

下月隈 C 遺跡

VI

—福岡空港周辺整備工事に伴う
下月隈 C 遺跡第 7 次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 881 集

—本文編—

2006

福岡市教育委員会

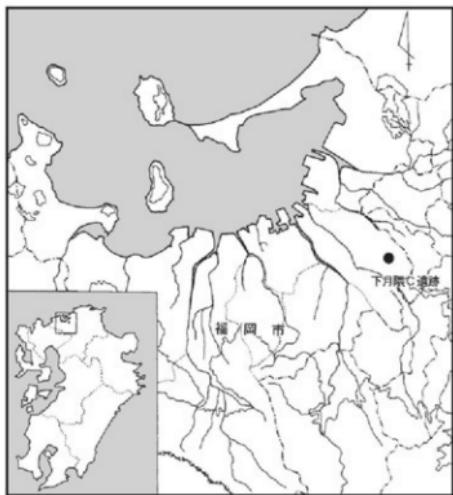
下月隈 C 遺跡

VI

—福岡市博多区月隈所在の下月隈C遺跡第7次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第881集

—本文編—



調査番号 0115

調査略号 SHC-7

2006

福岡市教育委員会



図版1 第II面出土の「皇后宮職」木簡と斎串



図版2 第4～9次調査古代遺構全景



図版3 第4～9次調査古墳時代後期～古代前期遺構全景



図版4 第4～9次調査弥生時代前期～古墳時代前期遺構全景

序

博多湾を抱いてアジア大陸と向かい合う福岡市は、古くから大陸文化の受け入れ口として栄えてきた地域で、各時代の重要な遺跡が数多く分布しています。特に、福岡市の中心部を南北に流れる那珂川・御笠川流域の博多区・南区から南に隣接する春日市にかけては、弥生時代の「奴国」の中心地域であり、博多区の国史跡の板付遺跡・金隈遺跡、那珂遺跡群や比恵遺跡群、南区の井尻B遺跡群など著名な遺跡が集中しています。

同様な遺跡の存在が予想された福岡空港南側に隣接する博多区月隈地区に、今回、空港周辺の洪水対策用の調節池が建設されることになりました。事前調査を行った結果、遺跡が確認され、記録保存の為の発掘調査を平成10年～15年まで実施いたしました。6年にわたる調査の結果、弥生時代前期から中世にかけての各時代の遺構・遺物が出土し、多大な成果を上げることが出来ました。

本書は、平成13年度に実施した第7次調査の報告書です。第7次調査では中世から古代にかけての条里水田や川跡で検出された大規模な水利遺構、弥生時代前期から後期にかけての集落を検出しました。特に古代の川跡から出土した「皇后宮職」木簡は全国的に見ても珍しく重要な発見でした。

本書が、市民の皆様の文化財保護に対するご理解とご認識を深める一助になり、また研究資料としてご活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで国土交通省九州地方整備局博多港湾・空港整備事業所および大阪航空局福岡空港事務所をはじめ、多くの方々にご理解とご協力を賜りましたことに対し、心から感謝の意を表します。

平成18年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 植木 とみ子

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が博多区月隈4丁目地内の中月隈調査池建設予定内において、2001年度（平成13年度）に実施した下月隈C遺跡第7次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は埋蔵文化財調査第2係主任文化財主事 山崎龍雄（現 調査第1係長）と同文化財主事 荒牧宏行（現同係主任文化財主事）が担当した。
3. 本書では遺構番号は前年度と重ならぬよう番号を付し、番号の前にSB（掘立柱建物跡）、SC（堅穴住居跡）、SD（溝・河川）、SE（井戸）、SK（土坑）、SS（水田）などの遺構の性格を示す記号を付した。またピット・柱穴については調査面毎に付した。
4. 遺構実測図に使用した方位は磁北である。また全体図に使用した座標は平面直角座標第II系で、磁針方位は西偏約6°30'である。座標は旧日本制地系を使用。
5. 本書の執筆は下記のとおりである。

第I章、第II章、第III章－1	……………山崎龍雄
第III章－2	……………荒牧宏行
第III章－3	……………山崎龍雄
第III章－4 - ①	……………山崎龍雄
第III章－4 - ②～④	……………荒牧宏行
第IV章－1	……………佐藤洋一郎・那須浩郎
第IV章－2	……………中橋孝博
第IV章－3	……………星山 洋
第IV章－4	……………光谷拓実
第IV章－5～8	……………パレオ・ラボ株式会社
第IV章－9	……………パリノ・サーベイ株式会社
第V章－1	……………荒牧宏行・山崎龍雄
第V章－2	……………寺井 眞
第V章－3	……………坂上康後
6. 自然科学分析については、年輪年代を独立法人奈良文化財研究所の光谷拓実氏、出土人骨を九州大学の中橋孝氏に、出土獸骨を埋蔵文化財課の星山洋氏に、水田の植物遺体の分析については総合地球環境学研究所研究部の佐藤洋一郎氏に、種実・土壤分析等は株式会社パレオ・ラボに、樹種同定と放射性炭素年代測定は株式会社パレオ・ラボとパリノ・サーベイ株式会社に委託し、分析結果については第IV章に収録した。
7. 第II面出土の「皇后宮殿」木簡については九州大学教授の坂上康後氏に、第III面出土の楽浪系土器については、財團法人大阪市文化財協会の寺井誠氏から玉穂を頂いた。
8. 本書では、遺構の撮影は山崎・荒牧がを行い、遺物の撮影については一部を上方高弘が、一部をフォトハウスOKAに委託した。遺構の実測は各面の遺構全体図を写真エンジニアリング株式会社に委託し、個別遺構などその他については調査担当者と瀬戸啓治・藤野雅基・森田ミヤ子・高手よし子・野口リウ子がを行い、遺物の実測は土器・石器類は調査担当者の他、上方・濱石正子・樫義久美子・濱田美紀・相原聰子が行った。木器の実測は調査担当者と境聰子・河野麻耶が行った。鉄型については渡辺亮志（九州大学大学院）が行なった。淨書は調査担当者と塙・大賀順子・澤玲子・増永明美・松尾信子・濱石・樫義・濱田・相原・大石菜美子が行った。
9. 第1面・第2面遺物観察表については調査担当者と境聰子・木藤直子・井上朝美が作成した。
10. 本文土層の色調や遺物の色調は新版標準土色粘によっている。
11. 本書編集は山崎龍雄と荒牧宏行が分担してを行い、山崎が統括した。
12. 発掘調査にかかる遺物・記録類の全ては、福岡市埋蔵文化財センターに収藏する予定である。

本文目次

第Ⅰ章	はじめに	1
1	調査に至る経過	1
2	調査の組織	1
第Ⅱ章	遺跡の立地と歴史的環境	5
1	遺跡の位置と立地	5
2	遺跡の歴史的環境	5
第Ⅲ章	調査の記録	9
1	調査の概要	9
2	第Ⅰ面の調査	13
3	第Ⅱ面の調査	39
4	第Ⅲ面の調査	89
5	第2区の調査	179
第Ⅳ章	自然科学分析	215
1	第7次調査出土の植物遺体の分析結果について	215
2	第7次調査出土の中世人骨	220
3	第7次調査出土動物遺存体について	223
4	第6次・第7次調査出土木製品の年輪年代	224
5	第7次調査出土試料の花粉化石	226
6	第7次調査出土試料の植物硅酸体	231
7	第7次調査の珪藻化石群集	235
8	第7次調査出土の大型植物化石	242
9	第7次調査出土木材の樹種	257
第Ⅴ章	総括	269
1	調査のまとめ	269
2	福岡平野出土の楽浪系土器	275
3	第7次調査出土「皇后宮職」木簡について	284

挿図目次

Fig.1	下月隈C遺跡の位置 (1/100,000)	4	Fig.52	SX781 実測図 (1/60)	75
Fig.2	下月隈C遺跡周辺の遺跡 (1/50,000)	7	Fig.53	畦界 10 下敷実測図 (1/50)	76
Fig.3	下月隈C遺跡の旧地形図 (大正末～昭和初頭 1/10,000)	8	Fig.54	SX770 畦界実測図 (1/200)	78
Fig.4	下月隈C遺跡調査地点位置図 (1/6,000)	11	Fig.55	SX770 実測図 (1/50)	78
Fig.5	下月隈C遺跡調査区配置図 (1/2,000)	12	Fig.56	SD740, SX770 出土道物実測図 (1/4)	79
Fig.6	第1面遺構全図 (1/400)	折り込み	Fig.57	畦界 2, SD728, 786 実測図 (1/200, 1/50)	80
Fig.7	東壁・北壁土層図 (1/60)	15	Fig.58	畦界 2, SD728 出土道物実測図 (1/4, 1/6)	81
Fig.8	SD712・715, SD712・713 土層 (1/300・1/60)	16	Fig.59	畦界断面実測図 (1/50)	82
Fig.9	SD708・712・713・715・722・724 出土土器 (1/3)	17	Fig.60	SS729, 755 出土木器実測図 (1/4)	83
Fig.10	SD720 と土層 (1/300・1/60)	折り込み	Fig.61	SX727, SS729, SD747, SD762, SD764, SD765、検出面 出土遺物実測図 (1/2・1/4)	85
Fig.11	SD720 出土土器① (1/3)	19	Fig.62	第Ⅲ面溝配図 (1/600)	90
Fig.12	SD720 出土土器② (1/3)	20	Fig.63	第Ⅲ面遺構全図 (1/400)	折り込み
Fig.13	SD720 出土土器③ (1/3)	21	Fig.64	SD801 土層・出土遺物 (1/60・1/4・1/3)	91
Fig.14	G・H-23区東西トレンチ南壁土層 (1/60)	22	Fig.65	SD818 土層 (1/60)	93
Fig.15	SD715・720・723 出土石製品 (1/3)	23	Fig.66	SD818 出土土器① (1/4)	96
Fig.16	SD712・714・720・①・722 出土木製品 (1/4・1/3)	24	Fig.67	SD818 出土土器②/4・1/5)	97
Fig.17	SD720・②・722, SS721 出土木製品 (1/4・1/3)	25	Fig.68	SD818 出土土器③ (1/4)	98
Fig.18	SX725・726 (1/80)	26	Fig.69	SD818 出土土器④ (1/4)	99
Fig.19	SX725 出土土器 (1/3)	27	Fig.70	SD818 出土土器⑤ (1/4)	100
Fig.20	SX725 出土木製品① (1/3・1/4・1/8)	28	Fig.71	SD818 出土土器⑥ (1/4)	101
Fig.21	SX725・726 出土木製品② (1/4)	29	Fig.72	SD818 出土土器⑦ (1/4)	102
Fig.22	SS704・710・721 出土土器 (1/3)	32	Fig.73	SD818 出土土器⑧ (1/4)	103
Fig.23	複乳・遺構面出土土器・木製品 (1/3・1/4)	33	Fig.74	SD818 出土土器⑨ (1/4)	104
Fig.24	第Ⅱ面遺構全図 (1/400)	折り込み	Fig.75	SD818・⑩・864 出土土器 (1/4)	105
Fig.25	SD735 土層断面図 (調査区南壁:1/60)	41	Fig.76	SD818 出土土器・石器① (1/3・1/4)	107
Fig.26	SX (堀) 743 実測図 (1/60)	42	Fig.77	SD818 出土土器・石器② (2/3・1/2)	108
Fig.27	SX (堀) 743 断面見通し図 (1/60)	43	Fig.78	SD818 出土木器① (1/6)	109
Fig.28	SX (堀) 743 土層断面図 (1/60)	44	Fig.79	SD818 出土木器② (1/4・1/6)	110
Fig.29	SD736, SX (堀) 743 出土遺物実測図 (須恵器:1/4)	45	Fig.80	SD818 出土木器③ (1/4・1/6・1/8)	111
Fig.30	SD736, SX (堀) 743 出土遺物実測図 (土師器:1/4)	46	Fig.81	SD818 出土木器④ (1/4・1/5・1/6・1/8)	112
Fig.31	SD735 出土遺物実測図 (弥生土器等:1/4)	47	Fig.82	SD818 内層 SX895・905・910 (1/60)	115
Fig.32	SD736, SX (堀) 743 出土遺物実測図 (木器:1/4)	49	Fig.83	SX895・⑤・905・①・910 出土土器 (1/4)	116
Fig.33	SX (堀) 744 実測図 (1/60)	51	Fig.84	SX895・905 出土木器② (1/4・1/8・1/10)	117
Fig.34	SX (堀) 744 出土串・木籠 (1/2)	52	Fig.85	SX905 出土土器 (1/8)	118
Fig.35	SX (窓) 737・土層 775, SD734, 738, 739 実測図 (1/60・1/40)	57	Fig.86	SD826・882・883・909・917 土層 (1/60)	119
Fig.36	SX737 実測図 (1/40)	58	Fig.87	SD826・883・831・854・856・865・882・893 出土土器 (1/4)	120
Fig.37	SX737 断面見通し・土層図 (1/40)	59	Fig.88	SD907 と土層 (1/100・1/60)	121
Fig.38	SX737, SD734, 738, SS733 出土遺物実測図 (1/4・1/6)	61	Fig.89	SD913 (1/80・1/60)	123
Fig.39	SX773 畦界 (1/200)	63	Fig.90	SD907・909・917・918 出土土器 (1/4)	124
Fig.40	SD746 土層断面実測図 (1/40)	63	Fig.91	SD818・921 (1/160)	125
Fig.41	土堤13補強下敷実測図 (1/60)	64	Fig.92	SD921 出土土器① (1/4)	126
Fig.42	SX773 と土堤護岸杭列実測図 (1/80)	65	Fig.93	SD921 出土土器② (1/4)	127
Fig.43	SX773 平面・断面見通し・土層断面実測図 (1/40)	66	Fig.94	SD830・893・909・917・921 出土土器・石器 (2/3・1/3)	129
Fig.44	SD746 出土遺物実測図 (1/3・1/4・1/6)	67	Fig.95	SD826・856・882 出土木器 (1/3・1/6)	130
Fig.45	畦界 11・12 下敷実測図 (1/50)	69	Fig.96	SD882・893 出土木器 (1/6)	131
Fig.46	畦界 11・22 出土木器実測図 (1/8)	70	Fig.97	SD907・913① 出土木器 (1/3・1/6)	132
Fig.47	畦界 7 畦界実測図 (1/200)	71	Fig.98	SD909 (SX911) 出土木器① (1/6)	133
Fig.48	畦界 7 下敷実測図 (1/50)	71	Fig.99	SD909・②・913・②・917・921 出土木器 (1/4・1/6・1/8・1/12)	134
Fig.49	SX782 実測図 (1/40)	72	Fig.100	SD921 出土鉄製 (1/3)	136
Fig.50	畦界 7・SX782 出土木器実測図 (1/4・1/8)	73			
Fig.51	SX781 畦界実測図 (1/200)	75			

Fig.101 第4～9次集落遺構配置図 (1/1,500)	138	Fig.136 蒼柵区南西部実測図 (1/200)	173
Fig.102 篠高地集落遺構図 (1/200)	139	Fig.137 SK852実測図 (1/50)	175
Fig.103 第III面掘立柱建物配置図 (1/200)	140	Fig.138 SK852・SX855包含層出土遺物実測図 (1/4)	175
Fig.104 掘立柱建物跡実測図 (SB01～04 1/80)	141	Fig.139 包含層・道構面出土遺物実測図 (1/4)	176
Fig.105 掘立柱建物跡実測図 (SB05～08 1/80)	142	Fig.140 低地部出土土製品・石器・鐵器 (1/2)	177
Fig.106 掘立柱建物跡実測図 (SB09～12 1/80)	143	Fig.141 第2区全体概観 (1/200)	180
Fig.107 掘立柱建物跡実測図 (SB13～16 1/80)	144	Fig.142 第2区・第6次調査区旧河川道構配図 (1/250)	181
Fig.108 掘立柱建物跡実測図 (SB17～20 1/80)	145	Fig.143 SD362出土土器① (1/4)	183
Fig.109 掘立柱建物跡柱穴出土遺物 (1/4)	149	Fig.144 SD362出土土器② (1/4)	184
Fig.110 掘立柱建物柱根 (1/10)	150	Fig.145 SD362出土土器③ (1/4)	185
Fig.111 掘立柱建物柱 (1/10)	151	Fig.146 SD362出土土器 (1/4・1/6・1/8)	187
Fig.112 柱穴出土土製品・石器 (1/2、1/1)	152	Fig.147 SX395 (1/40・1/100)	189
Fig.113 SC814実測図 (1/80)	153	Fig.148 SX395出土土器 (1/4)	190
Fig.114 SC814出土遺物実測図 (1/1、1/2、1/4)	153	Fig.149 SX395・①・935出土土器 (1/3・1/4・1/5)	191
Fig.115 SC881実測図 (1/80)	154	Fig.150 SX395出土土器② (1/4)	192
Fig.116 SC881出土遺物実測図 (1/2、1/4)	155	Fig.151 SX395出土土器③ (1/8)	193
Fig.117 SX803出土遺物実測図 (1/4、336～338は、1/2)	156	Fig.152 墓・墓岸伏道構図 SX933・935 (1/100・1/50)	195
Fig.118 柱穴出土土器実測図 (1/4)	157	Fig.153 SX933～935出土土器 (1/4)	196
Fig.119 SD829、830層断面図 (1/40)	158	Fig.154 SX930・931・932・①出土土器 (1/4)	197
Fig.120 SK869実測図 (1/30)、SK869出土遺物実測図 (1/4)	159	Fig.155 SX933出土土器② (1/4)	198
Fig.121 SK849実測図 (1/40)	160	Fig.156 SX933出土土器④ (1/3・1/4)	199
Fig.122 SK849出土遺物実測図 (1/4)	160	Fig.157 SX933・②・935出土土器 (1/4・1/5・1/8)	200
Fig.123 SK884実測図 (1/40)	160	Fig.158 SX933・③・934出土土器 (1/5・1/8・1/12)	201
Fig.124 SX806実測図 (1/60)	161	Fig.159 SD362・SX933出土土製品・石器・石製品 (1/3)	202
Fig.125 SX806出土遺物実測図 (1/4)	161	Fig.160 SX934 (1/50)	203
Fig.126 SX853実測図 (1/50)	162	Fig.161 包含層出土土器① (1/4)	205
Fig.127 SX853出土遺物実測図 (1/4)	163	Fig.162 包含層出土土器② (1/4・1/5)	206
Fig.128 SX889出土遺物実測図 (1/2、1/4、1/8)	164	Fig.163 包含層出土土器③ (1/4)	207
Fig.129 第III面水田関連施設実測図 (1/500)	165	Fig.164 包含層出土鐵器 (1/2)	207
Fig.130 第III面南東部実測図 (1/200)	167	Fig.165 第4～9次中世道構面 (1/1,500)	271
Fig.131 第III面南東部道構出土遺物実測図 (1/4)	168	Fig.166 第4～9次古代道構面 (1/1,500)	272
Fig.132 SX805出土土器実測図 (1/4)	169	Fig.167 第4～9次古墳時代後期から古代前期道構面 (1/1,500)	273
Fig.133 SX804、822包含層出土土器実測図 (1/4)	170	Fig.168 第4～9次弥生時代前葉から古墳時代前期道構面 (1/1,500)	274
Fig.134 SX800、804、805出土土製品・石器実測図 (1/1、1/2)	171	Fig.169 福岡平野出土の豪華系土器	276
Fig.135 包含層・道構面出土遺物実測図 (1/1、1/2)	172		

表 目 次

Tab.1 下月限C遺跡第1次～第9次調査概要	3	Tab.4 第2区出土遺物観察表	209
Tab.2 第I面水田計測表	34	Tab.5 福岡平野出土の豪華系土器一覧	276
Tab.3 第I面出土遺物観察表	35		

本文編卷頭図版目次

国版 1 第II面出土の「皇后宮職」木簡と漆串
国版 2 第4～9次調査古代道構全景

国版 3 第4～9次調査古墳時代後期～古代前期道構全景
国版 4 第4～9次調査弥生時代前葉～古墳時代前期道構全景

第IV章 自然科学分析目次

1 第7次調査出土の植物遺体の分析結果について

表1 第7次調査の水田跡（古墳時代後期～奈良時代）から産出した植物遺体の一覧	217
表2 第7次調査の水田跡（古墳時代後期～奈良時代）から産出した植物遺体のグループごとの産出割合	218
図1 第7次調査の水田跡（古墳時代後期～奈良時代）から産出した主要植物遺体の分布図	219

2 第7次調査出土の中世人骨

表1 計測値の比較（mm）	221	表2 鼻根部の計測結果（男性）	221
図1 遺存部位	222		

3 第7次調査出土動物遺存体について

表1 下月限C遺跡第7次調査出土動物遺存体一覧	223
図版1 出土獸骨写真	223

4 第6次・第7次調査出土木製品の年輪年代

表1 下月限C遺跡出土木製品の年輪年代	224
図1 曲物底板 No.1	225
図2 直物底板 No.2	225

5 第7次調査出土試料の花粉化石

表1 試料一覧	226	表2 産出花粉化石一覧表	227
図1 各遺構試料の主要花粉化石分布図	228		
図版1 下月限C遺跡試料8の花粉化石	230		

6 第7次調査出土試料の植物珪酸体

表1 試料1g当たりの機動珪酸珪酸体個数	231
図1 各遺構試料の機動珪酸珪酸体分布図	232
図版1 下月限C遺跡の機動珪酸珪酸体（scale bar:30μm）	234

7 第7次調査の珪藻化石群集

表1 分析試料一覧	235	表2-1 堆積物中の珪藻化石産出表（種群は安藤（1990）に基づく）	236
表2-2 堆積物中の珪藻化石産出表（種群は安藤（1990）に基づく）	237		
図1 堆積物中の珪藻化石分布図（2%以上の分類群を表示）	238		
図版1 堆積物中の珪藻化石顕微鏡写真	241		

8 第7次調査出土の大型植物化石

第1表 碱基同定試料の一覧表（その1～3）	243	第2表 土壤分析試料の一覧表	244
第3表 植物遺体分析試料の一覧表（その1・2）	245	第4表 植物遺体分析試料（木材、茎などの詳細）	246
図版1 出土した大型植物化石	254	図版2 出土した大型植物化石	255
図版3 洗い出し試料出土木材の材組織光学顕微鏡写真	256		

9 第7次調査出土木材の樹種

表1 第Ⅲ面出土木製品の器種別種類構成	262	表2 第Ⅱ面出土木製品の器種別種類構成	262
表3 第2区出土木製品の器種別種類構成	263	表4 第1面出土木製品の器種別種類構成	263
表5 杭材・自然木の遺構面別種類構成	264	図1 杭材・自然木の遺構面別種類構成	264
図版1 出土材・木材組織光学顕微鏡写真（1～12）	265	図版2 出土材・木材組織光学顕微鏡写真（13～24）	266
図版3 出土材・木材組織光学顕微鏡写真（25～36）	267	図版4 出土材・木材組織光学顕微鏡写真（37～48）	268

図版編卷頭図版目次

図版1 調査地と福岡空港周辺（2004年撮影）	図版11 (1) 第II面南西部足跡検出（南から） (2) 墓SX743全景（南西から）
図版2 (1) 福岡空港と調査地（南から） (2) 調査地南東側から福岡市街を望む	図版12 (1) SX773（屏風返し南から） (2) SD735出土墨書き土器
図版3 第I遺構面（古代～中世）全景	図版13 (1) SD921 鋼型出土状況 (2) 柱穴礎板に転用されていたネズミ返し片
図版4 第I遺構面南側の状況	図版14 (1) 亂構造構造 SX393 検出状況（北から） (2) SX395 人物出土状況
図版5 第II遺構面（古墳時代後期～古代前期）全景	図版15 (1) 第I面から出土した漆器 (2) 各調査区から出土した木製祭祀具 (3) 第III面 SD818 出土の銅鏡
図版6 第II遺構面南側の状況	図版16 (1) 第III面の各遺構から出土した農具 (2) 第III面の柱穴礎板に使用されていたネズミ返し
図版7 第III遺構面（弥生時代中期～古墳時代前期）全景	
図版8 第III遺構面南側高所部遺構検出状況	
図版9 (1) 第2区河川の埋没状況 (2) 遺構検出状況	
図版10 (1) 第I面 SD720 検出状況（向かう） (2) SD720漆器出土状況	
PL. 1 1937年（昭和14年）の調査地と周辺	PL.26 (1) 墓SX744全景（北から） (2) SX744全景（西から）
PL. 2 1947年（昭和22年）の調査地と周辺	PL.27 (1) SX737全景（置賈 南東から） (2) SX737近景（北から）
PL. 3 1948年（昭和23年）の調査地と周辺	PL.28 (1) SX737土層断面（北から） (2) SX737水口（北西から） (3) SX737水口（南から） (4) SX737剖面状況（南東から） (5) SX737水口木組（北西から） (6) SX737水口木組（北から）
PL. 4 1960年（昭和35年）の調査地と周辺	PL.29 (1) 土堤790、775、SD734 土層断面（調査区東壁 南西から） (2) 土堤780、SD734 土層断面（調査区東壁 南西から） (3) SD738、SD739 杖列検出状況 (4) SD738、SD739 土堤下敷（樹皮状） (5) SD734 土堤下敷状下敷 (6) 土堤775 蔊岸棺（杭と粗朶）
PL. 5 1969年（昭和44年）の調査地と周辺	PL.30 (1) SX773全景（屏風返し 南から） (2) SX773近景（南から）
PL. 6 1993年（平成5年）の調査地と周辺	PL.31 (1) SX773近景（東から） (2) SX773土層断面（南から） (3) SX773粗木（樹皮除去 南西から） (4) SX773粗木（西から） (5) SX773粗木折り曲げ状況（南東から） (6) SX773粗木折り曲げ状況（北から）
PL. 7 (1) 調査区北側 SST10 全景（北西から） (2) SS721全景（北から）	PL.32 (1) SD746、土堤（SX775除去 南から） (2) SD746 構築状況（西から） (3) SD746 土層断面（北から） (4) SD746 土層断面（南から） (5) SD746 木器W12出土状況 (6) SS755 木器W20出土状況
PL. 8 (1) SS710（北から） (2) 調査区南東側（南西から）	PL.33 (1) SS755-9（水口2と足跡痕 南から） (2) 砂坪10下敷（西から） (3) 砂坪7下敷（西から） (4) 砂坪7下敷建築物出土状況 (5) 砂坪11下敷（南西から） (6) 砂坪22下敷（西から）
PL. 9 (1) SS704全景（北西から） (2) 水田面での獸骨帶出土状況	PL.34 (1) SX782（脚跡下敷 西から） (2) SX782杵出土状況（南から） (3) SX770 検出（南から） (4) SX770 検出（西から） (5) SX781-1（水口 南から） (6) SX750-2（歩道 南東から）
PL.10 (1) SD712・713（東から） (2) SD720（北から）	PL.35 (1) 調査区全景（北西から） (2) 調査区南東側遺構状況（南西から）
PL.11 (1) SD720（南から） (2) SD719出土人骨	PL.36 (1) 高所部遺構状況（南西から） (2) 高所部溝検出状況（南から）
PL.12 (1) SD720 内堀 SX725・726 検出状況（北から） (2) SD720 内堀 SX725・726 検出状況（南から）	PL.37 (1) 調査区北西側溝検出状況（南から） (2) SD818（南から）
PL.13 (1) SD719（北から） (2) SX725（北から）	PL.38 (1) SD801（南西から） (2) SD801須恵器の出土状況
PL.14 (1) SX725 構築状況（南東から） (2) SX726 構築状況（南から） (3) SX726 構築状況（東から） (4) SD720 東側護岸杭の状況（南西から）	PL.39 (1) SD818-3区（南東から） (2) SD818-4区（南西から）
PL.15 (1) 水田面で検出した杭跡 SX728 検出状況（西から） (2) SX725で検出した木樁 (3) SD720 土器出土状況	
PL.16 (4) SS710 畑内から出土した土師器塊 (1) SD712～715 東壁土層（西から） (2) SD720 北壁土層（北から） (3) 西壁脚跡検出状況（東から）	
PL.17 (1) 調査区西半（北から） (2) 調査区北西部（北から）	
PL.18 (1) 調査区中央部（北から） (2) 調査区北東部（西から）	
PL.19 (1) 調査区西半（南から） (2) 調査区西半（南西から）	
PL.20 (1) 調査区南西部（南から） (2) 調査区南西部（南東から）	
PL.21 (1) 調査区南東部（南西から） (2) 調査区東半（南から）	
PL.22 (1) SX743、SX744（南から） (2) SD735全景（南から）	
PL.23 (1) SD735北側、土堤755、759、SD735土層（調査区東壁 南から） (2) SD735土層断面（調査区南壁 北から）	
PL.24 (1) 墓SX743全景（北西から） (2) SX743全景（北東から）	
PL.25 (1) SX743近景（北西から） (2) SX743近景（南西から） (3) SX743出土物状況（北西から） (4) SX743土層断面（調査区東壁 西から） (5) SX743北側遺物出土状況（北から） (6) SX743内曲物出土状況	

PL.40	(1) SD818-4 区中央遺物出土状況 (南東から) (2) SD818-5-1 区北側遺物出土状況 (南東から) (3) SD818-5-2 区北側遺物検出状況 (南西から) (4) SD818-5-1 区遺物出土状況 (5) SD818 遺物検出状況	PL.54 (1) SP268 (SB09、10) 磚板 (2) SP02、03 (SB10) 磚板
PL.41	(1) SD818-1 号土層 (南から) (2) SD818-2 号土層 (南西から) (3) SD818-5 号土層 (南西から)	PL.55 (1) SP149、150 (SB07) 磚板 (2) SP254 (SB07) 磚板
PL.42	(1) SX895-905 墓検出状況 (南西から) (2) SX895-905 墓完掘状況 (南西から)	PL.56 (1) SP177、178 (SB07) 磚板 (2) SP04 (SB1) 柱根
PL.43	(1) SX895 下部遺構 (西から) (2) SX895 下部遺構 (北から)	PL.57 (1) SC881 完整状況 (北東から) (2) SK884 完整状況 (南西から)
PL.44	(1) SD818-1 区土器出土状況 (2) SD818-2 区木器出土状況 (3) SD818-3 区木器出土状況 (4) SD818-4 区木器出土状況 (5) SD818-5 区土器出土状況 (6) SD818-5 区木器出土状況	PL.58 (1) SK889 完整状況 (北西から) (2) SX806 細井出土状況 (北西から)
PL.45	(1) SD818-6 区木器出土状況 (2) SD818-5-5 植子出土状況 (3) SD818-5 区木器出土状況 (4) SD818-8 区木器出土状況 (5) SD826 木器出土状況	PL.59 (1) SK863 上部遺物出土状況 (東から) (2) SK869 下部遺物出土状況 (東から)
PL.46	(1) SD907 (南西から) (2) SD909 上層 (南から)	PL.60 (1) SX853 遺物出土状況 1 (2) SX853 遺物出土状況 2
PL.47	(1) SD913 北側 (東から) (2) SD913 遺物出土状況 (東から)	PL.61 (1) SX852 木器、木片出土状況 (南から) (2) SD909 木器出土状況
PL.48	(1) SD913 遺物出土状況 (南東から) (2) SD913 木の実出土状況 (北から)	PL.62 (1) 調査区南西隅 (東から) (2) SX805 遺物出土状況
PL.49	(1) SD828 木器出土状況 (2) SD868 木器出土状況 (3) SD882 木器出土状況 (4) SD907 木器出土状況 (5) SD921 土器出土状況 (6) SD921 鮫型出土状況	PL.63 (1) 第2区旧河川堆積状況 (南西から) (2) 旧河川内構造検出状況 (南西から)
PL.50	(1) SP152 (SB10) 磚板 (2) SP165 磚板	PL.64 (1) SX395 検出状況 (南から) (2) SX395 検出状況 (西から)
PL.51	(1) SP233 (SB04) 柱根と礎盤 (2) SP228、239、240 (SB02、03、06) 磚板	PL.65 (1) SX395 東側の状況 (南から) (2) SX395 西側の状況 (南から)
PL.52	(1) SP179 (SB06) ねずみ返し転用磚板 (2) SP265 周辺穴礎板	PL.66 (1) SX933 検出状況 (西から) (2) SX933 検出状況 (北西から)
PL.53	(1) SP226 (SB06) ねずみ返し転用磚板 (2) SP06 (SB09、10) 磚板	PL.67 (1) SX933-935 (西から) (2) SX935 (南東から)

遺 物 図 版

PL.71	SD703・715・720-①出土土器	PL.94 SD818 出土木器①
PL.72	SD720-②・724-①、SX725-①出土土器	PL.95 SD818-②・826・882-①・893 出土木器
PL.73	SD724-②、SX725-②、SS704・710・721、排水溝出土土器、SD720・723 出土石器、SD712 出土木器①	PL.96 SD856・882-②・907・909・913、SX895 出土木器
PL.74	SD712-②・714・720-①出土木器	PL.97 SB06ねずみ返し転用磚板1
PL.75	SD720-②・722、SX725-①出土木器	PL.98 SB06ねずみ返し転用磚板2
PL.76	SX725 出土木器②	PL.99 握立柱建物柱根
PL.77	SX725-③・726、搅乱 (SX716)-連構面出土木器、SST21 出土木簡	PL.100 柱穴出土遺物1
PL.78	SST35出土墨書き土器 (須恵器)	PL.101 柱穴出土遺物2
PL.79	SD735出土須恵器	PL.102 銀穴住跡出土遺物
PL.80	SD735出土土師器、黒色土器	PL.103 土塗出土遺物1
PL.81	SX (東) 744出土木簡、畜串、SD735出土弦生土器	PL.104 土塗出土遺物2
PL.82	SX (柳) 743出土曲物	PL.105 土塗・柱穴・候出面出土遺物
PL.83	SD733、746、鞋畔11、22出土木器	PL.106 土塗出土石器
PL.84	鞋畔7、SX782出土木器	PL.107 SD362 出土土器①
PL.85	SST29、SS755、SD762出土木器	PL.108 SD362 出土土器②
PL.86	SD801・818 ①出土土器・土製品	PL.109 SD362 ③、SX395-①出土土器
PL.87	SD818 出土土器②	PL.110 SX395-②・933・935-①出土土器
PL.88	SD818 出土土器③	PL.111 SX930・931・932-①・934・935 ②出土土器
PL.89	SD818 出土土器④	PL.112 SX932 ②、包含層①出土土器
PL.90	SD818-⑤、SD826・854・907-①・921-①出土土器	PL.113 包含層出土土器②、SD362、SX933 出土石器・鉄器
PL.91	SD907・921 出土土器②	PL.114 SD362・SX395 ①出土木器、SX932出土遺物
PL.92	(1) SD921-③、SX895 出土土器 (2) SD818-①・830 出土土製品・石器	PL.115 SX395 ②・933 ①出土木器
PL.93	SD818-②・893・909・917・921出土石器・錺型・銅鏡	PL.116 SX395 ③・933 ②・934・935 出土木器

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経過

1994年（平成6年）3月31日付（四港建博第159号）で、運輸省第四港湾建設局博多港工事事務所長（現・国土交通省九州地方整備局博多港湾・空港整備事務所）より、福岡市博多区月隈4丁目7地内における月隈調節池建設事業計画地内の埋蔵文化財事前審査願が福岡市教育委員会に提出された。申請地周辺は御笠川東側の低地部の、水害を受けやすい地域であったため、その対策事業の一環として計画されたものであった。

申請地は福岡空港南側に南隣する約8万m²の空地で、埋蔵文化財包蔵地域の「下月隈C遺跡」として登録されている地域であり、過去に行われた周辺の調査では、弥生時代から中世にかけての集落跡や水田跡などが検出されているので、申請地においても遺跡の存在が予想された。このことから埋蔵文化財課としては、申請地において試掘調査を実施した。試掘調査は1994年5月19日～6月17日にかけて申請地全域に63か所の試掘坑を設定し実施した。試掘調査では、申請地全域に重層する弥生時代から中世にかけての遺構や遺物を検出した。

試掘結果では申請地全域に遺構が存在し、開発工事によってそれらの遺構が破壊されることが予想されたので、試掘調査の結果を平成6年7月6日付（福市教理第52号）文書で依頼者に回答し、今後の取り扱いについて協議を行った。協議の結果、月隈調節池建設工事に先立って記録保存の為の埋蔵文化財調査を実施することとし、第四港湾建設局長（現・九州整備局長）を委託者、福岡市長を受託者とする契約が締結された。発掘調査、資料整理及び発掘調査報告書作成費用については第四港湾建設局が全額負担し、調査を福岡市教育委員会が実施することとなった。当初の事業計画では、事業地全面を対象とした発掘調査を、平成10年度から4年計画で実施することとなっていた。しかし初年度（平成10年度）の調査により遺構濃度が試掘調査で想定されていた以上に高いことが判明したため、原局側と協議を行い、調査計画を5年間に変更した。第5年度を終了した時点で、調査事務所部分が残っていたのと、新たに調節池に伴う通水管部分の調査が必要となった為、再度原局側と調査についての協議を行い、平成15年10月迄調査を行うこととなった。

本書は第4年度（平成13年度調査、平成15年度から17年度整理）に実施した第7次調査の報告である。

調査・整理作業に当たっては九州地方整備局の皆様をはじめ、地元の皆様にご理解とご協力を得ました。この場を借りてお礼申し上げます。

2. 調査の組織

紙面上の都合から、第7次調査の調査組織について述べる。下月隈C遺跡第1次～第9次の調査概要についてはTab.1のとおりである。

(1) 委託者

運輸省第四港湾建設局博多港湾空港工事事務所

国土交通省九州地方整備局博多港湾空港工事事務所

《平成6年度》	第四港湾建設局長 石田省三	博多港工事事務所長	鹿籠雅純
---------	---------------	-----------	------

《平成12年度》	第四港湾建設局長 江頭和彦	博多港湾空港工事事務所長	古市正彦
----------	---------------	--------------	------

《平成14年度》	九州地方整備局長 渡辺茂樹	博多港湾空港工事事務所長	角 浩美
----------	---------------	--------------	------

《平成15年度》	九州地方整備局長 岡山和生	博多港湾・空港整備事務所長	酒井洋一
----------	---------------	---------------	------

《平成16年度》 九州地方整備局長 岡山和生 博多港湾・空港整備事務所長 元野一生
 《平成17年度》 九州地方整備局長 宮田年耕 博多港湾・空港整備事務所長 元野一生

(2) 調査主体

福岡市教育委員会

《平成6年度》 試掘調査

	教育長	尾花剛
	文化財部長	後藤直
	埋蔵文化財課長	折尾学
事前審査	主任文化財主事	濱石哲也
試掘調査	文化財主事	長家伸
経理担当	事務吏員	内野保基

《平成13年度》

	教育長	西憲一郎
	文化財部長	柳田純孝
	埋蔵文化財課長	山崎純男
調査担当	調査第2係長	力武卓治
	主任文化財主事	山崎龍雄
	文化財主事	荒牧宏行
整理担当	文化財主事	瀧本正志
経理担当	文化財整備課	河野敦美

《平成15年度》

	教育長	生田征生
	文化財部長	堺徹
	埋蔵文化財課長	山崎純男
調査担当	調査第2係長	力武卓治
	主任文化財主事	山崎龍雄
	文化財主事	荒牧宏行
整理担当	文化財主事	瀧本正志
経理担当	文化財整備課	中岳圭

《平成16年度》

	教育長	植木とみ子
	文化財部長	山崎純男
	埋蔵文化財課長	山口讓治
整理担当	調査第2係長	池崎讓二
	主任文化財主事	山崎龍雄
	文化財主事	荒牧宏行
経理担当	文化財整備課	鈴木由喜

《平成17年度》

	教育長	植木とみ子
--	-----	-------

文化財部長	山崎純男
埋蔵文化財課長	山口譲治
調査第2係長	池崎譲二
整理担当	山崎龍雄
調査第1係長	荒牧宏行
主任文化財主事	鳥越由紀子
経理担当	文化財整備課

《調査指導》 佐藤洋一郎（現）総合地球環境学研究所教授、日野尚志（佐賀大学名誉教授）、狩野久氏（元 京都橘女子大学教授）、坂上康俊（九州大学教授）、中橋 孝博（九州大学教授）、渡辺 晃（独立法人奈良文化財研究所）

《調査・整理協力者》

調査・整理補助 上方高弘、河野摩耶（慶應大学大学院）、境聰子、瀬戸啓治、所一男（東京大学大学院）、濱石正子、濱田美紀、藤野雅基、大石菜美子、大賀順子、大神真理子、木藤直子、小金丸昌世、相原聰子、清永啓子、澤玲子、西嶋奈美、平ノ内武、平山景将、松尾信子、増永好美、松下伊都子、松村 彩、宮坂 順、村上信子、持原良子、本村幸代、山野祥子、井上朝美

調査協力 天野玄蕃、荒牧幸子、荒牧テルオ、石井雅之、井出昇、井上一雄、井上利弘、井上英子、井上佳子、岩崎良隆、植松雅子、内山和子、榎田信一、大賀一、大橋由美子、大村順一、岡部安正、沖正芳、奥田弘子、小野千佳、甲斐康完、兼田ミヤ子、河野一一、北原由紀子、久保登喜子、黒瀬千鶴、小島キサエ、後藤タミ子、酒井次恵、里崎直子、佐藤アイ子、真田弘二、渋谷留雄、高手與志子、高松智、武田潤子、立山温、田中茂孝、田上智雄、谷辰巳、知花繁代、堤正子、豊丸秀二、永田八重子、二宮白人、野口リウ子、野村道夫、畠中千恵美、演フミコ、廣永清隆、廣永隆子、別府俊美、松井一美、松永七朗、丸山勝江、宗像正勝、本山啓、安高邦晴、安高精一、安高久子、山下嘉人、吉野悌二

Tab.1 下月隈C遺跡第1次～第9次調査概要

調査次数	調査番号	調査地番	調査面積	調査原因	調査期間	調査担当	備考書
1次	9404	福岡市博多区下月隈地内	885m ²	道路拡張	1994.4.8～6.27	白井寛也	市報第457集
2次	9615	博多区大字上月隈地内	8,900m ²	空港周辺整備	1995.6.6～96.3.21	宮井善廣・久住豊雄	市報第566集
3次	9610	博多区大字上月隈地内	3,575m ²	空港周辺整備	1996.5.7～10.18	宮井善朗	〃
4次	9828	博多区月隈4丁目	6,500m ²	月隈園跡地建設	1998.9.2～99.3.25	龜本正志・田上勇一郎	市報第750集
5次	9922	〃	10,000m ²	〃	1999.4.6～2000.3.25	龜本・山崎龍雄	市報第795集
6次	0018	〃	10,710m ²	〃	2000.4.11～2001.3.30	山崎・上角智希	市報第839集
7次	0115	〃	9,189m ²	〃	2001.4.1～2002.3.29	山崎・荒牧宏行	市報第881集
8次	0219	〃	7,400m ²	〃	2002.4.1～2003.3.31	山崎・荒牧	
9次	0327	〃	2,000m ²	〃	2003.4.～10.31	山崎	



Fig.1 下月限C遺跡の位置 (1/100,000)

第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の位置と立地 (Fig.1)

下月隈C遺跡は、福岡市の中央部を北流して博多湾に注ぐ、那珂川・御笠川の沖積作用によって形成された福岡平野の南東部に位置する。この平野は北東側を轄屋郡境となる席田・志免丘陵（標高50～200m）で限定され、西から南側を油山（標高569.4m）と片縄山（標高293.0m）とそれから北側に派生する低平な丘陵・台地に限定される。市内の位置的環境としては中心部の天神より約6km離れた位置にある。遺跡は福岡空港の南側に隣接する場所にあり、御笠川の東岸の沖積地に立地する。現地の標高は10m前後を測る。遺跡の東側は席田丘陵となる。御笠川西側の板付地区は春日市から続く低平な丘陵部から続くのである。

2. 遺跡の歴史的環境 (Fig.2～4)

下月隈C遺跡周辺の歴史的環境について述べる。周辺には席田丘陵や西側の板付の低丘陵を中心と弥生時代前期から古代・中世に亘る各時期の遺跡が分布しているが、それらについては第5次調査報告書などで既に詳細に記述されているので、本章では遺跡の継続時期にわたる、遺跡周辺特に御笠川東岸席田地区の中世に至る迄の概要について述べる。

旧石器・縄文時代については、御笠川東岸部では今のところ明確な遺跡は確認されていないが、西岸部では諸岡遺跡や板付遺跡、那珂遺跡群などで確認されている。ただ本調査区で縄文時代早期早水台式土器が出土しているので、周囲に遺跡が存在する可能性がある。遺跡が明瞭に確認されるのは、縄文時代晩期末～弥生時代前期頃からである。この頃の遺跡としては、低地部に雀居遺跡、下月隈C遺跡がある。席田丘陵部には甕棺墓や土坑墓・木棺墓などからなる墳墓遺跡として宝満尾遺跡、天神森遺跡、金限遺跡（国史跡）、上月隈遺跡、席田青木遺跡があり、集落遺跡としては大型建物などを検出した久保園遺跡、銅鐸鋒型が出土した赤穂ノ浦遺跡など弥生時代前期から後期にかけての遺跡が点在している。特に、遺跡東側丘陵部の上月隈遺跡は、道路建設の調査で甕棺墓群が見つかり、中期後半の甕棺墓内には細形銅劍1口とガラス製管玉20数点などが副葬されていた。また平成13年度に調査された上月隈B遺跡では弥生時代前期後半期の貯蔵穴群や柱穴などが検出されている。

古墳時代には首長墓の前方後円墳は存在しないが、丘陵部には直径34m、高さ9mを測る墳丘を持ち、全長11.2mの長大な横穴式石室を持つ後期円墳の今里不動古墳（市史跡）や、持田浦古墳群、堤ヶ浦古墳群など後期の大規模な群集墳が分布している。集落遺跡としては御笠川東岸沿いの低地部に立花寺B遺跡があり、微高地上に5～6世紀にかけての堅穴住居跡群が30棟確認されている。この遺跡からは市内でも出土例が少ない子持勾玉が5点出土している。

古代律令期は席田郡となる。席田郡は『和名類聚抄』によれば石田・大国・新居（にいい）の3郷からなる郡であり、那珂郡から分離した郡であると言われる。郡の規模としては小さく、同名の郡は他に美濃国に1か所存在する。郡内の西側には大宰府水城東門に続く西海道の官道が通り、郡内には『延喜式』兵部省によると久爾駅が置かれている。久爾駅には伝馬十疋が置かれている。久爾駅の所在地については確定していないが、駅家については大国郷にあったといわれている。大国郷は現在の席田村の月限あたりと推定されている。鎌倉時代中期の説話集『古今著聞集』（1254年）によれば、平安時代の寛治8年（1094）に大宰府權帥に任じられて下向中の源経信卿が、8月15日夜に筑前国蓮田驛について観月の宴を開いた時に、館の前の大きな楓の木があり枝葉が生い茂りて観月の邪魔になっていたので、人を集め木を切り払わせたとあり、そこから月隈の地名が起こったといわれている。

この葦田驛は久爾駅のことと考えられる。『平安遺文』158・160・162の中に貞觀10年席田郡にある大宰府觀世音寺一切經料田中で故高子内親王寄進の博多莊が混在しているとして觀世音寺と内藤寮との間に相論がおこっているとして係争地を大宰府田文所は仁壽2年(852)の席田郡班団について検出している。このことから席田郡が中央権門と何らかの関わりがあったことが考えられる。該期の遺跡としては、周辺に立花寺B遺跡や井相田遺跡(大野城市的仲島遺跡)、立花寺遺跡(平成12・13年度の調査では飛鳥～奈良時代の柵跡や大型建物跡などが検出されている)、雀居遺跡などが存在する。官道跡と思われる道路状遺構が御笠川西側の高畠遺跡、那珂君休遺跡などで確認されている。

中世の席田は南北朝時代～室町期には席田荘となる。席田荘は大宰府安樂寺の所領である。東側の志免町には吉原荘がある。室町から戦国時代は守護の少弌氏が衰退して後、福岡地方は一部博多の神の渕部が大友氏で、その他の地域は大内氏の支配下になり、席田は大内氏の支配下に入る。天文20年(1551)大内義隆が陶晴賢によって滅ぼされた後は大友氏の支配に入る。席田郡内には現在2か所の山城の存在が知られている。1か所は『筑前国続風土記』にある福居塚城、1か所は席田青木遺跡で検出された山城である。立花氏の旧家臣窓崎座主城戸清種が記した『豊前覚書』によれば、「天正八年、葦田郡月隈村一貴古野山に、立花城主の立花道雪が自ら出向いて、切寄せを造る」とある。これは月隈地区が、古来の官道沿いの交通の要衝であったため、博多や立花城防衛の備えとして当地に出城が築かれたことが考えられる。

参考文献

- ①福岡県地名大辞典 1988年 角川書店
- ②立花寺B遺跡2 福岡市埋蔵文化財調査報告書第702集 2002
- ③立花寺5 福岡市埋蔵文化財調査報告書第779集 2003
- ④上月隈B遺跡 福岡市埋蔵文化財調査報告書第742集 2003



調査区上空から太宰府方面を見る（北西から）

下月隈C遺跡



- | | | | | |
|-----------|------------|-------------|-----------|------------|
| 1. 下月隈C遺跡 | 2. 立花寺B遺跡 | 3. 鶴居遺跡 | 4. 下月隈A遺跡 | 5. 下月隈B遺跡 |
| 6. 天神森遺跡 | 7. 立花寺遺跡 | 8. 金原遺跡 | 9. 仲島遺跡 | 10. 井相田遺跡 |
| 11. 板付遺跡 | 12. 高畑遺跡 | 13. 麦野A遺跡 | 14. 比原遺跡 | 15. 那明遺跡 |
| 16. 五十川遺跡 | 17. 諸岡A遺跡 | 18. 諸岡B遺跡 | 19. 横手遺跡 | 20. 宝満尾遺跡 |
| 21. 大橋E遺跡 | 22. 三宅B遺跡 | 23. 博多遺跡 | 24. 堅粕遺跡 | 25. 蓬崎遺跡 |
| 26. 烏越古墳 | 27. 今里不動古墳 | 28. 持田ヶ浦古墳群 | 29. 刺塚古墳 | 30. 那珂八幡古墳 |

Fig.2 下月隈 C 遺跡周辺の遺跡 (1/50,000)

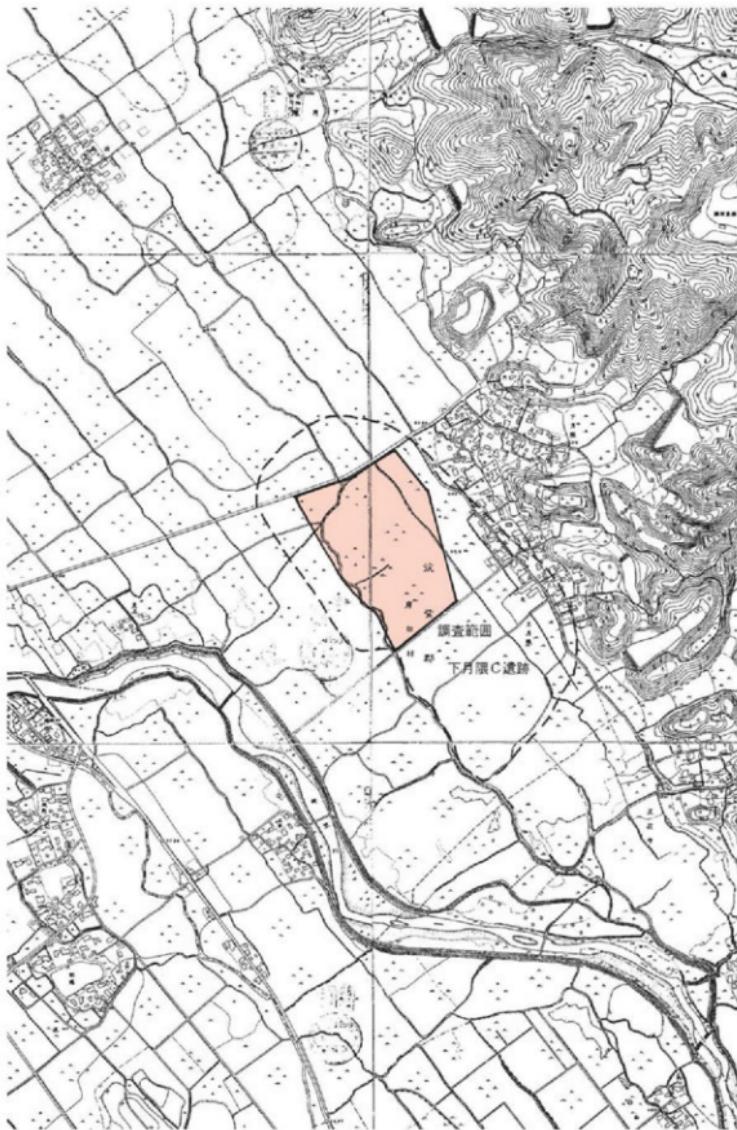


Fig.3 下月限 C 遺跡の旧地形図（大正末～昭和初頃1/10,000）

第Ⅲ章 調査の記録

1. 調査の概要 (Fig. 5)

第7次調査区は調査対象地の北東部分と第6次調査区の北側部分である。北東部分を第1区、第6次調査区の北側を第2区とした。第1区では第I面中世から古代末(平安後期～中世)、第II面古墳時代後期から古代前半、第III面弥生時代から古墳時代前半の3面の調査、第2区では第6次調査区からの続きの古代河川跡と堰・護岸杭列の調査を行った。第1区では第6次調査区で見られたような、明瞭な中世の造構面が東側に部分的に残るのみで、第6次調査区の第II面と重なる。その為、以下調査面がずれる。

第I面までの掘削は空港周辺の高度規制の関係から、重機による掘削と廃土の運搬が昼間に出来なかったので、業者に委託して夜間行った。バックホーとダンプトラックによって0.7mの深さ迄掘削・廃土除去を行う。それより下は昼間に人力掘削と一部小型の重機で更に掘下げた。第II面以下の掘削は高度規制内であったので、重機掘削は昼間に実施した。また全体の造構図や写真撮影は時間的な都合からセスナ機による空中写真測量を写真エンジニアリング株式会社に委託して行った。

造構面の深さは第1区では調査区東壁で、地表から第I面は-0.9m、第II面は-1.5～2m前後の面。第III面は-1.6～2.8mの深さで、それぞれの層の間に洪水砂などが挟まる。第III面は一部地山面上の包含層上で造構を検出したため、その調査後、重機で包含層を掘下げ、地山面造構を確認している。第2区は-1.6mで、洪水砂で厚く覆われていた。

調査区の基準は第4次調査で設定した基準に準じて、申請地の長軸に沿って、東西南北10mの方眼を組み、東西は東からA～Z迄、南北は南から1～32区迄グリッドを設定し、10mグリッドの番号は右下隅の杭番号とした。第7次調査は杭番号として第1区東西はB～J、南北は22～33ラインの範囲、第2区はQ～T、29～32ラインの範囲である。

1) 調査日誌抄

第7次調査は平成13(2001)年4月1日に着手し、平成14(2002)年3月29日に終了した。
以下調査の経緯を述べる。

2001年

5月 8日から夜間表土掘削作業を開始する。作業時間は空港の離着陸が終了する午後10時以降朝5時迄である。投光機を点けて作業するが、造構面などが多く残らない。

21日梅雨入り、例年より2週間早い。

掘削作業は25日に終了。その後作業員を導入し、第I面造構検出作業を行う。

6月 4日にベルトコンベアー導入。古代末～中世水田面の検出作業を行う。表土の掘り残しが一部あった為、重機で更に掘下げる。

条里に伴う水田や、溝が検出された。

19～20日大雨、現場がプールになり、水揚げで作業が数日中断する。SD720の掘下げを行う。

7月 第I面の調査。梅雨空が続き、作業は中々進まない。16日～29日迄福岡で世界水泳が開催される。



第I面 夜間掘削風景



第I面 水田検出作業

- 19日梅雨明け。暑い日々が続く。
 31日第Ⅰ面造構の空掘を行う。
- 8月 第Ⅰ面の実査作業と補足調査を行い、6日から重機で第Ⅱ面の造構面検出作業に入る。
- 9月 第Ⅱ面、古墳時代後期～古代の水田面造構検出作業。北西側と南東側に旧河川（SD73S）や溝がある。水田は洪水砂に覆われ良好に残る。
- 10月 第Ⅲ面の調査。静岡大学（現総合地球環境学研究所）佐藤洋一郎先生の現地視察で、プラントオーバルなどの採集を行う。
- 16日に第Ⅱ面空中写真測量。その後実測と補足調査。
- 11月 第Ⅱ面の調査を行いながら、9日より重機による第Ⅲ面造構検出作業を始める。並行して南側から造構の検出掘下げを進める。
- 12月 第Ⅲ面、弥生時代から古墳時代前期の調査。南側所部には、堅穴住居や掘立柱建物などが検出された。4日、第Ⅱ面のSD73Sから『皇后宮殿』木簡出土。
- 2002年
- 1月 第Ⅲ面の造構掘下げ、実測などの調査を行う。
- 22日から第2区表土除去
- 2月 19日、第Ⅲ面の空中写真測量と個別造構撮影を行う。22日、「皇后宮殿」木簡について記者発表を行う。
- 25日から第1区第Ⅲ面は北側造構を掘下げ、第Ⅳ面の検出作業。
- 3月 第1・2区の調査を行う。第2区作業が主体。
- 11日第1区第Ⅳ面・第2区の宮中写真撮影を行う。
- 14日から第1区埋め戻しを行う。
- 22日第2区調査終了。埋め戻しを行う。
- 31日 今年度作業全て終了する。



木簡の検出作業風景



調査指導の先生の案内風景



第Ⅲ面 溝 SD818掘下げ風景

下月限C遺跡

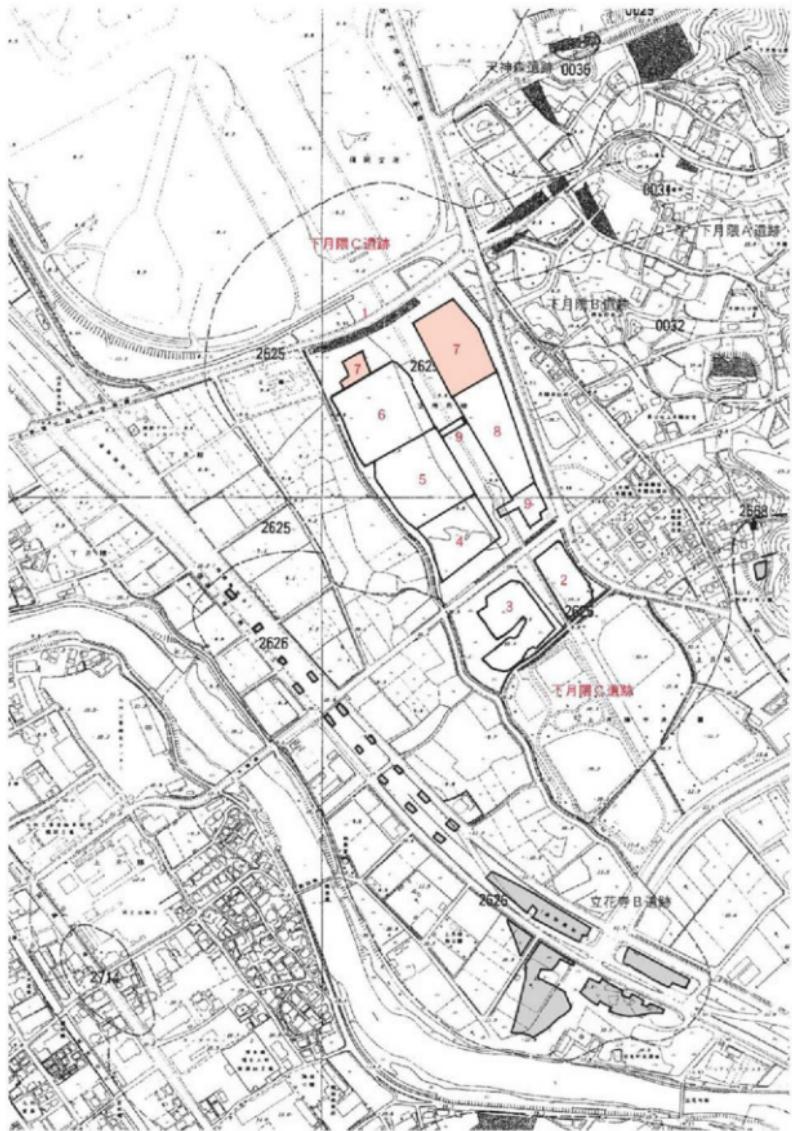


Fig.4 下月限 C 遺跡調査地点位置図 (1/6,000)



Fig.5 下月限C遺跡調査区配置図 (1/2,000)

2. 第I面の調査

1) 調査の概要

第I面は古代末から中世後期の時期である。遺構面は地表下-0.9m~-1.8mの深さであり、東から南側が高く、北西側が深くなる。東から南側はもともと地形的に高かったようである。遺構の残りは南東側が不良で、主に西側から北側にかけて検出された。検出した遺構は溝状遺構8条、水田面、堰跡1基である。北から西側には厚い洪水砂が堆積していたが、南側では砂の堆積は薄かった。

2) 遺構と遺物

① 溝状遺構 (SD)

SD701

調査区北東隅を流れる造成以前の近代水路である。調査区北側でSD703と合流するものと思われる。

出土遺物は図示するものはないが、古代の須恵器や中世の土師器・土師質土器、近世以降の陶磁器や、近代のレンガ、五円玉などが出土している。

SD703 (PL. 7・10)

調査区中央を南北に貫通する溝で、SD720の東に並行する。昭和初期の地図には認められるので、それ以前には存在していたものである。条里基準に沿うSD720と並行するので、近代までその基準を踏襲していたのであろう。

出土遺物 (Fig. 9, PL. 71) 近世から近現代の陶磁器や木製品、ガラス瓶、金属製品、土管、石炭ガラなどが出土地したが、弥生土器や古墳時代・古代の須恵器・土師器、中世の土師器・白磁などを少量含む。

1~6は陶器。1・2は碗。1は薄い茶色の釉が厚めに掛かり、高台内面は不規則な砂目跡が付く。朝鮮王朝で16世紀であろう。2は小型の碗で、高台は削り出す。外底部は露胎で、体部から見込みは黒褐色釉が掛かる。3~6は皿。3は見込みに3か所目跡が残る。4は高台骨付き以外薄い緑灰色釉がかかる。見込みと骨付きに4か所目跡が残る。5も見込みと骨付きに砂目跡が残る。高台部は露胎で低く削り出す。17世紀前半の肥前陶器か。6は中型の皿で、骨付き以外僅かに黄味を帯びた灰白色釉が掛かるが釉は輪状に剥き取る。肥前系陶器か。7~9は肥前の染付磁器。7は見込みに花文が入る。8は肥前磁器の広東碗で、体外面荒穢文である。18世紀末19世紀初め。9は型紙刷りで19世紀後半以降。10は口縁部が小さな玉縁を呈する白磁碗か皿。邢・定窯系の太宰府分類の白磁I-2類か。11は20世紀前半(1939年製)の佐賀有田の香蘭社の碍子である。

SD711

F-26区で検出した小溝。確認長8.4m、幅0.5m程、深さ0.06mで浅い。埋土は粗砂で、水田面に残る自然流路である。遺物の出土はなかった。

SD712 (Fig. 8, PL. 10・16)

調査区25区ライン北側を東西に延びる溝、幅3~4m、深さ0.3m程の深い溝である。南側にSD713が重なり、東側は近代の溝SD715が上面に重なる。埋土はSD712が灰オリーブ砂で、間に細砂の薄層を挟む位で単純である。

出土遺物 (Fig. 9・16, PL. 73・74) 古墳時代の土師器・須恵器、中世の土師器・白磁・青磁が多いが、近世の陶器・磁器などが少量出土しており、時期は近世以降か。

12・13は土師器の小皿。小片で復元口径は8.3cm・8.9cm、器高は1.05cm・0.9cmを測る。12は口縁

部の一部が歪んでおり、耳皿のような形態か。12は磨滅し調整不明。13の体部はナデ調整、底部は回転糸切である。14は透明釉のかかる陶器の小皿で小片である。胎上はやや粉っぽく近世の国産品である。

W1・2は漆塗椀。いずれもブナ属の材を割り抜いて作られている。W1は口縁部片。同一個体が2片あるが接合しない。復元口径は10.6cmを測る。材を割り抜いて成形しており、器壁の厚みは0.2cmと薄い。0.5mm厚の黒漆の下地に内外面に五花弁の花文が描かれる。W2は高台椀で7片を接合し復元した。復元口径13.7cm、器高6.6cmを測る。ロクロ成形で材を割り抜いて成形しているが器壁は厚手。漆が剥がれた部分では、刃物痕が確認出来た。黒漆の下地に赤漆を塗るが、剥離が進む。底部には直径0.9cmの円形の穿孔がある。W3は漆塗皿で低い高台が付く。材をロクロで割り抜いて成形しており、その痕跡が残る。黒漆が塗られる。W4は板材で一端を欠損する。残存長は20.3cm、幅3.8cm、厚み1.4cmを測る。上端には孔らしきものが認められる。表面は平滑に仕上げるが、傷が残る。

SD713 (Fig.8、PL.10)

SD712に先行する溝である。規模は西側で流路から幅1m、深さ0.1m前後である。

出土遺物 (Fig.9) 古墳時代の土師器、中世の土師器や白磁。陶器、近世の陶磁器、瓦などが少量出土している。

15は土師器の小皿。小片で復元口径は8.6cm、器高は1.2cmを測る。外底部は回転糸切。

SD714 (Fig.8)

F-24・25区で斜めに流れ、SD712に合流する溝。切り合いは不明だが、完掘した段階で、SD712に流路が重なる状況を示す。

出土遺物 (Fig.16、PL.73・74) 古墳時代土師器・須恵器、中世の土師器、青磁などが少量出土している。

W5は差備の陰卯下駄台部で欠損がひどい。台は長楕円形を呈し、残存長23.0cm、残存幅8.3cmを測る。鼻緒の穴が3か所あるが、左右の判断がつかない。征目のヒノキ材である。

SD715 (Fig.8、PL.16)

調査区東壁側で、C-25区で検出した近現代の溝で、SD712を切る。C-23・24区を南北に延びる現代の溝と関連すると思われる。この南側には同時期の擾乱SX716がある。

出土遺物 (Fig.9・15、PL.71) 16は直口の口縁を持つ陶器碗口縁部。うすい褐色の下地釉の上に黒褐色釉が施釉される。近世以降のもの。S1は不明滑石製品。長軸長10.4cm、短軸幅4.7cm、厚み1.3cmを測る、上面には使用による幅1cm、深さ0.3cm程の溝がある。砥石のようなものであろうか。

SD720 (Fig.10、PL.10・11・16)

調査区中央部をやや西に湾曲するものの南北に貫流する溝で、この溝は第8次調査区でも確認されている。この溝はほぼ南北の条里坪境に沿うものである。この東側に並行するSD703は条里地割を継続した名残であろう。規模は溝幅4~6m、深さは南側で0.7m(標高7.6m)、北側壁面で1.3m(標高7.1m)を測り、北側にかけて深くなる。この溝の南側でSD719と合流するが、その合流部分の南側に、別項目で報告する鍵型に曲る堰SX725がある。この合流する部分は堰南側に比べて一段と深くなる。これは水流で抉られたのであろう。また溝壁には護岸を行う為の杭が打ち込まれていた。杭は堰より南側では両側、合流部より北側では両側に杭が打たれる。SD719の上面には条里区画に沿った杭列がある。埋土は白色粗砂礫を主体とするが、間に灰オリーブ粘質土を薄く挟み、両岸護岸杭列辺りは粘質土や粘質砂となり、植物などを含む。溝の東側に打ち込まれた護岸杭の内15試料について樹種同定を行ったが、確認した樹種は周辺で入手できるものであった。

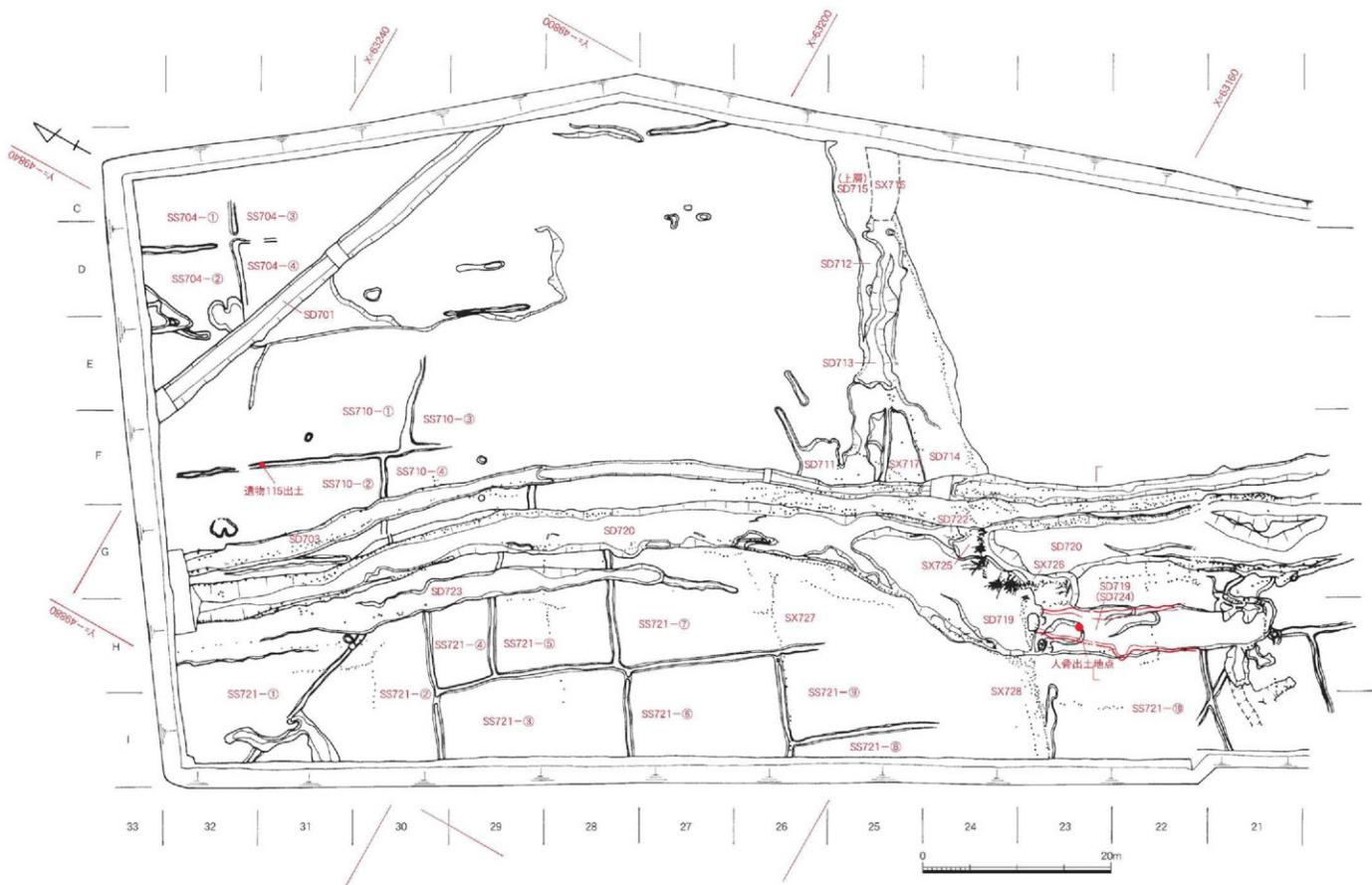
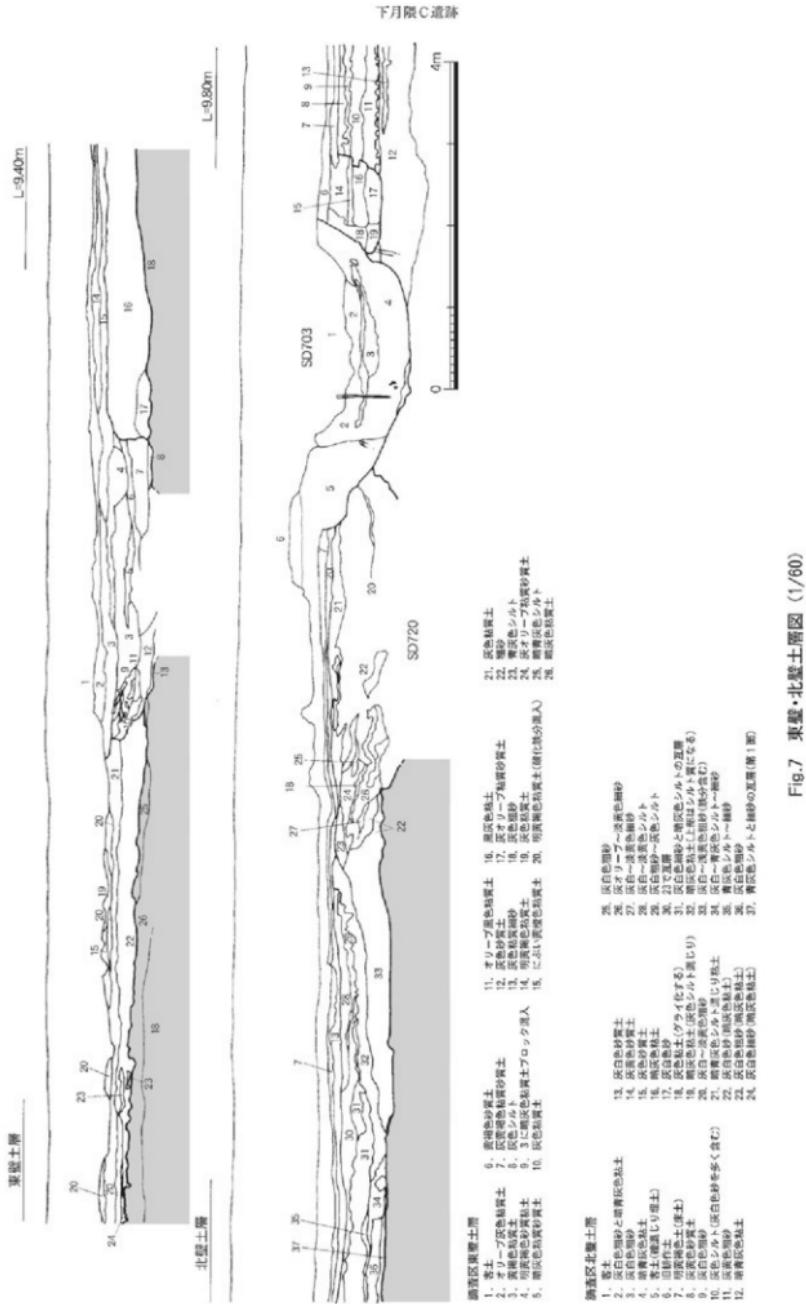


Fig.6 第1面遺構全体図 (1/400)



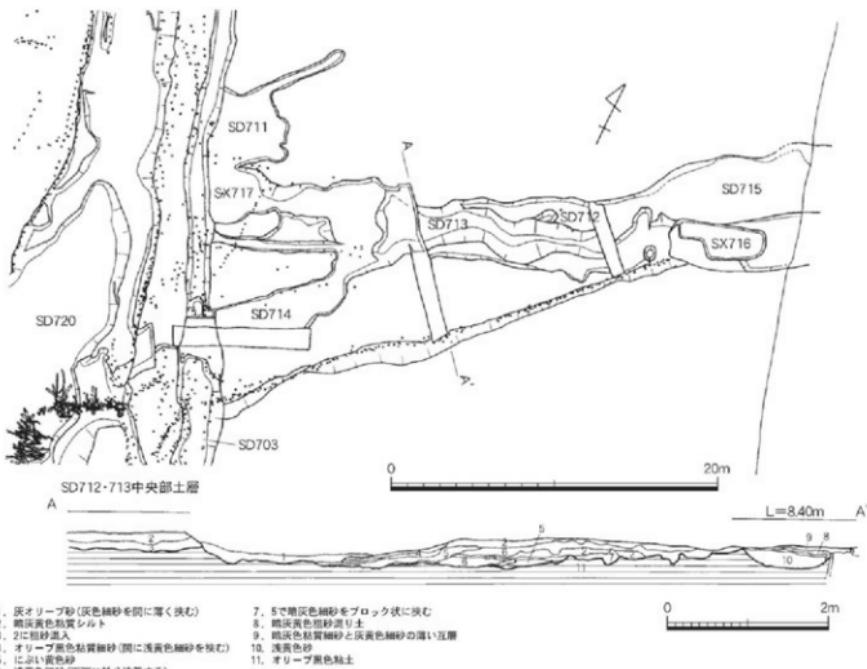


Fig.8 SD712~715、SD712+713土層 (1/300・1/60)

出土遺物 (Fig.11~13・15~17・PL.71~75)　弥生土器から古墳時代～古代の土師器・須恵器、中世の土師器・瓦器・陶磁器などと下駄などの木製品が出土した。

ST725 墓を中心に北側と壇周辺・南側に三分割して報告する。

17~37は上層出土。17~26は土師器。17は中世前期の小皿。復元口径は9.8cmを測る。磨滅し調整不明。18は壺1/8片で、復元口径は13.2cmを測る。体部調整は回転ヨコナデ。19~23は壺。19は壺口縁部小片。磨滅し、体部の調整は不明。20~23は高台部片。復元高台径は7.0~8.6cmで、比較的高台が高く細い21・22と、太い20・23の2種類ある。前者は10~11世紀代、後者は12世紀代であろうか。磨滅がひどく調整は不明。24は黒色土器A類壺の高台部片。高台径は8.5cmを測り、内外面とも磨滅する。25は小型の壺口縁部。復元口径は14.0cmで、外面に煤が付着する。26は貼付の把手で丁寧なヘラケズリ後ナデ。酸化鉄分が付着する。27~31は白磁。27は玉縁口縁のIV類碗。復元口径は16.0cmを測る。28は端反り口縁片。表面は施釉されるが、磨滅がある。29は底が深い皿か。口端部はやや外反し、釉は口禿げする。表面には貫入が入る。30・31は底部片。30は高台を削り出し、疊付きには目跡が残る。31は蛇の目状の高台であるが、釉の残りは悪い、邢・定窯系か。32~37は須恵器。32は9世紀前半の皿底部。内底は灰カブリし、外底部は回転ヘラケズリ後ナデ。太宰府編年中のC-1類で9世紀前半か。33は高台のある壺底部片。高台が外方に跳ねる7世紀後半代のもの。回転ナデ調整。34・

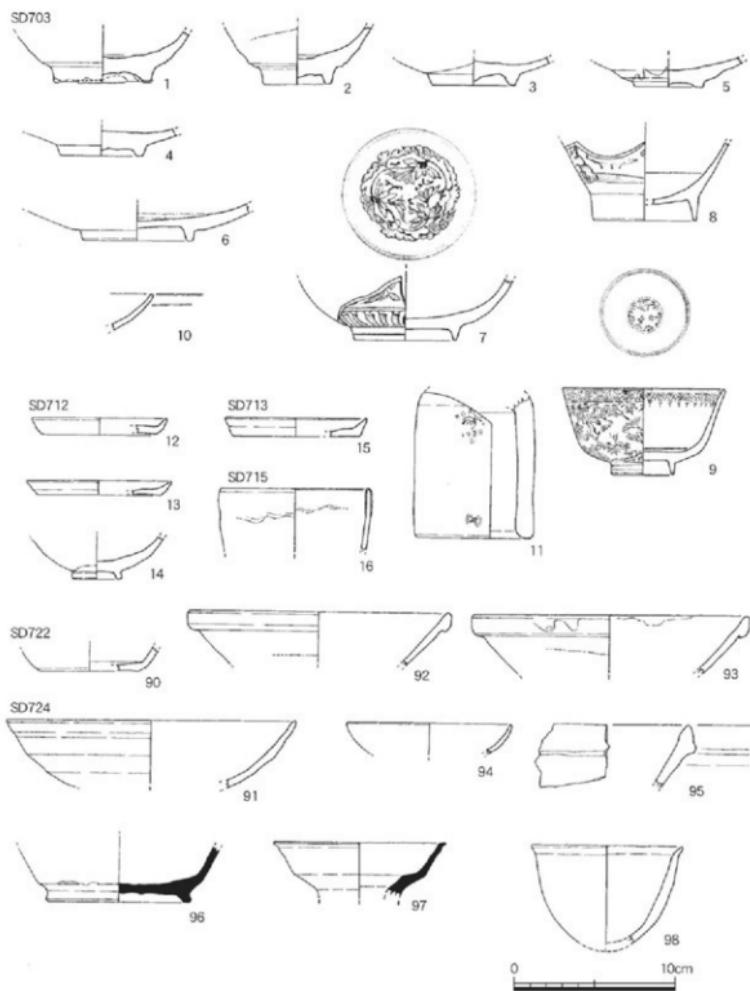


Fig.9 SD703・712・713・715・722・724出土土器 (1/3)

35は壺身。復元口径は10.6cm・12.5cmを測る。34の外底部は回転ケズリ、35の体部1/2以下は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ調整である。6世紀後半から末の時期で、小田富士雄氏編年のⅢB～ⅣA期のもの。36・37は蓋。36は口縁端部が短く丸く屈曲する形態で、8世紀後半代のもの。復元口径は17.0cmを測る。37は天井部が高い形態で、口縁は屈曲し直立する。復元口径は17.0cmを測る。回転ナデ調整である。8世紀前半代のもの。

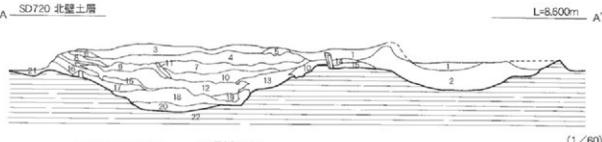
38~63は下層出土遺物。38~55は土師器。38~43は小皿。復元口径は8.0~9.4cmを測る。外底部は糸切りで、38・40~42には板状圧痕も残る。体部は回転ナデ調整。44は坏か皿で、復元高台径は11.4cmを測る。磨滅がひどく調整は不明。45~48は椀。古代後半~中世初めのもの。復元口径は8.2cm・7.0cm・5.5cm・8.4cmを測る。調整はナデである。49~52は甕。49は須恵器の製作技法で製作した甕で、体外面は木目直交の平行叩きで、内面には当具痕が残る。口縁部はヨコナデ。50は良質の焼けで生焼けの須恵器の可能性もある。口縁部内外面はヨコナデ。胎土は良質、焼成は良質。51・52は頸部がしまり、口縁が短く外反する甕。復元口径は17.8cm・19.8cmを測る。調整は口縁部がヨコナデ、胴部外面はハケ目であるが、52は磨滅が進む。内面はヘラケズリで、52の胴部内面は更にナデる。53は無類の瓶や鉢・甕などの口縁部細片。外面叩き後ナデを加え、内面はヘラケズリ。54は差込式の把手、表面は磨滅し、二次的に被熱を受ける。55は甕の把手か。貼り付けている。上面には穿孔がある。磨滅し調整は不明。56・57は白磁。56は口縁部が玉縁のIV類碗で、復元口径は15.2cmを測る。玉縁は折り返す。57は皿III-1類で、復元口径は9.8cmを測る。体部下半はヘラケズリで露胎。58・59は青磁碗。58は龍泉窯碗I類で、復元口径は15.6cmを測る。見込みにはヘラ切りによる花文が入る。59は同安窯系で、見込みには柳描き文が入る。60・61は陶器。60は褐釉陶器の四耳壺。釉はまだらに掛かる。耳の付き方から13世紀頃のものか。61は陶器の水注頸部片。肩部外面には工具の回転によるカキ目状の文様を施す。内面は回転ナデで、赤みを帯びた薄い褐色を帯びた釉が掛かるが、剥げている。62・63は須恵器。62は坏で、復元口径は12.4cmを測る。調整はナデ。8世紀代のもの。63は坏身で、体部外面1/2から底部は回転ヘラケズリ、その他はナデ調整。III B期のもの。

64~71は堀北側周辺。64・65は土師器の皿。64は北側で出土。外底部は糸切か。体部から内面は回転ナデ。65は復元口径11.0cmを測る。磨滅がひどいが、外底部は糸切か。66は口縁が短く外反する甕で、7世紀後半のものか。67は龍泉窯系の青磁甕。外面錦通弁で、13世紀のもの。68・69は須恵器甕。68は口縁で本来は高台が付く形態。8世紀後半から9世紀初めのもの。69は高台部片で、9世紀前半頃のもの。70は須恵器の高环の坏部で、7世紀後半のもの。底部は回転ヘラケズリで後ナデ。蓋の可能性もあるが、短脚が付く坏と考える。71は須恵器の破片の周辺を略方形に打ち欠いた瓦玉で一辺2.4cm、厚さ1.4cmを測る。表面は粗いハケ目とナデ。

72~89はSX725南側出土。72・73は上層出土。72は須恵質の鉢口縁片。73はIVA期の坏身。復元口径は13.0cmを測る。底部は回転ヘラケズリで、その他は回転ヨコナデ調整。

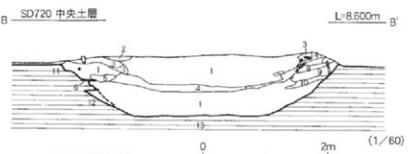
74~77は中世土師器。74~76は小皿。復元口径は9.0cm・9.2cmを測る。いずれも磨滅がひどく調整は不明。77・83は坏。77は完存で盃みが大きい。口径12.4cm、器高3.0cmを測る。体部は回転ヨコナデ、内面はナデ、外底部は板圧痕が残る。酸化鉄分が表面に付着する。11世紀頃の小皿に移行する時期か。83は底部片で、外底は糸切で板圧痕が残る。78は瓦器塊口縁部。復元口径は16.0cmを測る。調整は外面回転ヨコナデ、内面は丁寧なナデ、外面下半には指押さえ痕が残る。79・80は白磁。79は白磁甕IV類。釉が厚めに掛かる。80は口縁部がやや外反する口縁部でVII類の白磁。81・82は龍泉窯の錦通弁甕。13世紀のもの。84~88は須恵器。84・85は須恵器の坏で、平底で体部が丸みを持つ7世紀代のもの。86は体部が丸く、外側に張り出す高台を持つ坏で、7世紀後半のもの。復元高台径は10.0cmを測る。底部はケズリ後ナデ。87は坏身でIII B期のもの。復元口径は12.3cmを測る。受部は回転ナデで、外底部はヘラケズリか。88は高环脚部で7世紀後半代のもの。外面回転ヨコナデである。89は刻目突帯文土器甕の口縁部片。胴部上半で屈曲し、屈曲部に刻目が付く形態であろう。貼付突堤には棒状工具で刻目を付ける。外面は磨滅するが、内面はナデ調整で、指押さえ痕が残る。

A SD720 北壁土層



SD720北壁土層名
1. こいの赤褐色細砂質土
2. 黒褐色粘土
3. 淡黄色粗砂
4. 黄褐色砂
5. 黄褐色シルト
6. 淡黄色シルト
7. 黄褐色シルト
8. 淡黄色粘土
9. 黑褐色粘土
10. 淡色砂
11. 淡白色シルト
12. 淡白色粗砂に褐混入
13. 黑褐色粘土
14. 淡灰色リープ粘土
15. 青灰色粘土
16. 黑褐色粘土
17. オリーブ黄色細砂
18. 淡灰色粗砂
19. 黑褐色粗砂
20. 淡灰色粘土
21. 淡白色粗砂
22. 黑褐色粘土

B SD720 中央土層



SD720中央土層名
1. 白色粗砂
2. 淡灰褐色粘土
3. 淡灰色リープ粘土
4. 黄褐色粘土
5. 淡色含腐物質土
6. 黑褐色粘土
7. 淡白色シルト
8. 淡黄色シルト
9. 淡白色粗砂
10. 淡灰色粗砂
11. 淡オリーブ粘土
12. 黑褐色粗砂

G-H-23区トレーン南壁土層

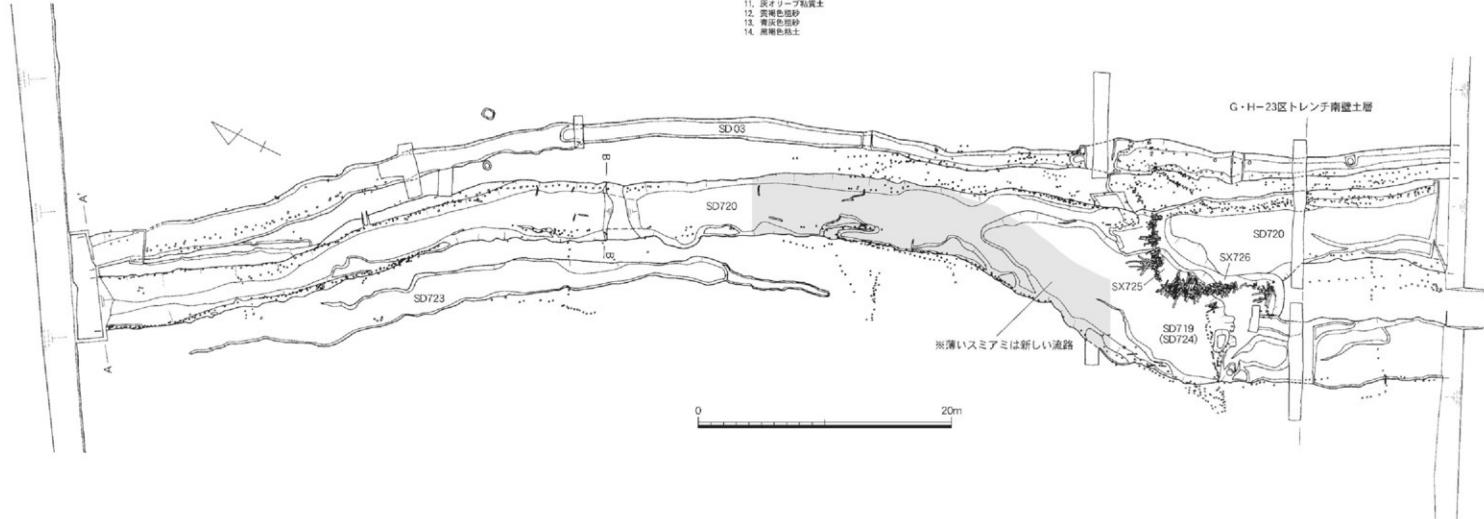


Fig.10 SD720と土層 (1/300・1/60)

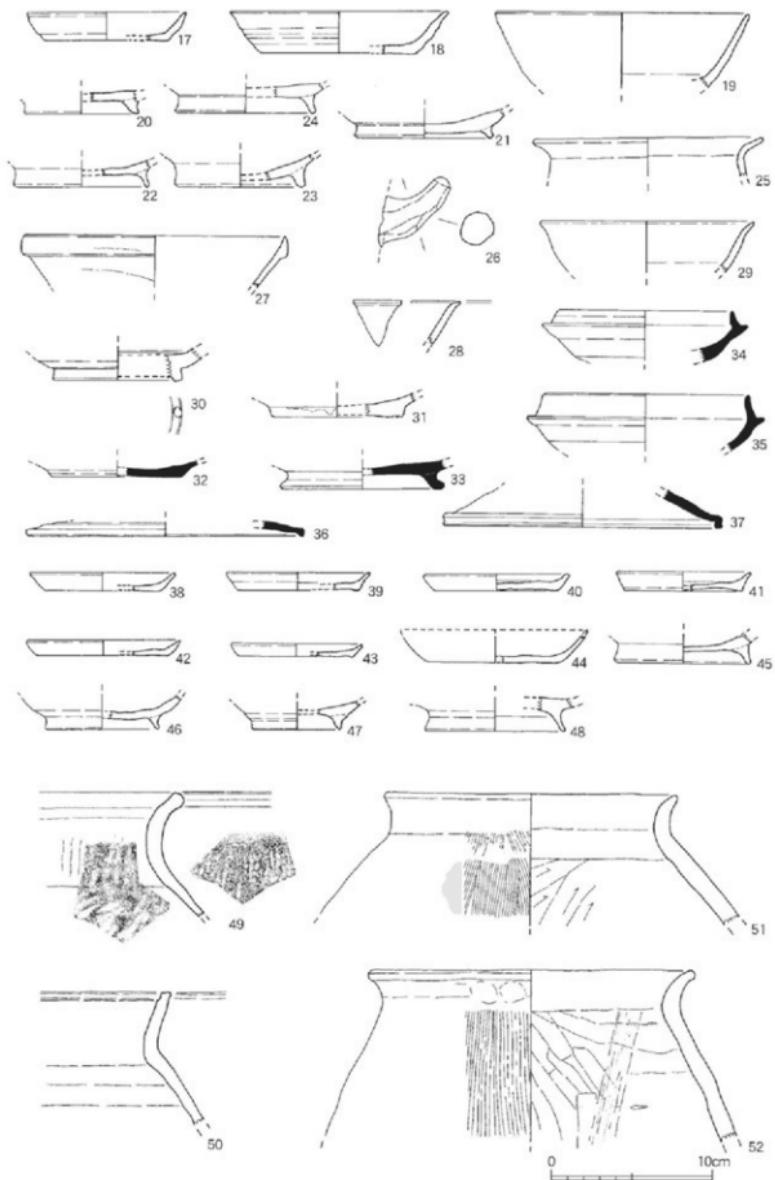


Fig.11 SD720出土土器① (1/3)

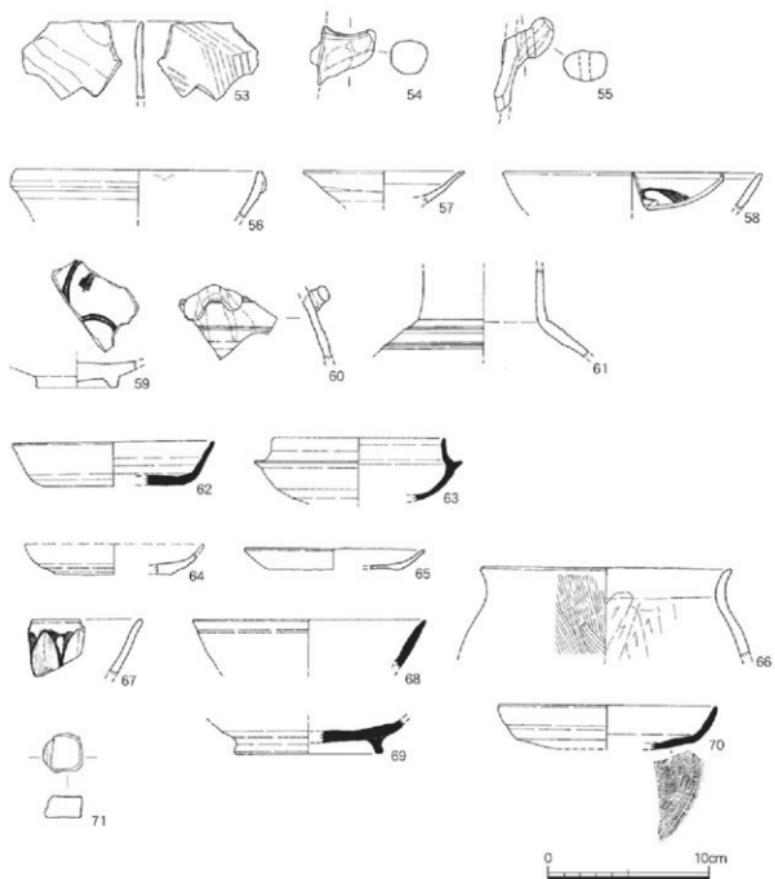


Fig.12 SD720出土土器② (1/3)

S2は断面三角を呈す方柱状の砥石。2面が砥面で、小口部は粗削調整。縦長7.5cm、横幅6.8cm、最大厚5.2cmを測る。色調は灰白色を呈し、石質は石英玢岩か。S3は扁平片刃石斧片。残存縦長2.8cm、厚み0.7cmを測る。石質は頁岩か。S4は石鍋の転用品であるが、両側に耳状の把手が付く。本来の口径は31.4cmを測る。外面はノミ状工具によるケズリ、内面は平滑に丁寧に仕上げる。下側は二次的に加工を加える。外面にはススが付着する。

W6～8は下駄台部。W6は連齒下駄の台部で、残存長15.3cm、推定最大幅8.1cm、最大厚1.9cmを測る。歯は磨り減って0.5cmほどしか残っていない。鼻緒の孔が3か所あるが、径は1.0～1.5cmほどで、鼻緒らしき繊維が残る。W7・8は差歛を切込みと楔で固定した露卵下駄である。いずれも長楕円形

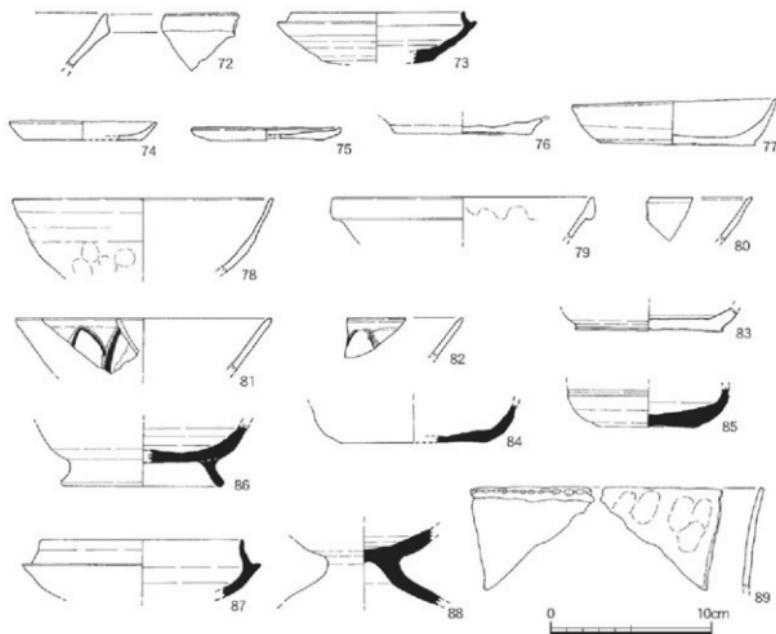
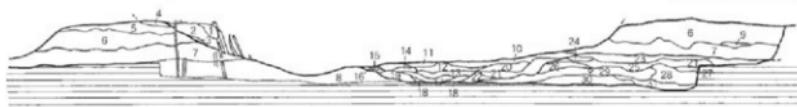


Fig.13 SD720出土土器③ (1/3)

を呈す。W7は全長18.7cm、最大幅8.6cmを測る。鼻緒の孔径は0.8~1.5cmを測る。鼻緒の前蓋の右側が窪んでおり、左足用と思われる。差歎を楔と目釘で止めている。W8は残存長21.6cm、残存幅8.0cmと大型であるが、欠損が著しく本来の面は余り残っていない。鼻緒の前蓋がやや左に寄るので、右足用であろう。W9~13は露卯下駄の歯。W9・10は上辺に楔が残り台形を呈す。長さは上辺で8.0cm・9.8cm、下辺で15.0cm・14.3cm、高さ9.3cm・9.7cm、厚さ1.3cm・1.7cmを測る。いずれも板目材を丁寧に削って仕上げる。W11・12は台形状の歯の上面にホゾを持つ。W12は上辺8.0cm、下辺10.7cm、高さ4.8~5.5cm、厚さ1.2cmを測る。ホゾの高さは1.2cmを測る。底面は摩り減る。W13もほぼ同じ大きさと思われるが、高さ4.3cmを測る。ホゾの上面には楔が残る。W11・12は板目材である。W13は歯の一部。側面は焼け炭化する。残存高10.9cm、厚さ1.4cmを測る。W14は板金剛と呼ばれる板草履の芯板の半分。五角形を呈し側面中央部を削り込む。厚さ0.45cmで、丁寧なケズリ仕上げ。W15は杓文字か。残存長17.1cm、厚さ0.8cmを測る。ケズリ仕上げで、表面は炭化する。W16~18は箸。端部が欠損するが長さは20.0cm・21.9cm・15.7cmを測る。断面は台形に割材をケズリ込んで仕上げている。W19は長方形の板材で、左側が欠損する。全面はケズリ加工で、上面は炭化する。W20は不明木製品であるが、杓文字の一節の可能性がある。残存長16.7cm、幅5.9cm、厚さ0.6cmを測る。表面はケズリで平滑に仕上げる。ヒノキの板目材である。W21は荷札木筒である。全長14.9cm、残存幅2.7cm、厚さ0.4cmを測る。中央で折れ曲るが頂部は山形に削り出し、上下両面も平滑に丁寧に仕上げる。その下に紐をかけるための欠き込みがある。上面には墨痕が残っていた。

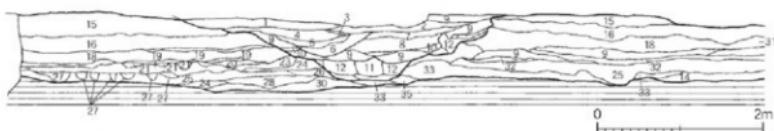
G-23区東西トレンチ南壁土層



G-23区東西トレンチ南壁土層

1. 淡黄色粗砂(灰色粘質土含む) - SD720壁岸
 2. 灰色シルト - SD720壁岸
 3. 淡黄色粗砂
 4. 淡黄色粗砂(灰質土・間かご下に植物含む)
 5. 淡い黄色細砂(灰分含む)
 6. よりやや深い黄色細砂(灰分含む)
 7. 暗青灰色シルト質粘土
 8. 黒色粘土(包含物)
 9. 8に黄褐色粗砂を含む
 10. オリーブ灰色粘土
11. 10よりやや黒い
 12. 暗オーブン粗砂(粗砂を含む)
 13. オリーブ灰色粗砂(粗砂を含む)
 14. オリーブ灰色シルト
 15. オリーブ細砂(部分強い)
 16. 黑色粘土
 17. オリーブ黑色粗砂
 18. 暗青灰色粗砂
 19. 暗オーブン粗砂(黑色粘土少量含む)
 20. オリーブ黑色粘土
21. 暗オーブン粗砂～粗砂
 22. オリーブ灰色粗砂
 23. 暗青灰色粘土(上部に粗砂を凸凹状に含む - 第Ⅲ面水田面)
 24. 黑色粘土
 25. 黑色粘土(粗砂を少し含む)
 26. 灰色粗砂
 27. にじみ黄色粗砂(26をブロック状に含む)
 28. 黄褐色粗砂
 29. 地中黃色粗砂
 30. 暗オーブン粗砂
 31. オリーブ黑色粘土

H-23区東西トレンチ南壁土層



H-23区東西トレンチ南壁土層

1. 暗灰褐色シルト質粗砂と淡黄色粗砂の混合
 2. 暗灰褐色シルト質粘土
 3. 淡黄色粗砂
 4. 淡黄色粗砂一時的に暗灰褐色粘土ブロック少量混入
 5. オリーブ灰色粘土ブロック混入
 6. オリーブ灰色粗砂にオリーブ黄色粗砂混入
 7. 暗褐色粗砂(部分含む)
 8. 淡黄色粗砂～粗砂(下部粘土が僅く鉢分を含む)
 9. 淡黄色粗砂
 10. 暗褐色粗砂粘土でブロック混入
 11. にじみ黄色粗砂でブロック混入
 12. オリーブ灰色粘土(粗砂を少量混入)
 13. 青灰色粗砂
 14. 暗褐色粗砂
 15. にじみ黄色粗砂質土
 16. 暗灰褐色シルト質粘土
 17. 暗灰褐色粗砂
 18. 暗褐色粗砂
 19. 18にじみ黄色粗砂の軽度に挿入
 20. 暗褐色粗砂(にじみ黄色粗砂ブロック少量含む)
21. 暗灰褐色粗砂
 22. 18よりやけい粘土
 23. 暗オーブン中粒砂
 24. 暗褐色粗砂(粗砂少量混入)
 25. 黑色粘土
 26. 25で削り取る多量混入
 27. にじみ黄色粗砂
 28. 黑褐色粗砂質土
 29. 暗緑灰褐色粘土(軟質)
 30. 暗緑灰褐色粘土(粘性、鉢分含む)
 31. 32と暗褐色粗砂の互層
 32. 暗褐色粗砂と暗褐色粗砂を混入
 33. 青褐色粗砂と暗褐色粗砂を混入
 34. にじみ黄色粗砂
 35. 黑白色中粒～粗砂

Fig.14 G・H-23区東西トレンチ南壁土層 (1/60)

SD722 (Fig.10)

G-24区のSD720 東壁で検出した溝であるが、時間の都合から一部しか調査していない。位置的にみて、SD714に延びる可能性がある。

出土遺物 (Fig.9・17、PL.75) 古墳時代から古代の土師器・須恵器、中世の土師器・白磁・青磁などの細片が少量出土している。

90は白磁の皿底部。底部は釉を掻き取る。縁を帯びた灰白色釉で、青白磁の合子の可能性がある。

W22は壺串で一部欠損する。残存長17.6cm、幅3.0cm、厚さ0.6cmを測る。頂部は山形に作り出し、角に切込みが入る。表面は丁寧な仕上げであるが、墨痕は残っていない。スギの板目材である。

SD723 (PL.9、PL.10)

G-27区からSD720の西側を平行して北に流れ、SD720西側に広がる水田の畔を切る溝である。北側に厚く堆積した洪水砂下で検出した。溝幅は下流の北側で約3mを測り、底の深さも北側が若干深くなる。内面には杭などはなく洪水などによる自然流路であろう。埋土も粗砂である。

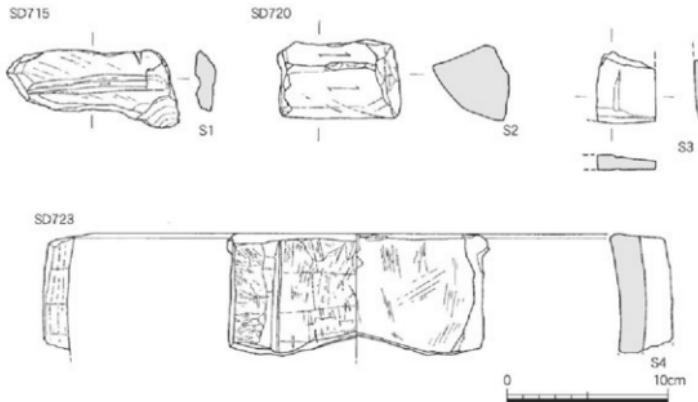


Fig.15 SD715・720・723出土石製品 (1/3)

出土遺物 量は少ないが、弥生土器や中世の土師器、滑石製石鍋片などが出土。

SD719・SD724 (Fig.14, PL.11)

H-22～G-23区で検出したSD720に合流する溝で、溝底は南が浅いが、水が北に向かって流れたので、更に溝底に深くなる。この下層溝をSD724としている。H-24ラインで、溝を横断する堰と思われる杭列があり、その北側には溝内に打ち込まれた条里方向に沿う西側から続く杭列があるが、時期的には新しい。南側の杭列の北側は一段と深くなり、その東側には鍵形に曲る堰がある、堰に打ち込まれた杭は西から北側に傾いているので、水流は南から北側に流れたのであろう。G-24～28区にかけてSD720西側から東側にかけて湾曲して流れれる新しい流路が上面で確認できたことから、この流れがSD719に繋がることが考えられる。溝の埋土は南側では黄白色の粗砂であるが、水の流れで一段と深くなる部分では細砂や粘土、粗砂などが交互に堆積する複雑な土層状況を呈す。土層埋土の状況から三回程の水の流れがある (SD724)。この溝から人間の頭骨が1点出土した。頭骨は下顎骨がなく、計測の結果からかなり高齢の男性のものと推定された。溝内の粗砂から出土しており、周辺から流れ込んだものと思われる。

出土遺物 (Fig.9・16, PL.71・72・73) 弥生時代から古墳時代の土器細片や須恵器、中世の土師器・白磁などが出土した。図化出来た遺物が多い下層溝のSD724のものを報告する。

91は土師器の塊で、復元口径は17.6cmを測る。外面はナデ、内面は丁寧なミガキかナデ。92～94は白磁。92・93は玉縁口縁IV類の碗、釉が厚めに掛かる。復元口径は16.0cm・16.8cmを測る。94は皿の口縁片。復元口径は10.0cmを測る。95は備前の焼締め陶器の擂鉢。備前焼IV期で14世紀後半から15世紀のもの。96・97は須恵器。96は高台が付く杯底部で、外底部はケズリ後ナデ、体部は回転ナデ、内面はナデである。高台部には接合痕が残る。97は壺か甌の口縁部片。復元口径は10.5cmを測る。調整は回転ヨコナデ。98は土師器の鉢。復元口径は9.2cmを測る。表面は磨滅し、調整は不明。

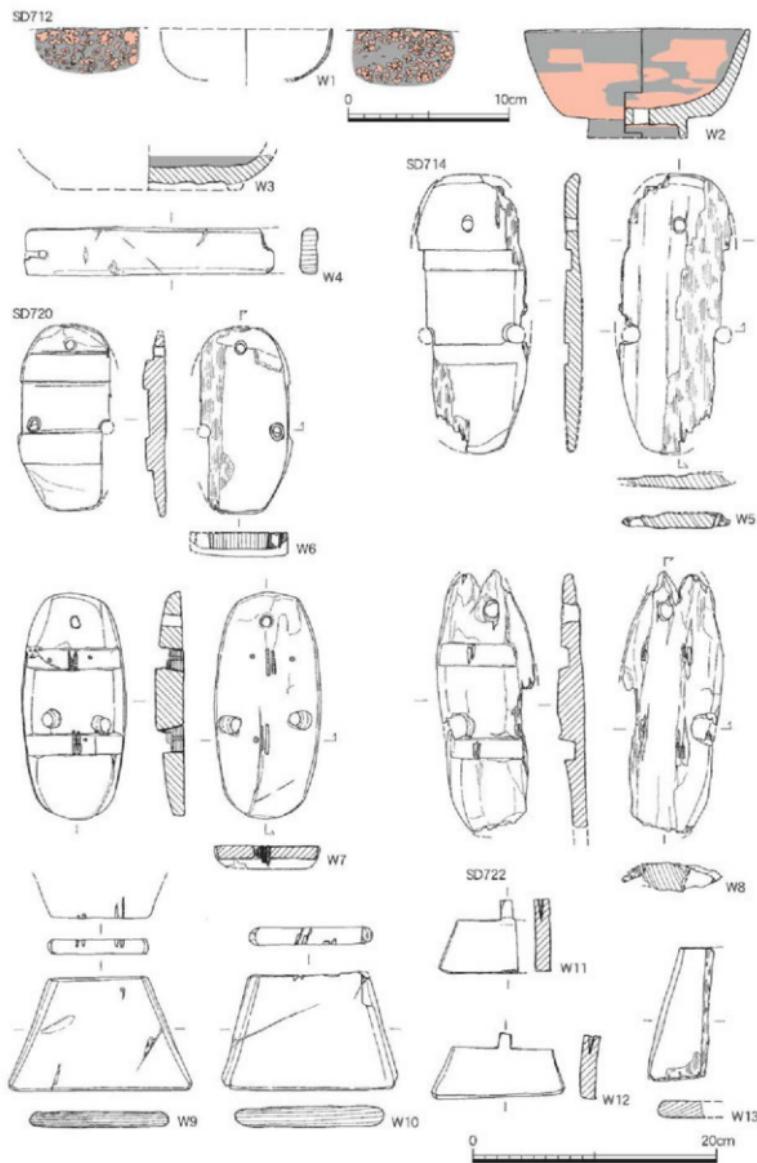


Fig.16 SD712・714・720-①・722出土木製品 (1/4・1/3) ※W1～3は1/3

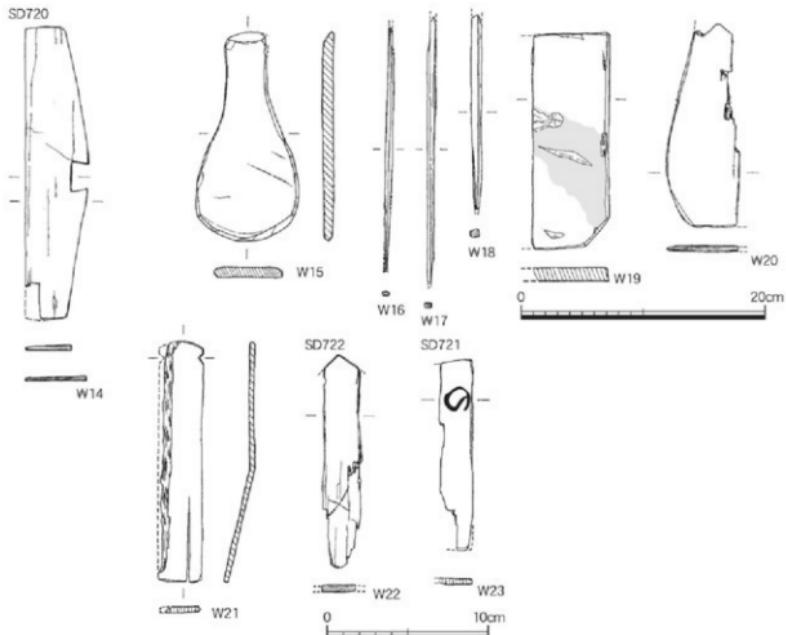


Fig.17 SD720-②・722, SS721出土木製品 (1/4・1/3) ※W21・23は1/3

② 堀 (SX)

SX725・726 (Fig.18, PL.12~15)

SD719とSD720と合流部で検出した堀で、鍵形に曲る形態。北側東西方向をSX725、西側南北方向をSX726としているが、造構の性格としては同一であるので合わせて報告する。残存長はSX725部分で5.6m、SX726は8.4mを測る。両造構の接合する部分に途切れる部分があるので、同時期に構築されたのではなく、構築された時期の差と考える。構築方法としては長さ2m前後、直径6~10cm程の杭を密に打ち込み、その間に長さ1m前後の横木をかませている。その間には松葉や小枝、植物の葉などが挟まっていた。杭は高所部で深く基盤に打ち込み、溝部分では流れで洗われたのかそれ程打ち込みは深くない。豊杭は北側と西側に倒れており、水の流れによるものと思われる。堀の内側には堀にかかる止まっていたと思われる植物の葉や小枝などがたくさん堆積していた。杭11試料について樹種同定を行った結果、いずれもマツ属であった。

出土遺物 (Fig.19~21, PL.72・75~77) 堀に絡んで弥生土器から古墳時代・古代の土師器・須恵器、中世土師器・瓦器・白磁・木製品、自然遺物などが出土している。

99~105は中世土師器。99は小皿。外底部糸切で、口径が小さくなり、且つ器高が高くなる形態を呈し始めるので13世紀以降のもの。100・101は壺。復元口径は100が13.8cm、101が14.6cmを測る。いずれも磨滅がある。101は形態的にやや古いと考える。102~104は土師器壺高台部。102は高台が断面

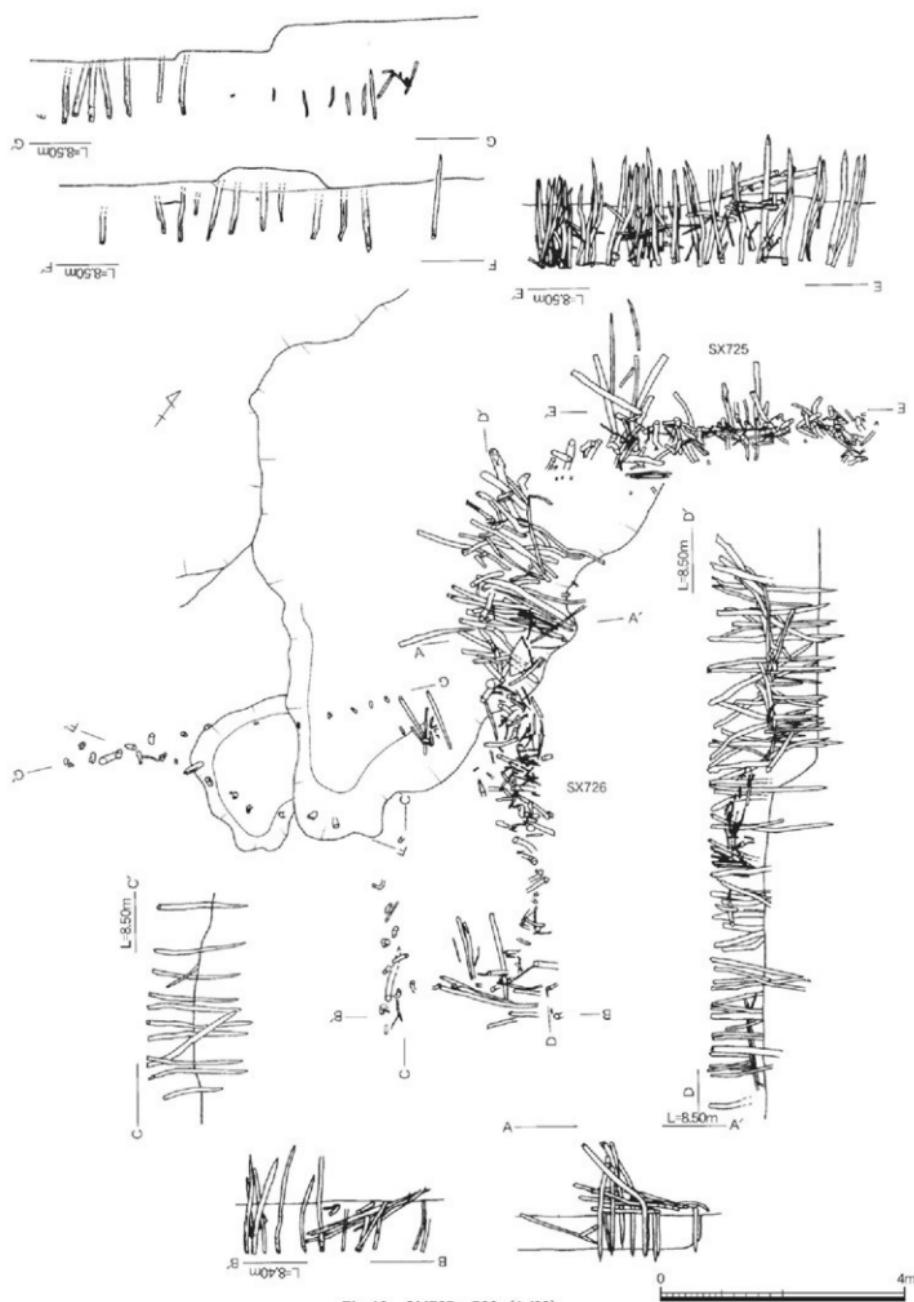


Fig.18 SX725・726 (1/80)

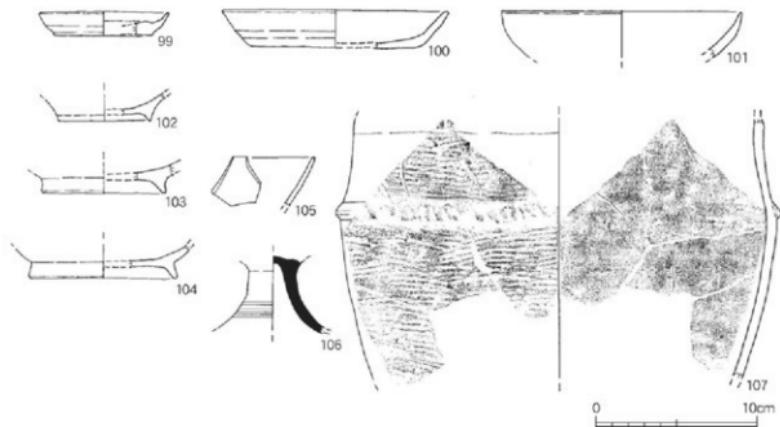


Fig.19 SX725 出土土器 (1/3)

三角を呈し簡略化した形態。104は細長く高い高台である。いずれも表面は磨滅する。105は白磁碗口縁部。釉が掛かり灰白色を呈すが、細かい気泡が入る。106は須恵器高环脚部。外面にはカキ目が巡る。色調は灰白色を呈し、焼成はやや不良。107は突帶文土器甌の側屈曲部。屈曲部には貼付け突帯が1条あり、ヘラによる刻目が付き、その痕跡は突帯下側脚部にも残る。外面は条纹、内面は丁寧な板ナデで擦痕が残る。

W24~26は漆塗椀。いずれもクリの木で作られている。W24は丸みを持つ体部で、口縁部と高台部を欠損する。ロクロによる挽き物で、内外面黒漆後赤漆で、内面3か所、外面4か所桐文を描く。W25は赤漆をいれていた椀。高台や体部の一部欠損。口径は14.5cmを測る。黒漆塗りの上に外面赤漆で文様描く。内面は赤漆を入れていたようで、全面に赤漆が付着し、漆ハケの使用痕が残る。ロクロによる挽き物である。W26は椀底部で、外面ケズリ、内面は黒漆塗りのち赤漆を塗る。W27~29は曲物底板。W27は完存で、直径14.2×15.3cm、厚さ0.9cmを測る。側面には対応して2か所に木(竹)釘が残る。柾目材である。28・29は半挽で、直径は23.3cm、厚さは0.9cmを測る。側面に木釘が7か所以上残る。片面には黒い炭化物(漆)が付着する。W29は直径27.3cm以上、厚さ1.1cmを測る。表面は傷みがひどい。側面には側板を接合するための9ヶ所木釘が残る。W30は長方形の曲物底板か蓋であるが、一部側面を欠損する。縦長27.8cm、横幅14cm、厚さ0.9cmを測る。表面には刃物傷が多く残っている。板上部には側板の圧痕が残り、櫛皮留の痕跡が残る。W31は欠損が著しい大足。残存長31.0cm、幅8.6cm、厚み1.0cmを測る。W32は紡織具の布巻き具。中央が膨らみ右端が細く尖る形態。残存長110.4cm、最大幅9.2cm、最大厚7.4cmを測る。中央部には2か所3×1.5cm余りの長方形のホゾ穴があり、内部にはホゾが残っていた。表面は削りで平面に仕上げ、側面は面取りする。樹種は本体がカキノキ属、ホゾはサカキで、異なっている。W33は板草履の芯一部。表面の傷みはひどく残りは悪い。残存長13cm、厚さ0.5cmを測る。W34~41は下駄で、W34~37はいずれも台が長楕円形を呈す差歛下駄、W38~41はその差歛である。W34・35は陰卯下駄の台。W34は小型で台の残り

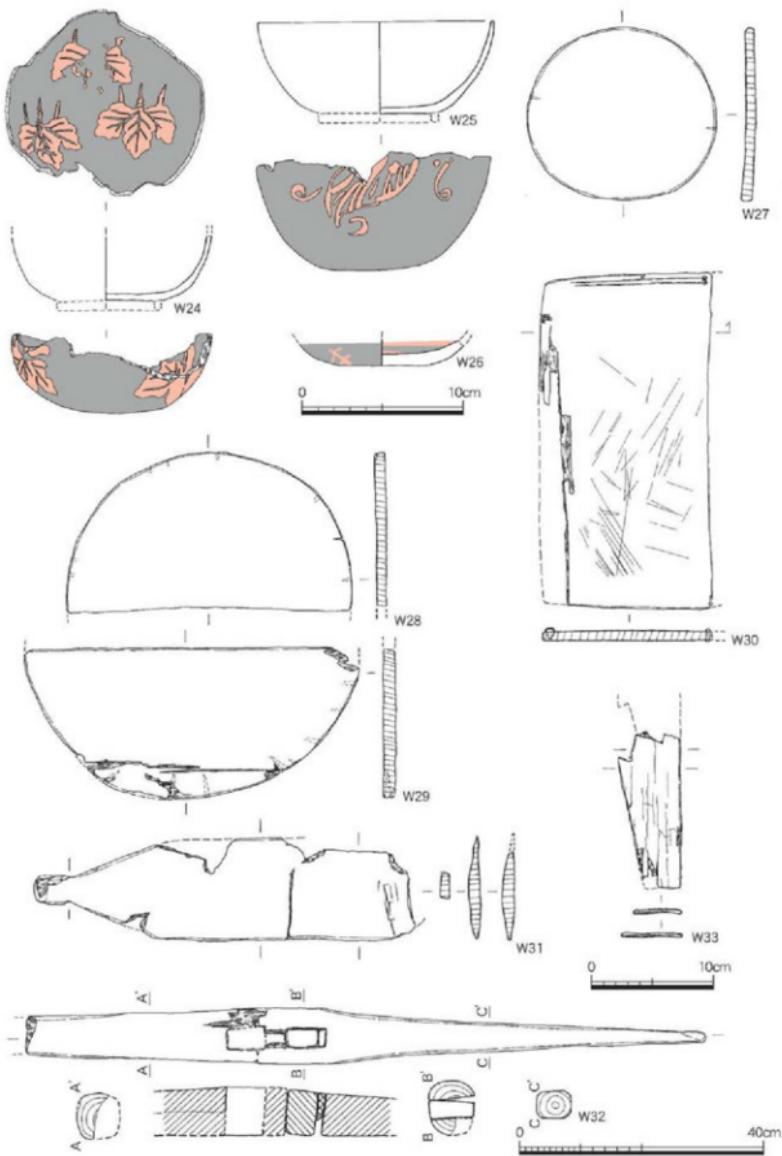


Fig.20 SX725 出土木製品① (1/3・1/4・1/8) ※W24～26は1/3、W32は1/8

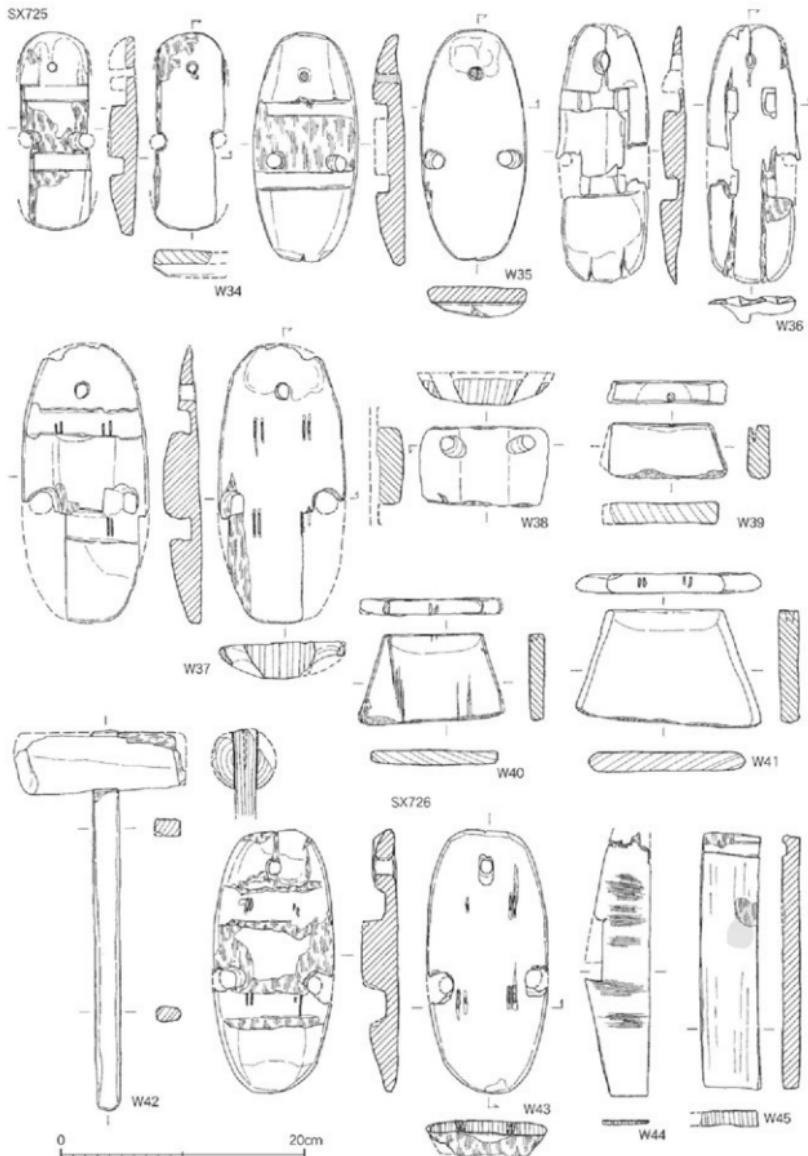


Fig.21 SX725・726 出土木製品② (1/4)

は悪い。台の全長16.2cm、残存幅5.8cmを測る。表面は丁寧なケズリ仕上げであるが、底には齒を噛ませる切込みがある。鼻緒孔が3か所ある。前壺が右によっており左足用であろうか。W35はほぼ完存である。全長18.9cm、最大幅8.6cm、最大厚2.4cmを測る。下駄底は一部欠損するが、差歛の切込みがある。鼻緒の前壺には紐の纖維が残る。柾目の板材を丁寧に削って仕上げる。W36・37は露卯下駄である。W36は乾燥と欠損がひどいが、全長21.2cm、最大幅7.5cm、最大厚2.2cmを測る。底には差歛用の切込みが2か所入り、その部分に装着用の長方形の0.7×1.5cmのホゾ孔が各2か所に入る。W37は欠損がひどいが、全長は22.9cm、最大幅10.3cm、最大厚3.2cmを測る。台底の切込みに2か所づつ楔が残る。鼻緒の孔が3か所あり、前壺は径1.0cm、後壺は径2.0cmを測る。木取りは柾目で、前緒壺の前方に指の圧痕の窪みが残る。W38は台の一部。鼻緒の孔が2か所残る。柾目材で樹種は不明。W39～41は差歛で形態は台形を呈す。39は傷みが酷いが、陰卯下駄の體。頂部に楔痕が残る。W40・41は露卯下駄の體で底は摩り減っている。W40は上辺7.5cm、下辺11.4cmを測る。頂部には楔が1か所残る。W41は大形で上辺長9.7cm、下辺長14.9cmを測る。楔痕が2対で2か所残る。W42は桶で、桶部分に柄が挿入されている。桶部分は長さ14.0cm、径5.0cmを測る。傷みが激しい。柄は全長31.1cm、断面は長方形で径は2.2×1.5cmを測る。桶と柄の挿入部の頂部には楔が打ち込まれ、固定されている。

W43は差歛下駄の台。露卯下駄で、底の傷みは酷い。全長21.4cm、最大幅9.8cm、最大厚3.0cmを測る。衛と台との固定は楔で、切込み部に2か所づつ打たれている。W44は草履芯の板。残存長21.6cm、最大幅5.2cm、厚さ0.25～0.4cmを測る。右側面には幅1.4cm、奥行き1.4cmの逆台形状の切込みがある。表面には藁などの圧痕が残る。W45は長方形の板材で、全長21.1cm、残存幅4.5cm、厚み1.3cmを測る。上端上面に幅1.2cm、深さ0.3cmの欠き込みがある。上面は一部炭化している。

③ 水田 (SS)

SD720 西側と東側で、3区画の水田面が確認した。SS704・710・721である。いずれも席田郡の条里方向に基づいている。SS704 水田が時期的に新しく、SS710・721は下層水田となる。第6次調査で確認した条里の坪境を示す東西大畦は本調査区では確認しきれなかったが、延長線上で杭列を検出している。

SS704 (PL.7、Tab.2)

調査区北東側 SD701 で検出した。高所部で検出した為、遺構の残りは良くない。洪水砂に覆われた部分で辛うじて幅0.7m程、高さ5cm程の畔状の高まりを検出し、水田面を確認した。十字に交差する畔があり4面の水田面に分かれる。水田は北から反時計回りで、①～④と番号付ける。畔は交差部辺りで流されたのか途切れる。畔は水田面に近い灰黄褐色シルトで粗砂が混じる。水田面②・④の西側 SD701 と切り合う部分では北に流れた流路が検出され、黄白色粗砂が堆積していた。この粗砂は上層から確認でき、水田面より新しい時期の流路である。水田面上には粗砂が詰まった足跡や株跡の落ち込みが多数残っていた。この水田面は SD701 南側にも広がると思われ、畔方向を取る粗砂が堆積した小溝などを確認したが、畔などは確認出来ず、明確な水田区画は把握出来ない。

出土遺物 (Fig.22, PL.73, Tab.2) 埋没砂から弥生土器から古墳時代から土師器・須恵器・沖積の土師器・土師質土器・陶器片が少量出土している。

108・109は土師器小皿。いずれも小片で、復元口径は9.0cmを測る。外底部はいずれも糸切で、体部は回転ナデ。110は備前IV期の擂鉢。外面は焼締められ赤褐色を呈す。焼成は良い。111は土師質の擂鉢。復元口径は約34cmを測る。外面は粗いハケメ、内面はすり目がかすかに残る。焼成は不良。108・111は水田③、109・110は水田④出土。

SS710 (PL.7・9・15)

SD720 の東側で検出した水田。畔は北側で東西と南北畔を部分的に検出したのみである。この水田北側の上面では SS704 の水田面が続いているようであるが、面的に把握出来ず、すぐ下が粗砂層になったので掘下げて確認した。この粗砂層は東側の SS704 下には認められず、E 杭ライン西側で水田面が立ちあがり SS704 に繋がると思われるが明確には確認出来なかった。畔の方向は SS704 と SS721 と同一方向であり、配置から少なくとも 4 枚の水田がある。規模は完全に確認した区画がないので不明であるが、水田①では南北畔と東側の立ち上がりの間が 13m を測り、又杭 E-30 ラインでも東西に立ち上がり、南側の東西溝との間隔 16m を測るので、その内面を水田面として把握すれば、面積は 208 m² となる。東西・南北畔はすべて交差する。水田面はオリーブ黒色シルトで、その面に足跡などが認められ酸化鉄分が沈着していた。畔は幅 0.5~0.6m 程で、水田面より 5~10cm 程の高さであるが、明瞭な盛り土は断面では確認出来なかった。南北畔で内から完存の土師器塊 115 が出土している。また水田耕土から牛と思われる頭骨が出土しており、水田祭祀の可能性がある。

出土遺物 (Fig.22, PL.73) 埋砂から弥生土器、古墳時代土師器、中世の土師器・須恵質土器、陶器、などが少量出土で、遺構の時期は確定が難しい。中世前期頃が多いが、上限は畔内出土の塊の時期以降、水田の開始の上限を示すものか。

112 は土師器の小皿。復元口径は 7.1cm、器高は 1.5cm を測り、口径の割に器高が高い。磨滅し調整は不明。大宰府中世土師器編年で 13 世紀末から 14 世紀中頃のものか。113・114 は土師器塊高台部。いずれも調整はナデ。115 は土師器の塊。畔内から出土。完形で口径は 14.1cm、器高は 3.9cm を測る。体部内外面はヨコヘラミガキで、外底部は回転ケズリで外周に粗いハケを放射線状に施す。胎土は赤色粒子や砂粒を多く含む。器形から 9 世紀前半頃のもの。116 は白磁皿口縁部片で、復元口径は 8.8cm を測る。体部外面下半は露胎である。117 は中世須恵質土器の鉢口縁部。12 世紀末から 13 世紀初め。115 以外は水田①出土。

SS721 (PL.7, Tab.2)

SD720 の西側で検出した水田。SD720 の洪水によるのか厚い洪水砂で覆われていた。畔は 26 ラインから北側で確認した。畔は南北方向と東西方向で、北側では北西から南東方向に延びる。これらの畔に開まれた水田区画は 9 面ある。東西と南北の畔はやすずれて交差する。水田区画の形状は長方形又は台形状で、面積は完全なものはないが、確認規模 48~248 m² でかなりのばらつきがあり、規格が崩れている。北側が水田⑥・⑧・⑨の東西畔南側には杭列があり、この杭列は東側の SD720 まで延びる。水口は水田②・③と水田⑥・⑨間の東西畔東側に水口と思われる畔が切れた部分が確認出来た。北側では洪水砂が南側に比べて厚く堆積しており、SD720 の氾濫によるよる砂が川下の北側は厚く堆積したのかも知れない、また中世の遺物は北側で主に出土しており、南側は古代のものが多いことから、時期差があるのかも知れない。

出土遺物 (Fig.17・22, PL.73・77) 埋砂から弥生土器、古墳時代～古代の土師器・須恵器、中世土師器・輸入陶磁器の白磁・青磁、木簡などの木製品が少量出土しているが、中世の遺物が多い。

118 は中世前期の土師器塊高台部片。復元底径 9.0cm を測る。磨滅がひどく調整は不明。119 は瓦器塊高台片。復元底径 7.0cm を測る。120~122 は白磁、120 は白磁碗の口縁細片。表面には貫入が入る。121 は平底皿で底部はやや上底。122 は四耳壺口縁部。口縁部は折り返す。表面はやや磨滅し、釉色はくすむ。11 世紀後半から 12 世紀前半のもの。123 は龍泉窯の鍋連弁青磁碗。復元口径は 15.8cm を測る。13 世紀代のもの。124 は須恵器の皿。復元口径は 14.2cm を測る。調整は体部から内面は回転ヨコナデ、外底部はヘラ切り。9 世紀前半のもの。125 は土師器の壺口縁部片。復元口径は 12.0cm を測る。調整

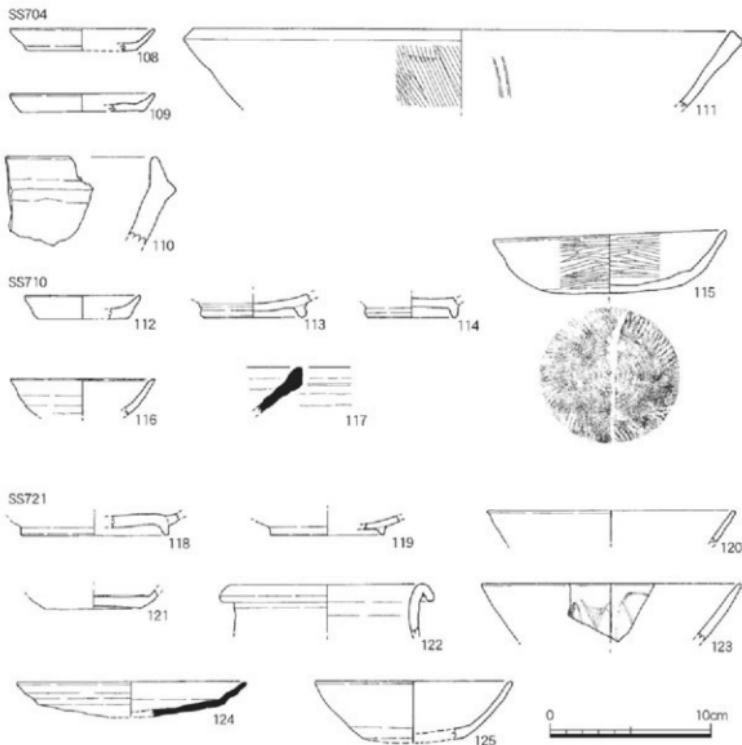


Fig.22 SS704・710・721 出土土器 (1/3)

は腐滅するが体部は回転ヨコナデ。118～123は水田①、124は水田②、125は水田⑧・⑨出土である。

W23は表面に「の」の字が書かれた板片。長さ11.8cm、残存幅2.05cm、厚さ0.3～0.4cmを測る。上下両端部は面取りして、表面は平滑に仕上げている。

④ 杖列 (SX)

SX727・728 (PL.15)

SX727・728は条里方向に沿う杖列。特に南側の杖列 SX728 は第6次調査で検出した東西坪境の大畦の延長上にあるので、畔に打ち込まれていた杖の可能性がある。

⑤ 搅乱・遺構面・包含層出土遺物 (Fig.23, PL.77)

126・127はSD712・713を切る近代の搅乱土坑 SX716 出土。126は19世紀前半遺構の肥前磁器碗で

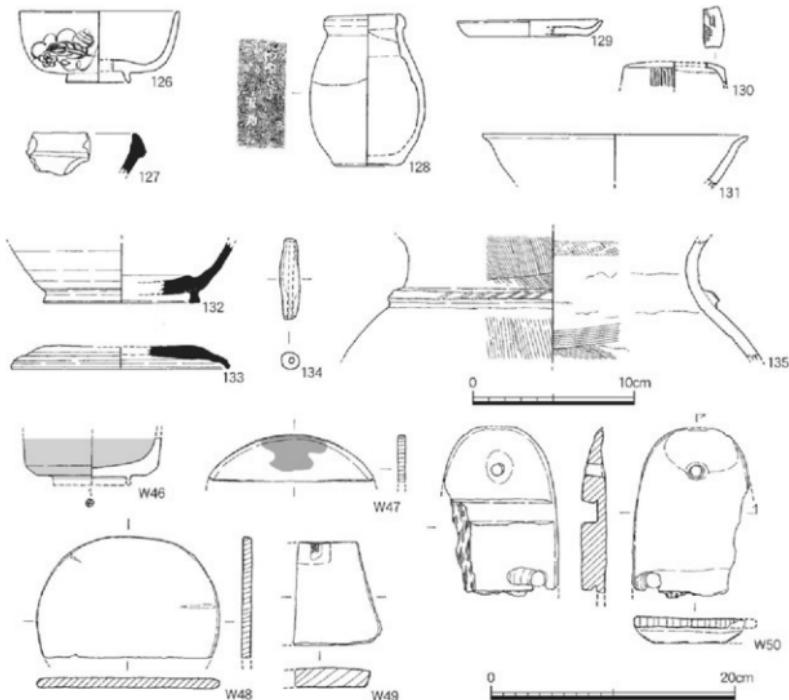


Fig.23 掘乱・遺構面出土器・木製品（1/3・1/4）※126～135は1/3、他は1/4

体部に花文が描かれる。127は東播系の中世須恵器鉢の口縁部細片。調整はヨコナデで12世紀。128は完存の陶器のタコ壺で器高9.3cmを測る。体部に『つやざき玉乃井』と彫られる。型打ちで成形したようで、縦中央部に接合痕が残る。体部上半には褐軸がかかり、下半から底部は露胎。調整はナデであるが磨滅する。福津市の津屋崎に『玉乃井』というタコ料理得意とする料亭が最近迄営業していた（石井忠氏ご教示による）。本資料はそこのものであろう。調査区排水溝出土。129は土師器小皿。復元口径8.8cmを測る。磨滅し調整不明。F-25区遺構面出土。130は白磁の合子蓋細片。体部は櫛状工具による縱線、天井部の文様は型押しで、貫入がひどく文様は不明。天井内面にも施釉。西壁出土。131は青磁碗口縁部片。口縁部がやや外反する形態で13世紀後半である。E-32試掘溝出土。132・133は須恵器。132は8世紀後半～9世紀前半の壺か坏底部。調整は回転ナデ。胎土に白色粒子と黒色粒子を少量含む。E-22区出土。133は蓋で9世紀前半のもの。少し歪みがあり復元口径は13.5cmを測る。天井部は回転ケズリ後ナデ。口縁部から内面は回転ナデ。H-24区遺構面出土。134は管状土鍤で、最大長5.0cm、最大径1.01cm、孔径0.3cmを測る。胎土は精良。135は弥生土器蓋口頭部片。頭部に1条突

帶が巡る。突帶にはハケ目工具による刻目が付く。調査はハケ目とナデ。弥生時代後期後半のもの。SX726 下黒色粘土包含層出土。

W46・47はSX716 近代搅乱出土。W46は漆塗椀。高台と口縁部を欠損。黒漆塗りの下地に赤漆を塗る。高台内に印がある。W47は曲物底板片。上面には黒漆の痕跡が残り、側面に釘穴がある。W48・49はF-26区遺構面出土。W48は曲物底板2/3片。最大径15.1cm、厚さ0.85cmを測る。側面に木釘が1か所残る。W49は差歛の露卵下駄の歛である。上面に楔が残る。W50は遺構面出土。陰卵の差歛下駄の台であるが、下歛切込みから欠損する。残存長13.9cm、最大厚さ2.3cmを測る。下駄はいずれもヒノキで作られる。

Tab.2 第1面水田計測表

(残存・推定)

遺構番号	形 状	面積 (m ²)	備 考	遺構番号	形 状	面積 (m ²)	備 考
SS704①	長方形	80以上	SD701が切る	SS710④	長方形	48以上	
SS704②	長方形	165以上		SS721①	台 形	176以上	SD723が切る
SS704③	長方形	152以上		SS721②	台 形	192以上	SD723が切る
SS704④	長方形	46以上		SS721③	長方形	162以上	③と②水口ありか
SS710①	長方形	208以上		SS721④	長方形	78以上	SD720・723が切る
SS710②	長方形	138以上		SS721⑤	長方形	148以上	SD720・723が切る
SS710⑥	長方形			SS721⑥	長方形		
SS721⑦	長方形	248以上		SS721⑧	長方形	46以上	⑨と⑩水口ありか
SS721⑧	長方形	180以上	SD723が切る	SS721⑩	長方形	176以上	

Table.3 第1面出土遺物観察表

報告 順序 番号	P.L.	PL.	出土状況	土種・形狀	性質 (cm) 中実度・馬力 口徑・幅・高 度・深 度	層位	土		色 調	直 織	理学状況	備 考
							層	土				
1 9 T1 SDT01				陶器・瓶	6.0 (0.5)	自っぽい黄土色、白・黄 色粒子子少量混入	褐色・内赤褐色薄茶色、外端 部に少量白い	良好	両台1/2強残存			
2 9 T1 SDT01				陶器・瓶	4.2 (1.5)	黄褐色、黒・白色粒少 量混入	褐色	良好	体部下平～両台全周			
3 9 T1 SDT01				陶器・瓶	5.0 (1.5)	真白色、黒・白色粒少 量混入	褐色	良好	両台全周			
4 9 T1 SDT01	上層			陶器・瓶	4.50 (1.5)	真白色、黒・白色	褐色	良好	両台1/2強存			
5 9 T1 SDT01				陶器・瓶	4.2 (1.5)	真白色、黒・白色	褐色	良好	両台1/2強存			
6 9 SDT01	試掘溝			陶器・瓶	6.0 (2.0)	真白色、黒・白色	褐色	良好	両台1/2強存			
7 9 T1 SDT01			専用罐器・瓶		6.2 (0.5)	真白色、黑色無機物 混入	褐色・灰白色油に反射・灰 色に反応	良好	粗織			
8 9 T1 SDT01			専用罐器・瓶		6.00 (4.0)	白に近い灰白色、黒・白 色粒子子少量混入	褐色・灰白色油に反射	良好	体部～瓶底1/2弱存			
9 9 SDT01			専用罐器・瓶		9.8 (3.8)	2.4	真白色、白色	褐色	良好	両台(1)細部に両台G1/2 火窓	両台	
10 9 SDT01			白瓷器・小皿		0.12	真白色、白色	褐色・白に近い灰白色	良好	0.1細部			
11 9 SDT01			磁器・片手		0.30	真白色	乳白色	良好	1/2～1/4強存			
12 9 SDT01	粗粘中		土器器・小皿		1.05	真白色	灰褐色	良好	粗粘1/4強存			
13 9 SDT01	粗粘中		土器器・小皿		0.9	真白色	灰褐色	良好	0.9細部(1)黄苔			
14 9 SDT01	粗粘中		土器器・小皿		2.0 (1.5)	少し黄色を帯びた白色、 黒・白色粒少量混入	褐色	良好	両台は通用、体部の残存 が少ない			
15 9 SDT01	粗粘中		土器器・小皿		1.0	真白色	少し灰白色を帯びた灰褐色	良好	0.1細部1/2強存			
16 9 T1 SDT01			陶器・瓶	(約)0.50	0.7	灰白色、細粒少量混入	褐色・黄褐色に黒褐色の點 がかかる	良好	0.1細部小片			
17 11 SDT01	上層		土器器・小皿	(約)0.5	1.75	真白色、砂粒少量	白っぽい灰褐色	良好	1/1強存			
18 11 SDT01	上層		土器器・杯	(約)1.5	2.6	真白色、砂粒少量	黄褐色	良好	1/1強存			
19 11 SDT01	上層		土器器・瓶	(約)4.0	4.5	真白色、砂粒少量	褐色を帯びた白色	良好	0.1細部(1)火窓	火窓部にやや積層あり		
20 11 SDT01	上層		土器器・瓶	(約)7.0	1.0	1～2mm粒多量	灰褐色	良好	両台部1/4強存			
21 11 SDT01	上層		土器器・瓶	(約)5.0	4.50	砂粒多量混入	灰褐色灰褐色	良好	両台部1/4強存			
22 11 SDT01	上層		土器器・瓶	(約)6.0	6.0	真白色、細砂少	灰褐色	良好	両台部1/4強存			
23 11 SDT01	上層		土器器・瓶	(約)6.0	6.0	真白色、細砂少	灰褐色	良好	両台部1/4強存			
24 11 SDT01	上層		陶土製土器・瓶	(約)5.0	5.0	白色細粒多い	灰・灰褐色	良好	粗粘1/2弱存			
25 11 SDT01	上層		土器器・瓶?	(約)4.0	4.0	砂粒多量混入、白色・黃 色粒子子混入	灰褐色	良好	0.1細部1/1強存			
26 11 T1 SDT01	上層		土器器・手	(約)0.5	1.0	1mm粒多量	灰褐色	良好	0.1手部			
27 11 SDT01	上層		白瓷器・瓶	(約)0.5	0.20	灰白色	褐色・灰白色、地は灰・褐色	良好	0.1細部1/5強存	N盤		
28 11 T1 SDT01	上層		白瓷器・瓶	(約)0.5	0.20	真白色、黑色粒子子かぶ り混入	真白色	良好	0.1細部小片	手部のため、手付		
29 11 SDT01	上層		白瓷器・瓶?	(約)0.5	0.21	真白色、灰白色	褐色・灰白色	良好	0.1細部1/10強存			
30 11 SDT01	上層		白瓷器・瓶	8.0間隔	0.10	0.10	灰褐色	良好	混合部細部	両台		
31 11 T1 SDT01	上層		白瓷器・瓶	(約)0.5	0.10	真白色、黑色粒子子少 量混入	褐色	良好	0.1細部1/4強存	両台		
32 11 SDT01	上層		白瓷器・瓶	(約)0.5	0.10	砂粒少量混入	褐色	良好	0.1細部1/4強存			
33 11 SDT01	上層		白瓷器・瓶	(約)0.5	0.10	白色砂粒多量混入、黑色 粒子子少量混入	褐色	良好	両台1/4強存	両台		
34 11 SDT01	上層		白瓷器・瓶	(約)0.5	0.10	砂粒少量混入	褐色	良好	1/1強存			
35 11 SDT01	下層		白瓷器・瓶	(約)0.5	0.10	白色砂粒少量混入、黑色 粒子子少量混入	褐色	良好	1/1強存			
36 11 SDT01	下層		白瓷器・瓶	(約)0.5	0.10	砂粒少量混入	褐色	良好	1/1強存			
37 11 SDT01	下層		白瓷器・瓶	(約)0.5	0.10	白色砂粒少量、黑色粒子 子少量混入	褐色	良好	1/10強存			
38 11 SDT01	下層		白瓷器・瓶	(約)0.5	0.10	灰・砂粒少量	灰褐色	良好	1/1強存			
39 11 SDT01	下層		白瓷器・瓶	(約)0.5	0.10	灰・砂粒少量	灰褐色	良好	1/1強存			
40 11 SDT01	下層		白瓷器・瓶	(約)0.5	0.10	灰・砂粒少量	灰褐色	良好	1/1強存			
41 11 SDT01	下層		白瓷器・瓶	(約)0.5	0.10	砂粒少量混入、非赤粒子 子少量混入	褐色	良好	1/1強存			
42 11 SDT01	下層		白瓷器・瓶	(約)0.5	0.10	砂粒少量、白瓷器粒子 子少量混入	褐色	良好	1/1強存			
43 11 SDT01	壁面下層		白瓷器・瓶	(約)0.5	0.05	砂粒少量混入	褐色	良好	1/1強存			
44 11 SDT01	壁面下層		白瓷器・瓶	(約)1.0	0.15	砂粒・赤色粒子子多量混入	褐色	良好	0.1細部1/4強存			
45 11 SDT01	下層		白瓷器・瓶	(約)0.5	0.10	砂粒少量混入	灰褐色	良好	両台部1/4強存			
46 11 SDT01	下層		白瓷器・瓶	(約)0.5	0.10	砂粒少量混入、赤色粒子 子少量混入	褐色	良好	両台部1/4強存			

下月限C遺跡

報告 番号	P.L.	出土階級	土色・粒度	基層・地形	地質 (cm) 日深さ・地厚 口幅・底幅 根深・幅 厚さ	地 土	色 調	質 感	現状状況		備 考
									堆積物	被覆	
47 11	SDT21	下層	土砂層・黒		(5.0)	(1.5)	堆積物	被覆灰褐色	良好	栗台部 1/4 領存	
49 11	SDT21	堆積下層	土砂層・黒		(5.0)	1.50	白色砂粒少量混入	被覆褐色	良好	栗台部 1/4 領存	
49 11	SDT21	下層	土砂層・黒		(5.0)	1.50	1 mm 以上砂粒多量混入、 赤色粒子も混入	被覆灰褐色 褐色か	良好	SDT21	調査器の堆積物
50 11	T2	SDT21	下層	土砂層・黒	(17.0)	0.50	赤色粒子・砂粒多量混入	赤色を帯びた黃褐色	良好	SDT21 小片	SDT21
52 11	T2	SDT21	堆積下層	土砂層・黒	(19.0)	0.50	1~2mm 砂粒多量混入、 揮	赤色・黒色の付着	良好	SDT21 ~ SDT1 1/6 領存	
53 12	SDT21	下層	土砂層・黒		(10.0)	0.50	細砂多量混入	灰・暗灰褐色	良好	SDT21	
54 12	SDT21	下層	土砂層・黒			1.50	砂粒多量混入	灰褐色・うすい赤褐色	良好	栗台部のみ残存	
55 12	T2	SDT21	下層	土砂層・黒			砂粒少量	被覆褐色	良好	栗台部のみ残存	
56 12	SDT21	下層	白砂器・黒		(15.0)	0.50	灰褐色	触・緑味帯びた灰白色	良好	SDT21 1/1 領存	
57 12	T2	SDT21	下層	白砂器・黒	(10.0)	0.50	灰白色、薄層	触・少々葉・跡を帯びた 灰・灰色	良好	1/12 領存	直付 1 類
59 12	T2	SDT21	下層	青磁器・黒	(15.0)	0.50	灰白色、薄層	触・青味	良好	SDT21 1/10 領存	我食窯: 売
59 12	SDT21	堆積	青磁器・黒		(5.0)	0.50	灰白色	触・瓦色の悪い茶褐色	良好	SDT21 1/2 領存	我食窯
60 12	T2	SDT21	下層	褐陶器・青磁器			青灰化で黒色粒子混入	青灰化、触:オフーバー	良好	耳縫細片	
61 12	T2	SDT21	上層	陶器・灰	頭部深 (7.0)	0.50	黒色粒子少量混入	触・赤色を帯びたうすい 褐色	良好	SDT21 1/4 領存	
62 12	SDT21	樂器	須器・灰		(11.0)	2.5	砂粒少量混入	赤灰色	良好	1/10 領存	
63 12	T2	SDT21	下層	須器・灰	(10.0)	0.50	触	灰色	良好	1/1 領存	
63 12	SDT21	堆積下層	土砂層・黒		(1.0)	1.50	堆積物、砂粒少量混入	黄褐色	良好	1/1 領存	
65 12	SDT21	堆積土層	土砂層・黒		(1.0)	1.50	砂粒少量混入	灰灰褐色	良好	1/1 領存	
66 12	SDT21	堆積下層	土砂層・黒		(1.0)	1.50	砂粒少量混入	不透明幽緑・青白	良好	SDT21 ~ SDT1 1/6 領存	
67 12	SDT21	堆積下層	青磁器・黒				灰白色	触・灰綠色	良好	SDT21 小片	我食窯系
68 12	SDT21	堆積下層	法器類・灰		(14.0)	0.50	砂粒少量混入	灰色	良好	SDT21 1/5 領存	
69 12	SDT21	堆積下層	法器類・灰		(0.1)	0.50	砂粒少量混入	黑色・触:少	良好	栗台部 1/4 領存	
70 12	SDT21	堆積下層	須器・青灰		(1.0)	0.50	砂粒少量混入	青灰色	良好	SDT21 1/6 領存	
71 12	SDT21	堆積下層	玩石・灰		(1.0)	0.50	砂粒少量混入	青灰色	良好	完存	調査器不明
72 12	SDT21	上層	須器・青灰			0.50	砂粒少量混入	青白	良好	SDT21	施塗跡
73 12	SDT21	上層	須器・灰		(1.0)	0.50	砂粒少量混入	黑色・触:少	良好	1/1 領存	
74 12	SDT21	上層	土砂層・小粒		(0.1)	1.50	砂粒少量混入	青灰褐色	良好	栗台部 1/5 領存	栗台
75 12	SDT21	下層	土砂層・小粒		(0.1)	0.50	砂粒少量混入	触:灰褐色	良好	SDT21 1/6 領存	
76 12	T2	SDT21	下層	土砂層・小粒	(0.1)	0.50	砂粒少量混入	青灰色	良好	SDT21 1/5 領存	
77 12	T2	SDT21	H-1	土砂層・灰	12.4	3.0	砂粒少量混入	铁分付着し青褐色	良好	完存	
78 12	T2	SDT21	下層	灰・灰	(14.0)	4.0	砂粒・砂粒少量	触:灰褐色、黑褐色	良好	SDT21 1/5 領存	
79 12	T2	SDT21	下層	白砂器・灰	(15.0)	0.50	砂粒がかった白色	触:少し黄色を帯びた灰 白色	良好	SDT21 1/5 領存	N型
80 12	SDT21	下層	白砂器・灰				触:触・白色	触:少しうれを帯びた灰 白色	良好	SDT21	
81 12	SDT21	下層	青磁器・黒		(1.0)	0.50	触:触・灰・青灰色	触:触・白色	良好	SDT21 1/5 領存	我食窯系
82 12	SDT21	下層	青磁器・黒		(1.0)	0.50	触:触・白色	触:触・青灰色	良好	SDT21	我食窯系
83 12	T2	SDT21	下層	土砂層・灰	(1.0)	0.50	砂粒少量混入、赤色粒子 混入	触:触・青灰色	良好	SDT21 1/5 領存	
84 12	SDT21	下層	須器・灰		(0.1)	0.50	砂粒少量混入	触:触	良好	SDT21 1/6 領存	
85 12	SDT21	下層	須器・灰		(0.1)	0.50	砂粒少量混入	触:触	良好	SDT21 1/6 領存	
86 12	T2	SDT21	下層	土砂層・灰	(1.0)	0.50	砂粒少量混入	触:触	良好	SDT21 1/6 領存	
87 12	SDT21	堆積下層	須器・灰		(12.0)	0.50	砂粒少量混入	触:触	良好	1/20 領存	
88 12	T2	SDT21	堆積下層	須器・灰	(1.0)	0.50	砂粒少量混入	触:触	良好	SDT21	
89 12	T2	SDT21	堆積下層	須器・灰	(1.0)	0.50	2mm 内外の多量混入	触:触・触	良好	SDT21	
90 9	SDT21	白砂器・灰			(0.1)	0.50	白色・黑色粒子少量混入	触:触・青灰色	良好	SDT21 1/6 領存	
91 9	SDT21	灰化	土砂層・灰		(1.0)	0.50	砂粒少量混入	触:触	良好	SDT21 ~ SDT1 1/5 領存	
92 9	T2	SDT21	灰化	白砂器・灰	(1.0)	0.50	白色・黑色粒子少量混入	触:触・触	良好	SDT21 1/6 領存	N型
93 9	T2	SDT21	青磁器・灰		(1.0)	0.50	灰白色・黑色無粒子少量 混入	触:触・触	良好	SDT21 1/12 領存	N型
94 9	SDT21	灰化	白砂器・灰		(1.0)	0.50	触:触	触:触	良好	SDT21 1/12 領存	

石器・石製品

番号 No. Fig.	PL 出土層	出土状況 出土鉱物	岩相・器形	直徑 (cm) × 高さ × 厚	性質 の概要	石 材	集 地	備 考
四 15	SDT05	不明鉱物晶	10.4 4.7 1.3	薄石				上面に使用による縁なし、深さ0.2cmの溝あり、砾石?
四 15	SDT06	下層	砾石	7.5 4.8 5.2	砂質? (石英ひん岩?)	灰白色		縫隙は1箇で、小口部は打抜による粗面調査
四 15	T1	SDT07	上層	高半円石片	2.8	0.7	直観?	灰-灰白色
四 15	T3	SDT08	石塗の軸用	φ15 φ14		薄石		黒褐色、外側にスグれ付着 両面に耳状の把手がつく

木器・木製品

編番号	P.L.	出土遺物	出土地點・層位	器種	法面 (単位: cm)					木取り	備考	種類
					長さ・口幅・ 幅	幅・高さ・ 厚	厚さ・底径	その他				
W1 16 73 SDT11		漆器・瓶		漆器・瓶	10.6	3.0	0.2		板目	縦1cmほど残存。	ブナ風	
W2 16 74 SDT12	漆器中	漆器・瓶		漆器・瓶	12.7	(3.0)		高台径4.0	板目	縦1cmほど残存。	ブナ風	
W3 16 73 SDT12	下限灰褐色シルト	漆器・瓶		漆器・瓶	14.9	1.7			板目	低い位置で多く。		
W4 16 74 SDT13	上層(砂シルト)	板材		板材	20.0	3.8	1.5		板目		スギ	
W5 16 74 SDT14	板材中	下駄		下駄	21.0	(3.0)	1.4		板目	裏面の脚跡下駄の合跡。	ヒノキ	
W6 16 74 SDT15		下駄		下駄	15.5	推測大.5	底大.10	裏面の孔径 1.0~1.5	板目	裏面下駄の合跡。 上駄の跡の残存。	ヒノキ	
W7 16 74 SDT15		下駄		下駄	18.7	8.6	1.4	裏面の孔径 1.0~1.5	本体: 板目 縫合: 不規	裏面下駄の合跡。	ヒノキ	
W8 16 74 SDT15		下駄		下駄	21.0	(3.0)	底大.15		板目	裏面? (裏面下駄の合跡)	スギ	
W9 16 74 SDT15	上層				約2.0~15.0	9.3	1.8		板目	裏面下駄の合跡。完形		
W10 16 74 SDT15	上層				約2.0~24.3	9.7	1.7		板目	裏面下駄の合跡。完形。		
W11 16 SDT15		下駄		下駄	(4.7~6.4)	5.0	1.2	縫合: 約1.6, 縫合: 0.5~1.5	本体: 板目 縫合: アメニ材	裏面下駄の合跡。		
W12 16 SDT15		下駄		下駄	8.0~10.7	4.3~5.5	1.2	縫合: 約1.4, 縫合: 0.5~0.8	本体: 板目 縫合: 不規	裏面下駄の合跡。完形。		
W13 16 SDT15		下駄		下駄	10.0	(4.0)	1.4		ナナメ	裏面下駄の合跡。		
W14 17 74 SDT15	捷化廻下駄	漆器芯		漆器芯	24.1	5.2	0.45		板目	裏側としては完形。	スギ	
W15 17 74 SDT15	片端丸(下駄)	漆器芯		漆器芯	17.1	底大.9.3	0.8	和舟幅0.3	板目	和舟丸形		
W16 17 75 SDT15		漆		漆	20.0		0.6		板目		スギ	
W17 17 75 SDT15	下駄(砂)	漆		漆	21.0		0.6×0.45		板目		スギ	
W18 17 75 SDT15	下駄	漆		漆	21.5		0.7×0.8		板目		スギ	
W19 17 SDT15	上層	板材		板材	17.9	(3.0)	1.1		板目		スギ	
W20 17 75 SDT15	不明大骨器(?)	不明大骨器(?)	(研究の一部?)	不明大骨器(?)	16.7	底大.7	0.6		板目		ヒノキ	
W21 17 75 SDT15	下駄・漆器用	漆器芯		漆器芯	14.9	1.7	0.4	洗合: 縞 縫合: 0.5~1.5	洗合: 縞 縫合: 0.5	裏面残有り。	スギ	
W22 17 75 SDT15	漆	漆		漆	17.0	(2.0)	0.6		板目		スギ	
W23 17 77 SDT11	②・水田用	板材		板材	11.8	(2.1)	0.3~0.4		板目?	「の」字が書かれた痕跡。 裏面残有り。	スギ	
W24 20 76 SXT25		漆器・瓶		漆器・瓶	(底大13.0)	(4.0)			板目	縦面付き。	ナラ	
W25 20 76 SXT25	漆	漆器・瓶		漆器・瓶	14.5	(5.0)			板目	縦面付き。赤漆付。	ナラ	
W26 20 76 SXT25	漆	漆器・瓶		漆器・瓶	(底大10.0)	(1.0)			板目	縦面跡	ナラ	
W27 20 76 SXT25	漆物(底版また 好焉)	漆物(底版また 好焉)		漆物(底版また 好焉)	14.2	15.0	0.9		板目			
W28 20 76 SXT25	漆物(底版また 好焉)	漆物(底版また 好焉)		漆物(底版また 好焉)	13.2	23.2	0.9		板目			
W29 20 76 SXT25	漆	漆物(底版また 好焉)		漆物(底版また 好焉)	27.2	12.4	1.1		板目		スギ	
W30 20 76 SXT25	黑色黏土下砂層	漆物(底版また 好焉)		漆物(底版また 好焉)	14.0	27.0	0.9		板目			
W31 20 76 SXT25	陶器	黑色黏土下砂層	陶器・底付?	陶器・底付?	21.0	(3.0)	1.0		板目	ヨウジ属アカガシ 黒葉		
W32 20 76 SXT25	鐵製品、漆器も満				110.0	9.2	7.4	本体: 沢山ち 押抜き: 沢山ち	澤山の鉛錠?	本体: ヒノキ風 模様: サカナ		
W33 20 76 SXT25												
W34 21 75 SXT25	漆器芯				13.0	5.0	0.5		板目	脚部下駄の合跡。	スギ	
W35 21 75 SXT25	漆				16.2	(5.0)	2.0		板目	裏面下駄の合跡。	スギ	
W36 21 75 SXT25	N.O.A.				18.9	8.0	2.4		板目	裏面下駄の合跡。	スギ	
W37 21 75 SXT25	W-4				21.2	7.5	2.2		板目	裏面下駄の合跡。	ヒノキ	
W38 21 75 SXT25	漆				21.9	10.3	3.2		板目	脚部下駄の合跡。	ヒノキ	
W39 21 75 SXT25	漆。黒褐色黏土下砂層	漆器・瓶		漆器・瓶	18.0	(10.0)	(2.0)		板目	脚部下駄の合跡。	ヒノキ	
W40 21 75 SXT25	漆	漆器・瓶		漆器・瓶	4.7	(3.0)	1.9		板目	脚部下駄の合跡。	ヒノキ	
W41 21 75 SXT25	漆				7.0	11.4	1.4		板目	裏面下駄の合跡。	ヒノキ	
W42 21 75 SXT25	漆				9.7	14.9	1.7		板目	裏面下駄の合跡。	ヒノキ	
W43 21 77 SXT25	工具・木箱				31.1	14.0	5.0	新規長方形 約: 10.0×1.5 幅: 1.2×1.5	新規長方形 約: 10.0×1.5 幅: 1.2×1.5	ヨウジ属アカガシ 黒葉? 板目?	ヨウジ属アカガシ 黒葉	
W44 21 77 SXT25	漆器				31.4	底大9.8	3.0		板目		スギ	
W45 21 77 SXT25	漆器芯				31.6	(5.2)	0.25~0.4		板目	裏側としては完形。	スギ	
W46 21 77 SXT25	板材				31.1	(4.0)	1.8		板目		スギ	
W47 21 77 SXT25	漆器・瓶				最大11.3	(3.0)		高台径6.0		ハイノキハイノ キ跡		
W48 22 77 SXT25	漆器(底版また 好焉)				13.4×3.0		0.7		板目		ヒノキ	
W49 22 77 SXT25	漆器(底版また 好焉)				0.0	15.1	0.9		板目		スギ	
W50 22 77 SXT25	漆器				8.8	(7.0)	1.6		板目	裏面下駄の合跡。	ヒノキ	
W51 22 77 SXT25	漆器				13.0	(0.0)	2.0		板目	脚部下駄の合跡。	ヒノキ	

3. 第II面の調査

1) 調査の概要

第I面を約80cm下げ古墳時代後期（6世紀後半）から奈良時代（8世紀後半）を中心とする時期の遺構を検出した。地形的に第I面で確認されたように北西方向に傾斜し、北半部を中心に水田の畦畔等の施設が洪水砂に覆われた状態で良好に残る。

南側ではこの検出面の下限となる8世紀後半に洪水砂で埋もれたSD735が検出された。蛇行した流路内の2箇所に井堰が検出され、木筒や墨書き土器が出土した。木筒は「皇后宮職」が記載された注目すべき文書木筒で、この地の歴史的背景を考察する上で貴重な資料となった。

この面では近世まで受け継がれた水防に関わる技術が多くみられた。水路のSD734の両岸には欠所の補修や護岸のための杭列や粗朶を柵状に絡ませた施設を有した土堤775と土堤790が検出された。また、水路734から田面への水口には砂泥の流入を防ぐ置賣とよばれる土壌SX737も検出された。このSD734の時期は層位や方向から他の畦畔や流路より降り、比較的旧河川SD735に近い時期と考えられる。

調査区西側から北側にかけて検出された流路や畦畔は北側で大きく東側へ方向を振る近似した方向をとる。出土遺物からみた時期は6世紀後半が下限となっている。この中で水路SD746を横切って築かれた堤の切所の修復に近世において「屏風倒し」と呼ばれる基礎工事がみられた。この遺構の時期は8世紀代とみられ、先のSD734同様に真北に近い方向をとる。従って条里地割りに則した畦畔が構築されるのはこの第II面より降った時期であり、第I面で検出された9世紀代の条里地割りの畦畔に変遷していく間に大きな変更があったものと考えられる。

時期的に遡って6世紀後半以前に築造された可能性がある北側で検出された畦畔は砂に覆われ遺存が良好であった。これらは流路に平行し地形に則した方向をとる。西側のSD746周辺の畦畔は下部に粗朶を敷き基礎固めをした水防工事を伴っていた。

2) 地形と層位

第I面同様に調査区南東部が高く北西方向に傾斜している。ただし南側では層位を明確にとらえた検出面ではなくSD735が検出できたレベルと周辺の砂層が薄く堆積していた層を指標にして剥ぎ取りを行った。北側になると厚い砂層の堆積が検出でき畦畔をとらえることができた。断面から第I面から第II面までの間層に剥ぎ取り時は認識できなかったが砂層にはさまれてグライ化したシルト層が堆積していることが判り部分的に水田面が残っていた可能性もある。

検出面の標高は南東部で7.7m、北西部で7.1mを測り60cmの比高差で傾斜している。

3) 遺構と遺物

① 旧河川

SD735 (Fig.24・25, PL.22・23)

(位置と形状)

調査区南東部で検出された。北流し調査区東際で方向を西寄りに変える。上流となる南側の8次調査でも大きく西側に蛇行しているのが確認され、形状から旧河川と考えられる。更に南側(上流)の延長は第6次調査で検出されたSD81と考えられ、時期的にも合致している。この推定ラインも蛇行が著しい。御笠川の支流と考えられるが、御笠川本流からの分岐は現地点では不明である。しかし、方向や現在の流路等を勘案すれば、南側約80mの御笠川が蛇行する変換点に位置した立花寺B遺跡

付近の可能性が考えられる。

(埋土)

Fig.25土層図に示すように3層上面の第Ⅰ面を約40cm下げたレベルで埋土の砂層が検出される。

幅は12m、下底は下層の黒色粘土が露呈され明瞭な部分もあるが、中央部は深さ約1.5mで変わった明色のシルトないし明褐色粗砂層とした部分もあり、巻き上げた砂層中で更に深くなっていた可能性もある。流路内は洪水砂とシルトで埋もれていた。大きな単位に分層することも可能であるが、時期が異なる層位としては確認できない。西側の壁の立ち上がりが急であるのは南側の8次調査で検出されたように西側へ蛇行していた為に水流により削られたことによる。層界も西側へ急に立ち上がり細かい層序がみられる。西側の岸際に盛り上がりがみられるのは人為的なものではなく、洪水による堆積と思われる。岸際の護岸に用いた杭列等は検出されない。

(遺物の出土状態)

堰743、堰744付近に集中するが、砂層中には実測図にのせていない比較的小さな破片がコンテナに10箱分出土した。この中には下限の8世紀後半代の遺物のほかに弥生土器が多く含んでいる。

(検出について)

SD735はバックホーを用いて南側から第Ⅰ面から第Ⅱ面への掘り下げていく過程において高いレベルでその砂層の流路が検出された。しかし、このレベルでは周辺は粘土層で、約20cmほど下げた面にシルトや砂が混じった水田面を検出できる可能性がある層位を確認するために、時間的な制約からこのレベルまで掘りさげ、SD735の上面を幾分割り下げた。この検出過程において土堤や護岸等の施設は検出されなかった。また、SD735の洪水砂に伴う畔も周辺には検出されなかった。しかし、調査区東壁の観察では直線的に北東方向へ延びた土堤775がSD735の洪水砂で覆われていた。時期的には近いと思われるが、SD735の洪水によって上部の堆積土が削平されていることが推察されるため、同時に存在したことを示すには難しい。

(SD735西側の小溝)

堰744から堰743の西側に幅30cmの細い小溝が途切れながら延長約20mにわたって検出された。遺構番号は調査時には付していない。この小溝はSD735の検出レベルと同様の高い位置で検出され、埋土も灰白色の洪水砂であった。SD735の方向よりやや西側へ振れて北流し、SD735からの取水路の可能性がある。

② 堰

SD735では第7次調査で2箇所、8次調査で1箇所の堰が検出された。蛇行する変換点付近に築き、変わった流路の方向とは逆向きの岸に取水口を設けたものと思われるが7次調査で検出されたSX743、SX733の井堰に伴う取水口、水路は検出されなかった。

SX743 (Fig.26~28, PL.24・25)

調査区東壁際で検出されたアーチ式の井堰である。蛇行したSD735が方向を西側へ振った少し先に築かれていた。井堰は調査区外にのび全体の形状は不明であるが、カーブの状況から中央付近までが露呈できていると思われ、川幅12mに対し幅16mに及んで構築されているものと推定される。

杭列は岸に上がった部分ではおよそ2列に打ち込まれているが、流路内では前面(南側)にも多くジグザク状に打ち込まれている。おそらく榦状に打ち込まれた堅杭に横木や粗朶を絡ませて構築していたものと考えられるが、水流で大きく北側へ傾斜している。これら堅杭の長さは下底までの約1.5

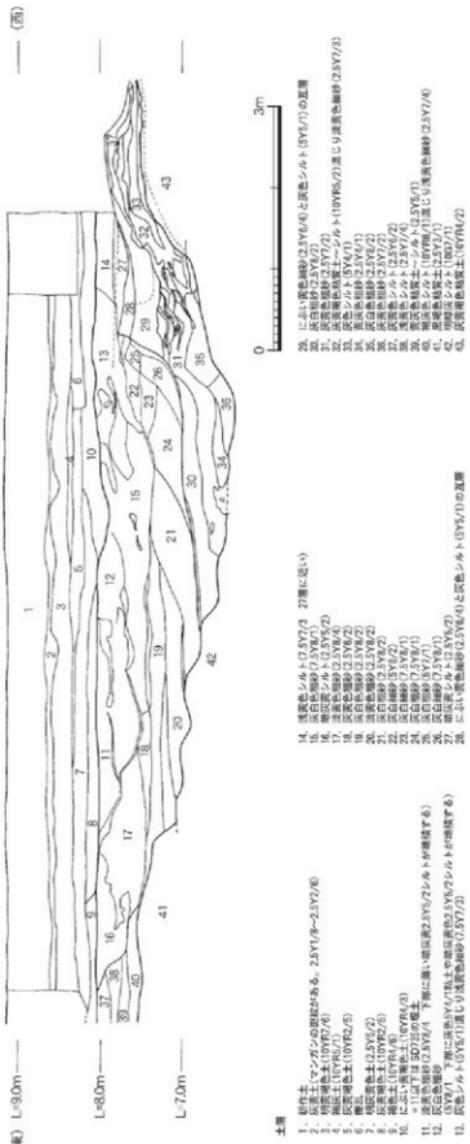


Fig.25 SD735 土壌断面図 (調査区南壁 : 1/60)

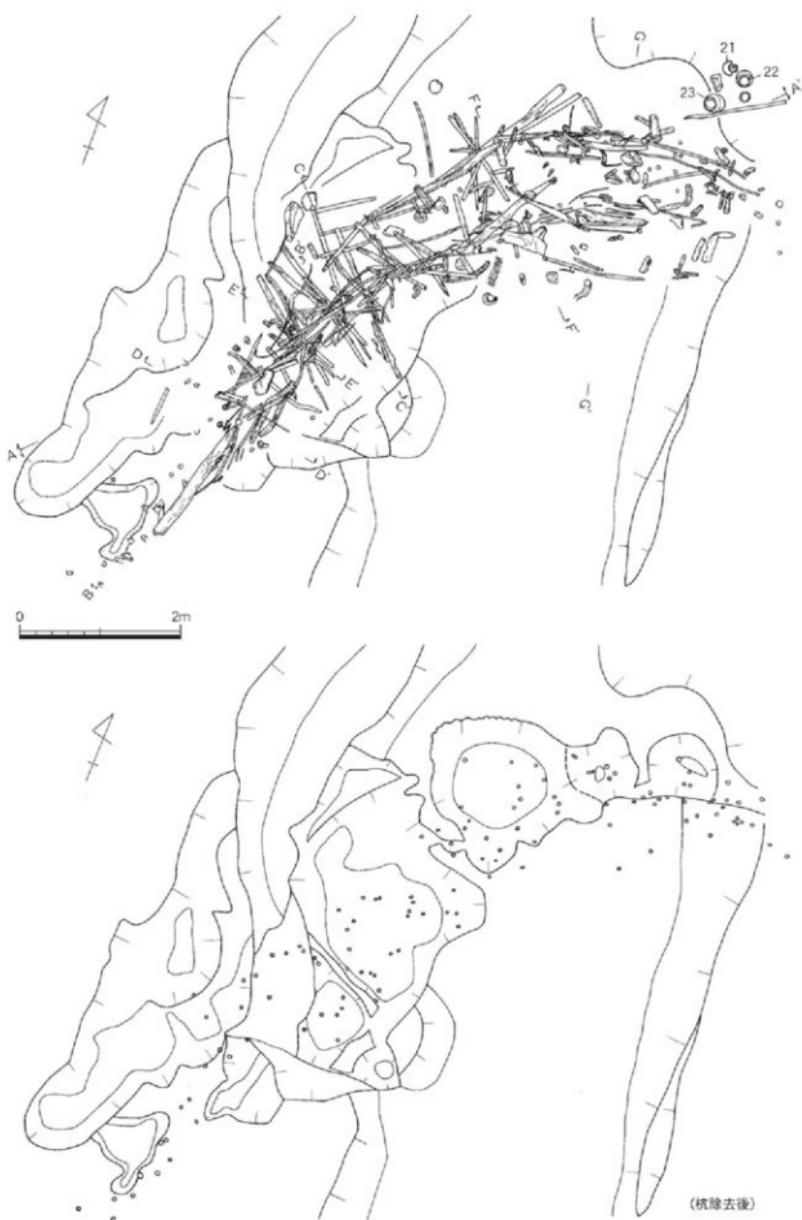
mが遺存する。横木は長さ3m以内のものを2列に渡し、中央部に向けてその間が開いている。

水流による巻き上げはSD735が向きを変えた西側(左岸)が大きいことが、豊杭の傾倒や破壊の程度または、下底の砂層によるえぐり込みの状態から窺える。Fig.28上層図からは井堰の前面で砂層が盛り上がりうねっている状態がみられる。

(樹種)

杭列の32本を採取し、パリノサーウェイ株式会社に樹種同定を委託した。その結果、スダジイが6本、サカキが4本、コナラ属コナラ亜属クヌギ節が3本、ミツバウツギ3本、ユズリハ属が3本、ヒップラジイが2本、シキミが2本、サカギが1本、キブシ1本、ツバキ属が1本、サクラ属が1本、タニウツギ属が1本、ガマズミ属が1本、クスノキ科Aが1本、ハイノキ属ハイノキ節が1本であった。また、井堰SX743内の粗朶類33個体の同定ではサカキ7本、ツブラジイ7本、スダジイが3本、ミツバウツギが2本、イボタノキ属が1本、マツ属複維管束亞属2本、ハイノキ属ハイノキ節2本、コナラ属アカガシ亞属が1本、シャシャンボ3本、タニウツギ属2本、ヤマグワ1本、クリ1本、ユズリハ属1本という結果であった。

以上のように多種類の樹種がみられるがスダジイ、ツブラジイ、サカキ等の常緑広葉樹が主体を占め、これに2次林のヤマグワやクリも若干加わる構成となっている。(第IV章-9 p-261)。ちなみに第I面のSD720内で検出された杭列SX725に用いられた樹種はマツ属複維管束亞属がほ



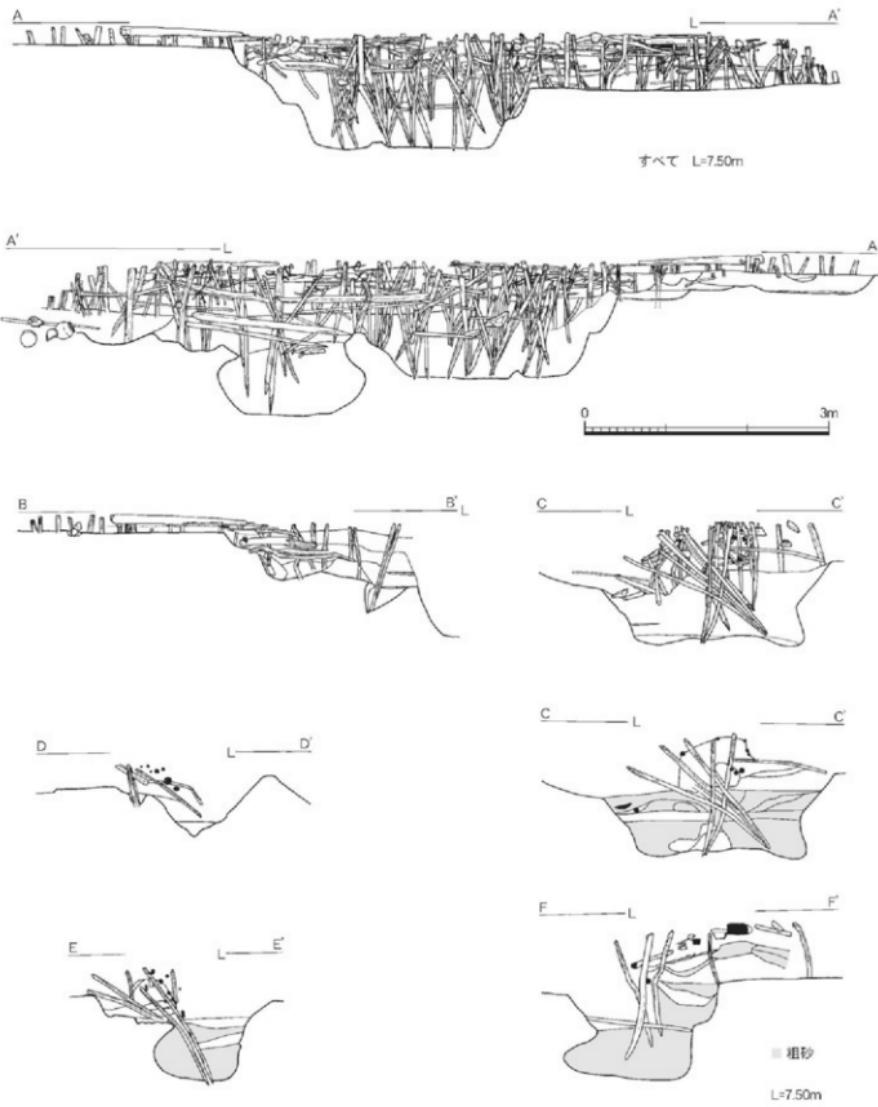


Fig.27 SX (堰) 743断面見通し図 (1/60)

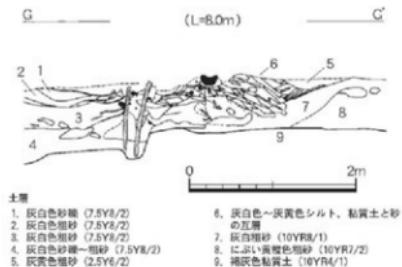


Fig.28 SX(壠)743土層断面図(1/60)

(個別説明)

須恵器 (Fig.29、PL.78・79)

1は天井中央部に墨書がみられる。欠けているが「戊」もしくは「成」と読める。明黄灰色を呈すが、重ね焼きにより外面の口縁部周線は黒化し、内面は口縁部から天井部近くまでの周線が輪状に灰色の発色をしている。2は調査区南壁近くから出土した坏蓋である。口径15.0cmを測る。灰白色を呈し軟質。3はSX743に絡んで出土した。焼き歪みが著しいが、天井部は平坦に近い。口縁部はM字状に窪んで直に折れ、端部は丸い。4は「戊」の墨書を有した坏身である。5は「次」に近い字体の墨書を有した坏身である。6～8は口径14.0cm前後で器高3.5cmを測る。6は赤褐色～灰色を呈し軟質である。8は灰白色を呈し外面体部と内面口縁部付近が黒色化している。9は赤みを帯びた灰褐色を呈し、胎土は赤褐色に発色した軟質の須恵器である。体部の立ち上がりが他と比べ鋭角で、口径は14.5cmとやや大きい。10は底部に下部が欠損した「禾」の墨書がみられるが、8次調査のSD735南側延長で出土した墨書土器と同様の「香」であろう。11の墨書は薄く判読不能である。12～17は各種法量の高台が付いた坏身を並べた。高台が14、15では比較的外側に付き、体部が口径に対して深みがある器形となり後出の感があるのに対し、16は高台が内側に貼り付けられ、体部の立ち上がりが直に近くなる古いタイプにみられる。17の外底部には板状压痕が残る。色調は16が外面黒灰色、内面アズキ色に発色している他は灰色～青灰色を呈す。18は底部が凹み、高台が外反した椀形に近い器形である。灰色～黒灰色を呈す。20は焼き歪みが著しい皿である。底部や体部に粘土や砂が付着し粗雑である。21の高台は坏部中央が盛り上がり、硯への転用も考えられたが中央部には研磨はみられない。22、23は井堰中央部の背後（北側）で出土した。下底に2個体が近接して完形で埋もれていた (Fig.26)。22は尖りぎみの底部を有し、口縁端部には1条の断面V字状の沈線がめぐる。外面は肩部以下に細かい格子タタキが残る。内面もほぼ同じ位置から青海波状文のアテ具痕を残す。23の底部は丸く、口縁部は肥厚し少し内湾する。内外面には22と同様の位置に格子タタキと青海波紋のアテ具痕を残す。底部近くに「公」の字を刻む。

土師器 (Fig.30、PL.80)

24、25は口径12.7cmのほぼ同じ法量であるが24が体部を直に立ち上げ口縁端部を外反させているのに対し25は体部中央に明瞭な屈曲をもたらせ外反させる。24の胎土には赤色粒が多く含む。26はSD735の調査区南壁で出土した。体部中位でやや内側に絞り込み屈曲させ、口縁部は大きく外反させて延ばす。底部は回転ヘラ切り後経く板ナデしている。灰白色を呈す。27、28はほぼ同形の黒色土器

とんどであり等質化した杭材となっている。このことは植生の変化とともに、調達方法や技術の変化も反映していると思われる。

SD735、SX743周辺出土遺物 (Fig.29～32、PL.78～82)

(出土状況)

須恵器の4、5、6、9、12、17、20、21、22、23、土師器の24、25、27はSX743に絡み出土した。この中で21、22、23、25の土師器は井堰SX743中央部の背後（北側）から近接して出土した。他はSD735内からの出土である。

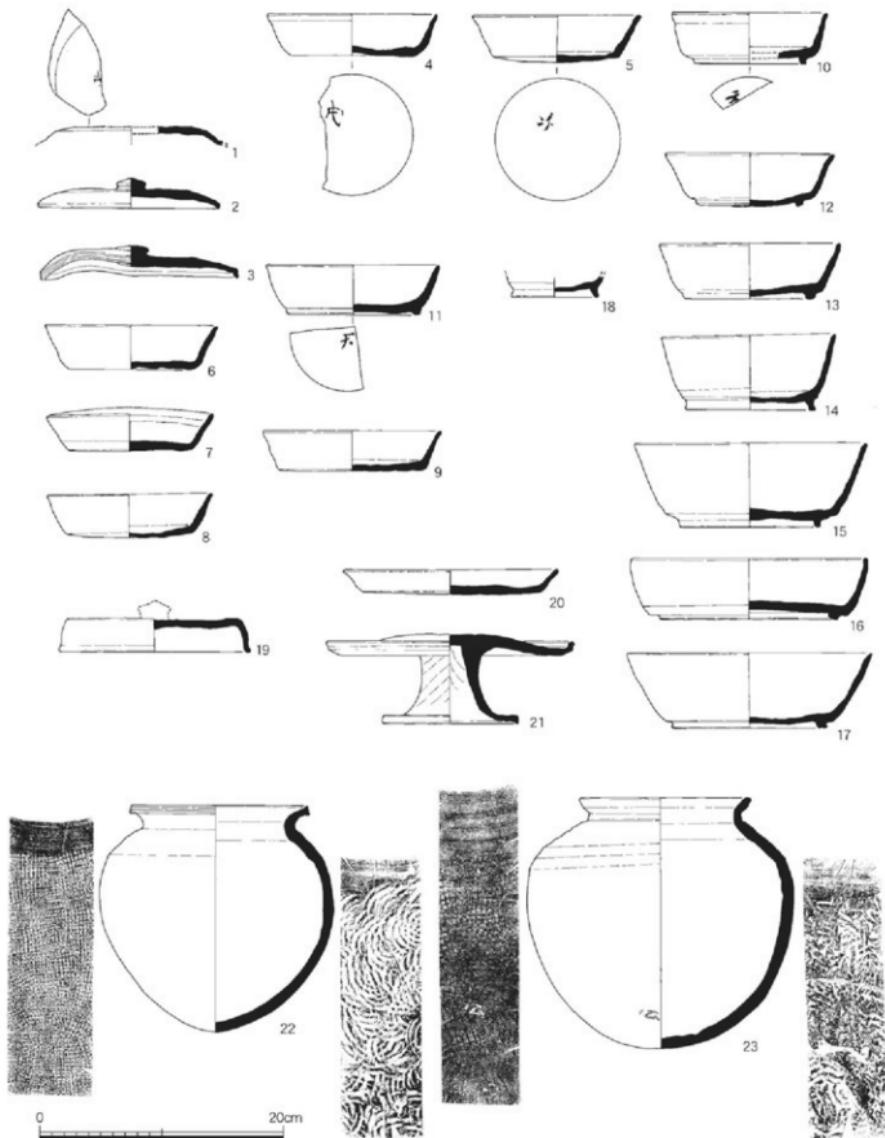


Fig.29 SD735、SX（壠）743出土遺物実測図（須恵器：1/4）

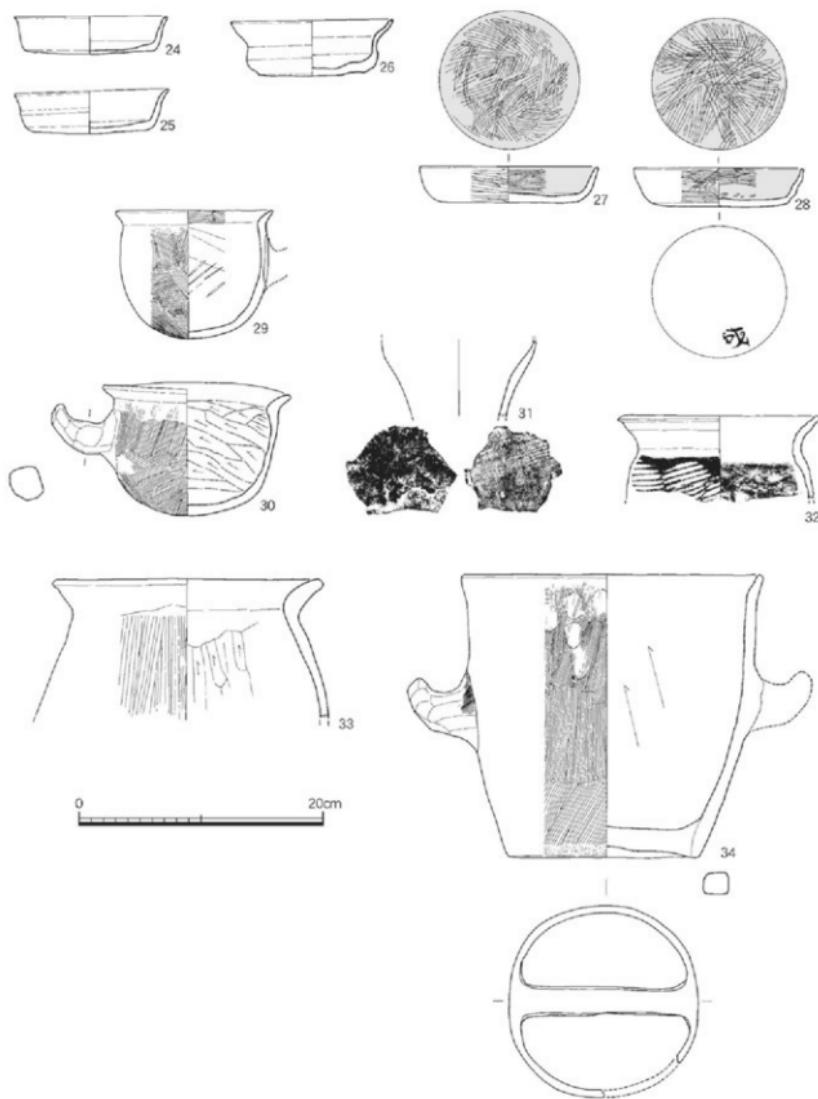


Fig.30 SD735、SX（壙）743 出土遺物実測図（土師器：1/4）

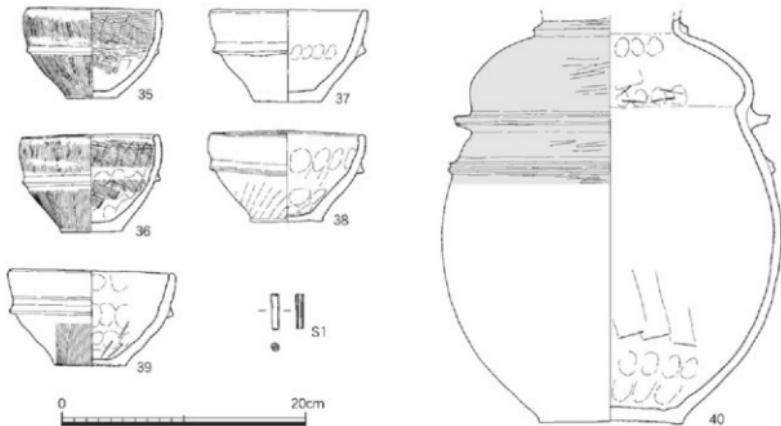


Fig.31 SD735出土遺物実測図 (弥生土器等:1/4)



SD735 内弥生(鉢形)土器出土状況

(内黒)である。27は外面の口縁端部付近も黒化している。内底部のミガキは周縁部に沿って湾曲させ、最後に中央部をほぼ同じ方向に施している。体部は横位からやや右上がりの方向に施す。外面も全面にミガキが施されている。28は外底部の端に「成」の墨書を有した黒色土器(内黒)である。内底部のミガキは27に比べ丁寧に施され放射状に右回りで進行したことが明瞭に判る。内面部のミガキは下位は右上がりに施した上にヨコ

ナデが加えられ、消されている。このヨコナデを境に屈曲し、上位はわずかに内湾する。横位から右上がりの方向でミガキの痕跡を端部まで残す。外面にも全面にミガキが施されているが、底部には不定方向に引っ掻いたような条線が多く残る。27、28とともに外面は黄灰色を呈す。29、30は取手付きの小形甌である。29は外面は2次火熱を受けて赤変し、内面はススが付着し黒色を呈す。30はSD735の北端で出土した完形品である。灰色を呈し、火熱を受けていない。31は焼塙土器である。外面には指紋の付いたナデの痕跡が残り内面は布目が残る。2次火熱を強く受け赤変している。32は製塙土器である。口縁端部が外反し、外面に深い平行タキ痕が残る。黒色～黒褐色を呈す。33は胴部が張る甌で、外面にタテハケを明瞭に残す。34の甌は底部中央に断面2cm方形の中央にかけて高くなった棒を貼り付け蒸気孔を2穴としている。外面2次火熱を受け赤変している。

弥生土器 (Fig.31、PL.81)

SD735の時期とは直接結びつかないが、河川内から出土した弥生時代の遺物について留意される数点を掲げておく。35~39の小形の鉢は弥生後期に属していると思われる。祭祀に伴う可能性があり36、38は完形である。第III面の集落の周縁に流路があったことが考えられ、このSD735によって擾拌された可能性がある。

35、36は調査区南際の下底から出土した。同法量で調整も外外面にハケメを残した同じ調整である。37、38も調査区南際近くで出土した。ハケメは残さずヨコナデを施す。39は最も法量が大きく、口径13.8cm、器高7.7cmを測る。外表面部の下位にハケメを残し、外底部は剥落している。40の外表面には全面に赤色顔料が塗布されていたと思われるが、下位と内面は器面が剥落し不明である。断面M字状の突帯が2条貼り付けられている。S1はガラス製の管玉である。白濁風化し、巻き上げた筋がみられる。全長2.8cm、径6mmを測る。

木器 (Fig.32、PL.82)

W1、2、4、5、7は井堀SX743に絡んで出土した。W1は曲物底板もしくは蓋である。径20.0cm、厚み6mmを測る。樹種はヒノキ材で柾目取りしている。周縁の4箇所に側板と接合のための綴じ孔が穿たれている。図示した左図の1箇所の孔には桜皮の紐で綴じられた側板の一部が残る。綴じ孔は2重となつた樹皮を回すように5mm離れた2孔1対の径3mm程度の孔を穿つ。また、中央で割れた材を接合するための径5mmの綴じ孔が3対6箇所に穿たれている。

なお、W1は年輪年代の測定を独立行政法人奈良文化財研究所の光谷 拓実氏に依頼し、690年という結果を得ている (P-224)。これは遺物からSD735の埋没時期が8世紀後半と考えられるのに対して伐採から廃棄までの時間を考慮すれば合致した年代といえる。

W2は曲物底板である。径20.5cm、厚み6mmを測る。材はW1と異なりスギの柾目材を用いる。周縁の4箇所に3mm離れた径5mmの2孔が1対となつた綴じ孔が穿たれている。W3の曲物底板（もしくは蓋）は径21.0cm、厚さ9mmを測る。材はスギの斜め取りを用いる。W1同様に中央の割れ目に4箇所径3mmの綴じ孔が穿たれている。周縁にそって刃物キズがみられ、樹皮の紐が遺存した綴じ孔が1箇所みられる。綴じ紐は2つの輪が組み合っている。W4は曲物側板で出土地点や径からW1と組み合う。径20cmに復元され、高さ5.0cmが遺存する。材はヒノキの柾目取り。板の重なりは12cm程度とみられ、内側に5.5mm間隔で刻みを入れ切り曲げしている。約2cm間隔の孔を通した樹皮の綴じ紐が1箇所遺存している。W6はSD735内の調査区東壁際で出土した曲物側板である。スギ材を用いているが、一部黒化している。左端に2欠1対となつた径5mmの綴じ孔が穿たれている。W7は曲物側板と思われる。長さ48.2cm幅7.0cmが遺存する。厚さ7mmを測るヒノキの柾目材を用いる。綴じ孔と思われる径5~9mmの梢円形ないし円形の孔が穿たれているが規則性がみられない。

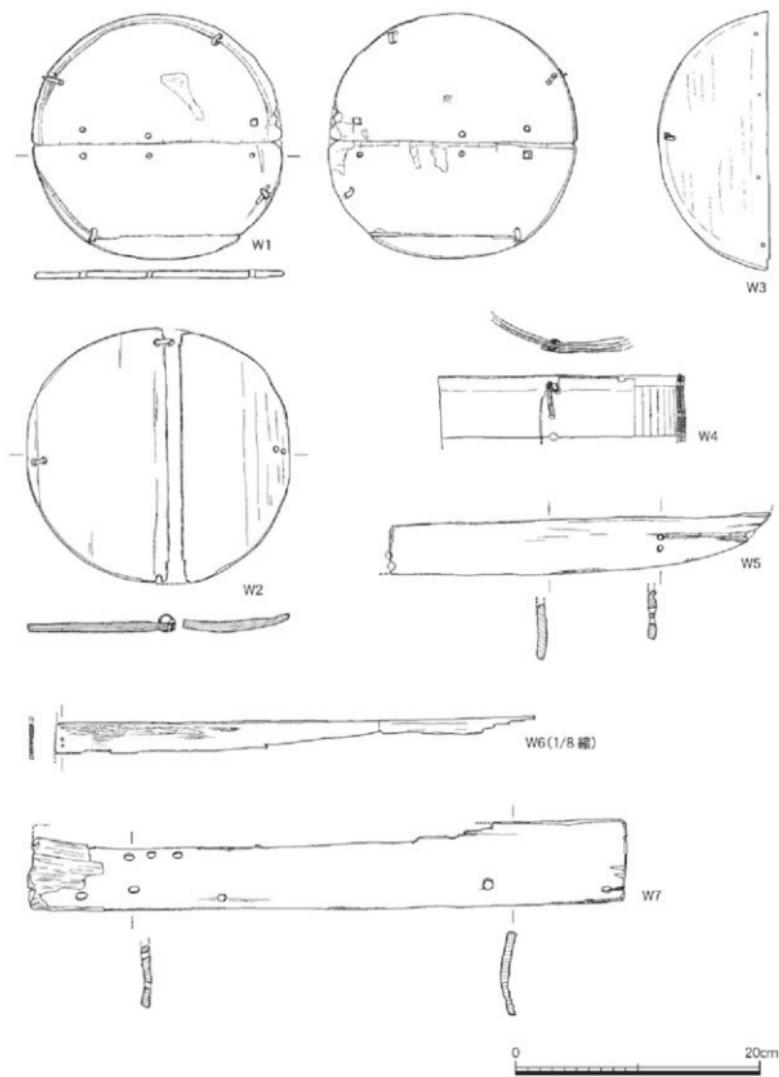


Fig.32 SD735、SX（罐）743出土遺物実測図（木器：1/4、W6は1/8）

SX744 (Fig.33, PL.26)

井堰SX743の約20m上流で検出された。SD735が東に方向を変えていく変換点に位置する。中央から西岸にむけて長さ4.1mの直線的な横木が堅杭に渡されていた。堅杭は高さ約90cmが遺存し、横木に沿って直線的に打たれている。おそらく、権状に組まれていたものと思われるが流された杭も多いと推察される。この横木より東側は破壊され杭列はほとんど残っていない。遺存する数本の堅杭はやや南側に折れて続く。逆の西岸際も南側に折れ短い横木が渡されている。この西岸近くの堅杭が南側に折れていく位置で木簡 W9 が出土した。出土レベルは下底から約40cm浮いた位置でシルトと細砂の互層の中であった。斎串 W8 も同位置の木簡の下から出土した。

形状や破壊の程度にこのSX744は先の近接したSX743と比べ違いをみせる。まず、SX743が大きくカーブを描いたアーチ式の構造であるのに対し、このSX744は比較的直線的な堅杭の配列となっている。また、洪水による破壊の程度もSX743が比較的全体残っているのに対し、SX743は特に東半分を失っている。遺物も井堰にからみSX743では多いのに対し、SX744の主な遺物は後述の斎串 W8、木簡 W9 のみである。従って、このSX744はSX743より古く構築され、洪水による破壊後に北側のSX743に再築された可能性がある。

出土遺物 (Fig.34、本文編巻頭図版1、PL.81)

周辺からは土師器、弥生土器の細片がコンテナ1箱分出土しているが、SX744に関連していると考えられる遺物は斎串 W8 と木簡 W9 のみである。出土地点は上述の通り西岸寄りで井堰に絡み出土した。

W8 は全長14.0cm、最大幅2.4cm、厚さ4~5mmを測る。頭部は三角形に切り出し、側辺の角2箇所に細い切り込みを入れている。材は同定していないが、スギのような針葉樹とみられる。W9 は遺存長35.4cm、幅4.4cm、厚さ4mmのヒノキ材を用いた文書木簡である。調査時に気づくのが遅れ、乾燥させたことにより歪みが生じた。

积文、解釈、文書による歴史的背景については卷末に掲載した坂上康俊氏の論文に詳しく、ここでは既往の調査成果をふまえこの木簡が出土した背景について述べることにする。

まず、時期であるが、SD735出土遺物は井堰SX743周辺に多いが、全体をみても時期は8世紀中頃~後半代に集中し、下限は8世紀後半におけると考える。

次に出土状況であるが、明らかに井堰に掛かった状態で細砂中から出土した。上部が欠損していることから、周囲を慎重に掘りさげていく中でほぼ直下に近い位置から W8 の斎串が出土した。次年度に調査した南側の第8次調査でもSD735内にさらに検出された井堰の取水口から斎串は出土した。水や川に関わる祭祀に伴っていたことが想像されるが、木簡との関連は判らない。この木簡と直接関連する「公」的、または官衙的施設に結び付く遺物や遺構は見つかっていない。しかし、SD735から出土した墨書き土器や内黒の黒色土器、さらに23の須恵器甕にヘラ書きされた「公」の字や時期は降るが7次調査のII区で出土した「里長」の墨書き土器にその関連が強く見られる。それでも数は少なく、逆に「戊」や「成」などの吉祥句や井堰に掛かった斎串などは共同体の農耕的祭祀の色彩が強く、木簡もこの1点のみ単独に出土したのみである。

当該時期の集落遺構は南側約300mの下月隈C遺跡第3次調査で検出されているが、ここでも官衙的な遺構、遺物はみない。さらに南側の約600m離れたSD735の流域になる可能性がある立花寺B遺跡 (Fig.4) では時期が9世紀代に降るが越州窯系青磁、邢窯系白磁、綠釉陶器などが出土し、馬の埋葬土壙も検出され、官衙ないし館的な色彩をおびる。さらに南側の丘陵裾に位置した立花寺遺跡では8世紀代の遺構が検出され、大型建物跡が含まれる。瓦や櫓も出土し官衙的な施設の存在が窺え

下月限C遺跡

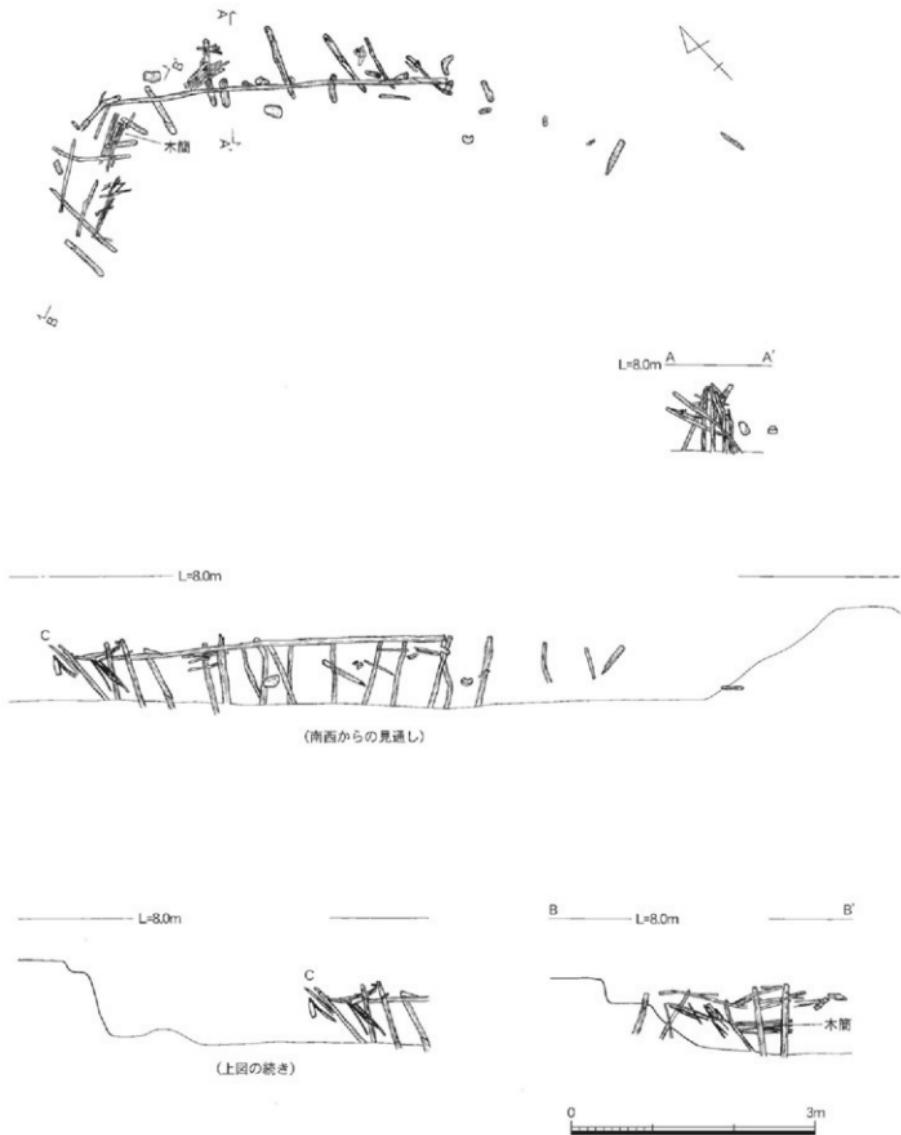


Fig.33 SX (堰) 744 実測図 (1/60)

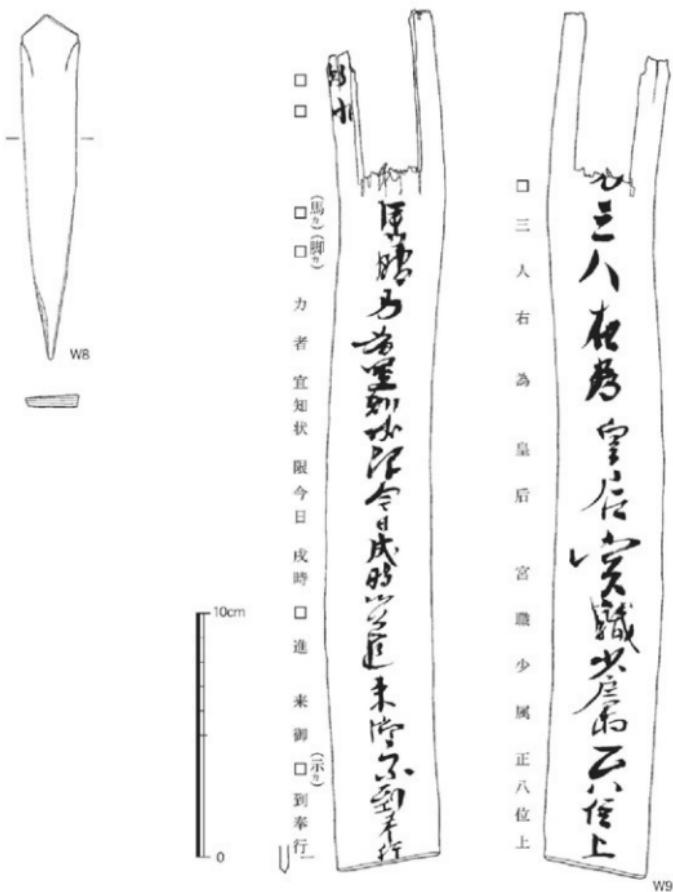


Fig.34 SX (堰) 744出土斎串、木簡 (1/2)

る。これらの遺跡は御笠川右岸域に立地し、想定されている官道とは近接しているが対岸に位置している。交通路としては山裾の道も推測されるかもしれないが、御笠川の水運が初期の輸入陶磁器の搬送を含め重要な役割を担ったように思われる。従って木簡との関連から推察すると差し出しが所在すると考えられる官衙的施設には上記の遺跡群が該当している可能性は高いと思われる。今後の調査に期待したい。

③ 水路と土堤

SD734、土堤 775、土堤 790 (Fig.24・35、PL.29)

調査区南側で直線的に北流する SD734 が検出され、その右岸の土堤を775、左岸の土堤を790とした。SD734 は幅1.1m、深さは土堤の頂部から20~50cmを測る。埋土に砂層を含み検出は容易であったが、中央部は土堤が崩壊し形状が消滅した部分もある。さらに南側の調査区南壁までの間は SD734 とその両岸の土堤は流された為か不明瞭となり、護岸の杭列がわずかに残り延長方向のみ迫ることができる程度である。

両岸の土堤は部分的に多くの護岸杭が打ち込まれ補強されている (Fig.24)。特に調査区東壁際では土堤の外側に 2 列ないし 3 列を配していることから土堤の幅を広げ補強したものと思われる。また、他の外側の 3 列目は部分的に配されているので、崩れた部分（欠所）の補強とみられる。土堤の幅は杭列間が 80~150cm おかれていることから下底もこれに近い規模であろう。高さは流失し、10cm 程度しか遺存していない。土堤の外側には洪水によって攪拌されたと思われるシルト質の堆積土が SD734 に沿って幅 4m 内外に及んで広がる。

中央部の SX737 付近では土堤は殆ど押し流されているがこの部分では水防の土木工事をみることができる。以下、用語や技術については『図録 農民生活史辞典』秋山高志 北見俊夫 前村松夫 若尾俊平 柏書房株式会社 1979 を参照した。

土堤の護岸杭列に沿って粗朶が見られる。これは粗朶を杭列に絡ませ付けて柵状に造り上げたものと考えられる。また、土堤の下部や法面に樹皮状のものを重ねて敷いた部分が残る (Fig.35、PL.29)。これはいわゆる「粗朶羽口」に通じた技術と思われる。法面に樹皮を敷き込み土をおいて踏み固め、これを繰り返したものと推察される。このように水防の土木技術が近世にまで継承されたことをみることができる。

杭の試料71本について同定を委託し行った結果、アワブキ属 6 本、サカキ 4 本、ツブラジイ 2 本、スダジイ 2 本、ツバキ属 3 本、クスノキ科 A3 本、コナラ属コナラ亜属クヌギ節 1 本、ヒサカキ 1 本、タブノキ属 2 本、ムラサキシキブ属 1 本、ミツバウツギ 1 本であった。SX743 も井堰杭と同様に照葉樹林が多く用いられている。杭は丸太の他、割材、板材に近いものも多く用いられていた。

調査区東壁際では SD735 と近接し、土層観察では SD735 からの洪水砂を土堤775、790は被っていった。



SD734 土層（調査区東壁 南から）



土堤775下部（護岸杭に粗糞を編み込み、内側に樹皮状のものを敷く）



SD738 敷粗染（護岸杭に木枝を編み込み、内側に樹皮ないし莖状のものを敷く）



SD738下敷（藁ないし莖状のもの）

SX737 (Fig.35~37、PL.27・28)

Fig.35のSD739はSD734の延長で、SX737付近の土堤が押し流され、水路の岸際が不明瞭となっている。周辺の土堤790、775に粗朶や樹皮による上記の技法を用いた補強や補修が行われているのは土堤が一部崩壊（欠所）または押し流され切れた（切所）ことによるものと思われる。その要因の一つにSD739の水口が位置していたことが考えられる。SX737は水路SD739の水口に設置された土壙でいわゆる「置簗」とよばれるものである。

「置簗」については乙益重隆氏の解説がある。これによれば『農政全書』や『成形図説』にみえ水口からの泥土の流入を防ぐために土壙を掘りここに堆肥や草を埋めて養分とし、また組んだ簗でこれを受けるように設置したものである。三筑遺跡では5世紀代の水田にこの土壙がみられる。（「三筑遺跡・次郎丸高石遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第69集 1981）

土堤775の護岸杭列はSX737との連結部（水口）にかけてSX737よりに配列し、水口を含めて延長約5mに及んで2列の配列となっている。これは水口周辺の土堤を幅広くし強化するとともに、修復が重なった結果と考えられる。

SX737は長径4m、短径2.7mの梢円形プランを呈し、南側にかけて不整形となっているのはあふれ出した水流によって壁が削られたものと思われる。深さは1.2mを測る。埋土は砂がレンズ状に堆積し、水口付近はうねり上がっている。土壙周囲の壁もオーバーハングし、洪水のうねりが強かったことが想像される。

SD739の水口からSX737に落ちていく際に簗状に組合せた小枝が検出された。幅1.7mにおよそ25cm間隔で7本のやや大きめの枝を並べ、それに小枝をあらく編んでいる。さらにその上に纖維質となった樹皮状のものをのせている。7本の横木のSD739側の掘方は判らず、粘土には水平に突き刺さった状態であった。また、下部は直下にシルトが一部みられるが黒灰色粘土が堆積している。SX737の土壙はこの木組みの端から掘り込まれ、砂層が堆積している。

このような小枝を編み樹皮を重ねたものは後述のSX773に見られるように土堤の下敷きに用いられた工事であるが、土堤775が通る位置よりSX737に寄っていることやレベルが土堤775の下底より約50cmも低い位置にあることから、洗い流された水口の修復もしくは更に木組みが簗のように編まれてSX737に延びていき下底の堆肥や草を受けていたことなどが考えられる。

出土遺物

41~43はSX737の下底から出土した。41、42は手捏ね土器である。41は底部が小さく丸みを帯びているのに対し、42は底部が比較的大きく平底である。43は如意口縁を有した弥生前期の小形壺である。口縁部の1/4を欠くがその他の部位は完形に近い。44、45は土堤790が流されたSD738から出土した。44は須恵器壺身の小片で復元口径の誤差が大きい可能性がある。45は須恵器高杯の脚部である。46は土師器壺の取手である。W10はSD734、土堤790の北側周辺の氾濫域であるSD733から出土した曲物底板もしくは蓋である。径28.5cm、厚みは最大厚の端部で1.0cmを測る。周縁は側板を受ける5mm高の段がつき、端部に刻みが2箇所みられる。底部には浅い刃物キズが残る。樹種の同定は行っていないが板目材である。W11もSD733から出土した。ほど孔を有した建築部材を杭に転用している。全長212.8cm、最大幅7.4cm、最大厚5.1cmを測る。上部に3×7cmの長方形を呈したほど孔を穿ち、全体にはケズリの痕跡をとどめる。ヒノキの芯持ち材を用いる。他に図示していないが、SD733からは手捏ねのミニチュア土器も出土している。

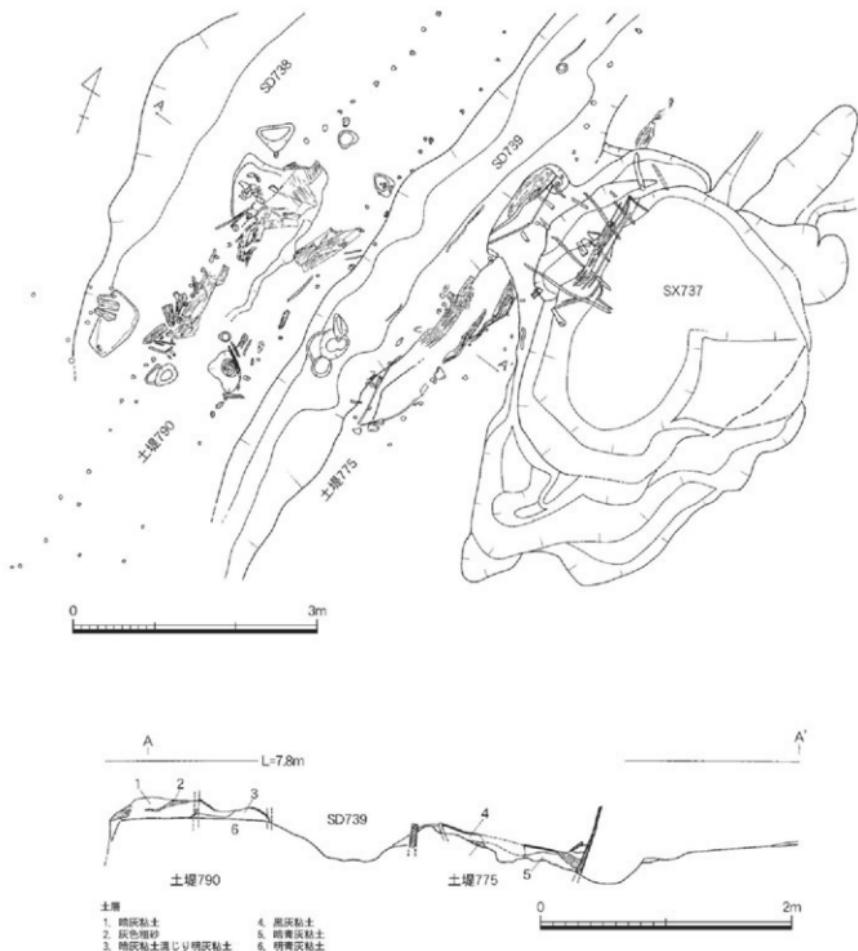
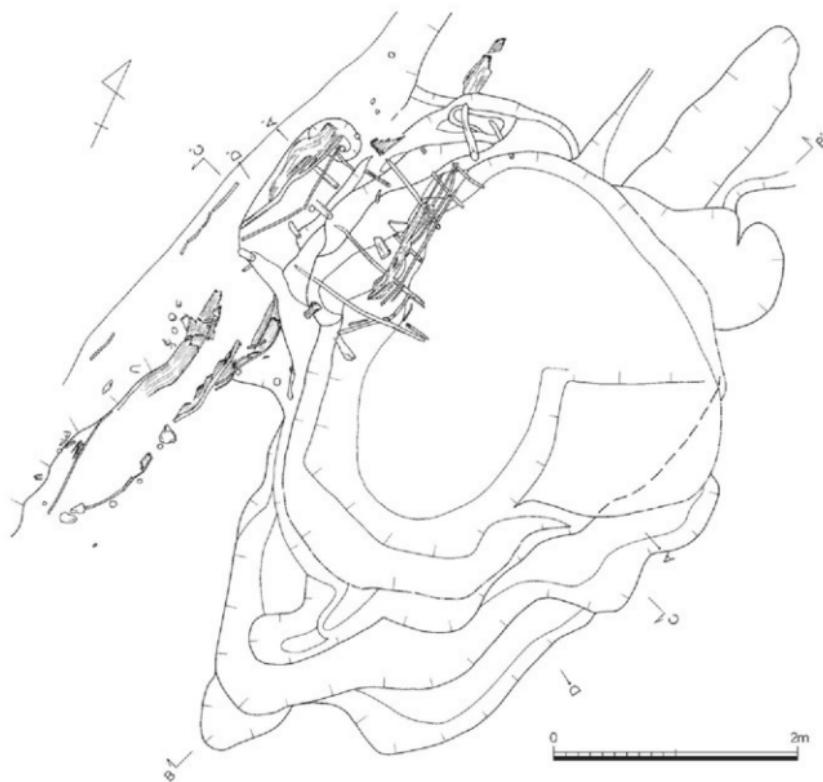


Fig.35 SX (置箒) 737、土堤 775、SD734、738、739実測図 (1/60・1/40)



- 土層**
- 1. 黒褐色粘質土
 - 2. 黒色粘土
 - 3. 黄褐色シルト
 - 4. 黑褐色シルト
 - 5. 黑色～灰黑色粘土
 - 6. 黑褐色粘土
 - 7. 黑褐色細砂
 - 8. 黑色粘土
 - 9. 黑褐色シルト
 - 10. 黄褐色砂と混じり灰色シルト
 - 11. 黑褐色細砂
 - 12. 黄褐色シルト質ブロック
 - 13. オリーブ灰色粘土

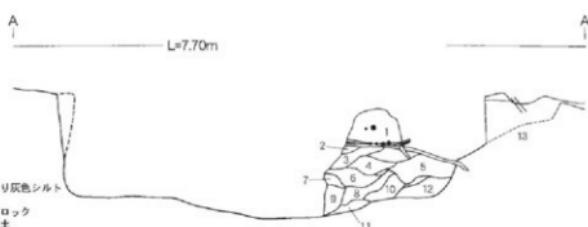
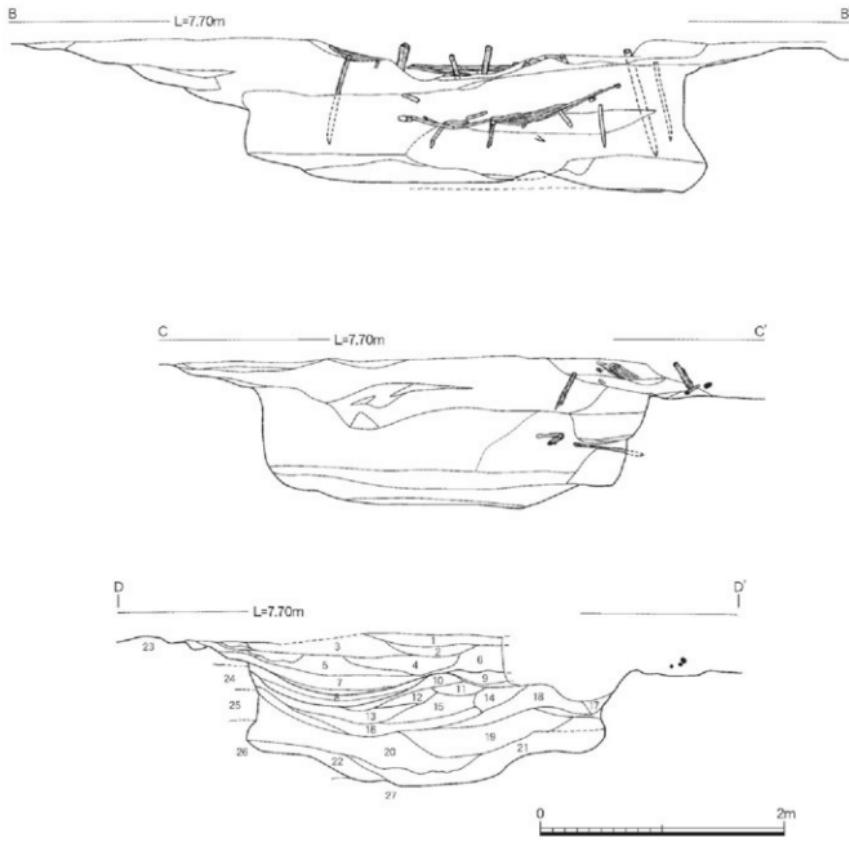
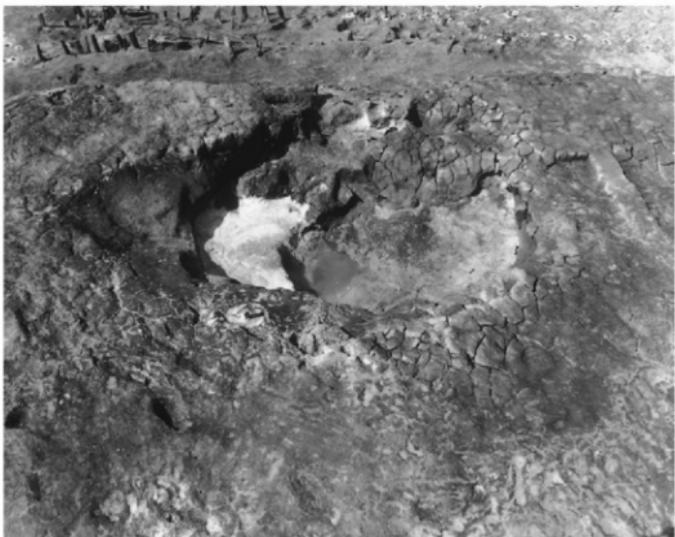


Fig.36 SX737 実測図 (1/40)



- 土層**
1. 淡褐色シルト(2.5Y3/1)
 2. 黒褐色粘土(2.5Y3/1)
 3. 淡褐色砂(2.5Y1/3) 下部に黄色細砂を薄く挟む。)
 4. 淡褐色砂(2.5Y1/3) 下部に黄色細砂を薄く挟む。)
 5. 淡褐色砂(2.5Y1/2) 黒色有機物を少し含む。)
 6. 淡褐色シルト(2.5Y3/1) 混じり灰オーリーブ(SY5/2)細砂(下部に黑色細砂を薄く挟む。)
 7. 黄褐色砂(2.5Y7/2)
 8. 上層の淡褐色細砂(2.5Y7/4)と下層の灰褐色細砂(2.5Y7/2)間に鉄分を含む下部に黒色粘土少ブロックを挟む。
 9. 淡褐色砂(2.5Y7/3 黑褐色砂を薄く挟む。)
 10. 黄褐色砂(2.5Y7/2)
 11. 灰褐色細砂(10YR4/2)混じり褐色砂(10YR4/1)
 12. 灰オーリーブ細砂(SY6/2)
 13. 灰オーリーブ細砂～半粒砂(SY6/2)
 14. 淡褐色細砂粘土(10Y4/1) 混じる褐色砂2.5Y7/6をブロック状に含む。)
 15. 黄褐色砂(2.5Y6/2)
 16. 灰褐色粗砂(10YR4/1)
 17. 灰オーリーブ色シルト(SY5/2)
 18. 黑色粘土(2.5Y2/1)
 19. 黑色粘土(10Y2/1 淡褐色砂2.5Y8/4をブロック状に少混合む。)
 20. 淡褐色細砂(2.5Y6/2)
 21. 灰褐色粘土(2.5Y4/1) 混じる褐色砂を含む。)
 22. にぶい黃褐色細砂(10YR7/4 黑色粘土10YR2/1のブロックを含む。)
 23. 黑色粘土(2.5Y2/1)
 24. 灰オーリーブ砂混じり粘質土(SY4/2)
 25. 鹿灰色砂質粘土(7.5GY6/1)
 26. 黄褐色細砂(2.5Y6/1)
 27. 灰白色粗砂(5Y7/1)

Fig.37 SX737 断面見通し、土層図 (1/40)



SX737 (南東から)



SX737 (北から)

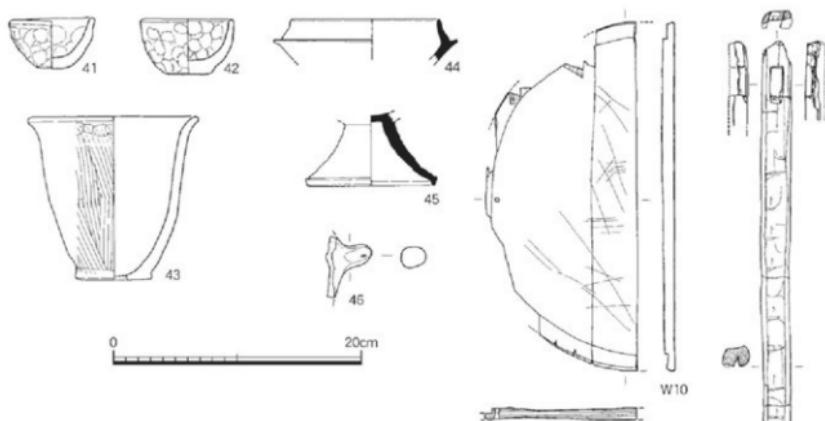
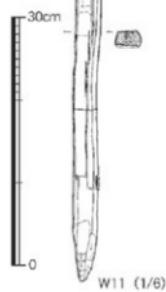


Fig.38 SX737、SD734、738、SS733 出土遺物実測図 (1/4、1/6)



SD746、土堤13 (Fig.39・40、PL.32)

(SD746)

調査区西壁近くをわずかに蛇行しながら北流し、北側で一帯の流路や畦畔と同様に方向を東に振る。幅約2m内外、深さ50cmを測る。覆土は南側が砂で埋め尽くされていたのに対し、北側はグライ化した粘土が堆積し、掘方の壁を見分けるのが難しかった。

(土堤13)

SD746の右岸（東側）には土堤13が付設されていた。土堤13の南側延長は砂に覆われて幅約1m、高さ約20cmが残り、検出が容易であった。土堤13の両端には護岸杭が打たれているが外側（東側）が連続しているのに対し、内側（SD746側）は断続的に打ち込まれている。おそらく、内側は崩壊した部分のみ補修、強化し、部分的に粗朶を杭列に編み入れて柵状にしたもののが残る（PL.32-2）。この技法は第I面で検出されたSD720の護岸でもみられたものである。

(SD746西側の土堤)

調査区北側で部分的に盛り上げた部分と外側（西側）の護岸杭を断続的に検出したが、明確な形状を把握できず、調査時には遺構番号を付していない。畦畔11とはSD746に伴った土堤との間に切れた水口が検出され（Fig.39）、畦畔22は切り替わった土堤（SX773の上部に構築された土堤）との間に水口が設けられている可能性がある。

(SD746、土堤13の切り替え)

土堤13の外側の護岸杭列は蛇行する変換点の位置でSD746から離れ東側に振れて延びていく。これは次項で記すSX773がSD746北側の埋没後に新たにこれを横切った土堤に伴っていることから、この遺構とともにSD746とそれに伴う土堤が北側で切り替わったことを示している。切り替わった以後もSD746の南側はこの既存の流路を用いたものと考えられ、上述の埋土の違いは埋没時期や機能を終える時期が南北で異なることによるものと考えられる。

SX773の北側における、SD746の東側土堤の延長は新旧の土堤が重複している。Fig.41はこの土堤を修復、補強した部分を示したものである。法面に沿って織維状となった樹皮もしくは藁ないし葦と思われるものが敷き込まれている。これは土堤775、790の項で記したように近世における「艶染羽口」に通じた技法で、粘土と樹皮や葦を交互に踏み固めながら入れたものとみられる。

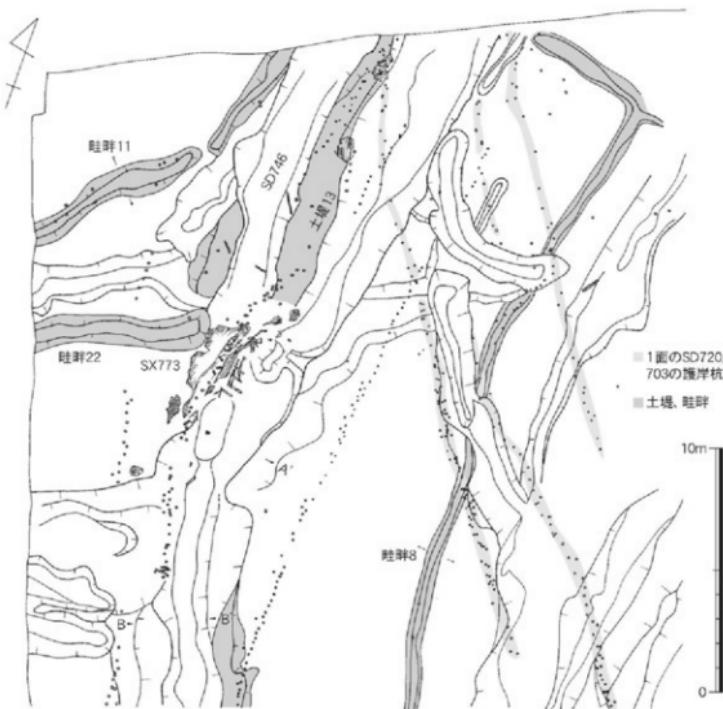


Fig.39 SX773周辺 (1/200)

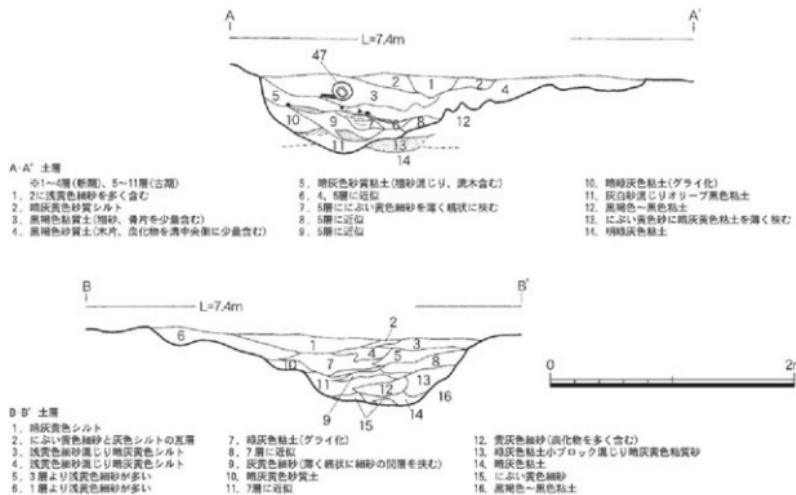


Fig.40 SD746 土層断面実測図 (1/40)

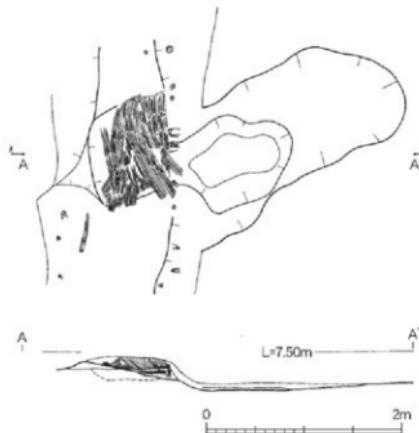


Fig.41 土堤13補強下敷実測図 (1/50)

下底より以下の堆積土中に及ぶ。

次にこの立ち並べた枝木にやや大きめの枝木を横方向に縫いこんで骨組みを作る。SX773の場合は上部と中央の2本のみ遺存していたが、おそらく下位に更に1本組んでいたものと思われる。さらにこの骨組みの間に細い粗朶を密に編みこんで垣根状にする。これを地盤に押し倒し、その上から細く同じ向きに並んだ纖維質の草木（樹皮、藁、葦等が考えられる）を敷き、その上から土堤の盛土を行ふ。その重みで立てた枝木が接地面近くから折れ曲がっている。土堤の下敷きの幅（敷）となる枝木の折れ曲がった部分から先端までは170cmを測る。

このSX773の中央に土堤の護岸杭が1列並んで打ち込まれていた。この杭に掛かるように敷き込んだ纖維質の草木は跳ね上がり、また、立ち並べた枝木も杭を避けるように倒されていましたことから護岸杭が先行していたことが判る。従って、地盤が軟弱なSD746内の土堤が流された後にその修復としてSX773が敷設されたことになる。

時期はFig.40のSD746の上層ベルトA-A'の上層から出土した須恵器环身17が位置や層位を鑑み最も近いものと考えられる。従って、切り替ったSD746も概ねこの時期まで機能し、関連する周辺の畦畔も同時期と考えられる。切り替った形状についてはP-62で既述したとおりである。

なお、SX773と同じ水防の技法は前記の『図録 農民生活史辞典』では地方凡例録に載る「屏風返し」として紹介されている。このなかで「堤の切口や欠目が深掘で、下埋をしなければ堤が築けず、また、岸固いもできないような泥川での修復法」とし、葉唐竹を立ち木にし、間に山葦を用いている。材料に少し違いがあるほかは基本的に変わらない技法である。なお、原書にあたっていないが地方凡例録は大石久敬著、寛政3年（1791）頃の起稿といわれている。

出土遺物 (Fig.44, PL.83)

47はFig.40のA-A'の土層断面ベルトに掛かって出土した。完形品で口径15.0cm、器高5.8cmを測る。体部下位に回転ヘラケグリを施し、底部との境が丸みを帯び不明瞭となっている。高台は外側に伸び、端部が更に張り出す。全体的に厚く、口縁端部まで器厚で丸く収められている。8世紀中頃～

SX773 (Fig.42・43, PL.30・31)

SD746の埋没はFig.40の土層断面では自然埋没したレンズ状の堆積がみられるが、殆ど粘土が堆積し、掘方の検出が難しかった北側では人為的に埋め戻した可能性もある。SD746が埋まった後に水路と土堤が東側に切り替わっている。SX773はこの切り替わった土堤に伴いSD746を横切る地盤が軟弱な部分に土堤の基礎として敷設されたものである。

まず、径6cm前後、長さ2m前後の真っ直ぐに伸びた大きな枝木（スダジイ）7本を水路とは反対方向の土堤の裾に並べ立てる。SX773の場合、立ち並べた枝木は延長2.4mの間に約30cmの等間隔に地盤に打ち込んでいた。この枝木が打ち込まれた部分はSD746流路内に入り、深度はその

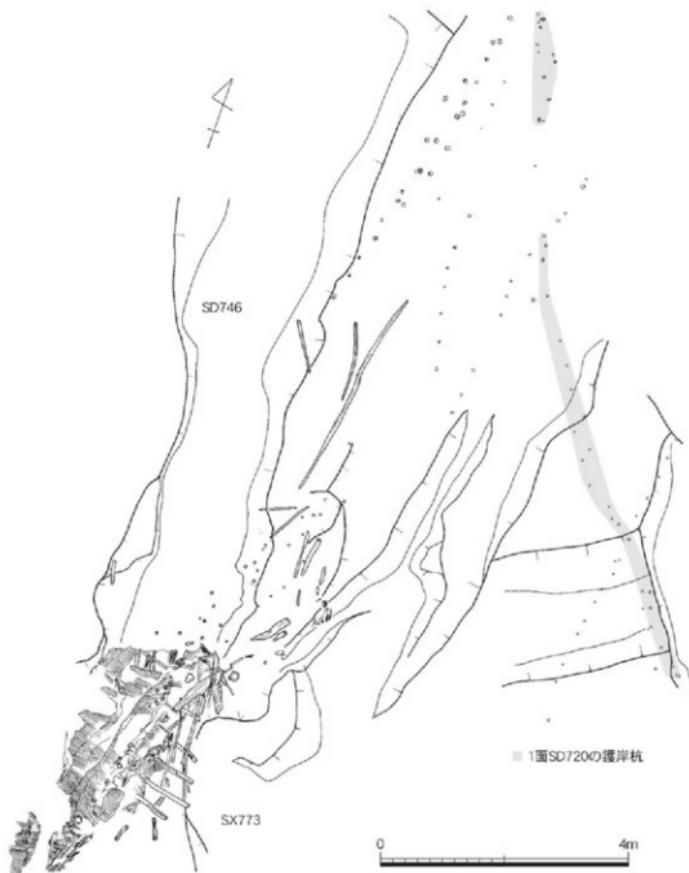


Fig.42 SX773と土堤護岸杭列実測図 (1/80)

後半代と思われる。48は須恵器壺は口径12.3cm、器高4.3cmを測る。底部は丸みを帯び、7世紀前半代を示す。49は須恵器鉢である。口径16.3cm、器高9.0cmを測る。口縁部は少し内湾し、端部は窄まって丸く收められる。外底部は回転ヘラケズリ、内面は同方向のナデを施す。50は三輪系土器である。外面と口縁部内面の一部を黒色に焼し、外面口縁部から頸部にかけてヨコナデ、体部は研磨している。内面は暗灰色を呈し横方向のナデを施されている。胎土は灰色を呈し、砂粒を含まず泥質。S2は復元した長さは13.6cm、幅4.8cm前後を測る石包丁である。石材は安山岩製と思われる。W12は右端が折れて欠損しているが、形状から左端と同様の紐掛け状の抉りがつくものと考えられる。遺存長43.4

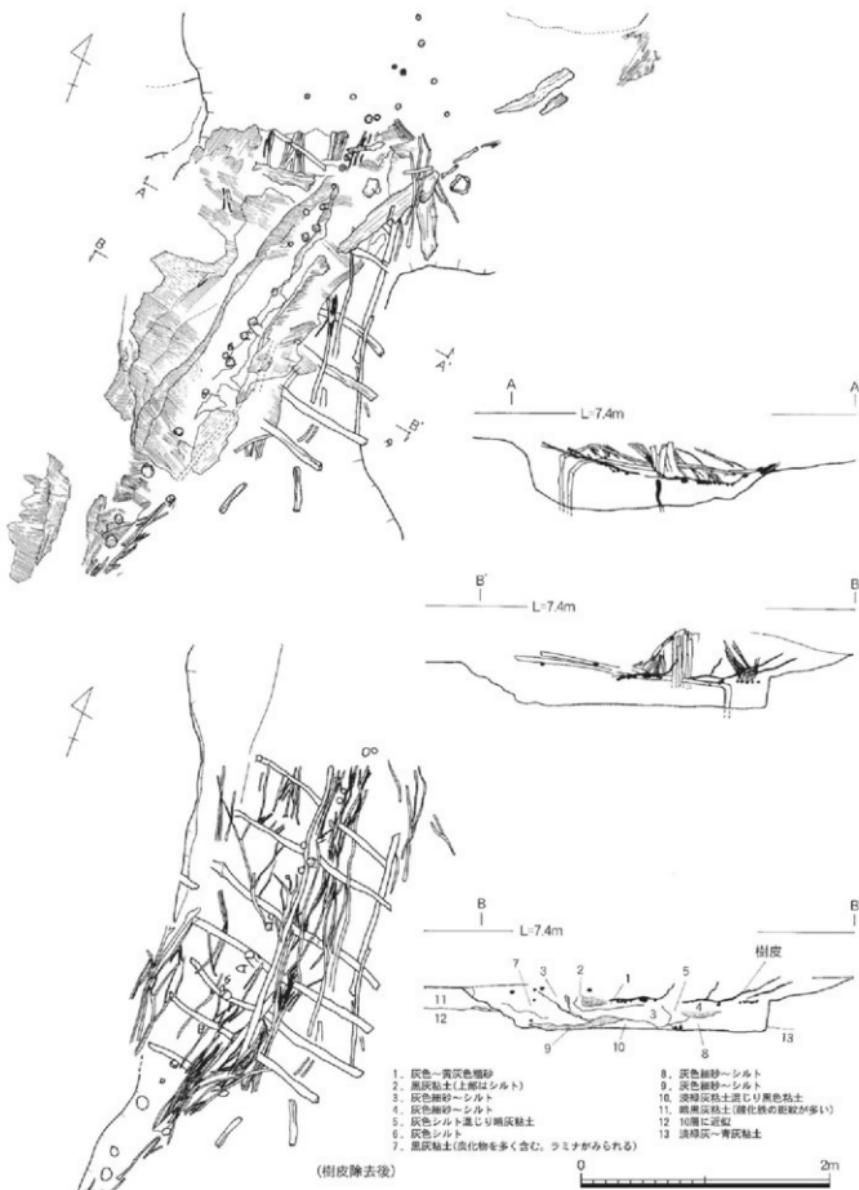


Fig.43 SX773 平面、断面見通し、土層実測図 (1/40)

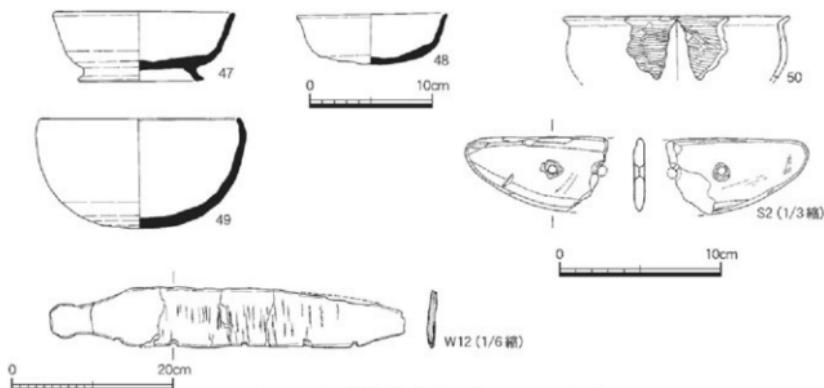
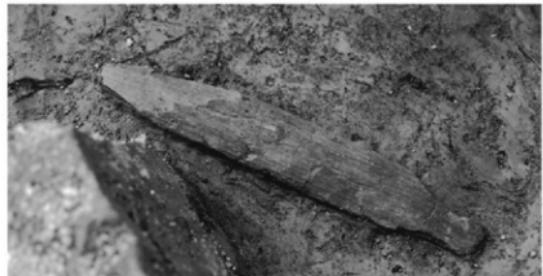


Fig.44 SD746出土遺物実測図 (1/3, 1/4, 1/6)



SD746内 木器（織器？）出土状況



W12出土状況

cm、復元長は45.5cmを測る。最大幅7.3cm、厚み1.1cmを測る。下端が刃部状にも見えるが不明瞭である。幅1cm前後の抉りがほぼ等間隔に計5箇所みられる。織機の可能性があり、鎌の刃部からの転用も考えられる。材はツブラジイを用いている。図示できなかったが近接して突起を削りだした織機の可能性がある木器も出土した。

④ 畦畔

調査区の西北部にかけて砂に覆われた畦畔が良好に残る。畦畔はほぼ流路の方向に平行したもので、地形に合わせ区画したものである。南北方向の畦畔は、南西部においてはやや湾曲して北に延ばし、中央付近で西に振って直線的に延ばす。さらに北側では流路と同じく東に大きく振って方向を変えている。

畦畔の時期は水路であるSD746に付随した土堤との間に水口を有していることからSD746が機能した時期に対応していると考えられる。この畦畔をきった洪水流路と思われるSD747や東に大きく振れたSD728、SD787が検出された。しかし、畦畔が切られた以後も畦畔修復の下敷と思われるSX781やSX782が検出されていることから、こうした洪水後も畦畔等の修復を重ね機能させていたことが考えられる。その時期は畦畔を切った流路から出土した遺物の下限は6世紀後半代におさまり、水路SD746を横切り切り替えた土堤の基礎（屏風倒し）が8世紀後半に近い時期であることは既述した。

畦畔11 (Fig.24・39, PL.17)

調査区北西隅で畦畔22と近接して検出された。北東方向に延長し、流された為かやや蛇行したような形状をなす。幅1.0~1.3m、高さ15cmで遺存する。調査区北壁際で検出されたSD746の流された左岸に細く残った土堤との間に切れた部分が認められ水口と思われる。畦畔11の北側には流水を示す灰白色砂の凹凸がみられた。この流路は畦畔11の裾部を平行しながら中途から北側に離れていく、SD746の流路や他の流路と同じ方向をとる。これは以前の畦畔に沿ったことを示している可能性がある。

畦畔11の下底には細い堅杭と畦畔の方向に沿った枝木が検出された。これから推測した畦畔の下底幅は約70cmで直線的に続いていたものと考えられる。枝木の密度に差異が認められ、特に水口近くには多くの枝木が幅広く検出され、スリ付け等によって幅広くし強化したものと考えられる。この水口付近の下敷には大きめの杭材も転用され、このうち2本を樹種同定した結果コナラ属アカガシ亜属とクスノキ科Aという結果が出た。

畦畔22 (Fig.24・39, PL.17)

畦畔11の南側に近接して検出された。方向が畦畔11と異なり、SD746の東側で検出された畦畔と同じ方向をとる。畦畔22はSD746の左岸土堤の位置まで延びていることから、SD746が切り替わって以後の畦畔でSX773の上に築かれた土堤との間に水口を有していたものとみられる。従って、畦畔11と22が築かれた時期は異なる可能性がある。北側には幅1.5m、深さ10cm程度の浅い流路が検出された。

畦畔22の下底にも粗朶類が敷き込まれていた。護岸杭は無く下敷には枝木のほか杭や建築部材が用いられていた。粗朶類の4本の樹種同定を委託した結果、アワブキ属、サカキ、コナラ属コナラ亜属クスギ節、クスノキ科Aという結果であった。

この敷粗朶からみた下底の幅は約130cm、検出した高さは約20cmである。

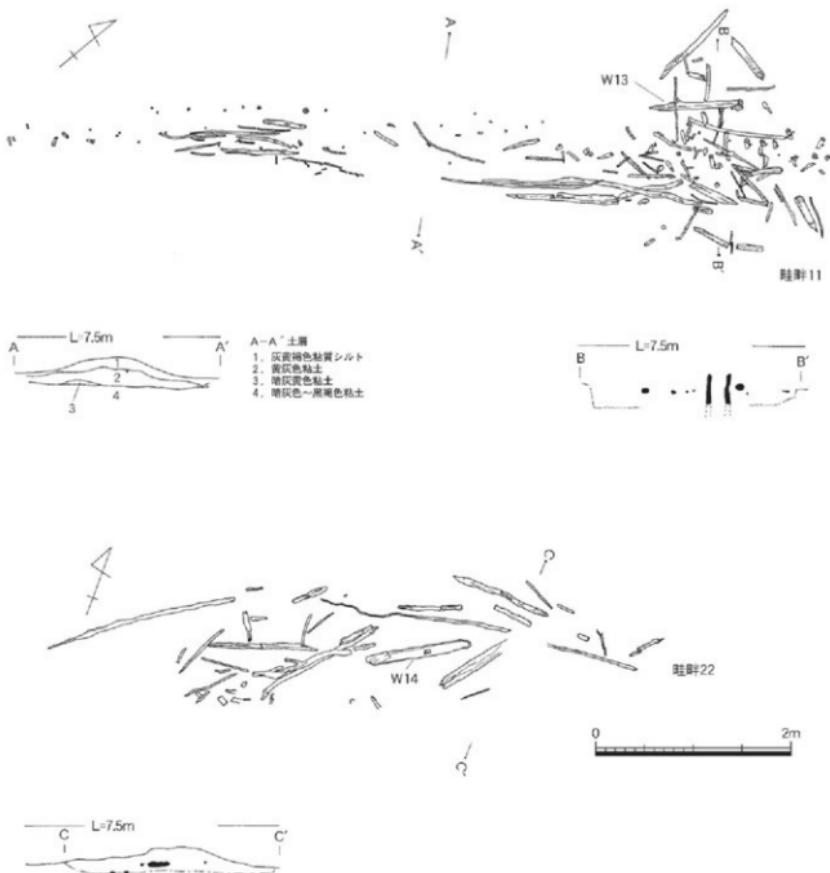


Fig.45 畦畔 11、22 下敷実測図 (1/50)

出土遺物 (Fig.46、PL.83)

畦畔の下敷きとして用いられた粗朶に混じって木器も少し含む。木器は杭が最も多く、建築部材が若干含まれる程度である。

W13は畦畔11の下底から出土。径5～6cmを測る樹皮のみ剥いだ丸太材の端部に幅2cm、径5cmの頭部を削りだす。取っ手もしくは縄掛け等が想定されるが機能は不明。また、この削りの下方に幅5mmの引っ搔いたキズが連続的にみられる。加工痕はみられないで、樹皮剥ぎ取り時のものか。遺存長92.4cm、材はアワブキ属。W14は畦畔22の下底から出土した建築部材である。図した裏面はほぼ全面焼けて炭化している。両面をハツリ、幅約10cm、厚み6cmの角材に仕立て、1箇所に3.5×4cmの方形ホゾ穴を穿つ。樹皮を剥いだだけの部分がみられ、径10cm前後の丸太材が用いられていることが判る。樹種はカヤ、現存長105cmを測る。

畦畔7 (Fig.47・48、PL.33-3・4)

調査区北西部で検出された。水路SD746の右岸に築かれた土堤13との間に水口を設け、直線的に東に延びていく。7次調査のなかで数少ない区画全体が良好に判る田面 (SS755-6) を構成する畦畔である。土堤13から南北に続く畦畔8との間の畦畔7の長さは6.3m、畦畔7から南側の畦畔12までの南北の長さは畦畔8の部分で11m前後とみられる。水口1の幅は約60cmを測り、周辺の土堤13の一部が巻き上げた水流によって洗い流されている。この修復と補強に土堤13の内側 (水路SD746側) にも護岸杭が打ち込まれている。同様の護岸杭が南側の水口2周辺でもみられる。

畦畔7は下端幅1m前後、高さ約20cmが遺存していた。上面はシルト質が堆積し、洗われたことを示す。下底に粗朶が敷き込まれている。SD746の両岸に区画された畦畔の東西に延長した畦畔11、22、7、10に

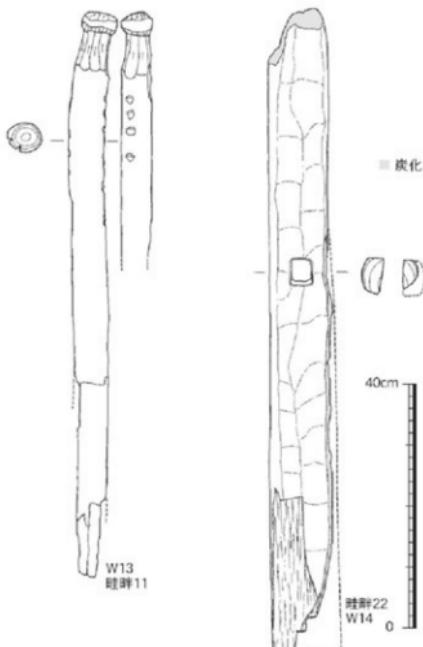


Fig.46 畦畔 11、22 出土木器実測図 (1/8)



畦畔7 水口1 (南から)

下月限C遺跡

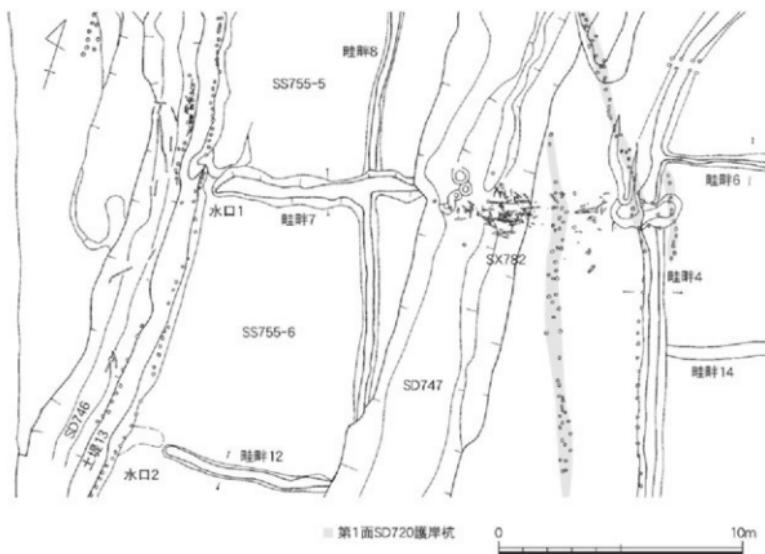


Fig.47 陸畔7周辺実測図 (1/200)

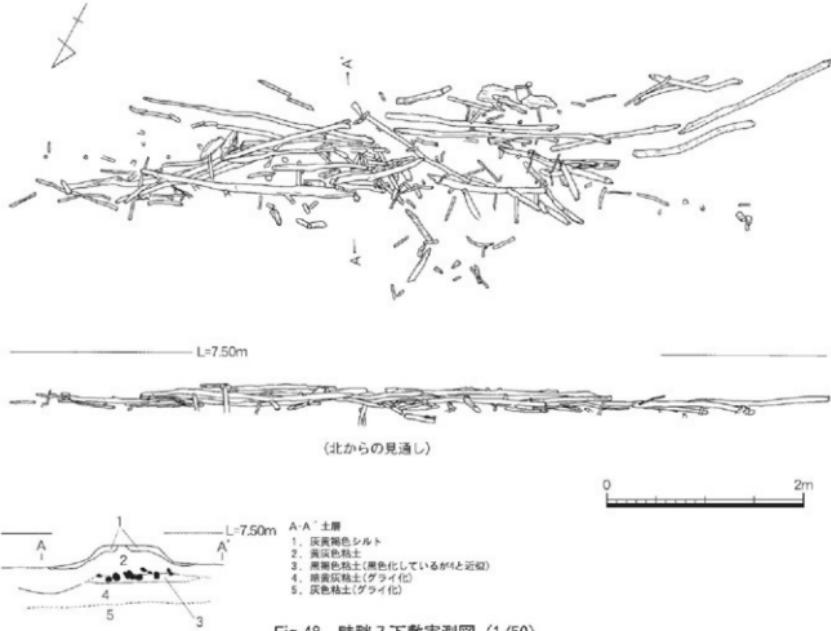


Fig.48 陸畔7下敷実測図 (1/50)

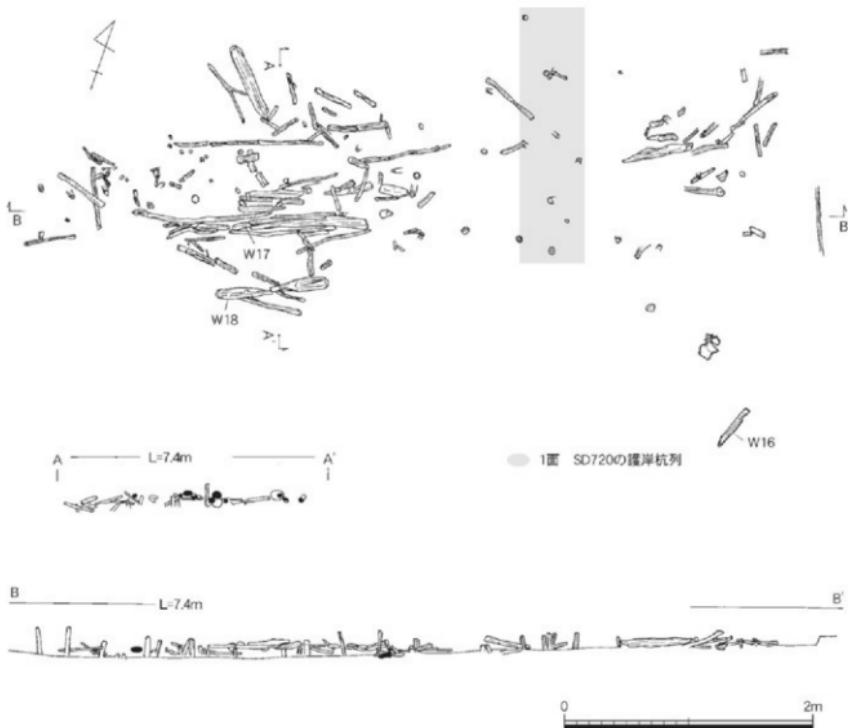


Fig.49 SX782 実測図 (1/40)

は下底に粗朶が敷き込まれている。修復によるものばかりではなく、構築当初から水流を予測して敷設されていたことも推測される。

畦畔7の下底では幅約1mの間隔を置いて長い枝を置き、その内側に細かい粗朶類が敷かれている。この外郭に置かれた木枝および、内部の畦畔の延長方向に長い枝は先行して打ち込まれたと思われる杭にからませて固定されている。粗朶類のレベルは他の畦畔でもみられるように踏み込みや土圧によるものと思われるが耕作土のレベルより低い。

下底から出土した粗朶の樹種同定を行った結果、スタジイ2、ガマズミ属2、シキミ1、サカキ3、コナラ属コナラ亜属クヌギ節2、コナラ属コナラ亜属コナラ節1、ヒサカキ2、ヤナギ属1、サクラ属1、アワブキ属1、タブノキ属1、コナラ属アカガシ亜属4、スイカズラ属1、クスノキ科A2、カキノキ1という報告であった。

畦畔12 (Fig.47, PL.33-1)

SD746の方向に合わせたことにより畦畔7に比べやや東に振れた方向に延長している。畦畔7に比べ脆弱で幅80cm、高さ約10cmが遺存する。敷粗朶は設けていない。土堤13が蛇行しているために畦

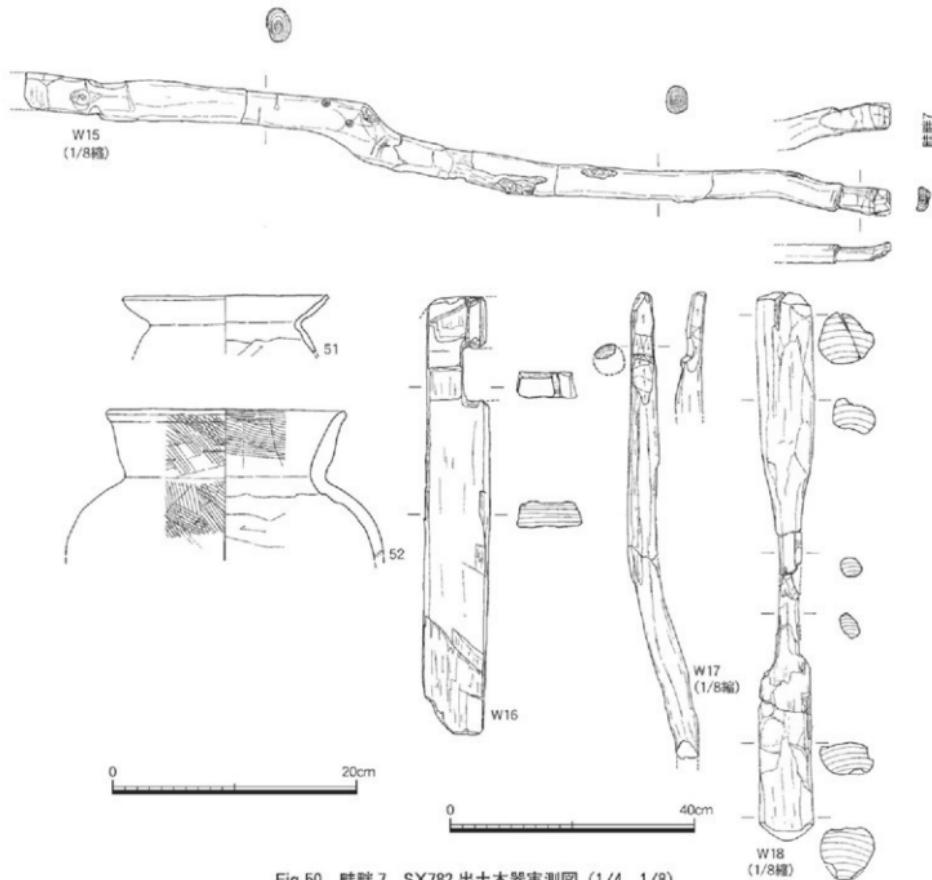


Fig.50 畦畔7、SX782 出土木器実測図 (1/4、1/8)

畔7より延長が長く推定9mを測る。土堤13との間に水口2が設けられているが、激しい水流によって幅広くなり、現状で約1.5m開いていた。畦畔7の北側の田面SS755-5と南側SS755-6との比高差は約10cmを測る。畦畔12の南側は約15m離れた位置まで畦畔は検出されなかった。

なお、SS755-6の植物遺体の分析結果を巻末(P-215)に掲載しているので参照されたい。

SX782 (Fig.47・49, PL.34-1・2)

畦畔7の東側延長に位置し、流路SD747内に位置している。畦畔7の下底同様の敷粗朶であるが、畦畔自体は流されている。畦畔7に比べ幅狭い70cmの間隔をとて長い枝を置き、内側に細かい粗朶を敷き詰めている。杭はこの内側の方に打ち込まれているのは重なる修復によるものと思われる。また、畦畔方向の長い枝より外側に散乱したような粗朶はスリ付けによる補強もしくは崩壊によって流



畦畔7土層（西より）



畦畔7下底 W15 出土状況

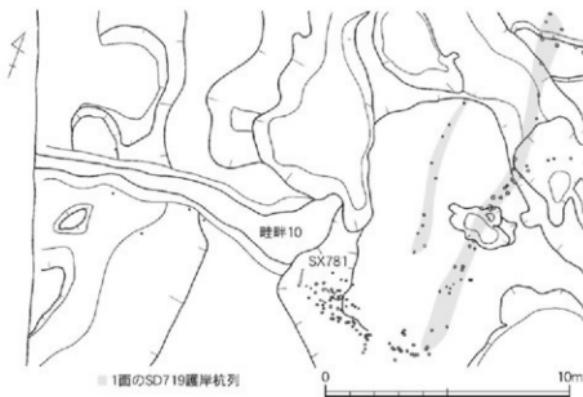


Fig.51 SX781周辺実測図 (1/200)

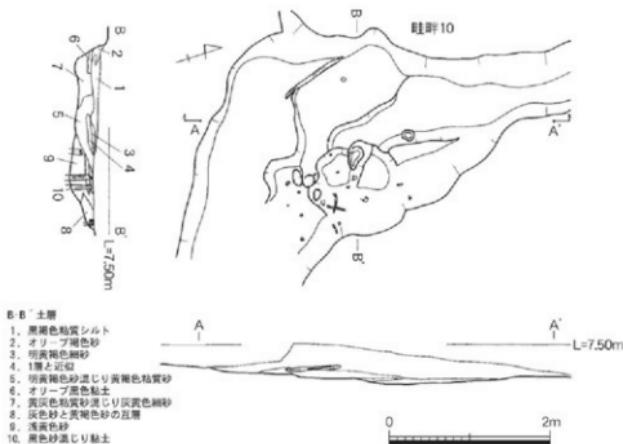


Fig.52 SX781実測図 (1/60)

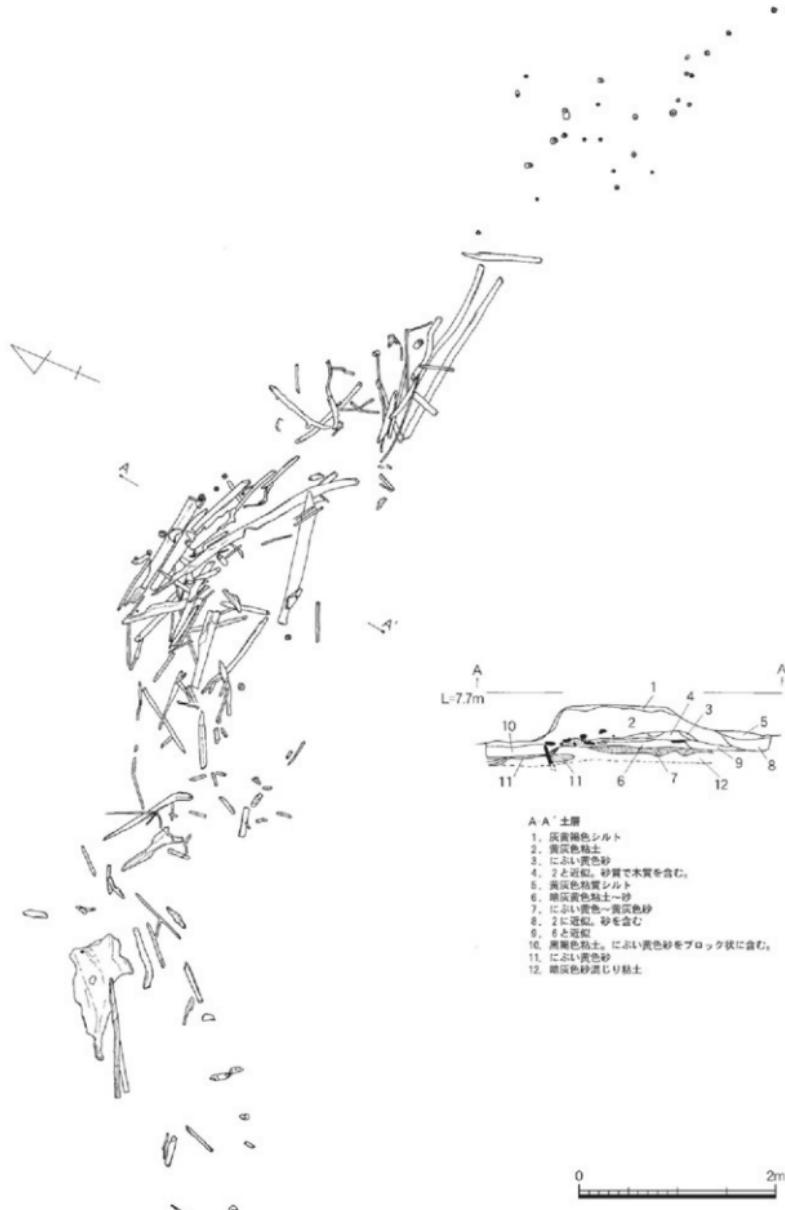


Fig.53 畦畔10下敷実測図 (1/50)

されたものとみられる。

16本のサンプルを樹種同定を行った結果、畦畔7と近似することが判った。その内訳はコナラ属アワブキ属1、ハイノキ属ハイノキ節1、コナラ属コナラ亞属クヌギ節2、ツバキ属3、アワブキ属3、ネジキ1、サカキ1、モチノキ属1、シキミ1であった。

出土遺物 (Fig.50、PL.84)

W15は畦畔7の下底から出土した。遺存長141.6cmを測り、建築材と考えられる。端部を段を有して細く削り出し、貫もしくは、紐状のものを掛けるような断面方形の突起を造る。遺存長141.6cm、最大径6.4cmの節が多く有した枝木を用いる。樹種同定は行っていない。W16～18はSX782から出土した。W16は幅5.3cm、厚さ2.1cm、現存長35.8cmを測る。1箇所に1辺が4.5cmの方形を呈したホゾ穴を作り出している。スダジイの板目材を用いる。W17は端部に弓彌状の抉りを削り出す。最大径5.0cm、図上の下方にかけては削りの痕跡がみられなくなる。材はアワブキ属を用いる。W18はコナラ属アカガシ亞属の割材を用いた堅杵である。全長89.4cm、槌部は径9cm、握部は径3.4cmを測る。握部中央の折れた部分に不明瞭ながら削ったような痕跡が認められ、横槌として再利用された可能性がある。

51、52はSX782から出土したが、流された混入品とみられる。畦畔7を流したSD747は後述のとおり6世紀後半以降であるので、SX782の構築時期を示していない。51は布留系土器、52は全体的に厚く、粗い調整を施す。外面はハケ調整後、ナデを加え凹凸が目立つ。口縁端部は外側へひねり出す。内面は頸部のナデ押さえ以下、横位のケズリを施す。

畦畔10 (Fig.51・53、PL.33-2)

調査区南西部で検出された。SD746の右岸に構築された畦畔で北側の畦畔12との距離は約25mを測るが、中間に不明瞭ながら畦畔が検出された。この畦畔との距離は約10mを測る。

畦畔12と畦畔10で区画されたSS755-9には西側の土堤13に沿った足跡とこれに平行して中央部を南北に連なった、ものと東西に横断したものが検出された(PL.19)。これは検出された畦畔の他に更に細かな区画をなす簡略な畦畔が設けられ、それに沿った足跡の可能性もある。

畦畔の残りは比較的良好で、幅180cm、北側の田面からは40cmの高さを測る。なお、南北の田面の比高差は約10cmである。畦畔10は少し湾曲しながら東へのび、SX781付近では北側に粘土が流れている。SX781の下底には上部の畦畔粘土と同じく湾曲してのびる粗朶が検出された。畦畔の延長方向に揃えて粗朶を並べているが、他にみられたような外側の護岸杭列に長い枝を絡ませ、縁取ったものはみられない。畦畔の土層断面にみられるように粗朶類のレベルから以下にシルト～砂層が堆積し、度重なる流水が推察されるが、修復に用いられた下敷きの粗朶類も流されたものと思われる。

畦畔10は水口の可能性があるSX781を越してさらに延長方向に杭列が続く。この範囲では畦畔の粘土や下底の粗朶類が壊滅的に流されたものと考えられる。

畦畔10に用いられた杭材5本の樹種同定はヒサカキ、ミツバウツギ、スダジイ、ツバキ属、アワブキ属であった。

SX781 (Fig.51・52、PL.34-5)

先述のとおり畦畔10と延長方向の杭列の間に幅約80cmの流路が認められ、水口と考えられる。Fig.52の土層断面からも杭列部分を切り込む砂層5が観察される。

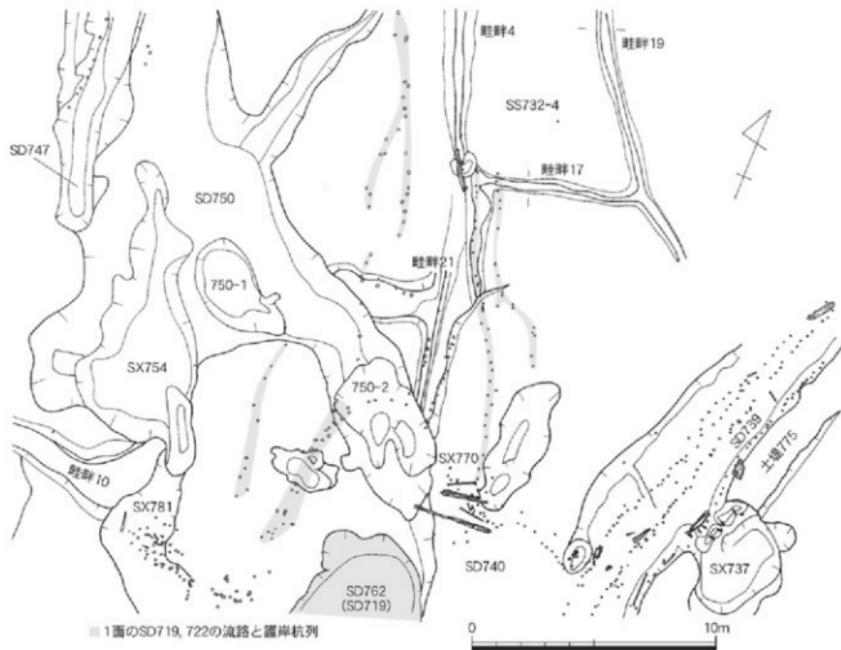


Fig.54 SX770周辺実測図 (1/200)



Fig.55 SX770実測図 (1/50)

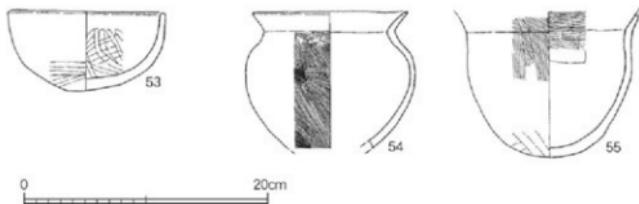


Fig.56 SD740、SX770 出土遺物実測図（1/4）



畦畔 3 水口

クリ3、コナラ属コナラ亜属クヌギ節2、マツ属複雜管束亞属1、ヤマモモ1、クリ1、ツバキ属1、タニウツギ属1で2次林が目立つ。

なお、これより南側では第1面のSD719、720に構築されたSX725、726による擾拌で生じた深い土壤（SD762）によって破壊、流失している。

出土遺物 (Fig.56)

53はSX770周辺の流路であるSD740から出土した。楕（鉢）形の器形をした土師器で口径13cm、器高6.6cmを測る。内外面にミガキを施している。54、55はSX770周辺から出土した。54は外縁細かいハケメを施し、内面は部分的に板ナデを加えたナデ調整。55は胴部が張らず、口縁部も開きが小さい。外縁部上位と内面口縁部とその下位に粗いハケメを残し、外底部はヘラケズリを施す。他はナデ調整。数少ないが出土遺物からみた下限は古墳後期に置くことができる。

畦畔23～25 (Fig.24・59、PL20)

調査区南西隅で検出された畦畔である。畦畔23、25は湾曲しながら南北へ延長し、それぞれ北側の畦畔8、畦畔4に接続していく可能性が高い。この畦畔で区画されたSS755-15、東側のSD741-1周辺は水流による砂の凹凸や足跡が著しい。特にSS755-15の西側の足跡は比較的明瞭にその方向をみることができ、畦畔23に向かって一部は渡り水路SD743の方へ向かっている。

SS776 (Fig.24、PL21)

調査区南際のSD735左岸域で検出されたシルト質の範囲である。畦畔は検出されず、この西側では第III面の黒色土が一部みえているのでこのシルト質の範囲は人為的な区画ではなく地形的な傾斜を

SX770 (Fig.54・55、PL.34-3・4)

調査区南よりの中央部で検出された。調査区中央部の南北方向に延長した畦畔4、21に連結した畦畔の基礎とみられる。畦畔21はさらに南側の畦畔25 (Fig.24) に統一していた可能性が高く、SX775の杭列は湾曲しているが、概ねこの南北方向の畦畔に対して直交させている。出土した枝木は畦畔の方向に沿った下敷きとみられ、この木枝にはその後の修復に用いられた径3cm程度の細い杭が打ち込まれている。樹種同定を行った9本の杭は

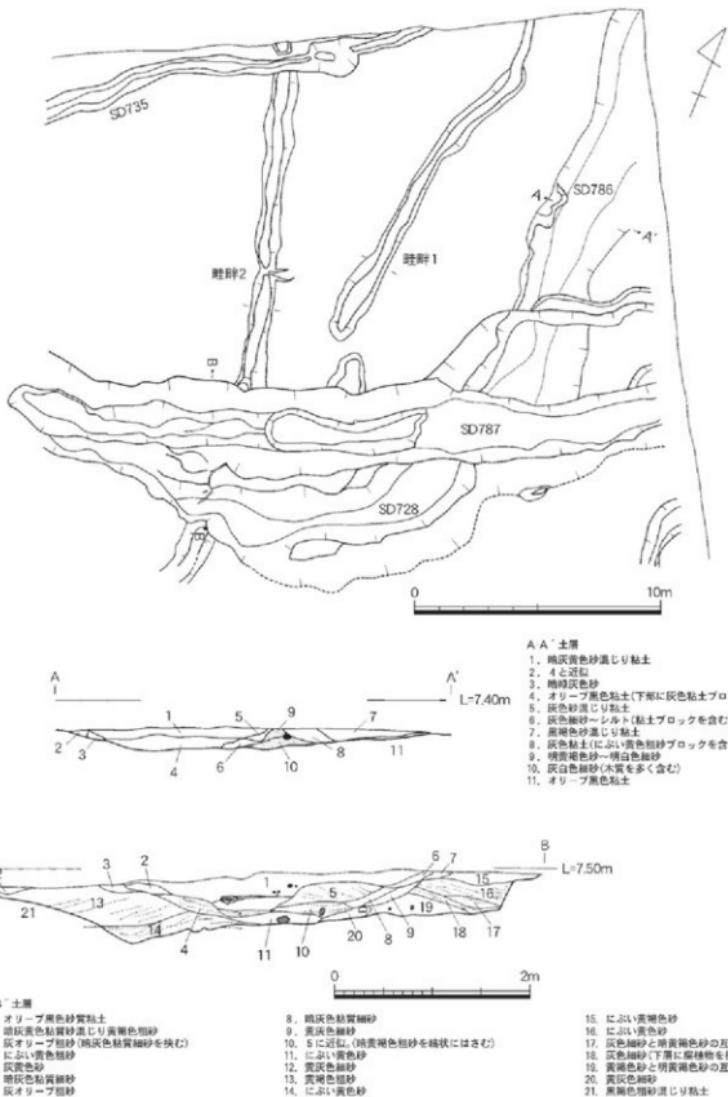


Fig.57 畠畔2、SD728、786 実測図 (1/200、1/50)

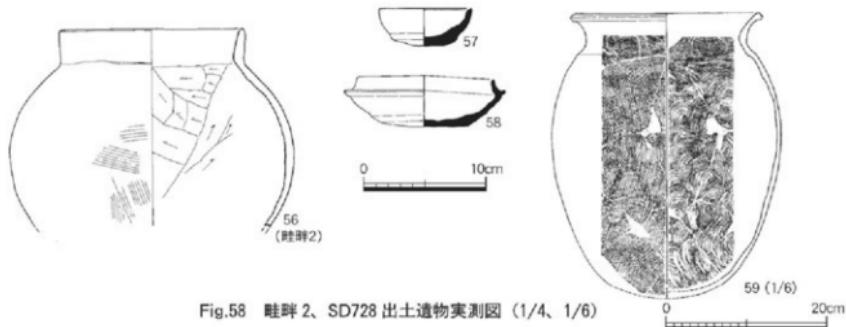


Fig.58 畦畔2、SD728出土遺物実測図 (1/4、1/6)

示しているものと思われる。

畦畔3~5、14~16 (Fig.24・59、PL.18・19)

中央部で検出された畦畔である。先述のSD746の右岸に築かれた畦畔とは洪水流路のSD747によって切断されているが概ねその延長を推定することができる。南北の畦畔は畦畔8と4と15が平行している。畦畔4と15の東西間の距離、すなわち畦畔14の長さは約7.5mを測る。東西に延びる畦畔14、20、17、SX770間の南北間の距離は10~12mを測り、西側の畦畔7と12間もこの範囲に含まれる。

畦畔4は北側で大きく東に迂曲し、畦畔2に延長していく。このコーナーに3箇所畦畔が切られ砂で埋もれているのが検出された。南側のSS732-2の西側畦畔4は崩壊した可能性があり、補修の杭が東側にみられるが、北側のコーナーに位置したSS732-1北側畦畔3の切られた部分は位置や形状から意図的と思われ排水を行った可能性がある (P-79写真)。

南北隣接した田面の比高差は3cm程度で西側のSS755が10cm近くあるのに対し対照的である。なお、SS732-2、SS732-1には足跡が畦畔周辺に多く残る。

畦畔1、2、6、9 (Fig.24・59、PL.17・18)

調査区北界で検出された畦畔である。流路SD787が他の流路と異なり東西に延長し畦畔を切っている。畦畔6は西側の水路SD743とその土堤もしくは切り替わったSX773から延長してくる土堤に直交する。さらに畦畔6と直交して畦畔9が延びている。東側の畦畔1、2は近接し、畦畔が切り替えられたことも推察され、畦畔2の東西の田面のレベルはほとんど変わらないか西側が逆にやや高いくらいである。従って畦畔1は古期の畦畔の可能性もある。

SD786、787 (Fig.57)

SD786が北側から蛇行した流路でSD728に連結していたものと思われるが、その埋没後、SD787がその流路を切って直線的に延びている。東から延びた流路SD785も畦畔を切って走行している。

出土遺物 (Fig.58)

56は畦畔2の下部から出土した。直口の短い口縁部に球形の胴部がつく。胴部上位は横位のハケメ、内面の頸部以下は横位から斜位のヘラケズリを施す。57~59は畦畔を切ったSD728から出土した。57の須恵器は小形の壺もしくは蓋である。底部はヘラ切り後未調整。外面体部と内面は回転ヨコナデを施す。口縁端部に浅い段状の凹みを有す。58の須恵器壺身は底部中心まで回転ヘラケズリが巡る。焼き歪みが大きいが口径11.7cmを測る。59は酸化焰焼成の疑似須恵器壺である。外面体部に木目直交平行タタキ、内面は同心円文のアテ具痕が残る。

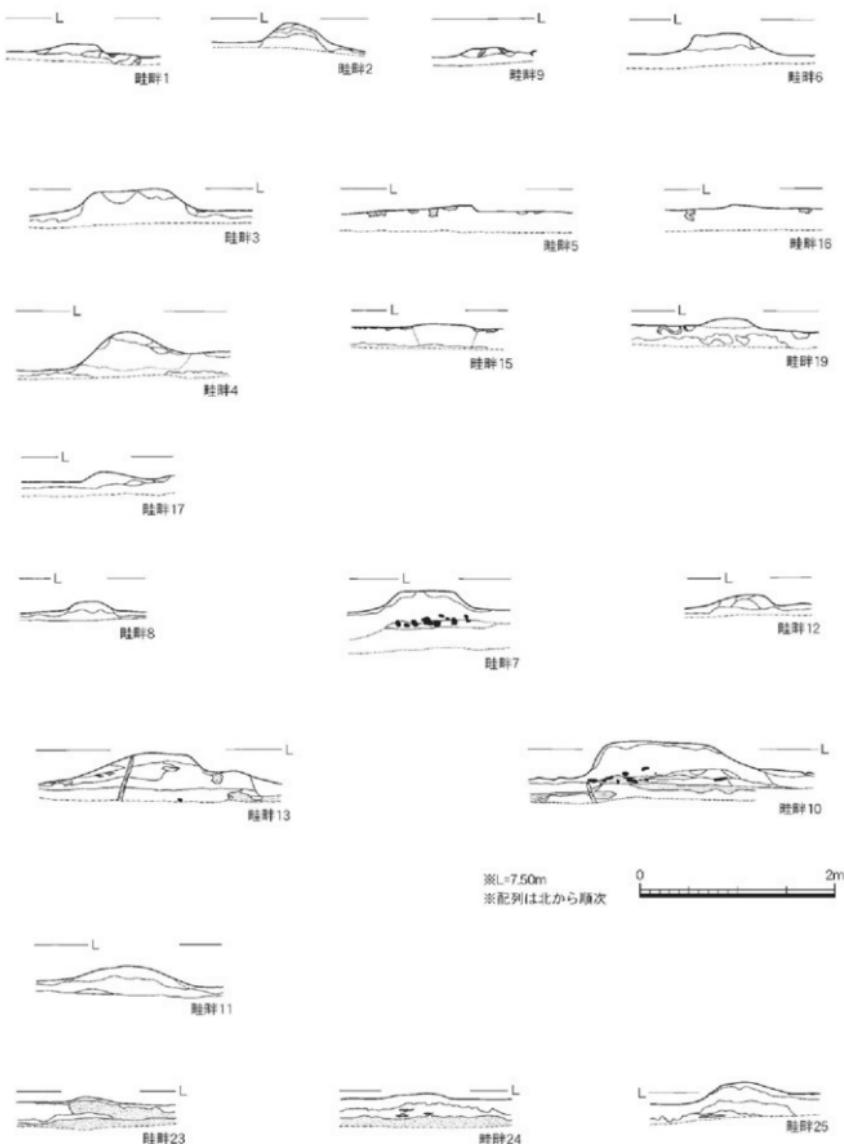


Fig.59 跡跡断面実測図 (1/50)

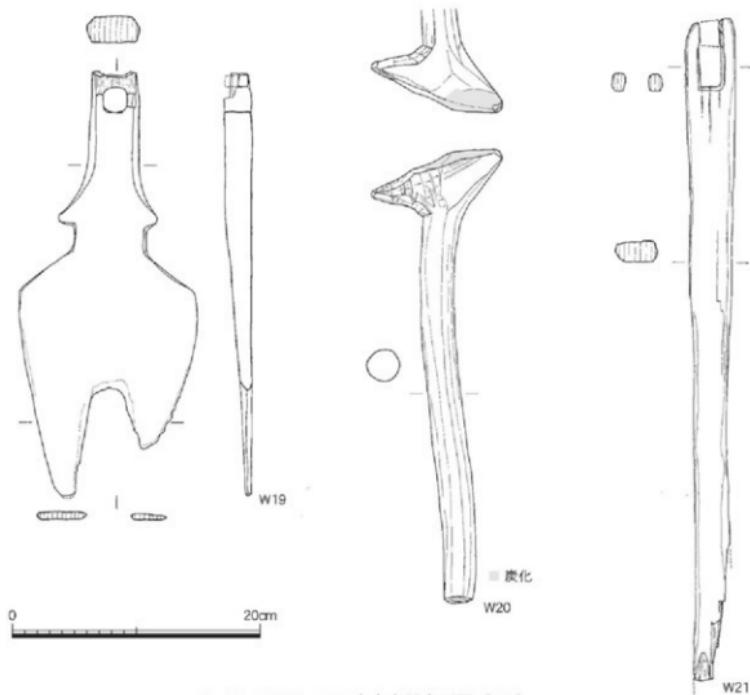


Fig.60 SS729、755 出土木器実測図 (1/4)

田面、流路出土木器 (Fig.60、PL.85)

W19は調査区北側に築かれた畦畔3の北側流域 (SD728の南側) から出土した。肩が張ったナス形を呈した二叉歟である。材はコナラ属アカガシ亜属の柾目材。遺存長34.7cm、刃部最大幅14.6cm、最大厚2.2cmを測る。柄との装着部に約2cm四方の孔を穿つ。W20は調査区南西部の畦畔10南側から出土した木柄である。サカキの枝木を用いる。全長37.1cm、刃部の装着部は炭化している。W21は調査区北西隅の畦畔22北側で出土した。コナラ属アカガシ亜属の柾目材を用いる。3.3×1.8cmの方形ホゾ穴を穿っている。遺存長54.2cm、最大幅4.1cm、最大厚1.8cmを測る。

その他、田面、流路出土遺物

SD727と出土遺物 (Fig.61)

60～62は調査区北際中央で検出された流路からの出土遺物である。60は手捏ねのミニチュア土器である。61の須恵器坏身は返りの端部をつまみ上げ屈曲させている。外底部は回転ヘラ切り後未調整。62は直口の土師器甕。外面は器面が剥落し調整不明。内面はナデ調整。

SS729と出土遺物 (Fig.61)

調査区北東部のSD787以北の田面をSS729とした。63の須恵器坏身は口縁端部が凹む。65は手捏ねのミニチュア土器である。坏部の下位から台部にかけて指頭痕が顕著である。坏部内面の下位は横位に板状のものを回している。

64は須恵器甕の口縁部である。遺存部に断面三角形の突帯が2条巡り上位の突帯以下に柳歛波状文が施されている。

SD747と出土遺物 (Fig.61)

調査区西寄りで検出された。南北方向の畦畔8と4の間を畦畔を切って流下している。流れの方向は水路SD746や畦畔3の方向と平行し、これらの水路や畦畔が自然地形に大きく制約を受けていることが判る。

66～69は手捏ねのミニチュア土器である。流水に対する祭祀行為に伴うものか。71は弥生の土製投弾。72は完形の須恵器坏身である。外底部は回転ヘラ切り後ナデ調整を行っている。

SD750、SX751と出土遺物 (Fig.61)

調査区南西部のSD762の北側に位置した流路である。流水によって洗い流された不整形の凹みが顕著である。

73はSX751から出土した手捏ねミニチュア土器である。74はSD750から出土した土師器甕である。外面体部にハケメを施し、頭部はナデによって消されている。

SD762 (Fig.24・61, PL.20)

調査区南西部で検出された流路である。土壤状に凹んだSD762は第I面の護岸や水流を反転させる「出し類」の可能性があるSX725やSX726の背後で水流が下底を巻き上げ凹んだSD719が残ったものである。さらに南西に延長したSD762-2は第II面で新たに検出された流路である。

75は胎土に滑石を多く含んだ縄文中期の阿高系土器である。ローリングを受け丸くなっている。76は須恵器坏蓋である。口縁端部は屈曲して折れ、天井部は回転ヘラ切り後軽くナデ押さえている。W22は第I面のSD720に属した下駄のたぐいと思われる。W23はコナラ属アカガシ亜属を用いた鍼頭である。

SD764、765 (Fig.24・61)

ともに調査区南際近くで検出された第I面のSD720に築いた護岸杭列側の落ち込みである。

77は弥生終末くらいの搬入品の壺であろう。横位に連続した竹管文と竹状のものを斜めに押し当てる文様が残る。78の瓦器碗は第I面のSD720に属したものである。

検出面

M1はE24区の遺構検出時に出土した鐵器であるが鏽が著しく形状が不明瞭であるが鉄鎌の可能性がある。

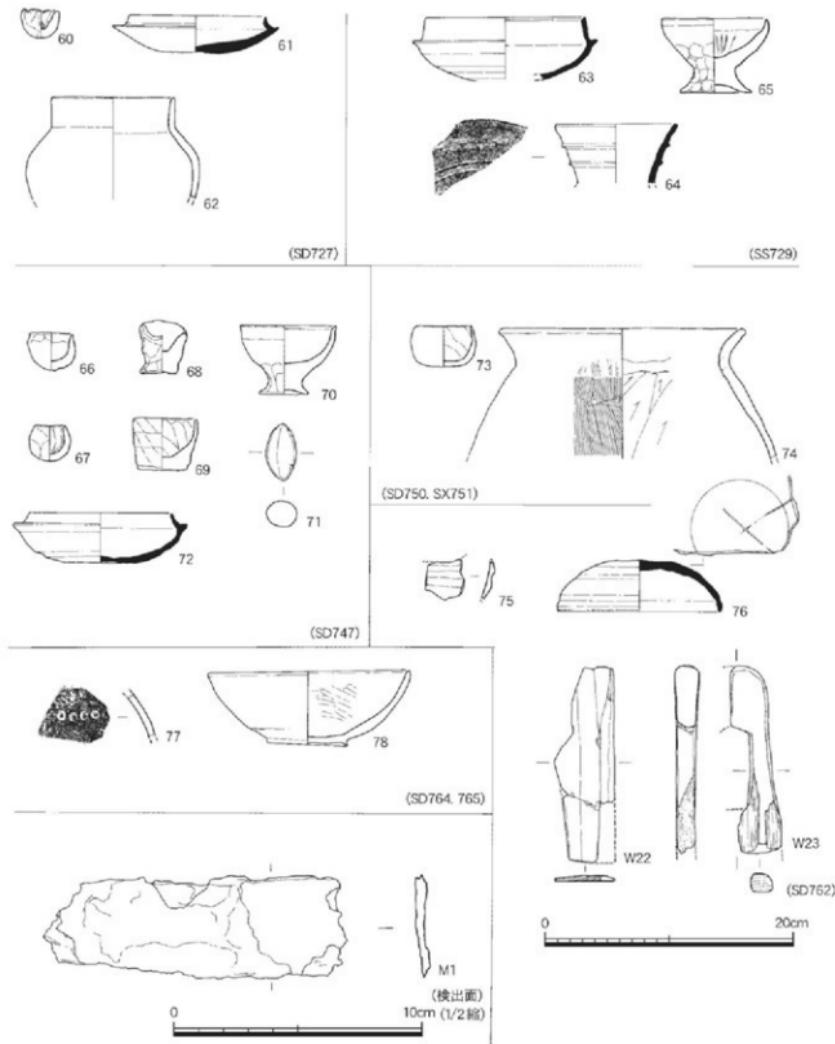


Fig.61 SX727、SS729、SD747、SD764、SD765、検出面出土遺物実測図 (1/2、1/4)

第II面検出の畦畔と水路について

ここで、検出遺構とりわけ畦畔の区画と時期について若干のまとめをしておきたい。第II面で検出された遺構は大きくその水路時期から3時期に分けられ、SD746（古）→SD734→SD735と変遷していくものと考えられる。その時期は「皇后宮職」の木簡が出土したSD735の埋没時期が8世紀後半に下限をおさえられることは確実である。SD746も既述した通り、その切り替え時期が8世紀後半に下限をおさえられる。しかし、それに付随した畦畔が遺物から6世紀後半代に下限がおかかる洪水路に切られているのでそれ以前から機能していたことが考えられる。従って、その形状は長く存続し、SX773（屏風返し）による水路の切り替え後も維持していたとみられるので、その基本的な区画形態は200年に及んで続いている可能性がある。

中央部を北流するSD734はその方向から畦畔を切っていると考えられ、降った時に構築されたものとみられる。延長方向からみるとSD735への排水も考えられる。上層にSD735の洪水砂を被るがその埋没時期まで存続していた可能性がある。また構築時期がSD746の廃止に伴うものか、または併存したものか判断が難しいが、SD746が切り替わった時期が8世紀代に及ぶことを考え合わせれば併存していた可能性は十分ありうると思われる。その場合、4次から9次調査の全体図（P-88に掲載）にみられるようにSD743とSD734は概ね平行し、畦畔はSD746に合わせ地形的な制約を受けながらも東側では方形区画をとるべく幾分地形的には大きな労力を用いて改変した可能性がある。このような地形的な制約と意図的、計画的な要素をあわせもった畦畔は次の来たるべく時代、いわゆる第I面で検出された条里に基づく地割りを準備させるものではないかと思われる。

なお、4～6次の流路SD190の北側に広がる畦畔は地形的な制約を色濃く受けた区画とみられ、6世紀後半代に下限がおかかると考える洪水路に切られている。その後、畦畔は踏襲されたものか新たな区画が部分的にも行われたものか、不明と言わざるを得ないが、図面をみるとこの流路の東側に流路と異なった方向の畦畔がみられ、こういったものが新期にまで継続した可能性がある。

第II面で検出された基本的な水利網は踏襲され第I面の遺構として検出されている。幹線水路として機能し、2箇所に堰を設けたSD735は第I面のSD720に引き継がれている。SD720の方向と位置は条里の区画に基づいたものであるが（P-272、Fig.166）、第II面において洪水路として検出された範囲であることから、地形も考慮されたものと考えられる。また、第II面で検出された支線水路のSD734は第I面では条里方向に近いSD714に替わり、更に現代まで続いたSD715に受け継がれている。また、遡った時期をみると、第III面では堰が2箇所設けられた支線水路のSD818が検出された。幹線となる水路は不明であるが、6次と7次の集落の間の谷部を走行していた可能性もある。

このように地形を考慮した水路が掘削され水利網が受け継がれているが、検出した3面の堰がいずれも近接していることは、更にこのことを強く感じさせるとともにそこに発生する水利権の問題も浮上することになる。ここで水利権を語れる具体的な資料はないが、調査区が何らかの人為的な境もししくは結節点を為していたとも考えられる。

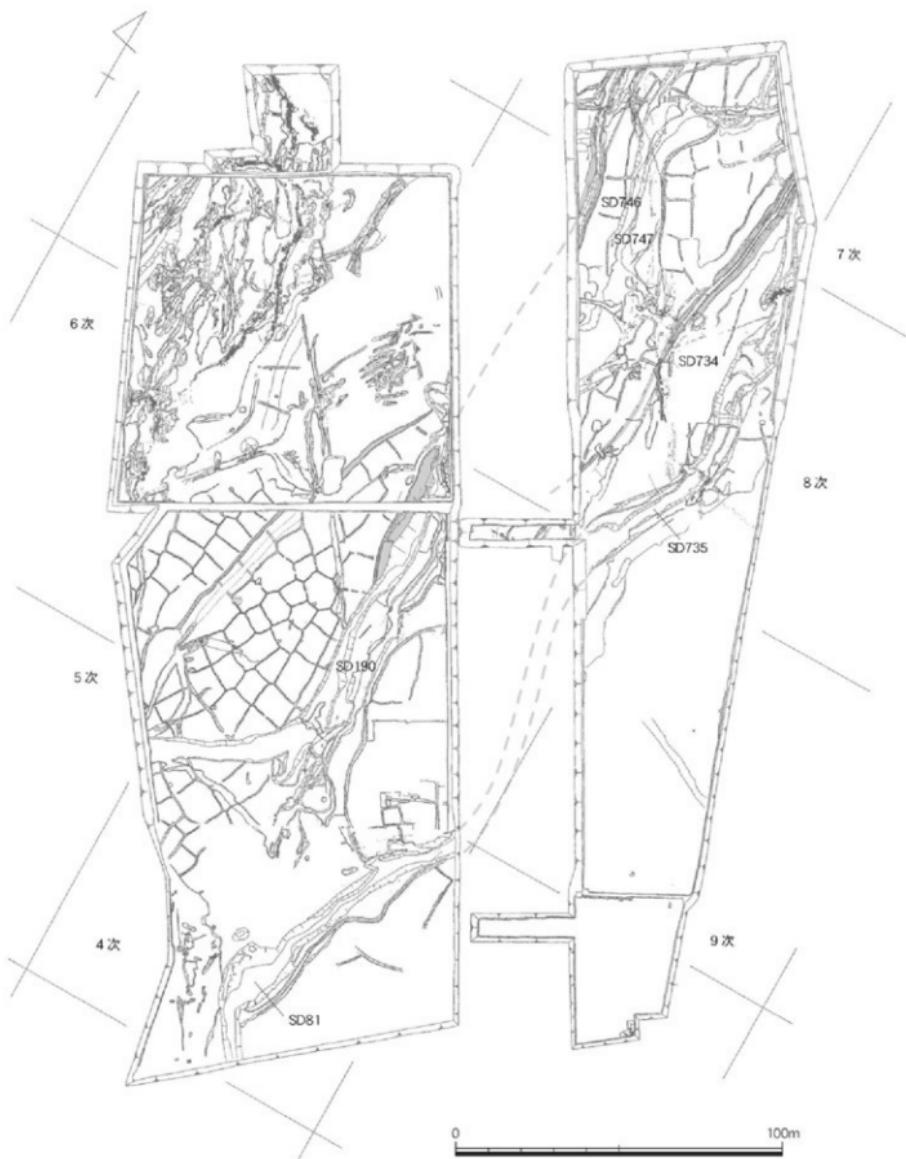
下月隈C遺跡



第II面畦畔と水路 (1/500)

0

40m



4次～7次調査 古墳～古代 水田 (1/1,500)

4. 第III面の調査

1) 調査の概要

第II面より0.1~0.8m更に下がった面で、標高6.4~7.6mを測る。南東側が微高地状に高く、北から西側にかけて低くなっていく。調査は11月から第II面調査と平行して行い、3月迄行った。北側は基盤より上面の包含層中で遺構が確認されたので、更に基盤挖掘下げて遺構のため押し確認調査を行った。検出した遺構は高所部では竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝、柱穴など。柱穴には柱根が残る。低地部では溝、不定形土坑などである。低地部では水田の区画らしき痕跡があったが、遺構としては明確に把握出来なかった。遺物は弥生時代前期から古墳時代にかけてのものが、溝を中心出土している。

2) 遺構と遺物

① 溝状遺構 (SD) (Fig.62・63)

溝としての記号をつけたものは24条あるが、主なものを報告する。

SD801 (Fig.64 PL.38)

調査区南東隅、SD735に一部を切られる溝。この部分は基盤上の上面に遺物を含む包含層SX800があり、その上面で検出した。遺物の時期から7世紀前半であり、第II面の時期になる。確認長は16m、幅2~3m、深さは土層部分で0.4mを測る。底面のレベルは南西側が高く、北東側が低くなり、北東側は溝状に一段深くなる。埋土は褐色灰土質土が主体で下部は砂混じりとなり、流水の状況を示す。

出土遺物 (Fig.64、PL.86) 弥生土器片が圧倒的に多いが、古墳時代土師器・須恵器・投弾・敲石・黒曜石剥片などが少量出土している。

1は須恵器の壺。復元口径9.6cm、器高3.8cmを測る。外底部は回転ヘラケズリ、体部は回転ナデ、内底はナデ。体外面に自然釉がかかり、底部にはヘラ記号がある。2は外面に線刻がある土器片。表面調整はナデで、弥生土器片か。3は手捏ねの鉢。内面板ナテ痕、外表面には指押さえ痕が残る。

4は土製投弾。全長4.1cm、最大径2.0cmを測る。丁寧なナデ調整である。胎土は精良。

S1・2は敲石。S1は敲石で、一部欠損するが、長軸長8.0cm、短軸長5.25cm、厚さ4.65cmを測る。粗割成形で、敲打使用痕が残る。S2は長方形形状を呈し、表面が欠損するが、上面に使用による窪みが残る。側面には敲打痕が残る。長軸長7.85cm、短軸長6.95cm、厚さ6.0cmを測る。石材はいずれも綠泥片岩である。

SD818 (Fig.62・63・65 PL.39~41・44・45)

調査区を北流する溝である。確認長は117mを測る。溝幅は北側で2.6mであるが、南側で4.2mとなる。また、溝の深さは北側で0.4m、南側で0.6mを測り、底面の高さは北側で6.5m、南側で、6.8mと北側が若干低く、北側に水が流れたようである。溝の北半分はほぼ直線的な溝である。しかし南半部ではG-26区で堰SX895・910が二重に検出され、その南側では第II面の大形土坑で擾乱を受け、またその南側では西側で重複する古い流路SD921があるなど、溝の形状は不明瞭になる。溝の埋土は北側では上層が黒色粘土から黒褐色粘土が主体で、間層に砂層を挟む。1号土層ベルトや2号土層ベルトでは2回の流路が認められる。堰北側の5号土層ベルトでは堰の影響なのか堆積の変化があり、砂を間に薄く挟み、大きく4回程の堆積変化が伺える。南側の9号土層ベルトでは灰色粗砂礫土から

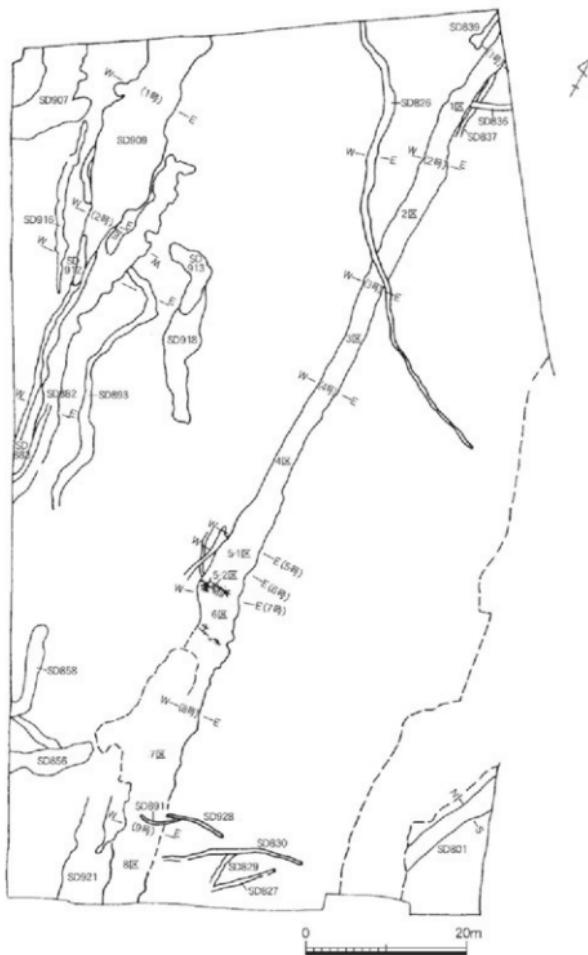


Fig.62 第Ⅲ面溝配置図 (1/600)

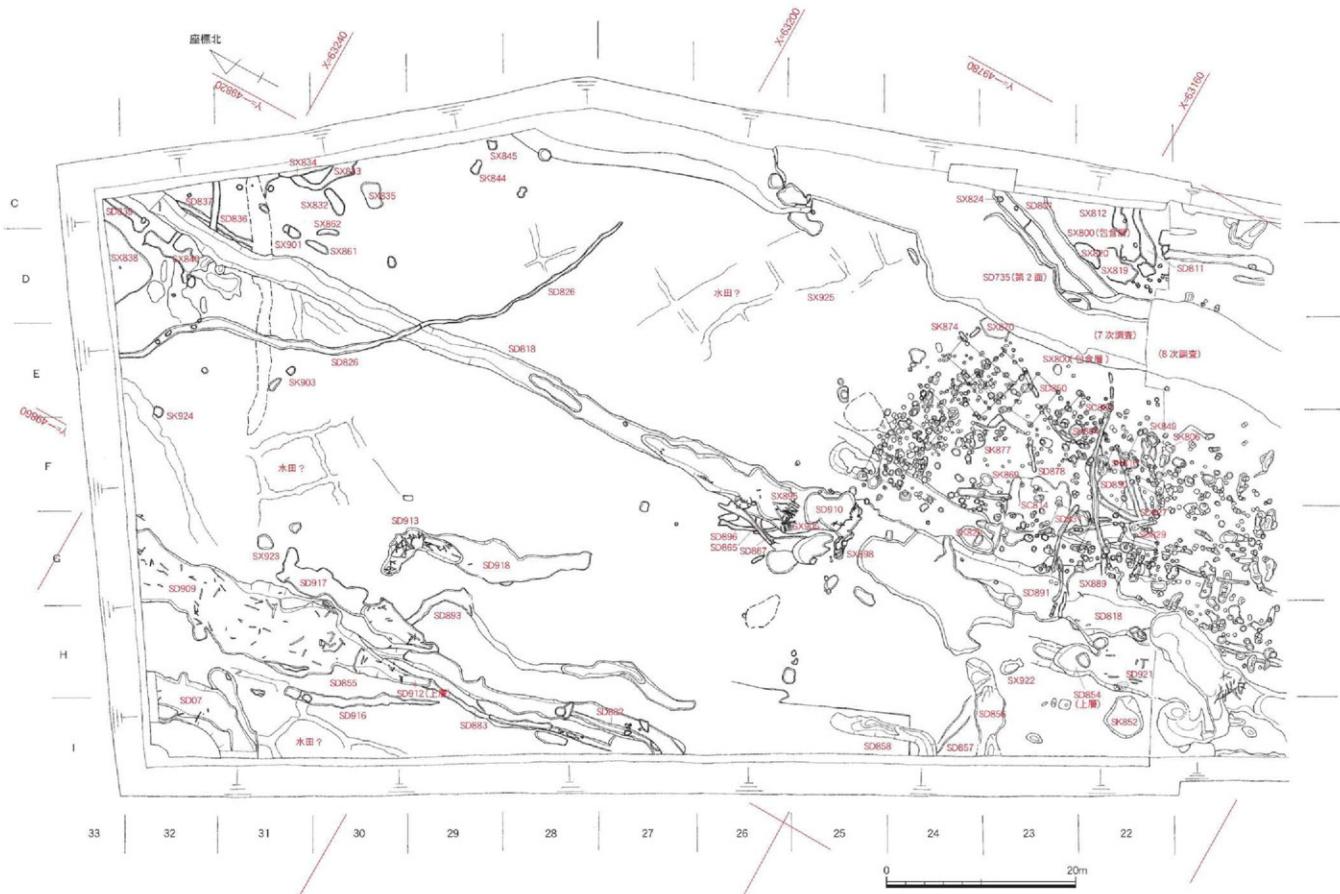


Fig.63 第III面遺構全体図 (1/400)

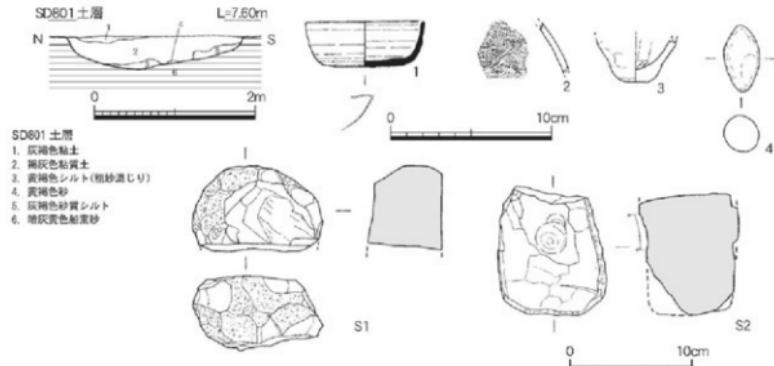


Fig.64 SD801 土層、出土遺物 (1/60・1/4・1/3) ※S1・2は1/3

灰褐色粗砂礫などの粗砂が中心となる。堆積土からは多量の土器と木製品などが出土している。下層からの出土が多い。この溝北側では水田としては確定出来なかったが、水田区画と思われる畔状の痕跡やその内面には水田耕土と思われるような土壤の汚れあり、又、この部分では溝西壁に水が流れ込んだような抉れや、溝沿いに不定形の浅い落込みなどがあり、南側の堰などの存在と合わせて考えると、周囲に水田が広がる水路であった可能性がある。溝遺物の時期は弥生時代後期後半から古墳時代前期までで、北側では時期的に新しいものが多い。北側で5世紀初めのSD826に切られるので、その時期には埋没していたのであろう。また南側では西側に溝の古い流路と思われるSD921などがある。

出土遺物 (Fig.66~81, PL.86~90・92・93~95) 北側から土層ベルト毎に1~8区として遺物を取上げたので、それに基づいて報告する。出土遺物としては弥生土器から土師器、石器や木器などが出土している。遺物としては弥生時代後期後半から終末のものが多い。また木器や流木なども全域で出土しており、農具などが比較的多く出土している。

5~14は1区下層出土。5・6は弥生時代後期の壺。5は広口・短頸で、復元口径は17.0cmを測る。調整はナデ。6は複合口縁壺口縁部で、復元口径は23.8cmを測る、調整は口縁部がハケメ後ヨコナデ、頸部はハケメである。屈曲部に刻目が付く。7はミニチュアの手捏ね壺である。8・9は後期中頃の高壺。8は復元口径21.8cmを測る。調整は外面ハケメ後ナデ、内面はナデとミガキである。9は大型で復元口径31.4cmを測る。内外面ナデ後ヘラによる暗文風のミガキが入る。10は楕円形の鉢。復元口径は15.6cmを測る。体部下面下半はケズリ、その他はナデである。11・12は支脚である。11は窓口、12は杏形の形態である。調整は11の外面は天井部までタタキ後ナデ、内面はナデである。12は内外面ナデである。13は突帯文土器の壺である。屈曲形の二重突帯と思われ、復元口径は21.4cmを測る。口縁直下の突帯には刻み目が入る。外面は貝殻条痕で、内面はナデ。板付I式古段階である。

14~22は2区下層出土。14~16は弥生時代後期の壺。14は直口気味の口縁で、復元口径は12.6cmを測る。口縁外面はハケメ後ヨコナデ、胴部はナデ。15は後半期で、復元口径は15.6cmを測る。胴部外

面はタタキ後ハケメ後ナデ、口縁はタタキ後ヨコナデ、内面はナデ。16は外反して聞く口縁部で、復元口径は24.0cmを測る。調整は口縁内外面ハケメで、口端部には刻目が入る。いずれも砂粒以外に雲母粒子を含む。17・18は甕。17は長胴で後期後半。復元口径は14.1cmを測る。内外面粗いハケメ調整である。18は後期。口縁部は肥厚する。復元口径は21.0cmを測る。外面は粗いハケメ、内面はヨコナデ、内面は細かいハケメ調整。19は高坏脚部。後期前半頃で、外面はヘラミガキで脚部上半はハケメ、内面はハケメ後ナデ。脚部には円孔が2か所ある。20~22は鉢。20・21は楕形の形態。20の底部はやや厚手で口径は10.4cm、器高は4.9cmを測る。調整はナデである。21は底が深い形態。復元口径は13.6cm、残存高は5.6cmを測る。外底部板ナデ、体部はナデ、内面はハケメで軽くナデる。22は大形で、復元口径は28.0cmを測る。外面はナデ、内面はハケメ後ナデ・ヘラミガキである。

23~29は3区下層出土。23・24は弥生土器の直口壺。復元口径は15.8cm・11.4cmを測る。調整は23はナデ、24は口縁部ヨコナデ、胴部はハケメ調整。25は古墳時代前期の甕。復元口径は15.7cmを測る。肩部に櫛櫛き波状文が施される。調整は胴部外面ハケメ、口縁部はヨコナデ、胴内面はヘラケズリである。布留式土器である。26は弥生時代後期終末期の鉢。底部には直径1.5×1.3cmの円孔がある。穿孔は焼成前で、ナデ調整である。調整は外面板ナデかナデ、内面は粗いハケメ。27は線刻のある土器片。調整はナデ。28・29は弥生時代後期後半の高坏。27は坏部で、復元口径30.3cmを測る。坏部外面は磨滅するが、調整はナデでハケメが少し残る。25は脚部で外面ヘラミガキ、内面はナデでシボリ痕が残る。頂部は接合面で刻目が多数残る。

30~39は4区出土。31は上層、他は下層出土。30・31は壺。30は後期後半の複合口縁壺。復元口径は25.4cmを測る。頸部内外面ハケメ調整、口縁部はヨコナデ。口縁の屈曲部には刻目がある。31は広口の小型壺。外面ハケメで焼成時破裂痕が残る。内面ハケメ後ナデ。32~34は甕。32は緩やかに外反する口縁の甕。復元口径21.6cmを測る。調整は外面ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はハケメ後ナデである。33・34は「く」字状に外折する口縁形態。復元口径は20.2cm・25.4cmを測る。調整は胴部外面ハケメ、口縁部調整は33がヨコナデ、34がハケメである。34の外面にはススが付着する。35は終末期の甕底部。調整は外面が板状工具のナデ上げ、内面はハケメである。36・37は同時期の高坏。36は口縁部細片。37は坏部で復元口径は33.8cmを測る。内外面ハケメ後ヘラミガキ、口縁外面から内面は暗文風のヘラミガキ、内底は放射線状にミガキが入る。古墳時代前期のもの。38・39は鉢。38は浅い皿型で、復元口径は8.8cmを測る。手捏ねで指押さえ痕が残る。39は5区と6区出土は片接合の小型の平底鉢で、ナデ調整でハケメが残る。

40~70は5区・1区(北側)出土。40は5・6・7区出土の破片が接合した大形壺で、復元口径は約50cmを測る。頭部に扁平な突帯が付く。口端部にはハケメ工具による刻目。頭部の突帯にはX形のハケメ工具による刻目が付く。内外面粗いハケメ調整で、内面頭部はヨコナデする。胎土には砂粒を多く含む。41~46は小型の壺。41は「く」字状に外反する口縁で、復元口径は10.5cmを測る。全面ナデ調整である。42は外来系の壺で、肩部外面に二段の竹管文とその間に半截竹管文が入る。色調は橙色を呈し、焼成は良好。43~45は直口する口縁。43はやや平底である。復元口径は9.4cm、器高11.4cmを測る。ナデ調整で、胴部は板ナデである。44は復元口径10.2cmを測る。調整は外面がヘラミガキ、口縁内面はハケメ後ナデ、胴部内面はナデである。45は口縁片で、復元口径は12.0cmを測る。口縁部外面はヘラミガキ、内面はヨコナデである。以上は弥生時代後期後半である。46は丸底の壺か甕の底部。外底部板ナデ、上部から内面はハケメ調整。弥生終末から古墳時代初頭のものか。47・48は複合口縁壺。いずれも後期後半のもの。47は復元口径19.2cmを測る。口縁部外面はハケメ後ナデで、ハケメ工具による小口の刻目施文がある。口端部には刻目が付く。48も同形態と思われる。頭部と胴部の

下限C造跡

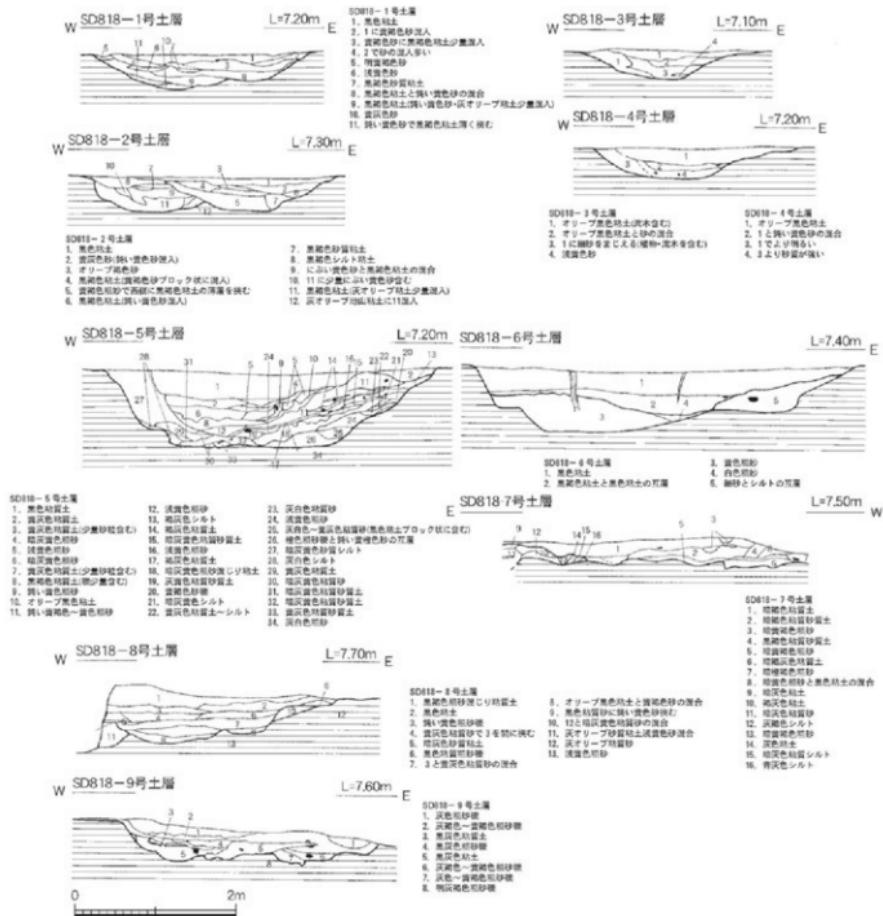


Fig.65 SD818 土層 (1/60)

境に割目のある三角突帯が付く。頭部内外面の調整はハケメ。49～62は彫で後期後半が主体。49は長胴の最大径が中央部にあり頭部が縮まる形態で復元口径は15.2cmを測る。口縁部はヨコナデ、外面はハケメ、胴部内面は底迄ヘラケズリである。外面胴部上面から底部、内底面にはススが付着している。

る。形態としては壺だが煮炊きに使用されている。50は頸部のしまりがない甕で、復元口径は14.6cmを測る。胴内外面板ナデ上げ、口縁部はヨコナデ。51～60は「く」字状に外反する口縁の甕。51は復元口径17.9cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ、胴部はハケメである。52は復元口径20.0cmを測る。外面ナデ、内面ハケメで、軽いナデ。53は復元口径22.0cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ、胴部内外面はハケメ。54は頸部に崩れた台形突帯が付く。復元口径は27.0cmを測る。口縁端部と突帯には刻目が付く。調整は外面がナデ、内面はハケメ後ナデ。55は古墳時代初頭。復元口径16.4cmを測る。口縁部はヨコナデ、胴部内外面はハケメで、内面にはナデを加える。56はやや厚手で、復元口径20.7cmを測る。調整は胴部外面と内面はハケメで、口縁外面はヨコナデ。57は復元口径20.4cmを測る。外面ハケメ調整で、口縁部外面はヨコナデする。58は復元口径24.2cmを測る。外面ハケメ調整で、口縁部外面はヨコナデを加える。59は頸部に突帯が巡る。復元口径は32.4cmを測る。調整は外面がハケメ後ヨコナデ、内面はハケメである。60はやや肩の張る形態で、復元口径は23.4cmを測る。口縁部はヨコナデ、胴部内外面はハケメ調整である。61・62は甕の底部で、後期後半～終末期である。底部の調整はいずれもハケメ後ナデ、62はハケメが残る。内面調整はいずれもナデ。焼成はやや不良である。63は壺の底部。底部は押し出され突出する形態で後期終末のもの。外底部ケズリ、胴部は底部付近は平行タタキ後ヘラミガキ、板ナデ、下半は粗いナナメハケメ後ナデ。内底は粗いらせん状に施すハケメで指押さえ痕が残る。その上面は板ナデ。64・65は鉢。64は古墳時代前期の鉢。復元口径は14.5cmを測る。底部外面はヘラケズリ、口縁部から内面はナデ。65は後期で、内面ハケメ後ヘラミガキを加える。66は支脚。外面の調整は平行タタキ、内面はナデである。67は器台口縁部。口径は8.6cmを測る。外面調整はハケメ、口縁部から内面はナデである。68～70は高坏。68は古墳時代前期前半で、復元口径は23.1cmを測る。坏部底部と体部の境には段を持つ。坏部内外面ヘラミガキを行う。脚部との接合面が残る。69・70は弥生時代後期終末の坏底部から脚部。いずれも坏部外底部はハケメ後ナデ、内面はヘラミガキ調整。70の脚部は外面ハケメ、内面はシボリ後ナデ調整。70の据部には径0.6cmの円孔が2か所残る。焼成前穿孔である。

71～118は5-2区(南側)出土。71～76は壺。弥生時代後期後半から古墳時代前期前半までのもの。71は細頸壺口縁部。復元口径8.2cmを測る。頸部外面ヘラミガキ、口縁部から内面はヨコナデ。72は復元口径16.9cmを測る。口縁端部に竹管文を巡らす。調整はヨコナデで、外面ハケメである。73は短頸の広口壺。口縁端部は少し凹む。復元口径は11.7cmを測る。調整はナデで、胴部外面はハケメ後ナデ。74は古墳時代前期で、丸底である。胴部最大径は約26cmを測る。胴部内外面ハケメで、外底近くは板ナデ、上半部はヨコナデを加える。75・76はいずれも頸部に突帯が付く。75は三角突帯で、工具による刻目が付く。口頭部内外面はハケメである。76の突帯は台形状でヘラによる刻みが付く。外面ハケメ調整である。77～82は甕。77は小型の甕。復元口径14.2cmを測る。口縁部ヨコナデ、胴部外面はやや磨滅し粗いハケメが残る。内面は板ナデ調整。78～82は中型の甕。78は底部が凸レンズ状を呈す。復元口径22.4cm、器高28.9cmを測る。胴部外面上半から内面はハケメで、胴部下半は板ナデ、底部なナデ。口縁部はハケメ後ナデを加える。胴部外面上半に黒斑があり、ススが付着する。79は外反が強い口縁で、復元口径は27.0cmを測る。外面はハケメ、口縁部はヨコナデで、頸部はハケメ後ナデである。80は復元口径25.6cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面はハケメ、内面は粗いハケメである。81は口縁端部上部が跳ね上る形態で端部に凹線が巡る。口径28.2cmを測る。調整は口縁部ハケメ後ナデ、胴部はハケメである。82は頸部に三角突帯が付く形態。復元口径27.0cmを測る。口端部と突帯部には刻目が付く。調整は胴部がハケメ、口縁部は外面ヨコハケ、内面はハケメである。83は後期の大形壺の胴部。胴部残存径44.0cmを測る。下半に刻目のある突帯が付く。外面ハケメ調整。

84～93は鉢。後期から古墳時代前期である。84は小型皿の形態。復元口径12.6cmを測る。手捏ねで指押さえ痕が残る。85は古墳時代前期で、復元口径16.1cmを測る。外底部ヘラケズリ、体部はハケメ、内面はナデである。86は体部が内湾する形態。復元口径15.0cmを測る。外面ヘラミガキ、口縁部外面から内面はヨコナデ調整。87は口縁部が直立する形態。大形で復元口径は28.8cmを測る。外底部はヘラケズリ、体部外面はハケメである。88は底部が平底で後期前半。復元底径は5.5cmを測る。調整はナデで、内面は板ナデである。89は手捏ねの鉢。復元口径11.2cmを測る。体部下半はハケメ、上半から内面はナデである。器壁は厚手で土師器と思われる。90・91は体部から口縁部が屈折する形態。手捏ねで指押さえ痕が全面に残る。外面黒斑がある。91は復元口径13.0cmを測る。調整は体外面ハケメで口縁部はヨコナデ、内面は口縁部ヨコナデ、体部は板ナデである。92は土師器の丸底の鉢。調整は外面ヘラケズリで底部はナデを加える。内面はナデ。93は深底で、口縁部が体部から外反して聞く形態。復元口径14.4cm、器高14.6cmを測る。外底部はヘラケズリ、体部外面は板状工具の強いナデ上げ、内底は指ナデ。外面スヌが付着する。古墳時代前期か。94～96は後期の脚台付鉢の脚台部。復元脚径は13.4cm・9.6cm・10.4cmを測る。脚台部の調整は94がハケメ後ヨコナデ、95は外面タテヘラミガキ、内面は細かいハケメ後ナデ、96はヨコナデで、外面にハケメが残る。97～109は高坏。97・98は北陸系の土師器の高坏と思われ、丸底の底部に斜め方向に鈎が巡る形態。97は復元口径13.9cmを測る。内外面ハケメ後ヘラミガキ調整。98は同形態の一部である。胎土は精良。99は深底で、体部から口縁部が内湾して立上り、底部の境に段が付く形態。復元口径は16.6cmを測る。坏部内外面細かいハケメ後ヨコナデ、脚部はハケメ後ナデ、内面シボリ痕が残る。胎土は雲母細粒を含むが精良。100は外来系の脚部。脚裾の境に5条沈線があり、筒部はヘラミガキ、内面にシボリ痕が残る。101は丸みを持つ坏に大きく広がる脚部を持つ。復元口径28.8cm、復元器高16.9cmを測る。坏部外面下半はヘラケズリ、上半から内面はナデ、脚部外面はヘラケズリ、裾はヨコナデ、内面はヨコハケメである。102～104は短脚で大きく聞く裾部で、後期後半から末のもの。復元脚径18.0cm・17.0cm・15.8cmを測る。102・103の脚部調整は内外面ハケメ、104は外面丁寧なナデで筒部に工具痕が残る。内面は細かいナナメハケメ、奥はナデである。102は破片が4・5・6区出土である。105～109は細く高い脚部である。調整は、105は外面ハケメで下半はヘラミガキを加える、内面はハケメ後ナデで、シボリ痕が残る。106ハケメ後ヘラミガキ、内面ナデでシボリ痕が残る。径0.7cmの円形透孔がある。107は外面ハケメ、内面はナデでハケメ、シボリ痕残る。108は上半ハケメ、下半ヘラミガキ、内面はヨコハケメ、奥にはシボリ痕残る。径0.7cmの円形透孔が1か所残る。109は外面ヘラミガキで、内面シボリ痕残る。110は鼓形器台の脚部で、外面ヨコナデ、内面ヘラケズリである。古墳時代前期である。111～114は頸部の縮まりが口縁直下にある筒形の形態。後期後半から終末のもの。口径は111～113が14.1cm・15.5cm・20.0cm、器高は113が22.6cmを測る。112の口縁端部は上方に少し摘み上げる。調整は、111は口縁端部にタタキ、口縁部外面はナデ、脚部はタタキ後ハケメ後ナデ、口縁部内面はハケメ、脚部内面はハケメ後ナデである。112・113は内外面ハケメで、112の口縁部はヨコナデする。114は脚部。復元脚径17.0cmを測る。外面ヘラミガキかナデ、内面はナデ。115・116は支脚。115は口縁部が外折する筒形の形態。復元口径が10.6cm、器高16.9cmを測る。調整は脚部外面粗いタタキ後ナデ、脚部内面はナデ、口縁部内面はハケメである。116は杏形器台の頂部。外面はタタキ、内面はナデ調整。頂部には直径1.0cmの円孔がある。117は中期後半の大形の筒形器台。外面丹塗りでヘラミガキ、内面はナデ調整である。118はSD818から出土した楽浪系筒杯で、円筒形土器とも呼ばれる（鄭仁盛2003「楽浪円筒形土器の性格」『東京大学考古学研究室紀要』第18号）。底部径（復元）9.6cm、残存高2.1cmであり、器壁は胴部のもっとも薄いところで5mm、底部で6mmである。内面や胴部外面にはロクロによる回転ナ

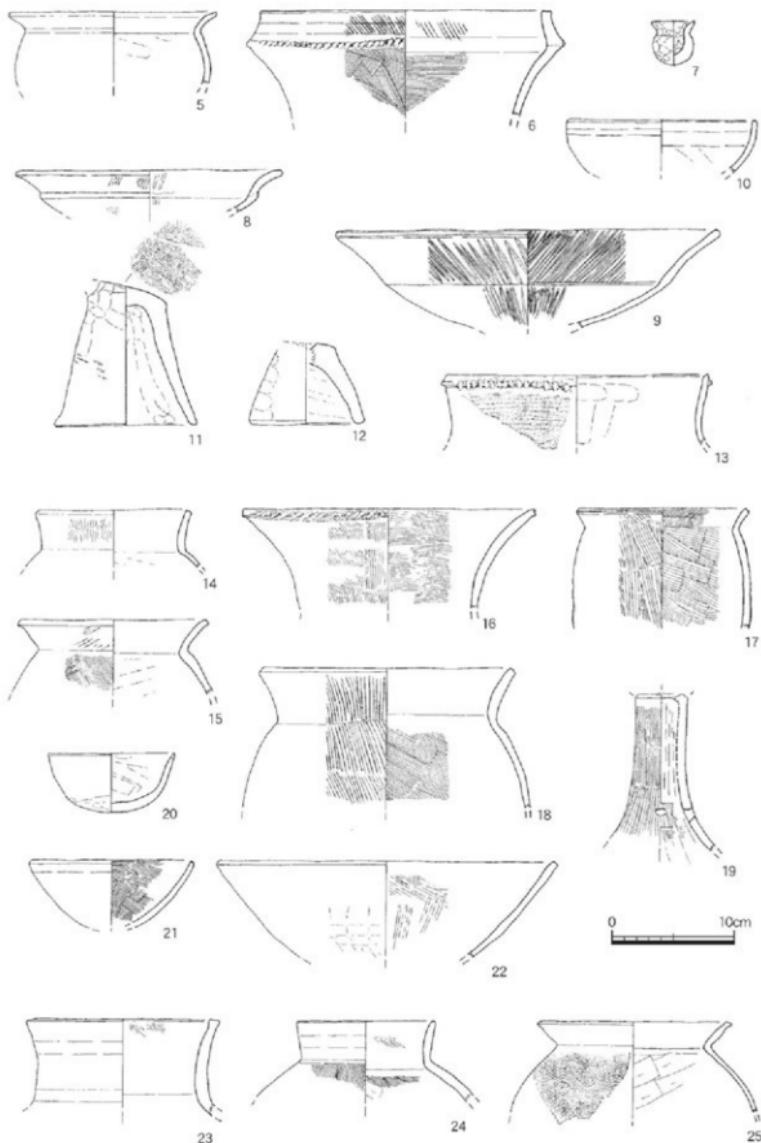


Fig.66 SD818 出土土器① (1/4)

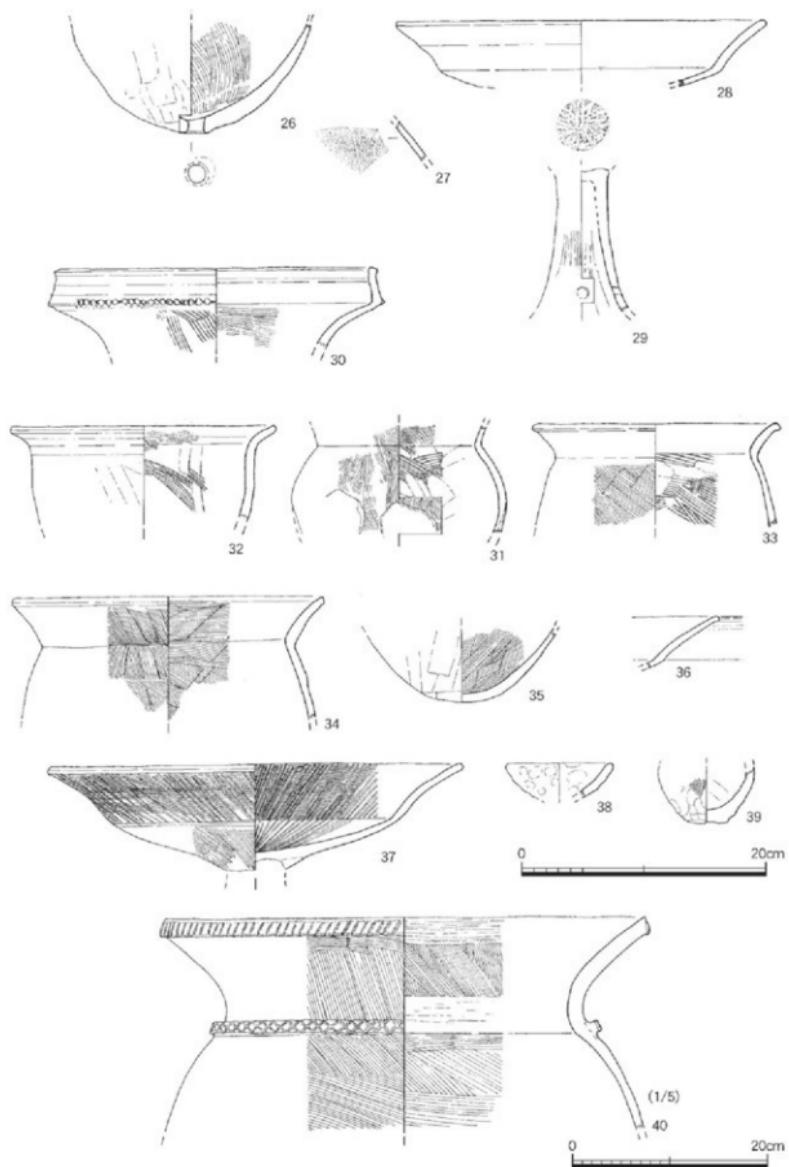


Fig.67 SD818 出土土器② (1/4・1/5)

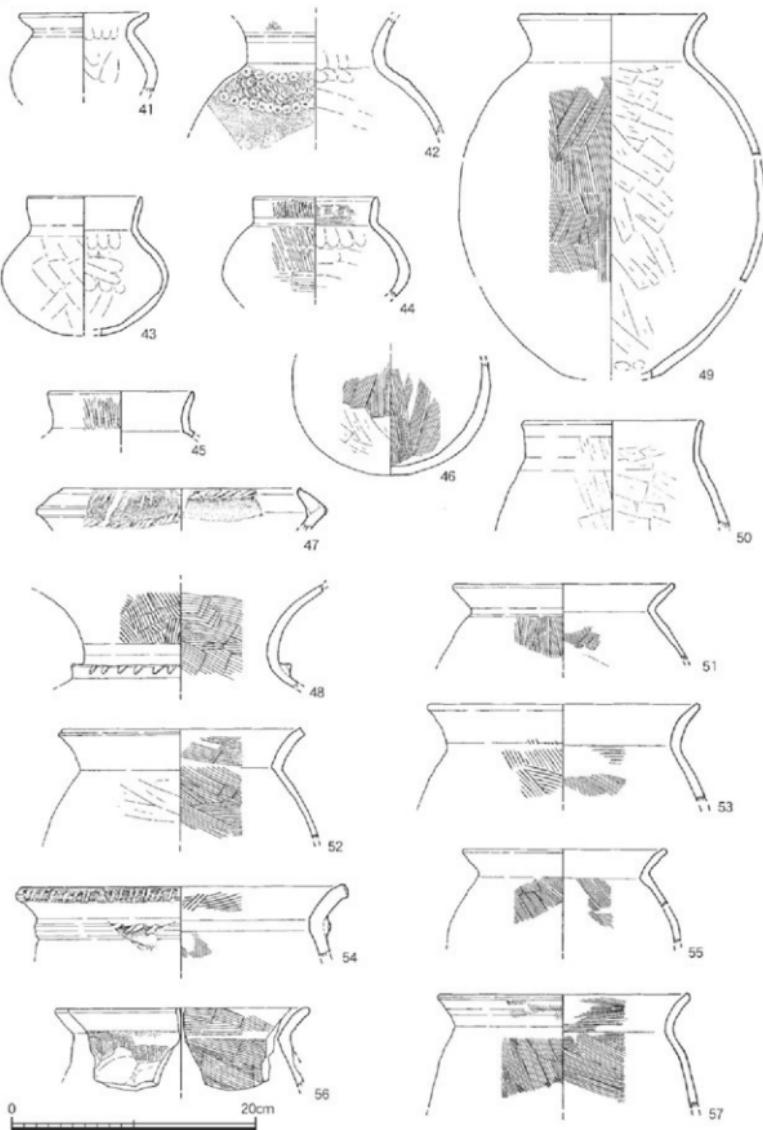


Fig.68 SD818 出土土器③ (1/4)

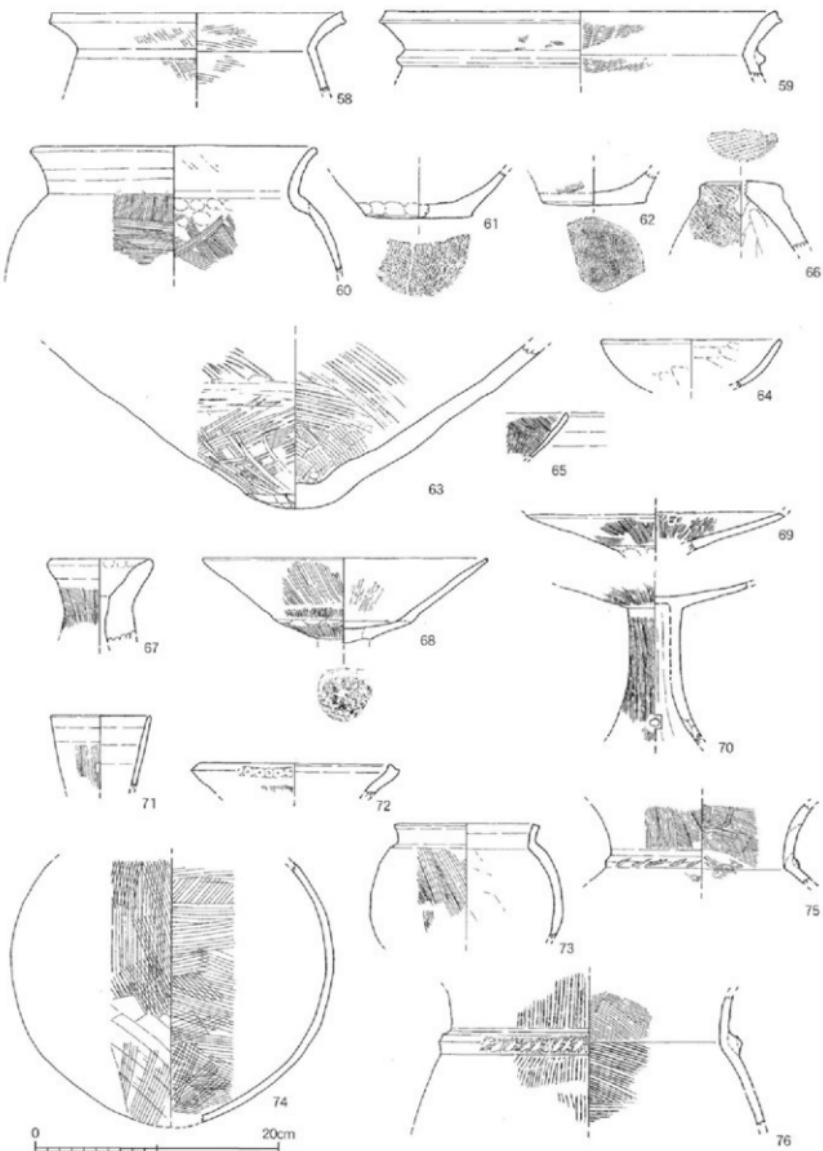


Fig.69 SD818 出土土器④ (1/4)

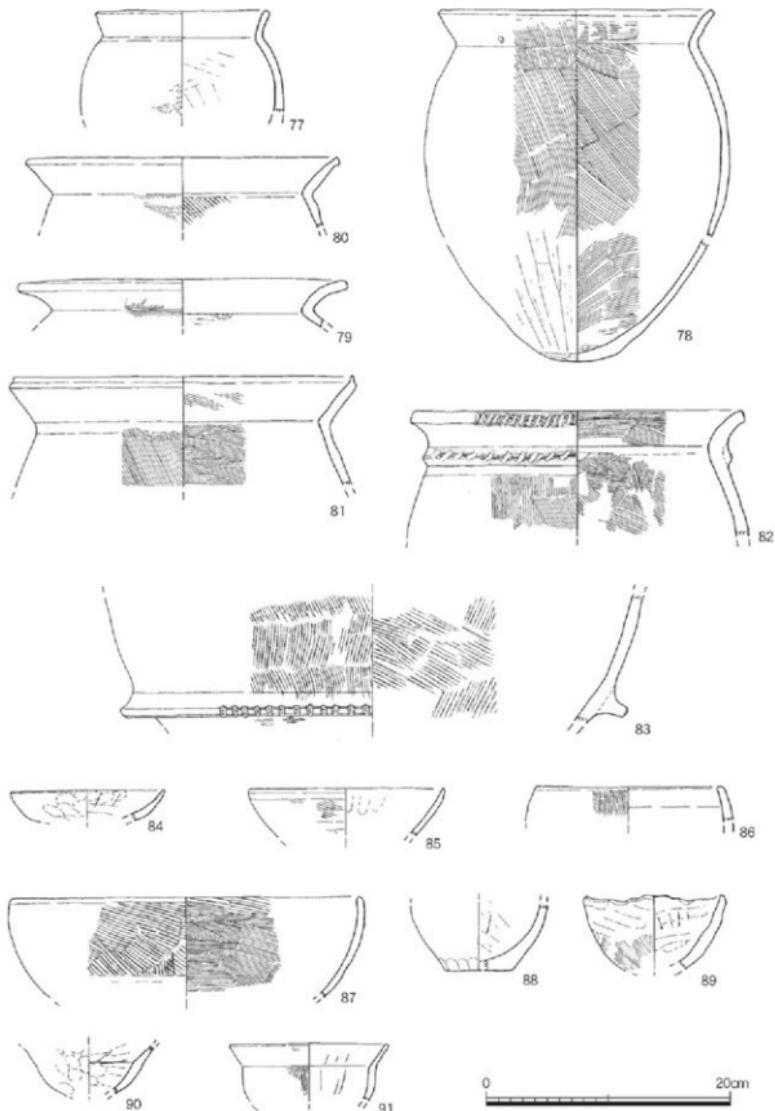


Fig.70 SD818 出土土器⑤ (1/4)

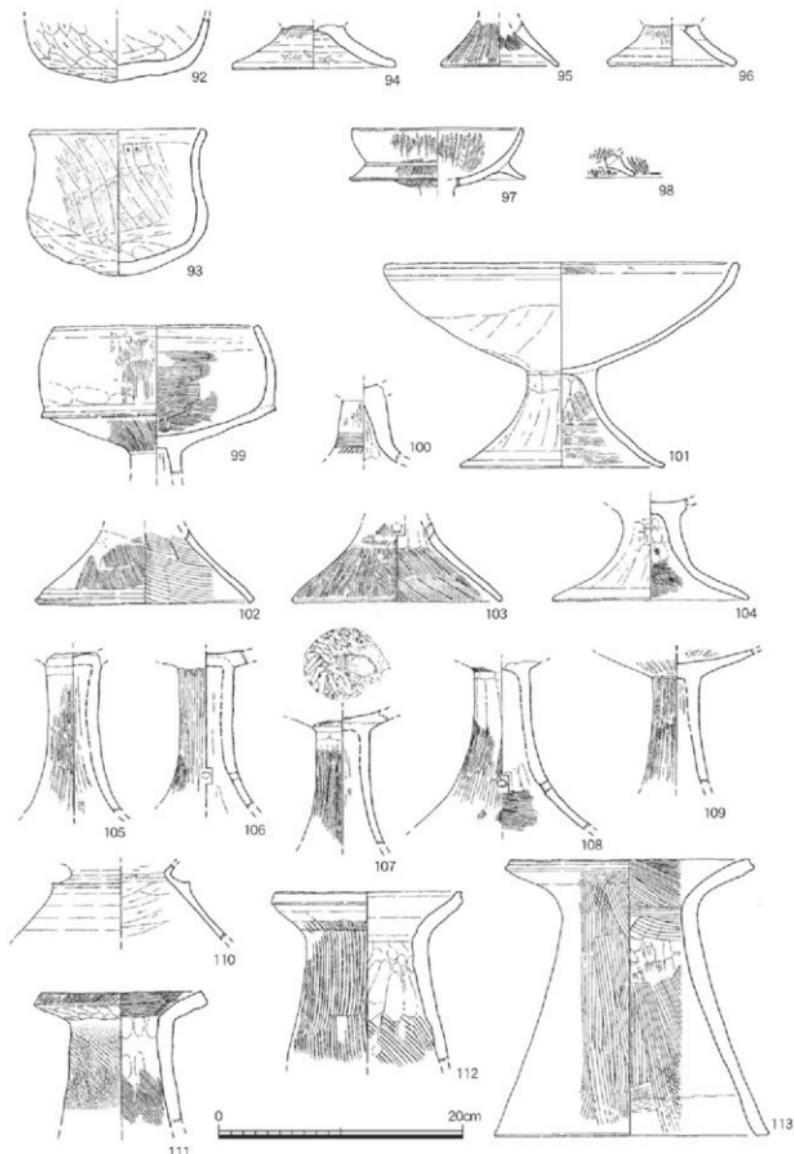


Fig.71 SD818 出土土器⑥ (1/4)

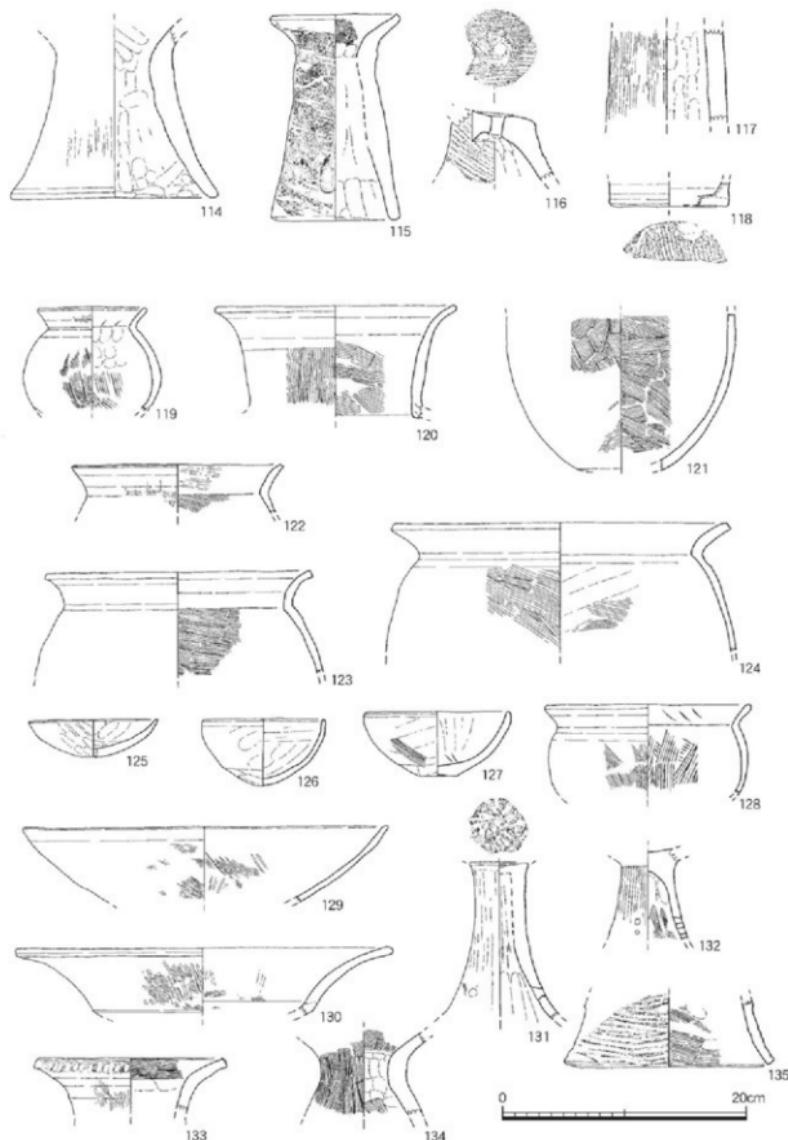


Fig.72 SD818 出土土器⑦ (1/4)

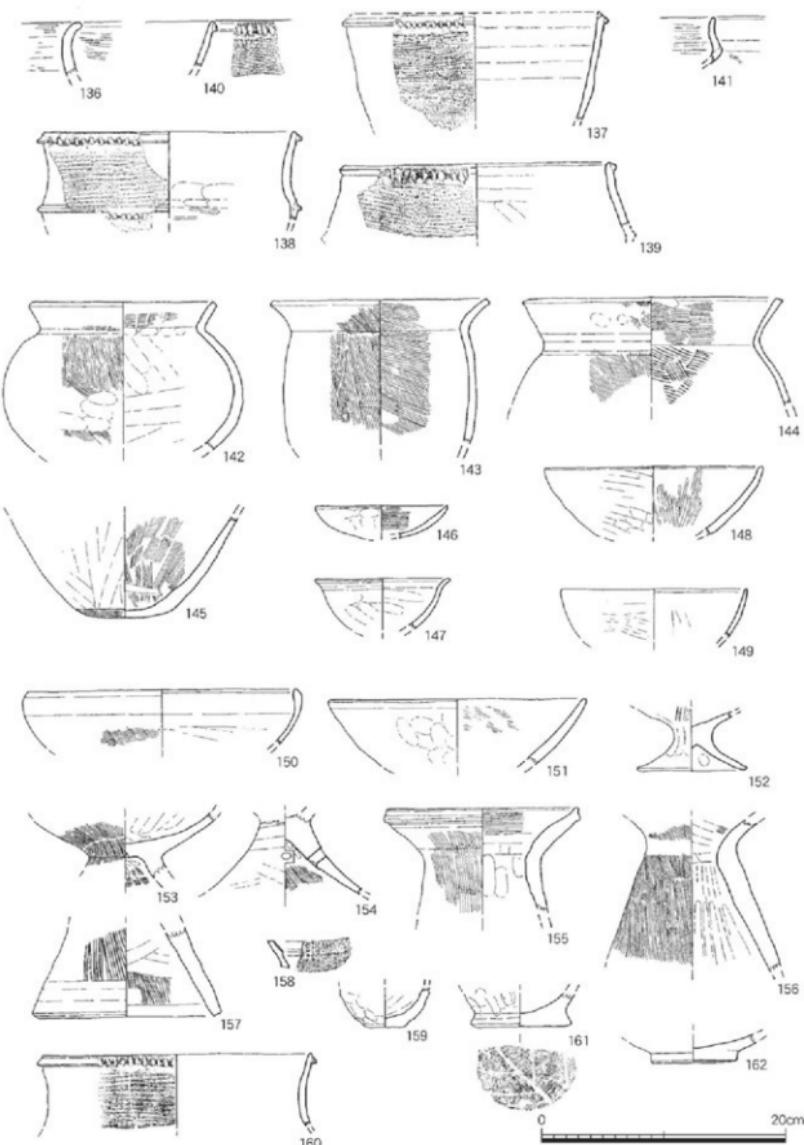


Fig.73 SD818 出土土器⑧ (1/4)

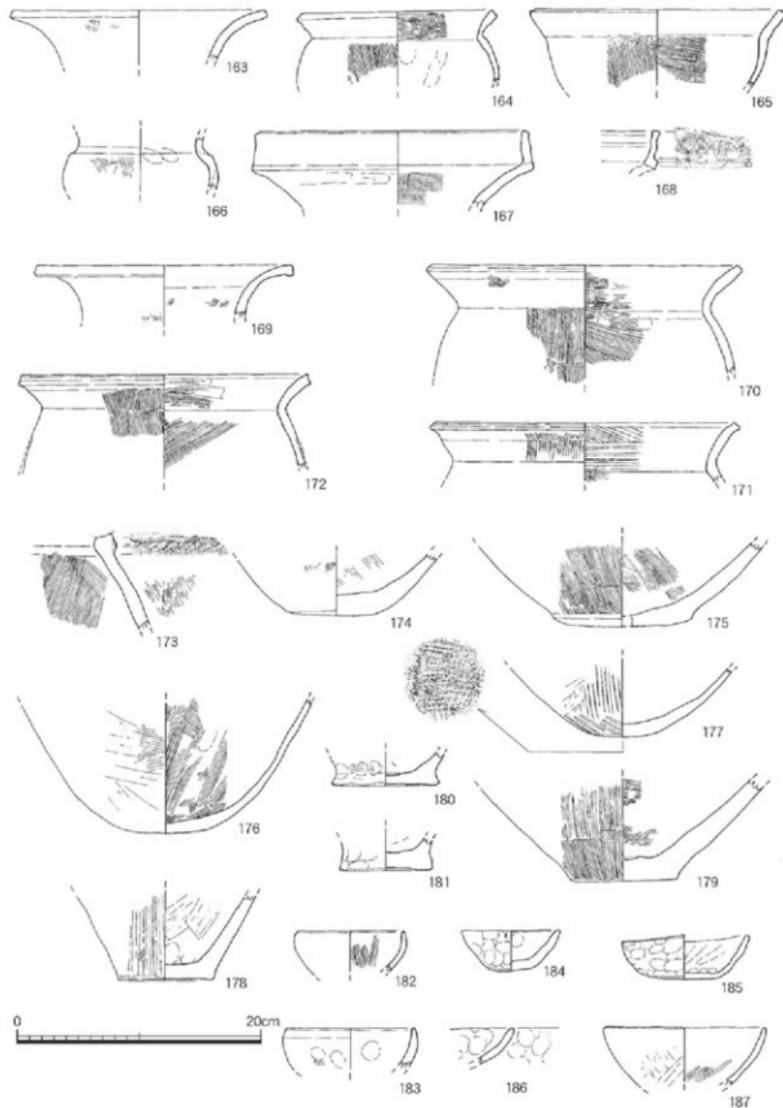
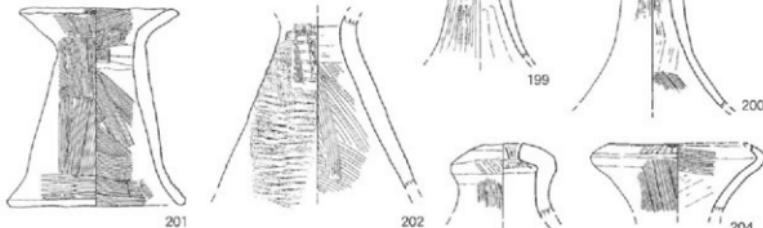
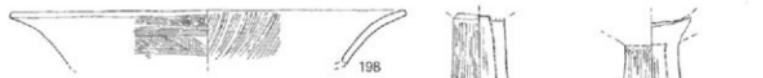
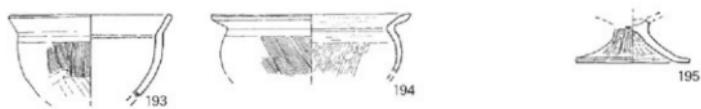
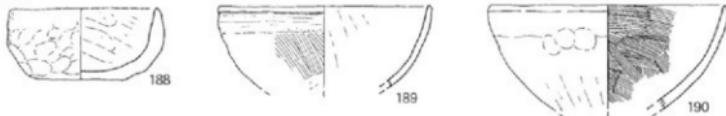


Fig.74 SD818 出土土器⑨ (1/4)

SD818



SD864

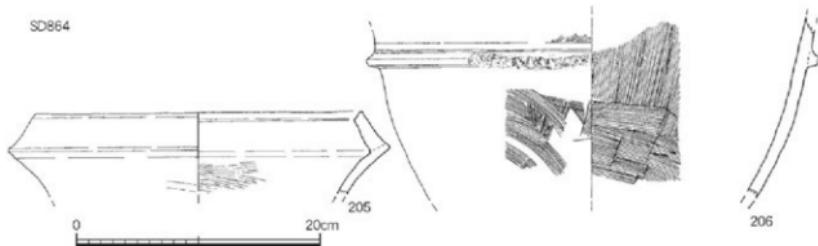


Fig.75 SD818-10・864 出土土器 (1/4)

テの痕が、また、底部には静止糸切り痕が残っている。器面が荒れているものの、この糸切りによる筋は底部の外縁まで続かないことから、外縁には糸切り後にヘラケズリが施されたと思われる。また、胴部の最下部には手持ちのヘラケズリが施されている。色調は外面がにぶい黄橙色(10YR7/3)、破断面が褐灰色(10YR6/1)、底部の表面が褐灰色(10YR6/1)、内面は黒色(N2/)である。胎土には砂粒をほとんど含まない泥質胎土が用いられている。なお、楽浪土城出土の筒杯にはしばしば黒漆が塗られているが、当資料にはその付着痕跡は見られない。

119~140は6区出土。119は小型壺。復元口径9.0cmを測る。胴部外面ハケメ後ナデ、口縁部はハケメ後ナデ、内面はナデでハケメと指押さえ痕がある。外面黒斑がある。120は口縁部片である。復元口径は19.8cmを測る。調整は、頸部内外面はハケメ、口縁部内外面はヨコナデで、外面はハケメ後ナデである。121は壺と思われる底部。内外面ハケメ調整であるが、外面下半はナデを加える。122~124は外反する口縁部の壺で、弥生後期のもの。122~124は復元口径17.4cm・21.4cm・27.8cmを測る。調整は、122は胴部外面ナデで、内面はハケメ、口縁部はヨコナデである。123は、胴部外面は磨滅、内面はハケメ、124は胴部外面ハケメ、口縁部はいずれもヨコナデである。125~128は鉢。125・126は土師器。125は浅い皿型である。復元口径10.6cm、器高3.0cmを測る。指ナデ調整である。126は底が尖り、復元口径は10cm、器高5.5cmを測る。外底ヘラケズリ、その他はナデ調整。外面黒斑がある。

127は平底で、復元口径11.8cm、器高5.3cmを測る。調整は外面ハケメ後板ナデ、内面は板ナデ。128は「く」字形口縁で、復元口径は16.6cmを測る。口縁部ヨコナデ、胴部内外面はハケメである。129~132は高壺。129・130は大形の壺部。復元口径は29.8cm・30.8cmを測る。調整は129が外面ハケメ後ナデ、内面はヘラミガキ、130は外面ハケメ後ヘラミガキ、内面はヘラミガキである。131・132は脚部。131は細く長い筒部で、外面ハケメ後ナデ消し、内面シボリ痕が残る。上面接合面が残り、裾には円形透かし孔がある。132は筒部外面ヘラミガキ、内面ハケメ後ナデ。裾には二段の円形透かし孔が3か所ある。133~135は器台。133は口縁部で、復元口径15.8cmを測る。外面ハケメ、口縁部内面はハケメである。口縁端部には刻目が付く。134は頸部。調整は外面ハケメ、内面はハケメとナデ。134は脚部で、復元口径16.8cmを測る。調整は外面タタキ、内面はハケメ後ナデである。136~141は板付1式から刻目突帯文土器である。136は丹塗壺の口縁部細片。137~140は刻目突帯を持つ壺。復元口径は20.5cm・20.7cm・21.4cmを測る。形態から突帯が口縁部のみのもの137・138と、屈曲部にも刻目突帯を持つもの139・140に分かれる。調整は外面貝殻条痕、内面はナデで、139は内面も貝殻条痕ナデである141は粗製浅鉢の口縁部細片。調整はナデである。

142~165は7区出土。142は「く」字形口縁の扁球気味の壺。復元口径は15.4cmを測る。調整が外面ハケ、内面ナデで、口縁部内面にはハケメを加える。弥生後期である。143~145は壺。143・144は「く」字形口縁で、復元口径は17.4cm・21.0cmを測る。調整は内外面ハケメで、144の口縁部外面はハケメ後ヨコナデする。145はレンズ状を呈す底部片。外面板ナデ上げ、内面と外底部はハケメ調整。146~151は鉢。146~148は古墳時代前期の土師器。146は皿形の鉢。復元口径は10.8cmを測る。外面指押さえで、内面ハケメである。147は緩やかに外反する口縁で、復元口径は11.0cmを測る。内外面ナデ調整。148・149は楕形の鉢。復元口径は17.6cm・15.0cmを測る。148の調整は外面底部がヘラケズリで上半が板ナデ、内面はヘラミガキ、149は内外面ナデである。150は口縁がやや内湾気味に直立する形態。復元口径は21.6cmを測る。調整は外面ハケメ、口縁部から内面はヨコナデからナデである。151は直立気味に開く形態。復元口径は21.0cmを測る。調整は外面ナデ、内面はハケメ後ナデである。152・153は脚台付鉢脚部。152は古墳時代前期のもの。外面丁寧なナデでハケメが残る。153は後期のもので、外面と脚内面はハケメ、内面はナデ調整。154は土師器の高壺。大きく開く脚部で、調整は

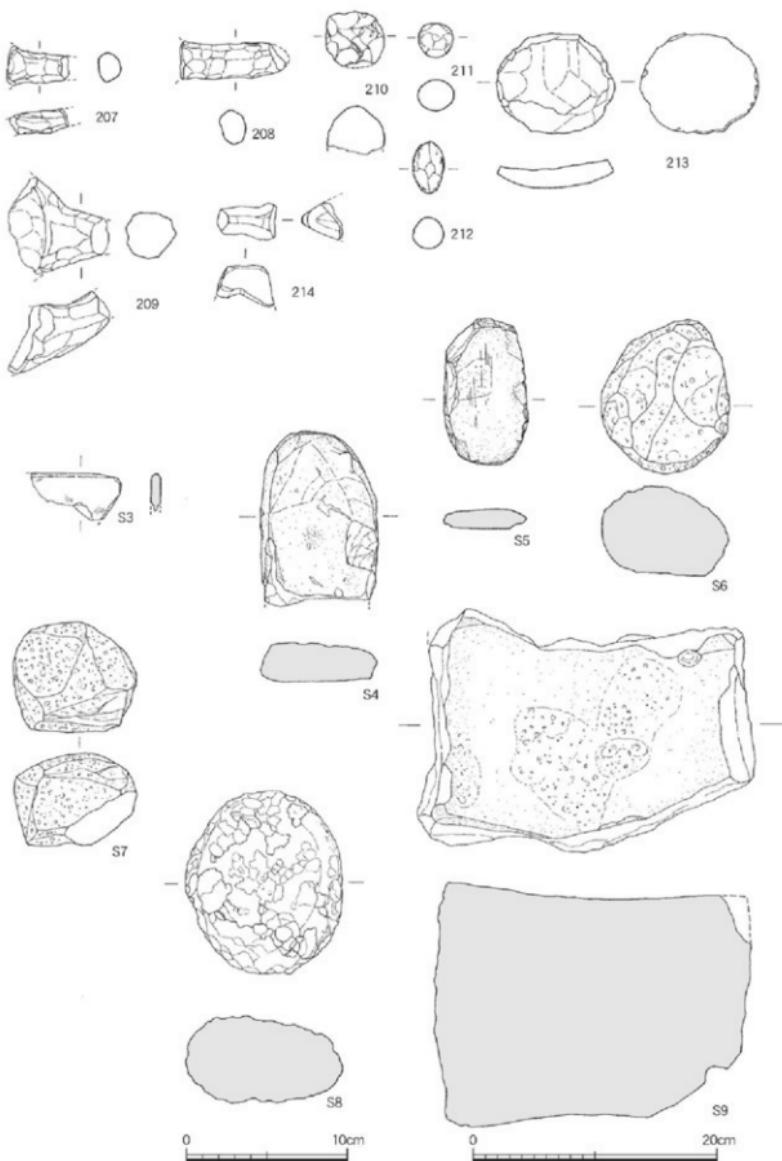


Fig.76 SD818 出土土製品・石器① (1/3・1/4) ※S9は1/4

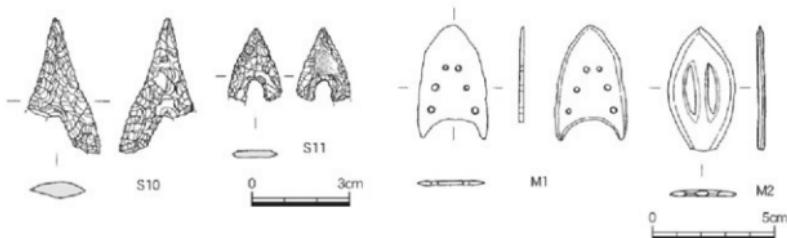


Fig.77 SD818出土石器②・銅器 (2/3・1/2)

外面ナデ、内面はハケメである。据部には径0.8cmの円形透かし孔が4か所ある。154～156は弥生時代後期後半の器台。155は復元口径15.6cmを測る。157は脚部で復元脚径15.4cmを測る。調整は155が外面ハケメ、口縁内面はハケメ、脚内面はナデである。156も外面ハケメ、内面ナデでシボリ痕が残る。157は内外面ハケメで、内面上部はナデである。158は複合口縁壺口縁細片か。縦の刻目のある縦の突帯と備描波状文が付く。159はミニチュア土器鉢。手捏ねで、指押さえ痕が残る。160～162は刻目突帯文土器。160は二重の突帯を持つ刻目突帯文壺。復元口径は20.8cmを測る。161は底部で、底面に木の葉圧痕が残る。162は浅鉢の底部。調整は外面ナデ、内面は磨減する。外面貝殻条痕、内面はナデである。163～165は7-2区出土。163は広口の壺。復元口径は21.0cmを測る。外面ハケメ後ヨコナデ、内面はヨコナデ調整。164・165は鉢。164は「く」字状口縁で、復元口径16.2cmを測る。調整は外面ハケメで、内面は口縁部ヨコハケ、体部内面はナデで指押さえ痕が残る。165は口縁部が外折する形態で、復元口径20.6cmを測る。調整は体部内外面がハケメで、口縁部はヨコナデである。

166～204は8区出土。166～169は壺。166は小型壺。外面ナデでハケメが残り、内面指ナデ調整。167は複合口縁壺で、復元口径は21.0cmを測る。168は弥生時代後期の外来系土器の複合口縁壺。外面はヨコナデ調整で、ヘラによる連続鋸歯文が付く。169は広口壺の口縁部。復元口径20.5cmを測る。内外面ナデ調整で、外面ハケメが残る。170～172は「く」字状口縁の甕。復元口径は24.6cm・24.2cm・23.2cmを測る。調整は内外面ハケメとナデである。173は大形甕の頸部片。扁平な突帯が付き、櫛歯による刻目がつく。内外面ハケメである。174～177は平底から丸みを持つ底部で、弥生後期から終末のもの。調整は173がナデ、175はハケメ、176は胴部ハケメ、底部はナデ、177は外底部平行タタキで、胴部は粗いハケメ、内面はナデである。178・179は中期後半の底部。底径7.7cm・8.4cmを測る。178は外面タテハケメ、内面は板ナデ。179は内外面ハケメで、底部はナデである。180・181は弥生時代前期の底部。180はナデで指押さえ痕が残り、181は板ナデである。182～194は鉢。182・184は口縁が内湾気味に直立する形態で、復元口径は8.6cm・10.4cmを測る。182は外面ナデ、内面ヘラミガキ調整。183は外面ハケメ後ナデ、内面はナデである。外面黒斑がある。184・185は手捏ねのミニチュアの鉢。口径7.9cm・10.0cm、器高3.3cm・3.6cmを測る。いずれも外面は指押さえ痕が残り、内面はナデである。186は口縁が開く皿形の形態。手捏ねで指押さえ痕が残る。187は楕形で底が深い。復元口径は12.6cmを測る。調整は外面ナデ。内面は丁寧なミガキ。188は口縁が直立する器壁が厚手の鉢。復元口径は12.2cmを測る。外面指押さえ痕後ナデ、内面は指ナデ、底部は難なナデ調整。189～192は大形。189は復元口径17.4cmを測る。調整は外面ハケメ、内面はナデ。190は深底で、復元口径は19.0cmを測る。調整は外面下半板ナデ上げ、上半はナデ、内面はハケメ。191は復元口径22.4cmを測る。調整は外面

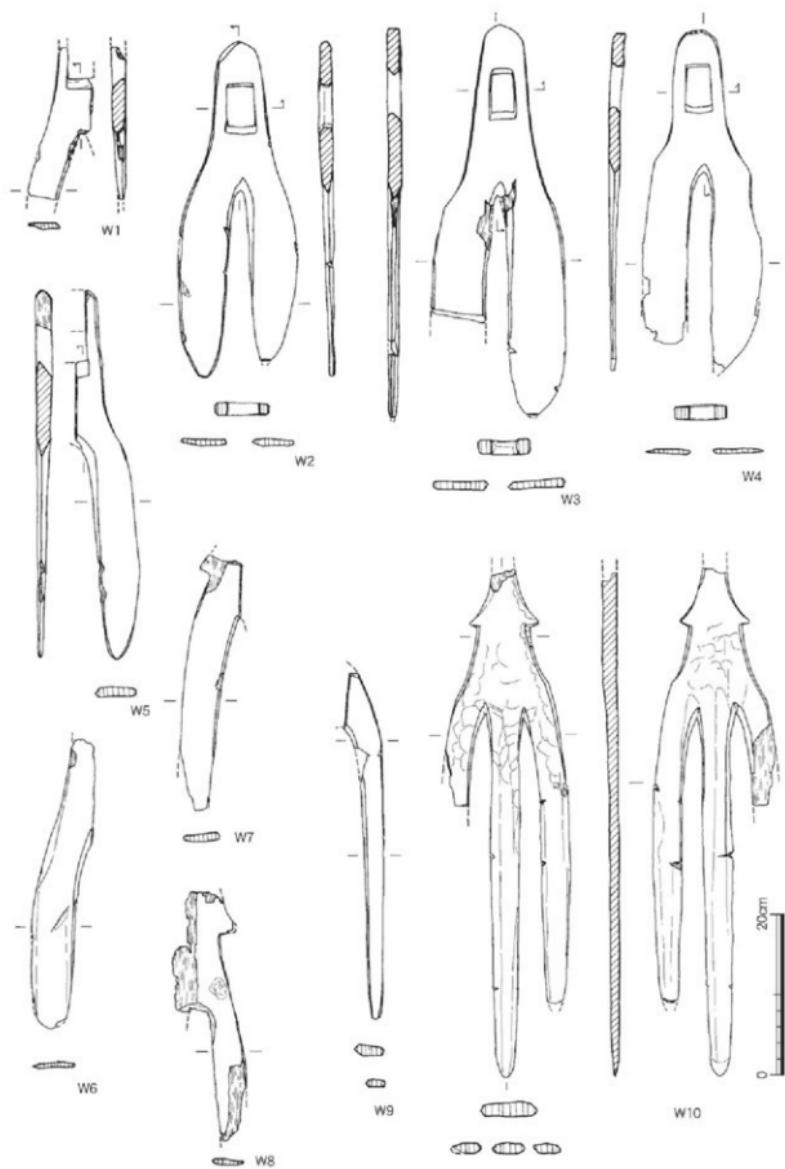


Fig.78 SD818 出土木器① (1/6)

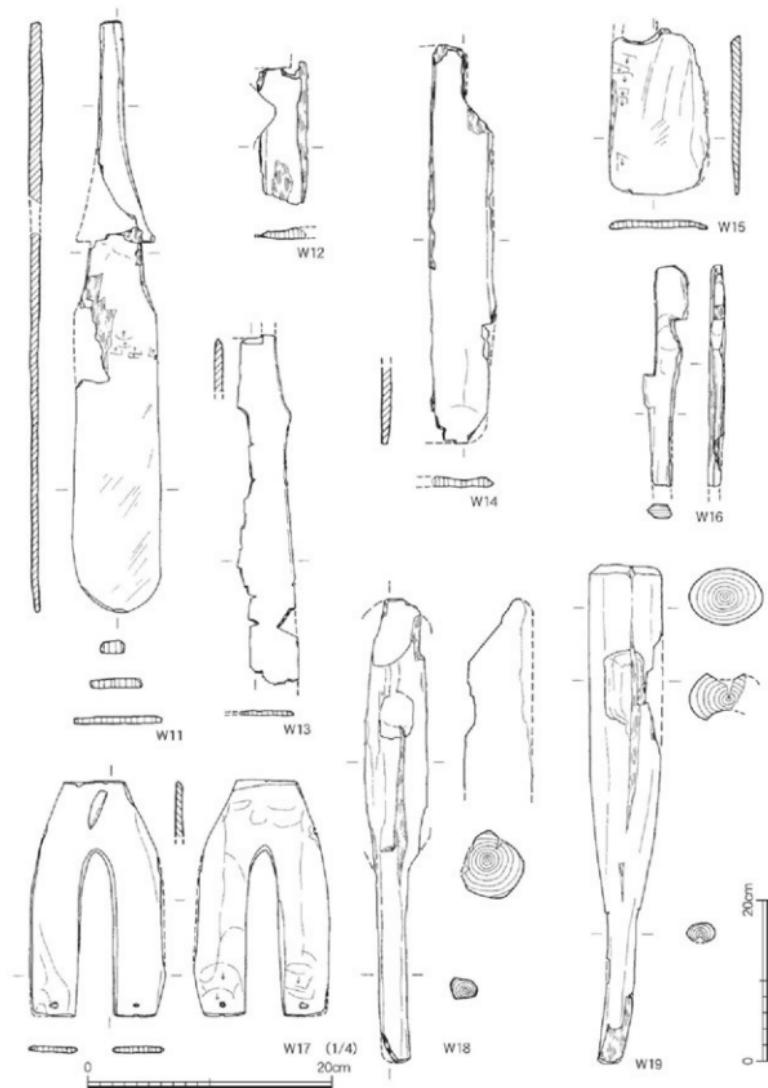


Fig.79 SD818 出土木器② (1/4・1/6)

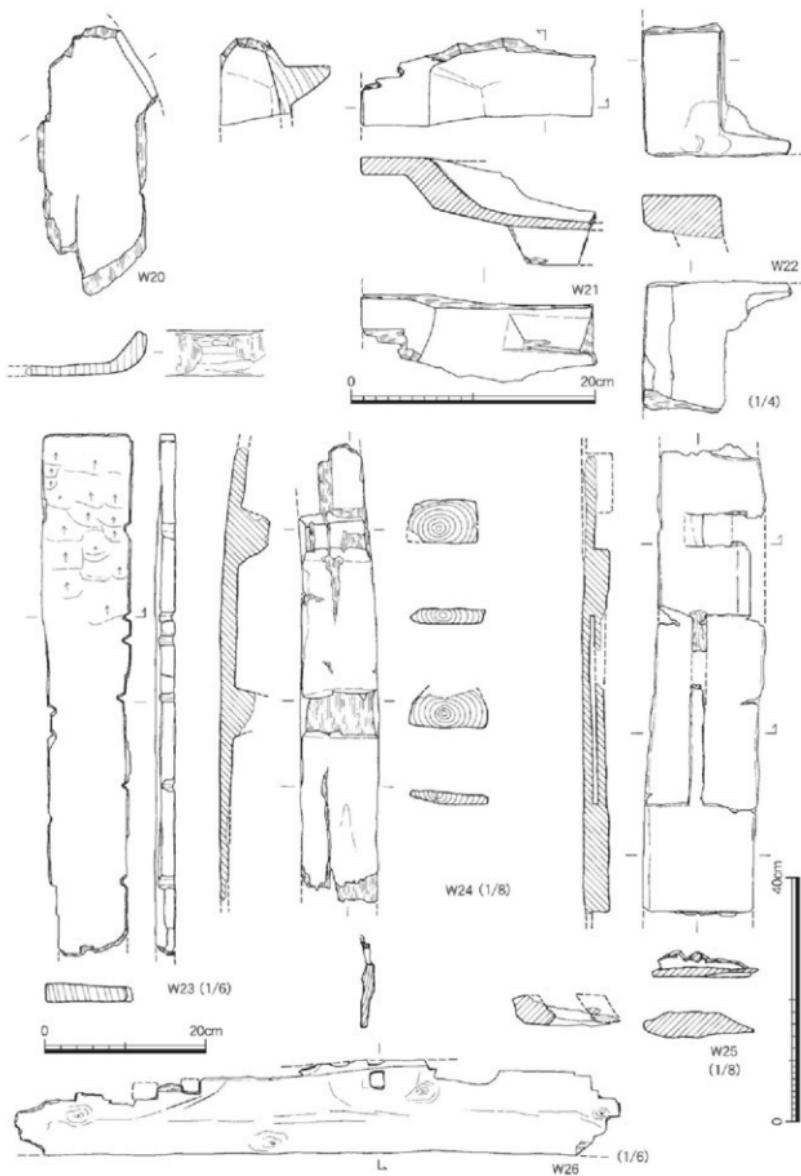


Fig.80 SD818 出土木器③ (1/4・1/6・1/8)

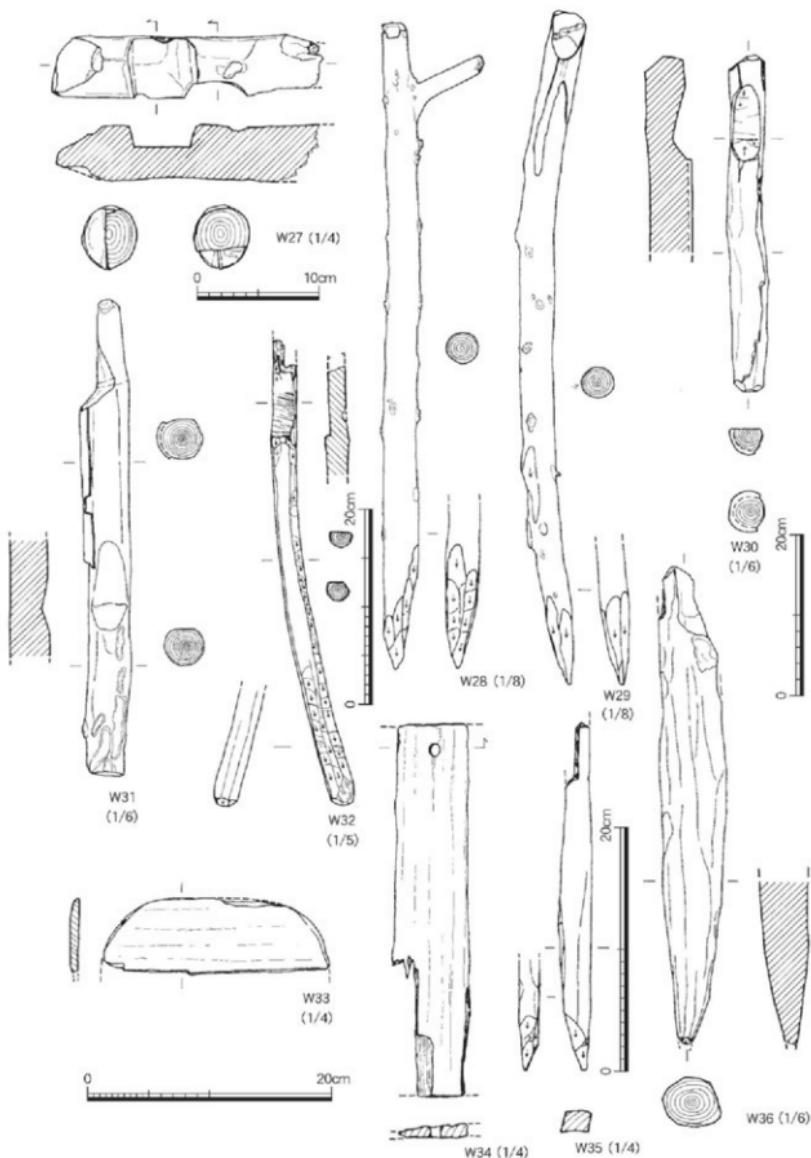


Fig.81 SD818 出土木器④ (1/4・1/5・1/6・1/8)

ハケメ後ヘラナデ、内面はヘラミガキ。192は復元口径27.2cmを測る。調整は外面タタキ後ナデ、内面はヨコハケメ。193・194は口縁が外折する形態。復元口径は13.3cm・16.2cmを測る。調整は、193は体部外面ハケメで下半がヘラナデ、口縁はヨコナデ、体部内面は丁寧なナデ。194は体部内外面ハケメ、口縁部ヨコナデ。195は脚台付鉢の脚部。脚径9.0cmを測る。外面タテヘラミガキ、内面磨きに近いナデ。196～200は弥生時代後期後半の高杯。196～198は浅く広がる杯部。復元口径は27.8cm・27.8cm・32.2cmを測る。調整は196・197内外面ヘラミガキで、197の内面はハケメ後ミガキ。198は外面ハケメ、内面ヘラミガキ。197の胎土は精良。199・200は筒部が細く脚が大きく広がる脚部。調整は外面ヘラミガキ、内面ナデでシボリ痕が残り、200の内面下半はハケメ後ナデ。201・202は器台。201は口縁部が「く」字状口縁。口径は13.0cm、器高16.4cmを測る。調整は外面ハケメで、脚裾外面は平行タタキを加える。202は脚が大きく開く。外面タタキ後上半はハケメ、内面はハケメである。203は中央部が盛上の杏形器台。中央部に3.2×2.6cmの円孔が空く。調整は外面ハケメとナデ、内面はナデ。204は口縁が袋状の形態。口縁外面は平行タタキ、体部はハケメ、口縁部内面はハケメで、内面は板ナデ。

207～209はサジの柄。いずれも指揮さえ仕上げである。207は4区出土で、残存長3.75cm、残存幅2.4cmを測る。208は6区土層ベルト出土。残存長6.45cm、最大径2.35cmを測る。209は5-2区出土。杓の部分が残る。残存長6.15cm、杓部残存径6.0cmを測る。部分的に黒化部分がある。210・211は丸玉で5-1区出土。210は大形の1/2片。径3.5×3.55cmで、指揮さえ仕上げ。211は径2.0×2.1cm、厚さ1.9cmを測る。指揮さえ後丁寧なナデ仕上げ。212は5-2区出土の投弾で、全長3.15cm、最大径2.0×1.9cmの円形の断面。丁寧なナデ仕上げ。胎土は精良。213は5-1区出土。土器片利用の円板。径6.2×7.05cm、厚さ0.6～1.2cmを測る。ナデ調整である。214は家形土製品の屋根の一部か。残存長3.4cm、残存幅2.2cm、残存高2.5cmを測る。調整は丁寧なナデ。

S3は5-2区出土の石臼丁。残存幅5.5cm、厚さ0.6cmを測る。丁寧なケンマ仕上げで、石材は粘板岩。S4・5は磨石。S4は7-1区出土。形状は橢円形状で、下小口は欠損。残存長10.8cm、最大幅7.1cm、厚さ2.4cmを測る。上下両面粗い磨り、上小口は磨り、痕跡側面は敲打痕が残る。石材は火成岩系。S5は5-2区出土。扁平な石斧の可能性もある。長さ9.0cm、最大幅4.9cm、最大厚1.2cmを測る。上下両面研磨である。石材は緑泥片岩か。S6・7は敲石。S6は5-1区出土。長さ9.45cm、最大幅7.7cm、最大厚5.7cmを測る。粗削の角礫の全面に使用の敲打痕が残る。S7は5-2区出土。径は6.85×7.6cm、最大高5.7cmを測る。粗削の角礫の全面に使用の敲打痕が残る。石材は緑泥片岩か。S8は円形の扁平な磨石か敲石。長さ11.2cm、幅9.6cm、最大厚5.3cmを測る。使用痕が激しく凹凸がある。石材は花崗岩であるが風化がひどい。S9は作業台石兼砥石。長さ27.1cm、最大幅19.9cm、高さ19.9cmを測る。側面は粗削成形面で、上面は擦られ砥石に使用されたのか、また敲打使用痕も残る。石材は砂岩。S10・11は黒曜石の石鎚。1区・4区出土。基部は凹基で、S10は大型で、鎚身長4.15cm、残存幅2.2cm、厚さ0.5cmを測る。全面丁寧な二次調整を加えている。S11は鎚身長2.2cm、幅1.6cm、厚さ0.2cmを測る。縁辺丁寧な二次調整を加えている。

M1・2は銅鏡。いずれも8区下層出土。M1は凹基で、鎚身長4.7cm、最大幅2.8cm、厚さ0.2cmを測る。鋳造成形で、表面に6か所径0.2cmの円孔が空く。円孔は対称的に配置されている。縁辺の調整は雑で、刃は片側を研ぎ出す。M2は柳葉形で、鎚身長5.1cm、最大幅2.6cm、厚さ0.25cmを測る。中央に円弧状の透孔が2か所空く。鋳造側面は研ぎ出しているが、透かし部分には鋳造時の痕跡が残る。

W1～17は農具。W1～6は又鎌。いずれも刃部は二叉である。長方形の柄壺が付く。W1は刃と方

形の柄壺の一部が残る。残存長18.6cmを測る。表面は削り調整。W2は完存で、最大長41.1cmを測る。表面は削り加工で、刃部内側は一部丁寧な加工。右側の刃はやや摩り減る。W3・4は左刃が一部欠損。残存長48.0cm・41.6cmを測る。表面は削り加工で、刃部内側は丁寧な加工。W4は表面の劣化は著しいが、全面削り加工である。W5は柄壺と右刃が残る。残存長44.7cmを測る。W6は刃の一部で、残存長35.4cmを測る。柄壺孔は確認出来なかったが、形態から鍬とした。傷みはあるが削り加工である。W7は組み合せナスピ形の又鍬。残存長31.4cmを測る。表面は削り加工。樹種はW4以外コナラ属アカガシ科である。W8・11はナスピ形の三又鍬。W8・9は刃の一部。三又刃と思われる。残存長25.4cm・42.2cmを測る。W10は両側の刃を欠損する。基部の両側面に作り出し部を持つ。残存長62.1cmを測る。両側に削り加工が顕著に見られる。いずれもコナラ属アカガシ科である。W11はナスピ形の平鍬。残存長72.6cmを測る。削り加工で、一部顕著に加工痕が見られる。刃先も削り出す。樹種はコナラ属アカガシ科である。W12も一本の平鍬の一部か。残存長17.5cmを測る。欠損が著しい。W13は大形の平鍬の一部。柄壺の一部が残る。残存長42.5cmを測る。全体に傷みがひどい。いずれもコナラ属アカガシ科である。W14は平鍬に一部か。残存長48.9cmを測る。着装孔が見られず組み合せ式の鍬か。表面は削り調整。樹種はツバラジイである。W15は平鍬か泥除けと思われるが明確でない。残存長20.5cmを測る。上端に孔の一部が残る。表面に削り加工痕が見られる。W16は泥除けのつかない農具柄の一部。残存長26.9cmを測る。表面は削り加工である。W15・16はコナラ属アカガシ科である。W17は又鍬の転用品。欠損品を再利用する。刃先に穿孔し、基部は削り再加工を行う。コナラ属アカガシ科である。W18・19は敲打具。残存長56.8cm・61.4cmを測る。W18は傷みがひどく、原形が分かりにくい。杵の一部の可能性がある。W19は杵の転用品。表面は傷みがひどく、加工は不明。樹種は、W18はコナラ、W19はツバキ属である。W20は容器の皿か。楕円形状の皿のようで、残存長23.0cm、残存幅14.4cmを測る。表面の加工は削りで、刃物痕が残る。樹種はサクランボである。W21は脚付き容器の一部。外底部の片隅には長軸方向の脚が付く。調整は丁寧な削り加工である。W22は槽の一部。調整は削り加工。樹種はクスノキである。W23は長方形の目盛り板(コモゲタ)。残存長64.3cm、幅11.2cmを測る。表面は削り加工で、両側面に欠き込みが10cm幅で施される。柾目のスギである。W24は梯子の一部である。残存長75.0cm、最大幅12.8cm、最大厚6.2cmを測る。足かけ部が30cm間隔で二段残る。足踏み角度は113度、125度である。サカキの芯持ち材を使用している。調整は削り加工と思われるが、傷みがあり詳細は不明。W25・26は長方形の板材で、傷み・欠損が著しいが建築材と思われる。W25は壁材と思われ、残存長77.2cm、最大幅18.5cm、最大厚5.0cmを測る。中央部は両側を欠き込み、中央部分を長軸方向の中空持ち手状に作り出す。上端に一辺約3cmの方形の貫孔を持つ。孔はナメに開けられる。樹種はツバラジイである。W26は残存長98.4cm、最大幅16.2cmを測る。上側面に3か所一辺が1.2cmから2.0cmの方形か長方形の孔がある。板目のモチノキ属である。W27は垂木と思われる炭化した加工材。芯持ち材で残存長21.9cm、最大径5.3×4.6cmを測る。左端はナメの削り、右端は欠損する。上面と下側面に欠き込みがある。上面は5.0×5.5cm、深さ1.5cmの方形状、下側面が丸みを持つ。組あわせの部材の一部と思われる。W28・29は芯持ちの杭材。W28は芯持ちの杭で、全長105.8cm、径約6cmを測る。下端は削って尖らす。上部は枝を1か所又状に残し、先端は加工を加える。上端は潰す。杭ではなく、横木を架けるのに利用したものであろう。W29は全長110.4cm、径4.5~6.0cmを測る。先端は削り尖らす。上端はナメ削り。樹皮が一部残る。樹種はいずれもスギである。W30は棒状の加工材。残存長41.4cm、最大径4.7×5.0cmを測る。上端と上面に削り加工を加える。上面には長さ9cmに亘って両側から斜めに削り込む。表面には樹皮が残る。樹種はコナラ属コナラ節である。W31は加工材で、残存長58.6cm、最大径5.7×5.0cmを測る。上端部

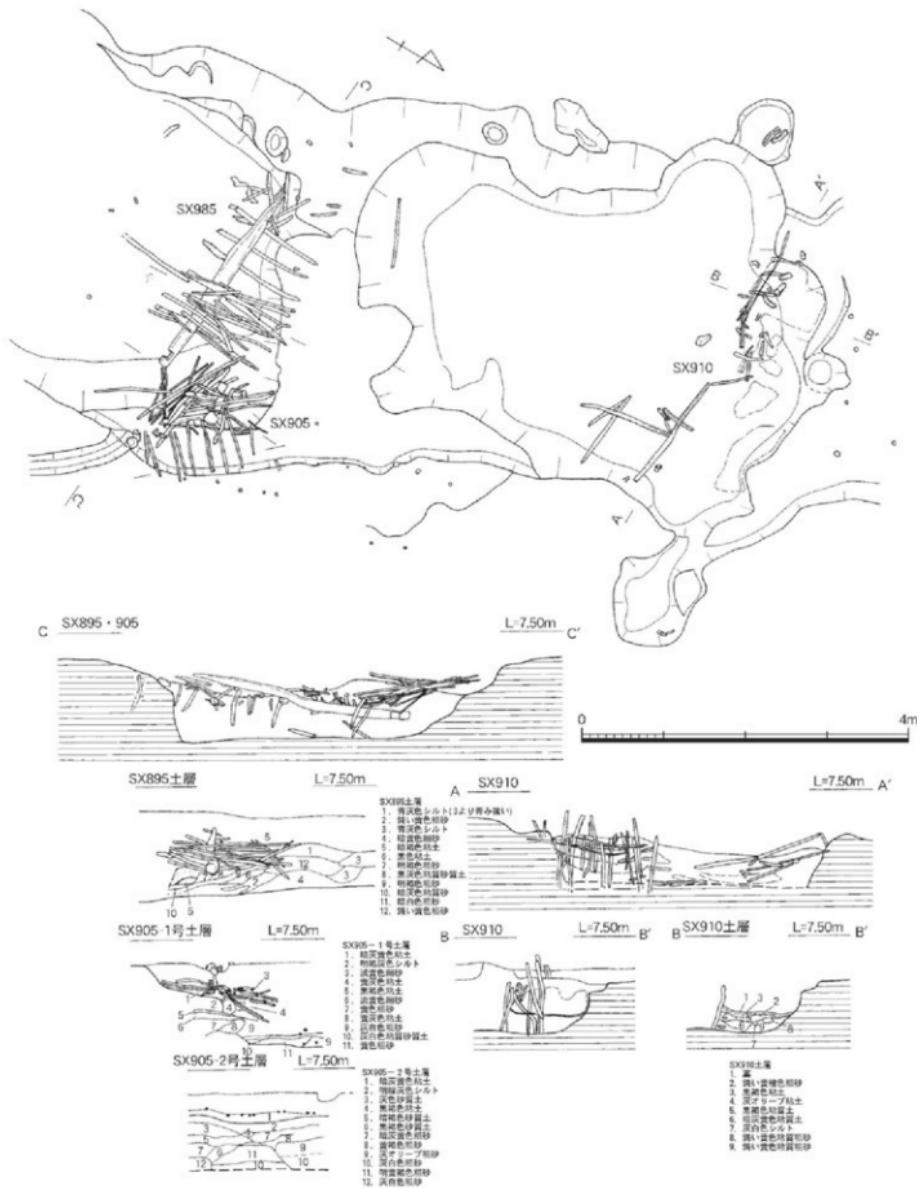


Fig.82 SD818 内壁 SX895・905・910 (1/60)

に長さ13cmの欠き込み、側面に長さ10cm程の欠き込みを入れる。部分的に樹皮が残る。横架材か。芯持ち材である。W32は棒状の加工材。残存長47.5cm、径 2.0×2.4 cmを測る。上部は浅く底面が平坦になるように欠き込み、下部から側面は削り加工を加える。表面の一部に刃物痕が残る。芯持ちのコナラ属アカガシ亜属である。W33は円形の板材の一部。残存長径18.3cm、残存幅7.9cmを測る。柾目とのスダジイである。W34は長方形の板材。長さ30.5cm、幅6.0cm、厚さ1.1cmを測る。上部に径0.8cmの円孔があく。表面は削り加工。樹種はスギである。W35・36は杭。W35は断面方形の割材を利用し、残存長57.0cm、径 4.4×3.5 cmを測る。下端を削って尖らす。樹種はツブライジである。W36は残存長58.5cm、径 6.5×8.4 cmを測る。下部を削って尖らす。芯持ち材で、樹種はカキノキ属である。

SX818 内埋状遺構

SX895・905・910 (Fig82, PL.42・43)

SX818 の G-26区で検出した遺構で、北側に SX895・905 が、南側に 5m 程離れた所で SX910 を検出している。SX910 より SX895 の残りが良く、SX910 の廃止後に SX895 が構築されたと思われる。

SX895 は幅2.9mの規模で、側面に欠き込みがある長さ約2.6m、最大径0.2mの建築材を横木に用い、それに直交するように長さ1.2~1.5m程の杭を青灰色シルト層に打ち込んでいるが、いずれも北側に倒れしており、南からの流れを示している。杭は横木の上下にあり、疎らであることから、残りは良く

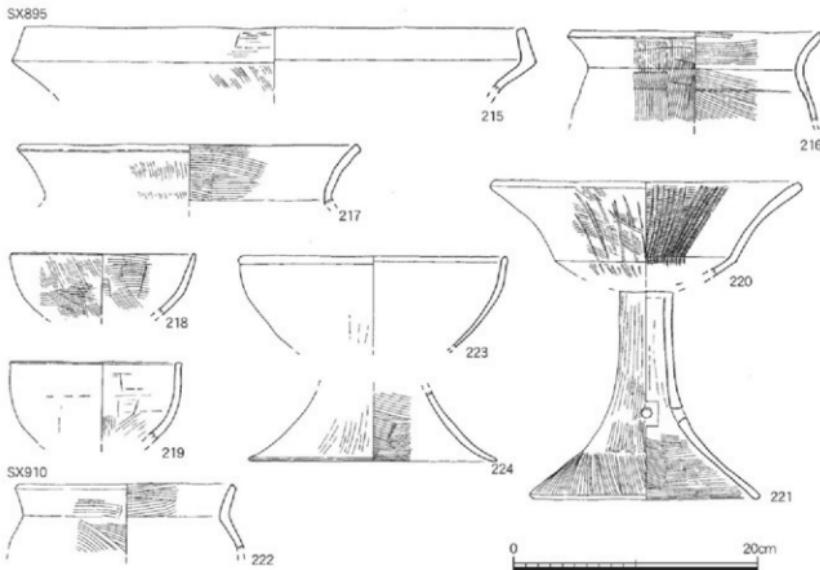


Fig.83 SX895-①・905-①・910 出土土器 (1/4)

下月限C遺跡

SX895



SX905

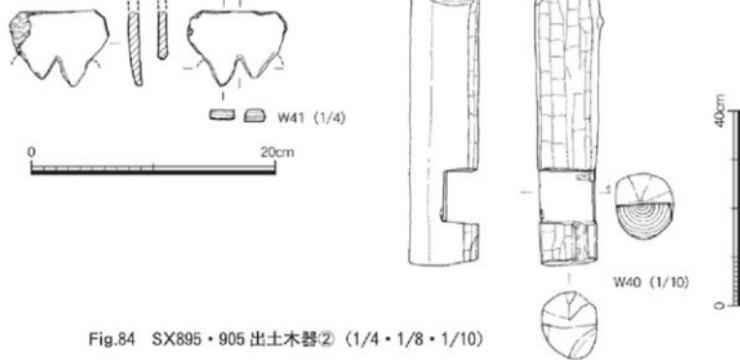


Fig.84 SX895・905 出土木器② (1/4・1/8・1/10)



Fig.85 SX905 出土木器 (1/8)

ない。この堰の南側はテラス状に高くなり、その南側は落ち込む。テラス部より堰北側は0.6m程深くなる。

SX905はSX895の西側壁際で検出したもの。上部に壁に直交して並行する長さ0.6~0.8mの杭とその下に流れに沿って北に固まって倒れていた長さ1~1.4m程の杭群がある。横木などはない。検出具合からSX895と一連のものと思われる。

SX910は確認幅3.8mを測り、ほぼ溝幅一杯直交する堰跡である。横木と溝底の粗砂層まで打ち込んだ継杭から構成される。横木はSX895に比べて細い。残りは東側が良く、西側は横木のみで継杭はほとんど残っていない。この継杭はほぼ直立する。杭の長さは1m程である。この堰の南側には藁層が薄く面的に残っていた。藁の下は粘土層となる。この堰の南側もテラス状に高くなる。堰の北側はテラス部より0.6m程深い。

出土遺物 (Fig.83~85、PL.92・96) 215~221はSX895出土。215は複合口縁壺。口縁部細片で、復元口径約40cmを測る。調整は外面ハケメで、口縁外面はヨコハケメ後ナデ、内面はヨコナデ。216・217はいずれも弥生時代後期の甌口縁部。216は1/4片で、復元口径は20.0cmを測る。調整は外面ハケメで、外面には工具痕が残り、ススが付着する。また内面には粘土帶の痕跡の段が残る。217は口縁1/12片で、復元口径27.8cmを測る。調整は外面ハケメで、ヨコナデを加える。218・219は鉢。体部が内湾して立上る形態。218は口縁1/8片で、復元口径15.0cmを測る。調整は外面ハケメ。胎土は精良で、角閃石や雲母を僅かに含む。217は底が深い形態。1/6片で、復元口径13.0cmを測る。調整はハケメ後ナデで、外面ハケメ工具痕が残る。胎土に砂粒を多く含む。外面ススが付着する。220・221は高环。同一個体の可能性はあるが、別々に報告する。220は口縁部1/8片で、復元口径25.2cmを測る。調整は外面ハケメ後難なタテヘラミガキ。口縁部ヨコナデで黒斑がある。221は脚部1/8片で、脚径16.4cmを測る。調整は筒部外面ハケメ後ヘラミガキ、裾部内外はハケメ、筒内面はナデでシボリ痕残る。裾部に径0.9cmの円孔が1か所ある。胎土は220が精良。焼成はいずれも良好。

222~224はSX910出土で、222は粗砂層、他は西側砂層出土。222は甌口縁部1/8片で、復元口径17.8cmを図る。調整は外面ハケメで、内面はハケメとナデ。223は鉢口縁1/12片。復元口径は21.8cmを測る。口縁端部が丸みを持ち、外面僅かに段を持つ形態。調整は内面丁寧なナデかミガキ、外面は磨滅がひどく不明であるが、下半部は工具によるナデを加える。224は高环脚部。1/12片で、復元脚径20cmを測る。調整は外面タテヘラミガキ、内面下程細かいハケメ。胎土は精良。焼成はいずれも良好。

W37~40はSX895出土。W37は農具の一部。残存長28.1cm、幅7.9cmを測る。柄端が残る。孔の角度は42度である。柵目のコナラ属アカガシ亜属。W38・39は樹皮が残る杭材の一部。W38は残存長57.2cm、直徑2cmを測る。先端は片側を加工している。W39は全長114.6cm、最大径5.4×4.5cmを測る。表面には一部樹皮が残るが、先端4面の加工。上端はV字に削り加工する。W39の樹種はコナラ属

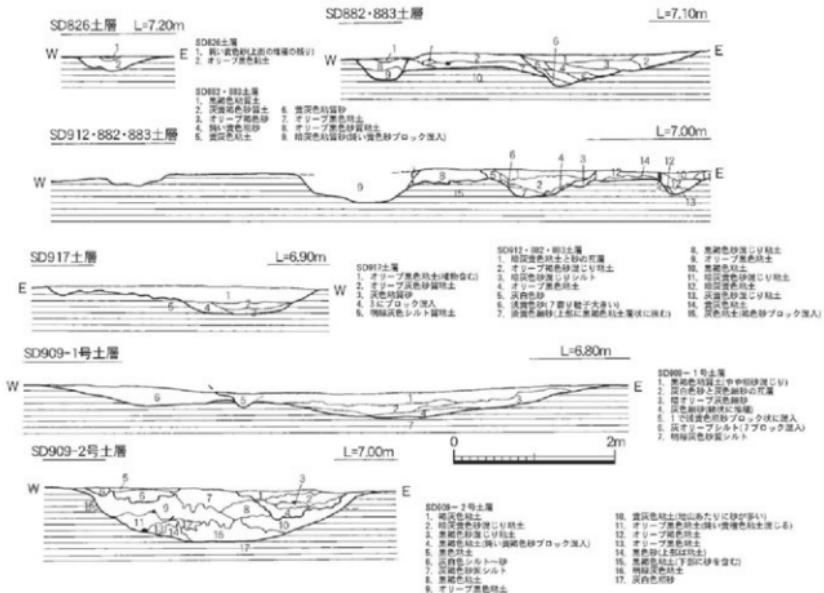


Fig.86 SD826・882・883・909・917 土層 (1/60)

アカガシ亞属。W40は大型の建築材。全長249.7cm、最大径14.5×13.5cmを測る。下端は削って尖らせ、上部は幅11.0cm、長さ11.3cm、深さ6.3cmに亘って欠き込みを行い、部材のかませを作る。表面の一部はケズリ加工を行う。樹種はクスノキ属である。

W41・42はSX905上層黒色粘土出土。W41は農具エブリの歯の一部。樹種はコナラ属アカガシ亞属である。W42は下層出土。芯持ち材の杭で、全長138.0cm、径2.4~3.6cmを測る。先端は削り加工である。

SD826 (Fig.86)

調査区北東側で検出した蛇行して北流する小溝で、D-28区で消滅する。SD818を切っている。溝埋土はオリーブ黒色粘土で、流木など植物遺物を含んでいた。溝の上下・左右には水田面の畔の痕跡と思われる酸化鉄分が集積する部分や、粗砂が堆積する部分があり、水田に伴う水路であった可能性がある。

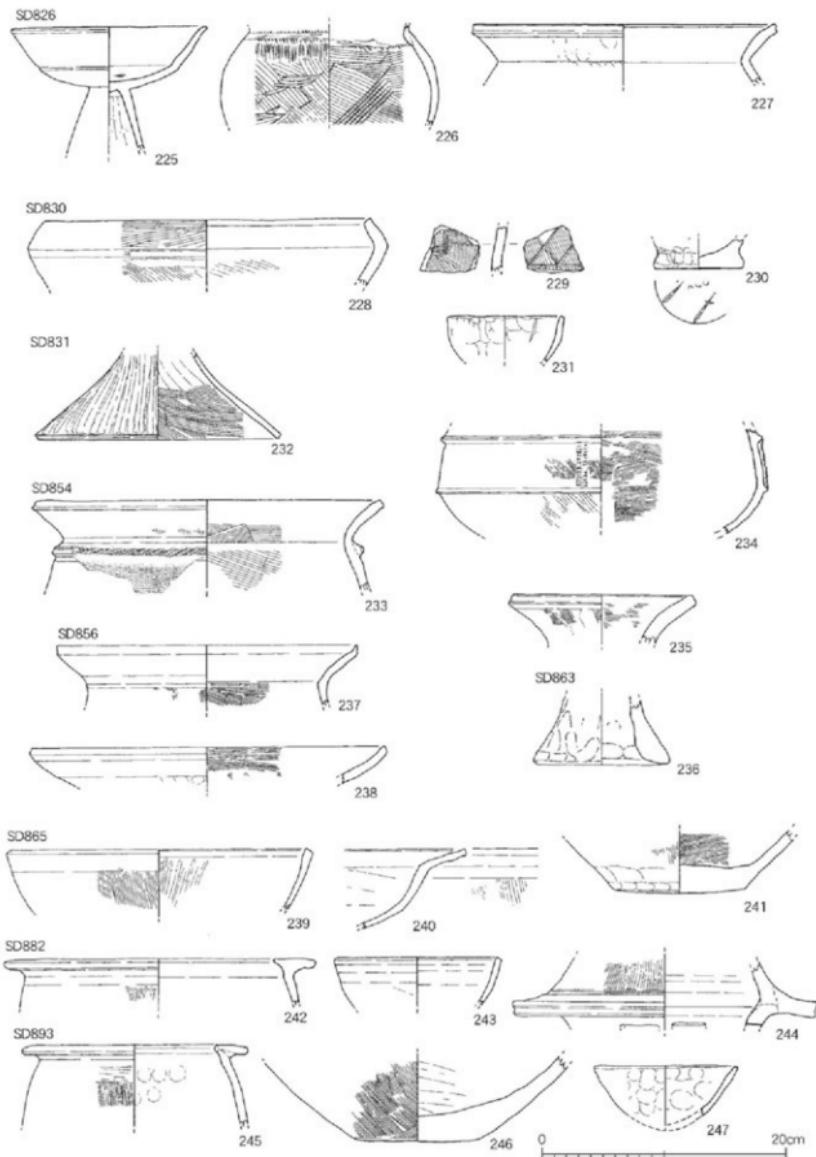


Fig.87 SD826・830・831・854・856・863・865・882・893 出土土器 (1/4)

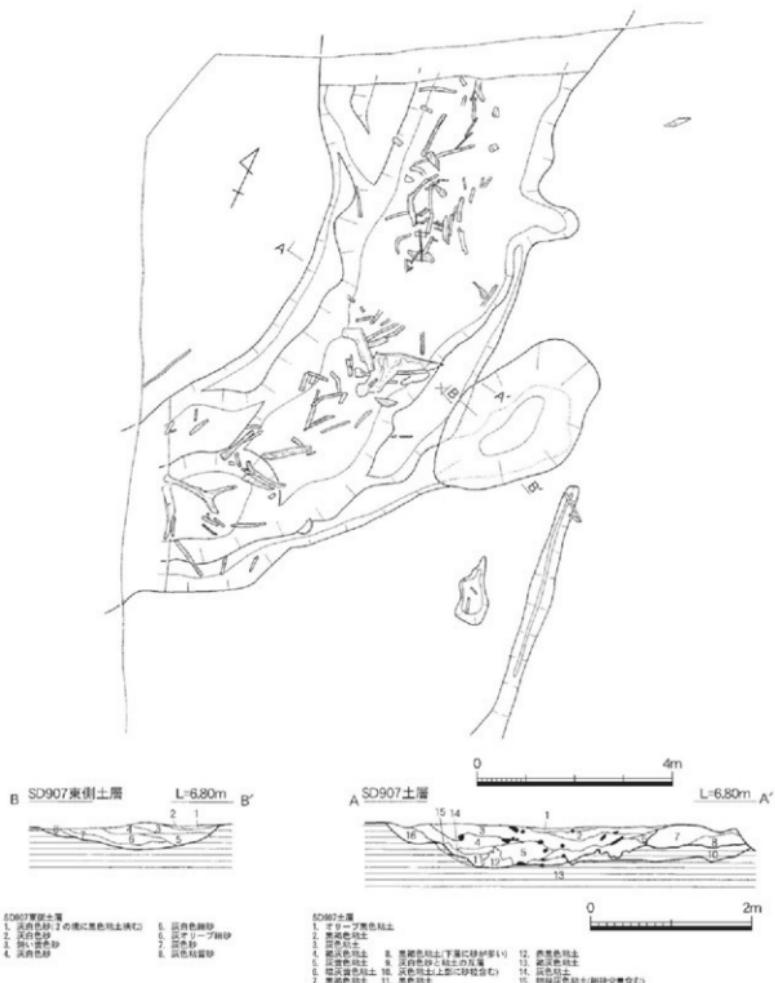


Fig.88 SD907と土層 (1/100・1/60)

出土遺物 (Fig.87・95、PL.90・95) 弥生土器や古墳時代の土師器、木製品などが出土している。量としては多くない。

225は土師器で5世紀前半代の高环。環部の体部と底部の境に段を有す形態。口径は15.8cmを測る。調整は外側ナデでススが付着し、脚部内面はヘラケズリである。226・227は弥生時代後期後半。226は壺胴部。調整は外側粗いハケメで頸部から口縁部はヨコナデする。227は甌口縁部で、復元口径21.4cmを測る。調整は外側ハケメ後ヨコナデ、内面はナデで、外側にはススが付着する。

W43は農具の平鍬の一部で方形の柄轄が残る。残存長18.5cmを測る。表面は削り加工。柾目のコナラ属アカガシ亜属材である。W44は削り貫きの容器の一部。残存長48.2cm、残存幅17.8cmを測る。表面は削り加工を行う。樹種はクスノキである。

SD864

SD818で検出した壺 SX905 の上層で検出した溝で、SD818の一部と思われるが、調査時番号を付しているので、別として報告する。

出土遺物 (Fig.75) 205は複合口縁壺口縁。復元口径は26.8cmを測る。調整は外側ナデから口縁ヨコナデで、内面ハケメが残る。206は甌底部で1条の刻目突帯が巡る。調整は外側ハケメである。

SD830 (PL.35・36)

南側高所部で検出した東西方向に流れる小溝で、SD829を切る。西側はSD818東岸までである。幅は0.5m前後、深さは0.3~0.4mを測る。埋土は黒褐色から黒色粘質土である。

出土遺物 (Fig.87) 弥生時代後期の土器が大半で、溝の時期であるが、少量前期の土器や1点古墳時代の土師器を含む。出土量は少ない。

228は複合口縁壺。口縁部で復元口径26.4cmを測る。外側ハケメでナデを加える、内面はヨコナデで、頸部にはハケメが残る。229は壺の口頸部片。調整は外側は斜格子状の刻目とハケメ、内面はハケメ。230は前期土器の底部。外側調整は条痕を加え、底部には圧痕がある。231は小型の鉢で、歪んでいる。口径は9.4cmを測る。手捏ねで指押痕が明瞭に残り、粘土も付着する。

281は土製紡錘車。径4.5cm、中央部厚1.1cm、孔径0.5cmを測る。調整なナデ。胎土は精良。

SD831 (PL.36)

G-23区で検出した小溝。西側でSD818と重複する。確認規模は6m、幅0.24m、深さ0.14~0.33mを測る。埋土は黒色粘質土である。

出土遺物 (Fig.87) 232は弥生時代後期後半の高环脚部。復元脚径は19.6cmを測る。調整は外側タテヘラミガキ、内面は裾がハケメ。

SD854 (Fig.91、PL.37)

調査区南西側H-23区、SD818の西側で検出した確認長8m、中央部最大幅3m、深さ0.17mを測る不定形状の溝。下層にはSD921があり、その新期のものかもしれない。埋土は鈍い黄色粗砂。

出土遺物 (Fig.87、PL.90) 弥生時代前期から後期の土器が出土。後期の時期が多い。

233は頸部に突帯が付く甌。復元口径は28.5cmを測る。調整は口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴部外側はタタキ、内面はハケメ。突帯にはハケメ工具の刻目が付く。後期終末頃か。234は手焙形土器で破片より復元。外側2条の突帯が巡り、突帯を繋ぐ刻目のある縦突帯が貼り付く。調整は外側ハケメで、下半はヘラミガキ、内面はハケメ。胎土は精良。古墳時代前期初頭である。235は器台口縁部。復元口径は15.0cmを測る。調整は外側ハケメ後ナデ。236は支脚底部。復元底径11.0cmを測る。調整はナデ。

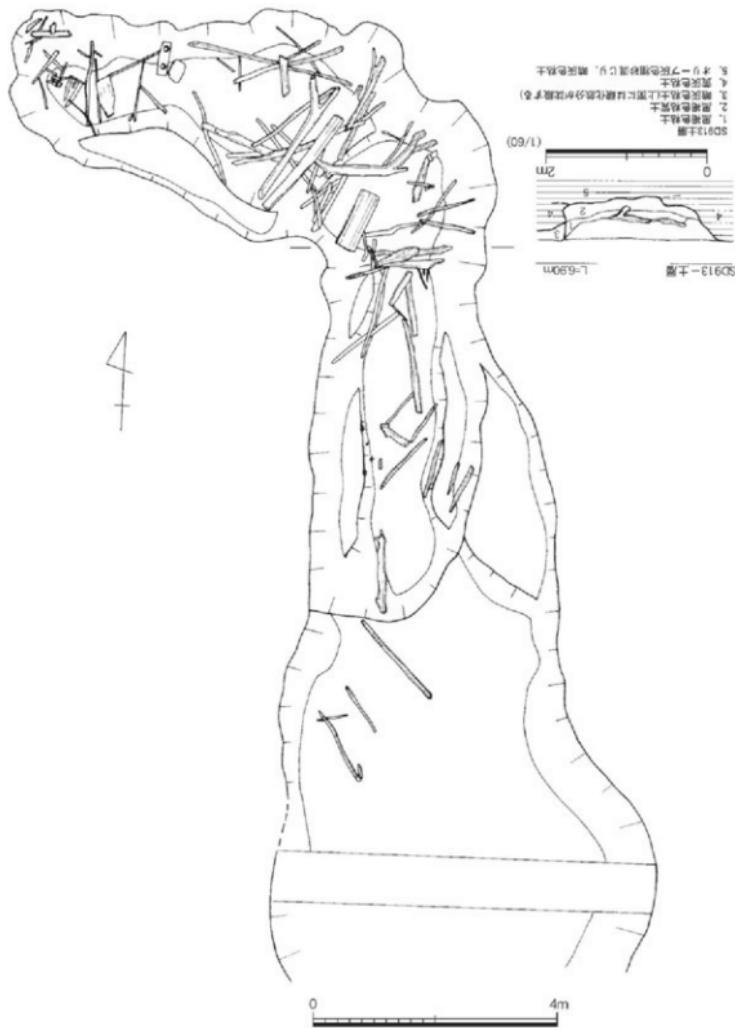


Fig89 SD913 (1/80・1/60) ※土層は1/60

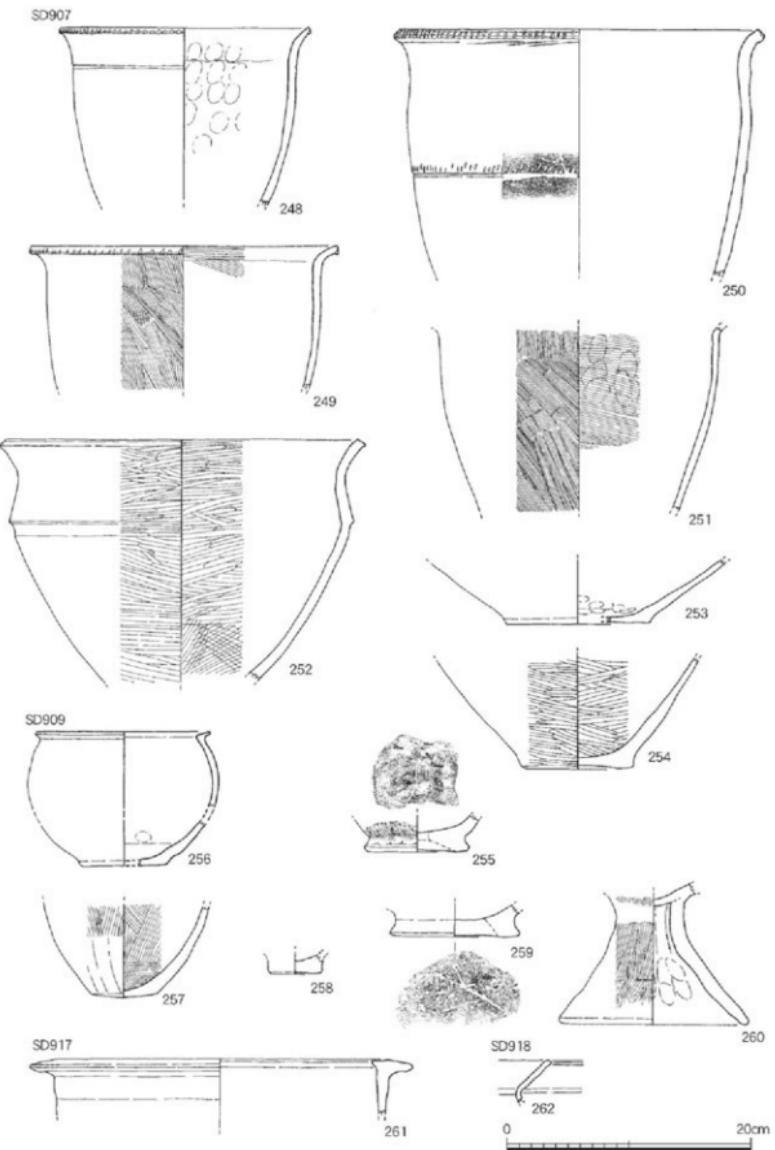


Fig.90 SD907・909・917・918出土土器 (1/4)

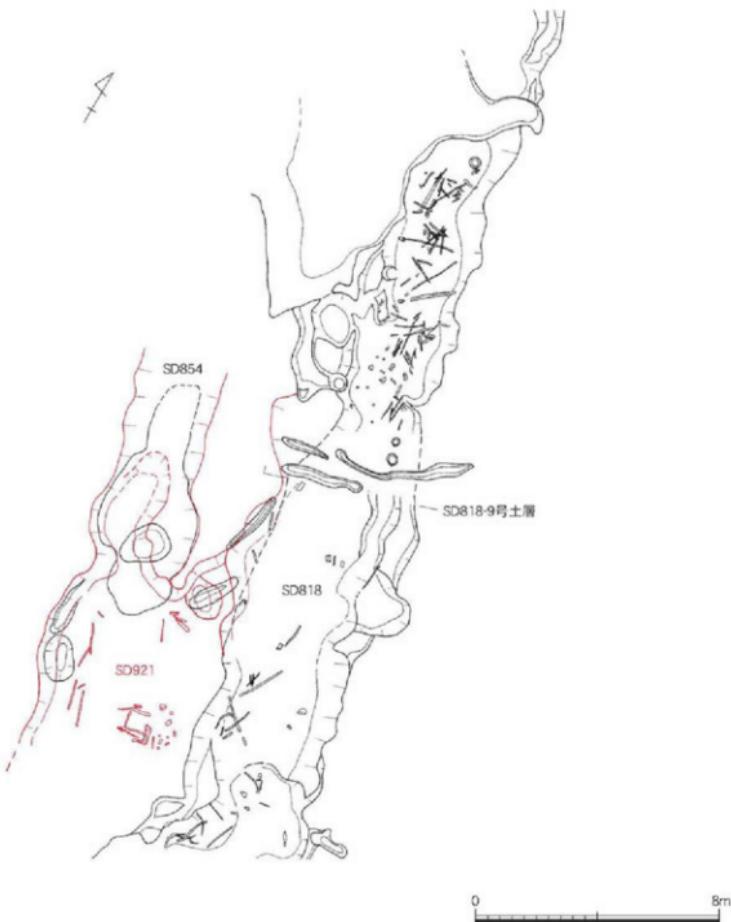


Fig.91 SD818・921 (1/160)

SD856

調査区南西側H・I-24区の西壁にかかる東西溝。確認規模は10m、最大幅3.2cm、深さ0.05~0.15m程の浅い溝。西側に深くなる。

出土遺物 (Fig.87・95) 弥生時代前期から後期の土器が多いが、中心は後期である。

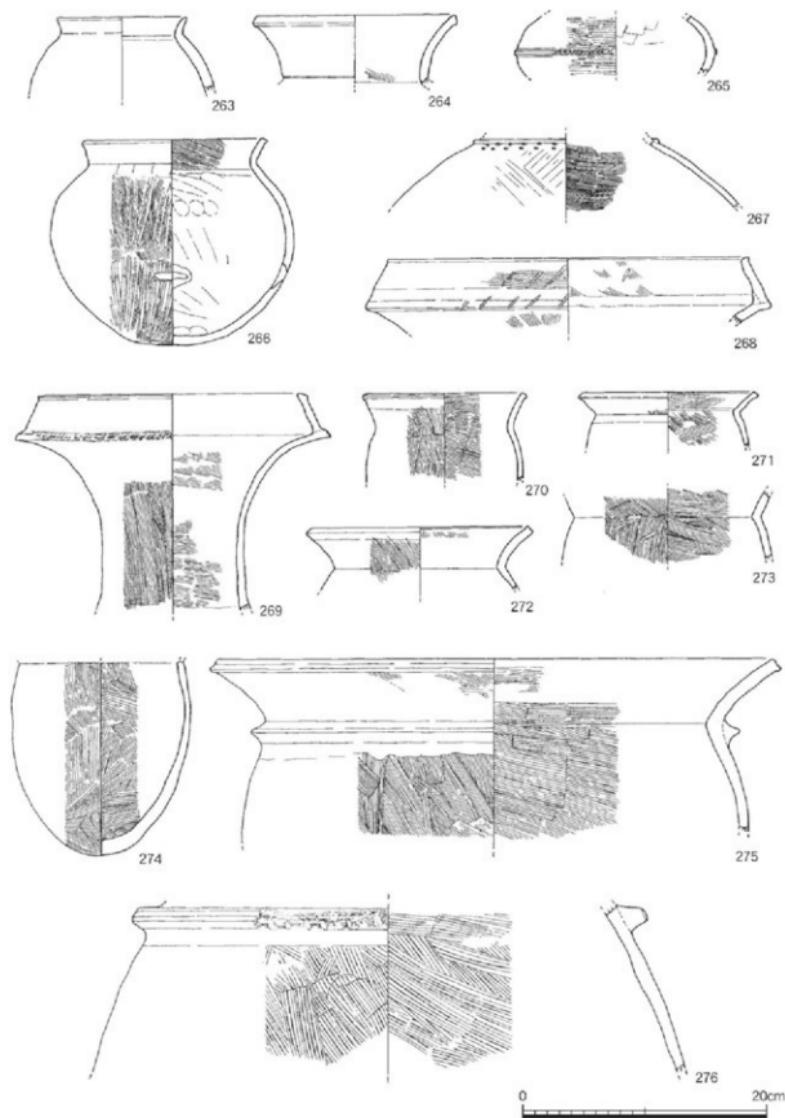


Fig.92 SD921 出土土器① (1/4)

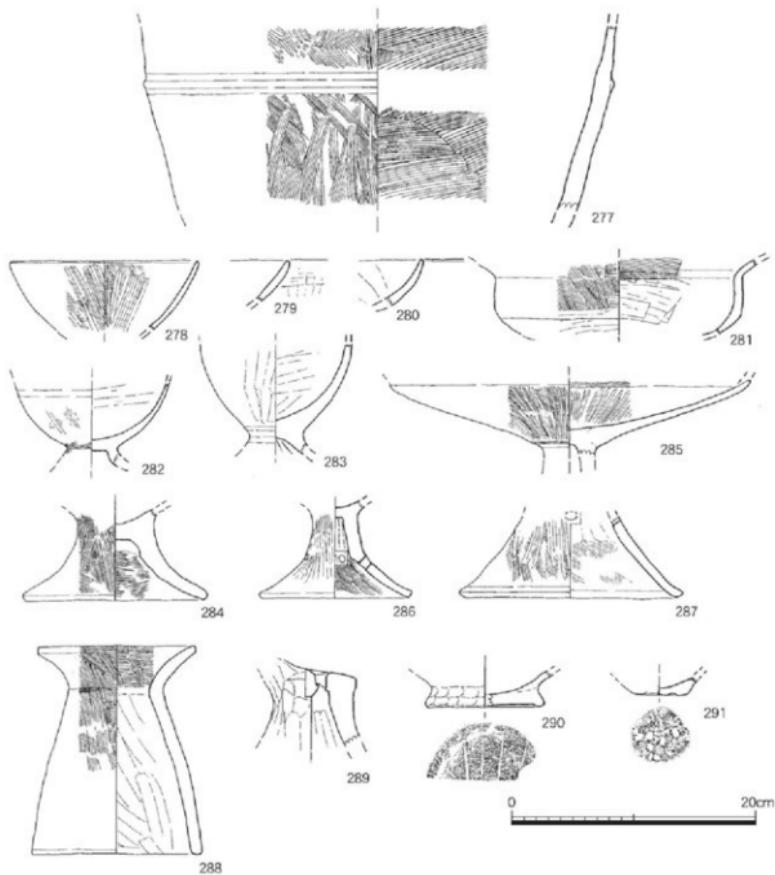


Fig.93 SD921 出土土器② (1/4)

237は口縁端部が上方に立上る壺。復元口径は24.5cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ、胴部はハケメである。238は底の深い高壺の壺部か。復元口径は29.0cmを測る。調整は外面ヨコナデ、内面はハケメ。

W45は円錐形の紡錘車。径4.2×4.5cm、高さ1.6cmを測る。孔径は0.65×0.6cmで、棒材が残る。表面は丁寧な削り仕上げ。

SD865 (Fig.63)

SD818・867に切られる小溝で、SD896と一連の溝と同じであろう。

出土遺物 (Fig.87) 弥生時代中期から後期終末の土器が少量出土している。

239・240は鉢。239は内湾気味に口縁が立上る形態。口径は24.9cmを測る。調整は外面ハケメ、内面はヘラミガキ。240は体部が丸く口縁が屈折して外に聞く形態。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面は粗いハケメでナデ。241壺か甕のややレンズ状を呈す底部。調整は外面ハケメ後ナデ、内面はハケメ。

SD882 (Fig.63, PL.37)

I-28 区で検出した小溝。確認長は10m、幅1.2m、深さ0.4mを測る。この上面は第II面のSD746で、SD882は北側ではSD909に変わっていく。埋土はにぶい黄色粗砂が主体である。

出土遺物 (Fig.87・95・96, PL.95) 弥生時代中期から後期末の土器片が少量出土した。

242は逆L形の口縁を持つ甕。復元口径は25.4cmを測る。調整は胴外面がハケメ、その他はナデである。243は小型の鉢で、復元口径は13.6cmを測る。調整はナデである。244は筒形器台。底状の鈎が巡り、方形透かしがある、調整は外面暗文風へラミガキ、内面はヨコナデ。胎土は精良。

W46は三又鍤の一部で、柄壺と刃が残る。残存長55.9cmを測る。丁寧な削り加工である。W47は二又鍤か。残存長33.4cmを測る。表面は削り加工。いずれも柾目材で、コナラ属アカガシ亜属である。W48は方形の垢取り。残存長40.8cm、高さ5.8cmを測る、二本の枝状の把手が付く。受部上方に2か所円孔がある。丁寧な削り加工。樹種はクスノキである。

SD893

調査区 H-27 区～29 区まで蛇行して流れる小溝。幅は0.5～1.5m、深さは最大0.1m程で浅く凹凸があり、自然流路と思われ黄褐色粗砂が堆積する。

出土遺物 (Fig.87・94・96, PL.95) 弥生時代後期から古墳時代前期の土器が少量出土している。

245は逆L形の口縁部を持つ甕。復元口径は18.4cmを測る。調整は、242は外面ヘラミガキのようであるが、磨滅が進みは明瞭でないが、内面は工具によるナデ、弥生時代中期後半のもの、246は後期の大形甕の底部。復元底径10.2cmを測る。調整は外面ハケメ。内面は板ナデ、底部にはハケメが残る。247は古墳時代前期の尖底の鉢で、復元口径11.4cmを測る。手捏ね調整で、指押さえ痕が明瞭に残る。

S12は石庖丁。刃全長10.3cm、刃幅3.9cm、厚さ0.7cm、孔径は0.7cmを測る。紐孔間は2.0cmを測る。表面は研磨調整で、刃部を研ぎ出す。石材は輝緑凝灰岩。

W49は二又鍤の一部。方形の柄壺が残る。残存長35.9cmを測る。表面は削り加工。W50は三又鍤で、刃部を欠損する。残存長36.8cmを測る。方形の柄壺が残る。表面は削り加工。いずれも柾目材で、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。

SD907 (Fig.88, PL.46)

調査区北東隅で検出した西から北に弧を描いて流れる溝。東側には流れが分岐した梢円形状の落込みがある。溝幅は西壁で4.45m、北側で5.3m、溝底は西側5.96m、北側で5.90mと北側が若干低くなることから、北に流れたのであろう。埋土は灰色粘土が主体で、下層には粗砂を含む。粘土層には流木や木製品を多量に含んでいた。東側の土坑状の落込みは灰白色粗砂が主体である。

出土遺物 (Fig.90・97, PL.90・91・96) 弥生時代前期の板付I式新段階の土器が出土している。

248～250は口縁端部に刻目が付く。如意形口縁の甕。復元口径は20.4cm・25.0cm・29.6cmを測る。刻目は、248は棒状工具、249はヘラ、250はハケメ工具による。248は頸部にも1条の沈線が巡る。調整はナデで、内面には指押さえ痕が残る。249は外面ハケメ、内面は口縁部がハケメで、胴部はナデ。250はナデ調整で、胴部中央に1条の沈線と刻目が付く。突帯の退化したものであろう。251は胴部で、内外面ハケメ調整。内面には指押さえ痕が残る。252は黒色磨研の深鉢で、復元口径約30cmを測る。

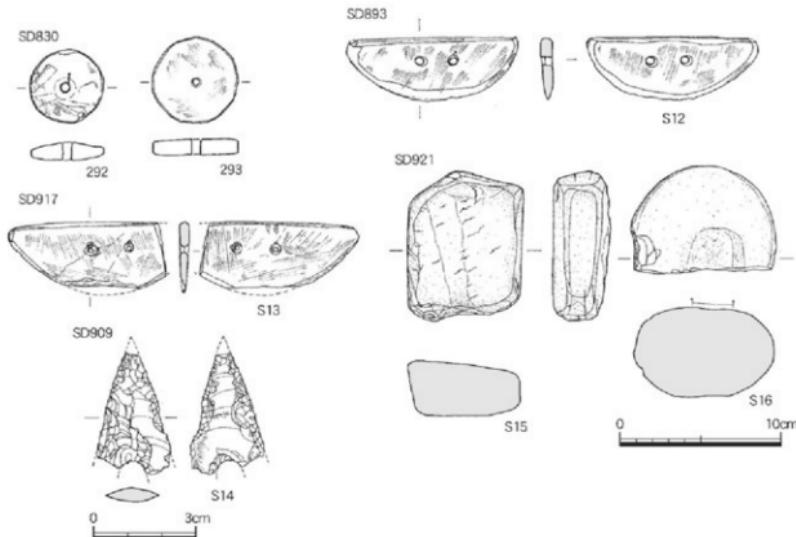


Fig.94 SD830・893・909・917・921 出土土製品・石器 (2/3・1/3) ※S14は2/3

頸部と胴部の境には段を有す。表面やや磨滅するが、内外面ヨコヘラミガキである。253～255は底盤。253・254は壺の底部で、復元底径11.4cm・9.0cmを測る。253の調整は外面ヘラミガキ、内面はナデ。254は内外面ヘラミガキ調整。255は円板貼り付けの底部。底径8.5cmを測る。調整は、胴部外面は条痕で、その他のはナデ。

W51は有孔円板。径7.5×7.8cm、最大厚1.2cmを測る。中央に径0.9cmの円孔がある。表面は一部欠損するが、削り加工。円孔は両側から開けている。板目材である。W52は二又鋤の欠損品。残存長37.9cmを測る。表面は削り加工。柾目材である。

SD909 (Fig.86、PL.61)

SD882・883の流路とほぼ並行に流れ、それらの溝に先行する溝。H-30区辺りから幅広くなる。H-31区で小溝SD885が西岸に合流する。溝幅は5～9mと一定でなく、深さは最大でも0.3m程度である。埋土はオリーブ黒色粘土から黒褐色粘土が上層で、下層には細砂とか粗砂が堆積する。土層をみると造構の重なりも認められるので、流路の重なりで広くなったのかもしれない。

出土遺物 (Fig.90・94・98、PL.92・93・96) 弥生時代中期から後期の土器や木製品が出土。北壁際SX911とした所で槽などが出土している。

256は壺の口縁と底部1/4片。破片から復元したもの。復元口径14cm前後、器高は11.0cmを測る。表面は磨滅し調整は不明。257は甌の底部で、底部は丸みを持ち後期のもの。底径は5.8cmを測る。調整は、257は内外面ハケメで、下脚部外面は板ナデ上げである。258は鉢の底部か。底径4.3cmを測る。磨滅するがナデ調整。259は円板貼り付けの底部。底径10.4cmを測る。底部に木の葉痕が残る。260は高环の脚部。復元脚幅径15.0cmを測る。外面ハケメ、内面はナデで、指押さえ痕が残る。

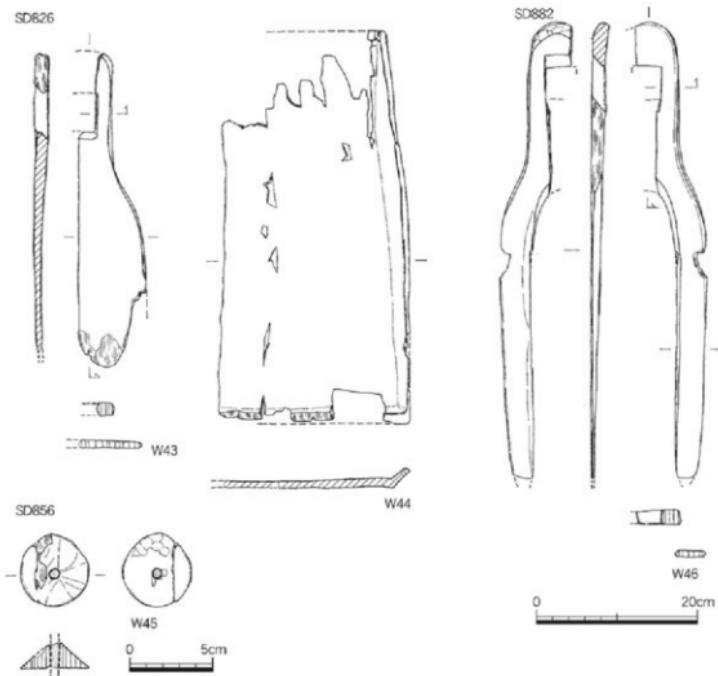


Fig.95 SD826・856・882 出土木器 (1/3・1/6)

292は土製鍤車。径5.2cm、厚さ1.0cm、孔径0.5~0.6cmを測る。調整はナデ後研磨。

S14は黒曜石の剥片石鏃。基部は凹基で、先端と基部を欠損する。鏃身長3.75cm、厚さ0.4cmを測る。縁辺は二次調整を加える。

W53・54はSX911出土で容器の槽の一部。いずれも両端に把手状のテラスを持つ。W53は全長71.8cm、残存幅23.4cm、器高11.1cmを測る。内底には加工痕が残る。W54は1/2存で、全長73.2cm、残存幅24.0cm、最大高10.0cmを測る。側面に透かし窓を持つ。外面にはケズリ加工痕が残る。いずれもクスノキを削り貫いたものである。W55は大形の杓子。杓の部分は半欠で、残存長54.6cm、杓部残存径11.0cmを測る。全面削り加工であるが、杓部は特に丁寧な整形である。柾目材で、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。W56は荷負い棒か。残存長121.9cm、径7.0×9.0cmを測る。上下両端は削って尖らす。樹皮が残り、一部炭化する。芯持ち材で、樹種はツバキ属である。

SD913 (Fig.89, PL.47)

G-28~30区に鉤型に延びる溝で、南側はSD918が重なるが、埋土が違っており、別の遺構と考える。規模は溝幅1.8~2.7m、深さは0.3~0.55mを測る。埋土は黒褐色粘土で上層は灰味を帯びる。中層から下層にかけて木製品や流木、イチイガシ実が多量に出土した。種実は1か所に固まっており、

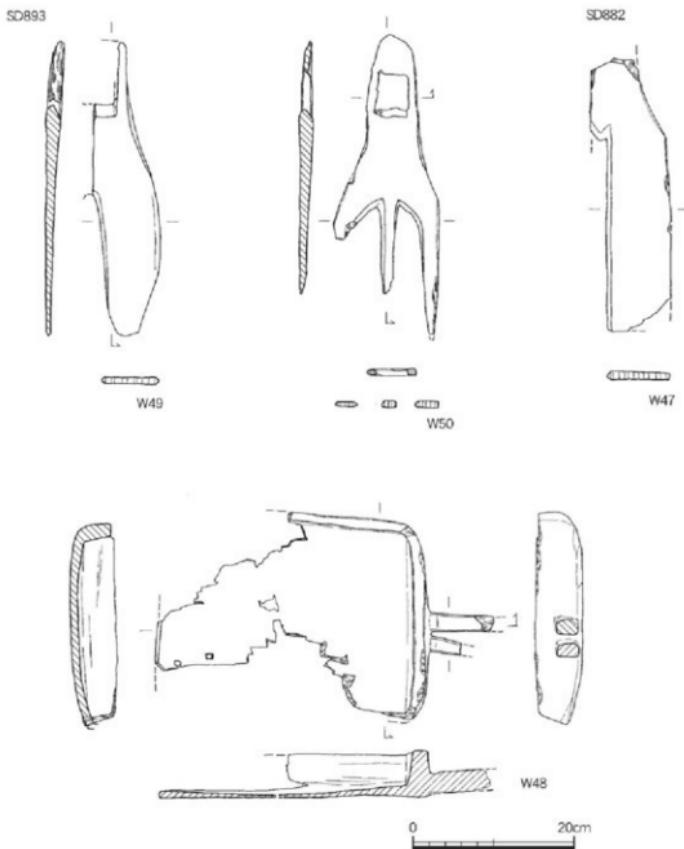


Fig.96 SD882・893 出土木器 (1/6)

容器に入っていた可能性があり、水漬けして灰汁抜きしていた可能性がある。

出土遺物 (Fig.97, PL.96) 弥生時代中期から後期にかけての土器が少量と木製品、種実が出土した。図示しうる土器は無かった。

W57は容器の桶。復元口径は12.4cm、器高17.8cmを測る。底部に高台を持つ。削り貫き製作で、表面は削り加工である。口縁部に3個の円孔、高台部に2か所透かしが残り、復元数は12個、4か所の円孔、透かしである。樹種はスギである。W58は長方形の不明木製品。残存長43.7cm、幅14.9cm、最大厚2.6cmを測る。中央部は方形状の高まりを持ち、その中央に一辺約4cmの方形孔を持ち、その両側に径約8cmの円孔がある。円孔部以外の加工状況は不明。柾目材で、樹種はコナラ属アカガシ亞属。